

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別掛紙第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第8巻第10号 昭和38年9月1日発行（毎月1回1日発行）

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別掛紙第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第8巻第10号 昭和38年9月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

裏窓



9月号

定価 250 円

IBM 1807

振替・東京10756番
(久保書店宛)

||||||| 裏窓叢書 |||||

第一集 **狂異地獄肌**

飯田豊吉著 中島喜美絵

第二集 **黒姫呪縛**

黒木 忍著 山田彬弘絵

第三集 **地底の牢獄**

藤見 郁著 秋吉 轡絵

第四集 **残酷裸女絵巻**

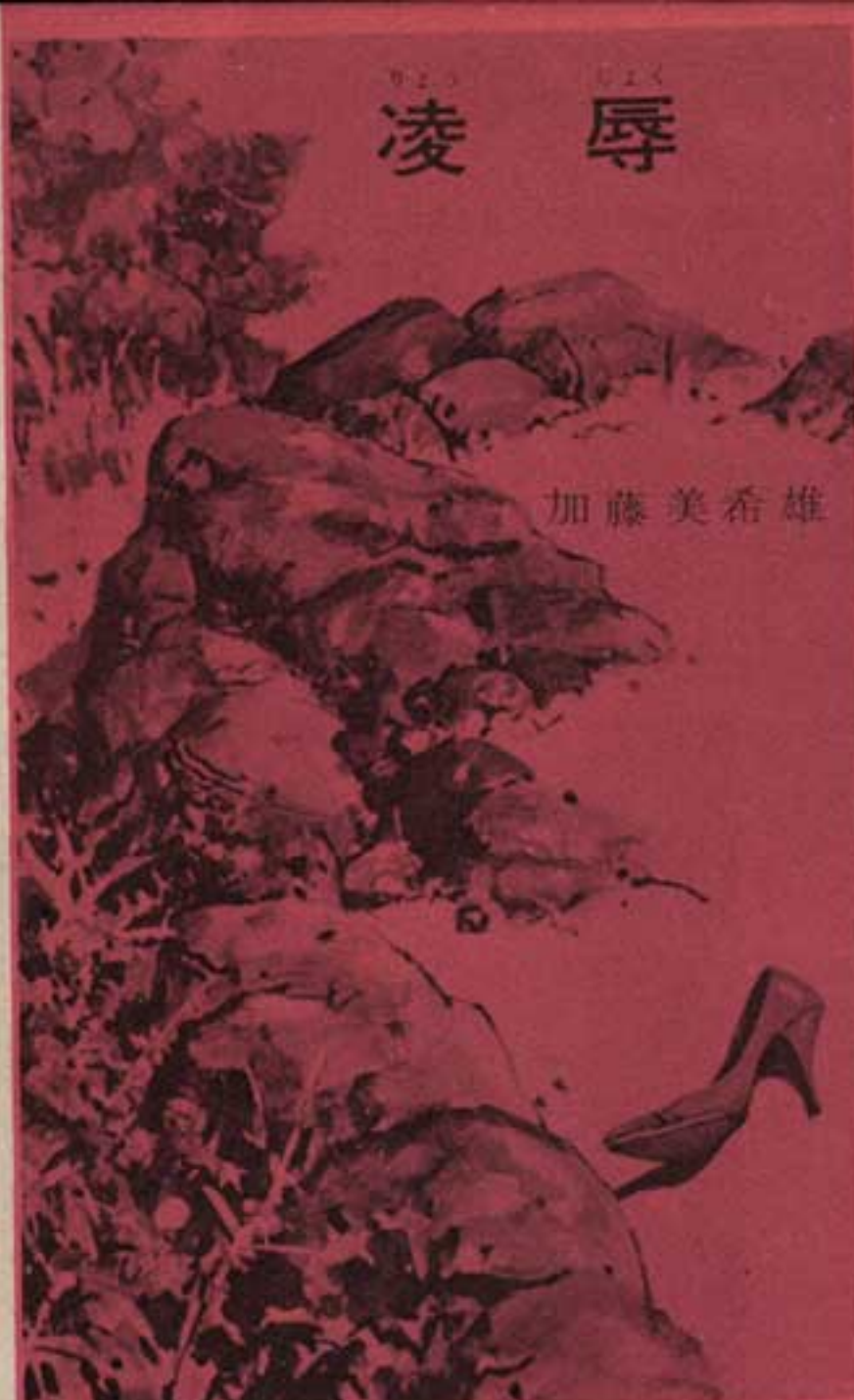
万里小路崑著 豊田みのる絵

第五集 **責め肌忍法**

万里小路崑著 古正英生絵

¥400 千80円

東京都中野区江古田1-6-11011
株式会社・あまとりあ社
(振替・東京一〇七五六・久保書店宛)



凌辱

加藤美希雄

凌辱

加藤美希雄・著

¥180 千40円

情痴事件ストーリー

女の黒い罠

遠山照彦・著

¥170 千40円

成人学校・ピンク専科

セクシー・ナイト
講座

戸山一彦・著

¥200 千40円

この罪を負って私は地獄へ堕ちる！

まだ知られていない日本の
イロんな土地のイロイロ話総まくり！
風流はだか痴理風俗

岡本 薫 著

¥2100 千400円



裏窓・九月号・目次

◎表紙

モデル・柚木あぐり
カメラ・吉田 久

◎目次カット

とびらカット・中川彩子
江淵晃夫

絵本いろはうた

文・宮古志満夫
絵・小日向一夢

(9)

色
二
オフセット

裏窓叢書名場面集・第一集～第五集

(223)

海賊虹姫伝奇

文・島本春雄
絵・春日章

(103)

オフセット
色ページ

海外S M誌ご紹介……………フェニクス商会

(127)

戦国
無残

小笹姫受難……………

潮 一樹

(24)

シベリア
の女囚

魔女アクリカ……………

春川光彦

(52)

裏窓
文芸評論

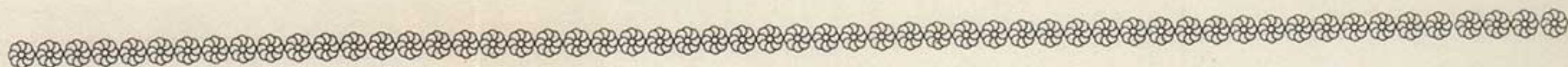
マルキ・ド・サド著

食人国旅行記……………

安東 泉
エダ・キリコ

(73)





傑作
グ ラ ビ ア

海外の公刊誌より①②……………フェニクス商会

海辺のうた……………吉田 久
夜のなげき……………

洋画SMシーン・スチール集……………

■裏窓タウン……………(135) ■読者コーナー……………

美しきけものの檻……………鬼頭 暁

体当た ああ、ぼくは女ばかりの集団に……………水尾 究
りM論 ころもからだも埋めてみたい……………

■寄稿作品ご紹介……………(92) ■うらまど・ニューモードご紹介……………

お化粧される弓子……………北園透一郎

嫌悪の青春……………立原道夫

男爵夫人の拷問博物館……………フェニクス商会

穴 (あな)……………石山省一

コレハオドロ記『髪を愛する男』……………左 次 朗

変幻白だぬき……………文・井村 錠
……………絵・古正英生

必殺のデリンジャー……………文・祖父江 新
……………絵・落合 竜二

特製マゾキン……………嶋 岡 晨

失われたものをとめる……………かびやかずひこ

現代マゾヒズム文化時評⑱……………森下 高茂

連載マゾ小説 ゴルドンの記憶⑥……………阿麻哲郎

■編集後記……………

(214) (202) (154) (96) (42) (82) (160) (88) (168) (177) (68) (186) (159) (144) (64) (212) (111) (124) (116) (215) (15)



東表窓草紙

絵本いろはうた

文 宮古志満支
絵 小日向一夢



いにしえの 人の残したきもの美を
今に伝えるお振り袖
ろうたけた 姿に匂うこの香り
袂に秘める香水か
はなやかな 長い袂をひるがえし
帯揚げ結ぶ艶で姿
にじみ出る 日本娘のしとやかさ
お太鼓結びの美しさ
ほのかなる 梅の香りのただよえる
日本座敷のたたずまい



へん心をしたと男になじられて
引き据えられる春の宵
とこの間を 背にして坐る若者の
目にちらちらと燃える火よ
ちがいます 身に覚えのない疑いと
両手をついて許し乞う
りふじんな 責めのいわれは聞こえぬと
ただひたすらに抗議する
ぬれている まつ毛を見ればなおさらに
男の胸は燃えあがる
るうじゆなき 蕾のような唇が
清き暮しを思わせて
をとめごの 優美さ溢る振り袖の
長い袂がゆれうごく

わかき日の けがれなき身をなかくも

責めんとするや恨めしき

かなしみは 紅の袂をかきいだく

乙女の胸に溢れきて

ようしやなく 両の手首を掴まれて

ねじまわされる帯の上

たかだかと 両手を後ろで括られて

身悶えているなで肩に

れんぼする 男ごろの現われか

きびしくしごく縄さばき

そで口が 後ろにまわりやつ口が

畳の上に垂れている



つつましく おもてを伏せて端坐する 後ろ手姿のやさしさよ
ねっおびる 男の声をあきらめて じっとうつむき聞いている
なわ尻を 取られて乙女は立ちあがる お倉につづく長廊下
らんまんの 花の季節を前にして 桜模様のつづれ帯
むな高に 締めた帯揚げなやましく 六筋の縄にからんでる
うしろ手の 縄目はきびしこのさだめ 引ったてられて歩を運ぶ
るどばたで 切られし菊の身を想い じっと堪えてる立ち姿
のに匂う すがた楚々たる白百合の 清さ想わすそのからだ

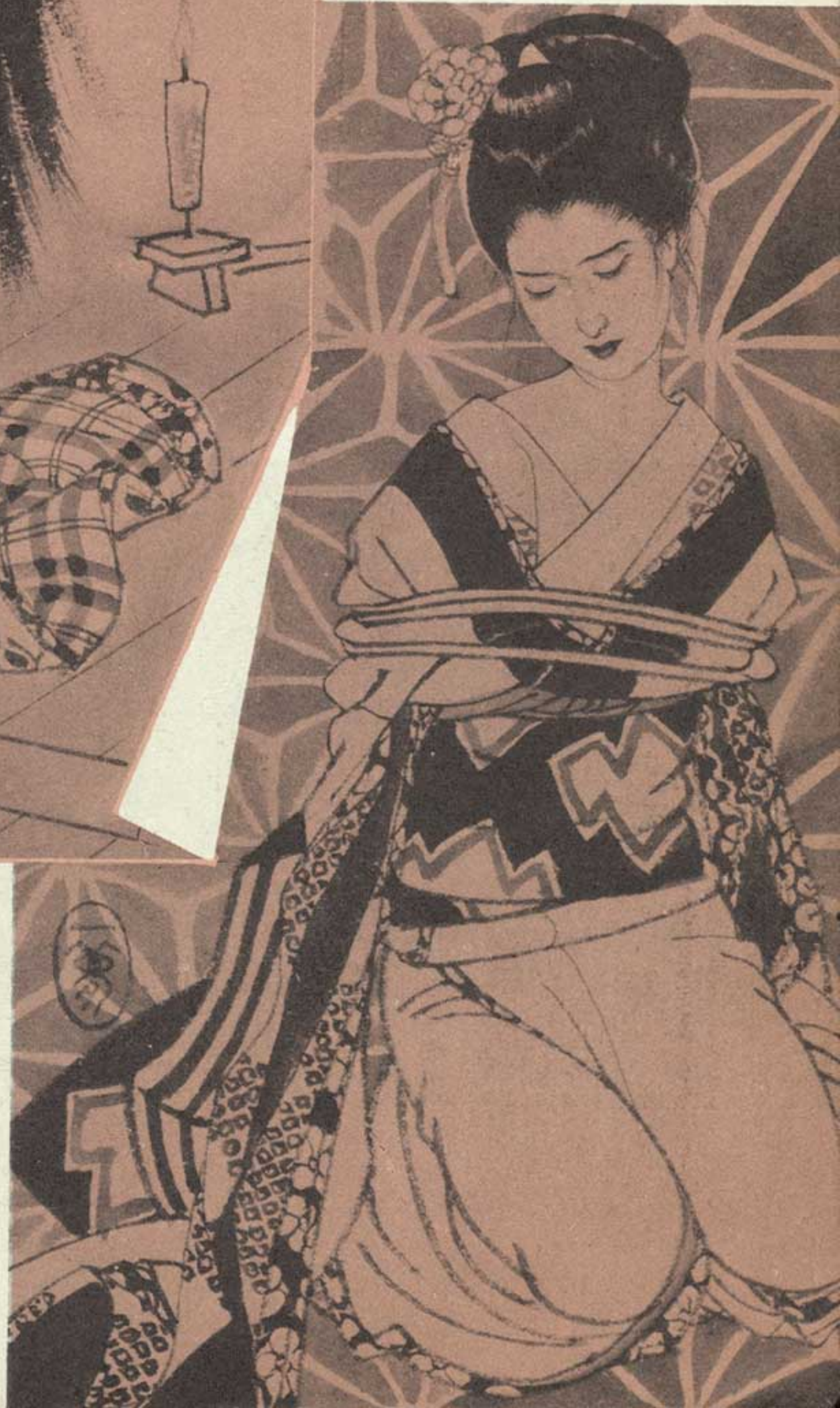
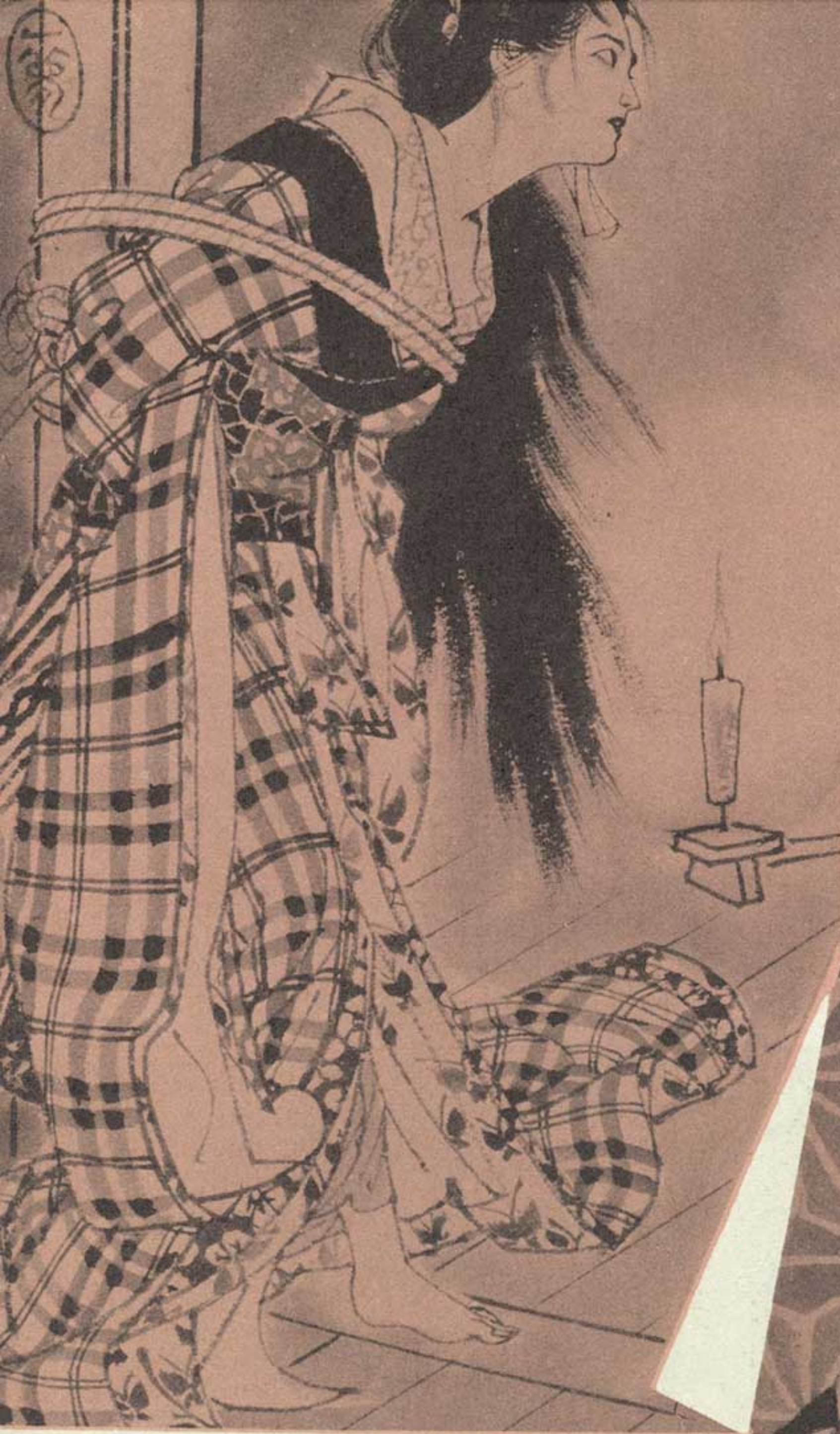




お仕置きを 受けるこの身を黙々と ながめているはお月さま
 ぐらの戸を あけて乙女は入れられる ろうそくだけのほの暗さ
 やわ肌を しめる縛しめひしひと むしろの上に据えられる
 まめしぼり 乙女の口にはめられた この手拭いの恨めしさ
 けんらの 歌舞伎舞台の雪姫も 桜の幹につながれて
 ふくよかな 胸しめつける縛しめに 長い袂が泣いていた
 こよいこそ わが身にかかるこの縄目 お菊雪姫だけでなく
 えも云えぬ 胸のときめきいかにせん 妖しき夜のこの想い
 てくびから 長く垂れてる縄尻は 後ろの人の手にとられ
 あわれわれ 云われるままに歩みゆく お倉の中の角柱
 さるぐつわ 今はあわれなめしうどの かわいい口をふさいでる
 きりきりと 腕に食いつく細引きの 縄の白さのあざやかさ



ゆえもなく 雁字搦めに縛られて
ただおとなしく正坐する
めにしみる 赤き襦袢が控え目に
両袂よりこぼれてる
みもだえる 身は後ろ手に括られて
着物つくろうすべもなく
しみじみと 縛しめ受けしわが身をば
ただうなだれていとほしむ
ゑほんから 抜け出たような美少女の
縄目姿のあでやかさ



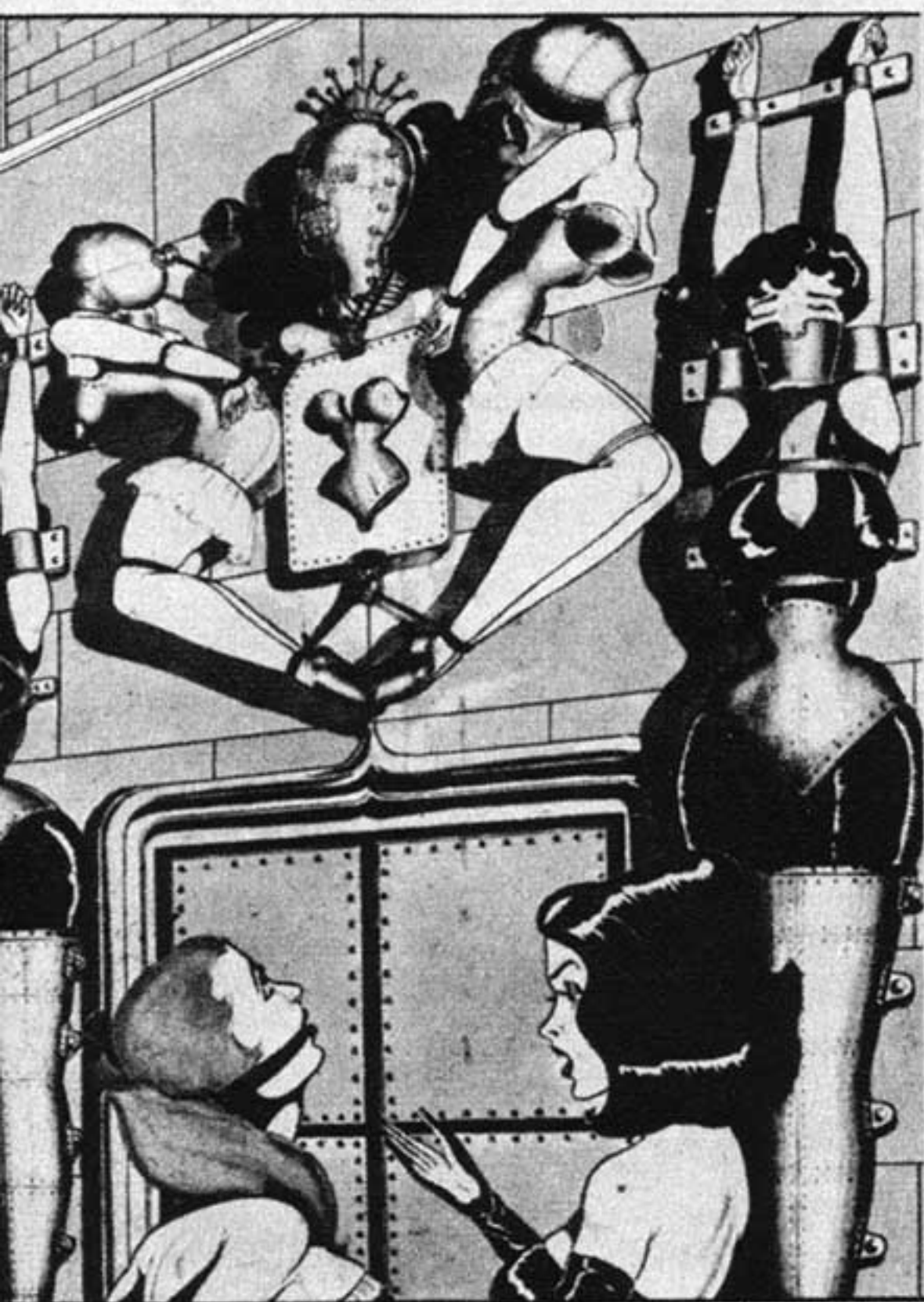
ひぢりめん 両の袖から覗いてる
もう今は 肌に切なき長じゅばん
できぬ身の

盛装のまま括られて
せなかでは 両の手首が高々と
柱にかたく縛られる
するがまま 云うがままにと

おとなしく
お仕置き受ける秘か夜よ

海外の公刊誌より

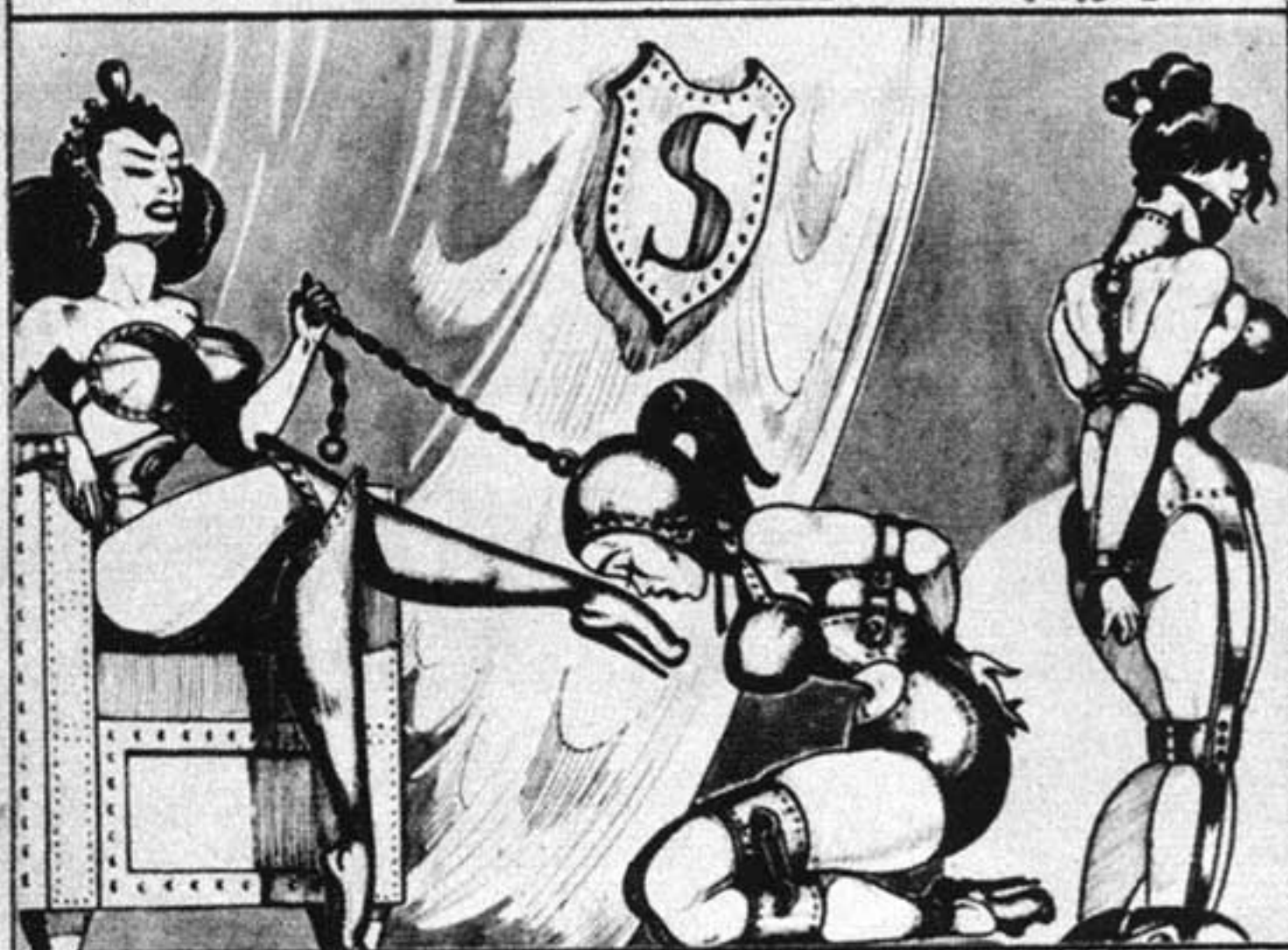
アメリカSM絵物語・ご紹介



63

BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

VOLUME ONE - Funamura



Published by Nutrix Co.

ILLUSTRATED WITH 32 ACTUAL
JIM BONDAGE DRAWINGS

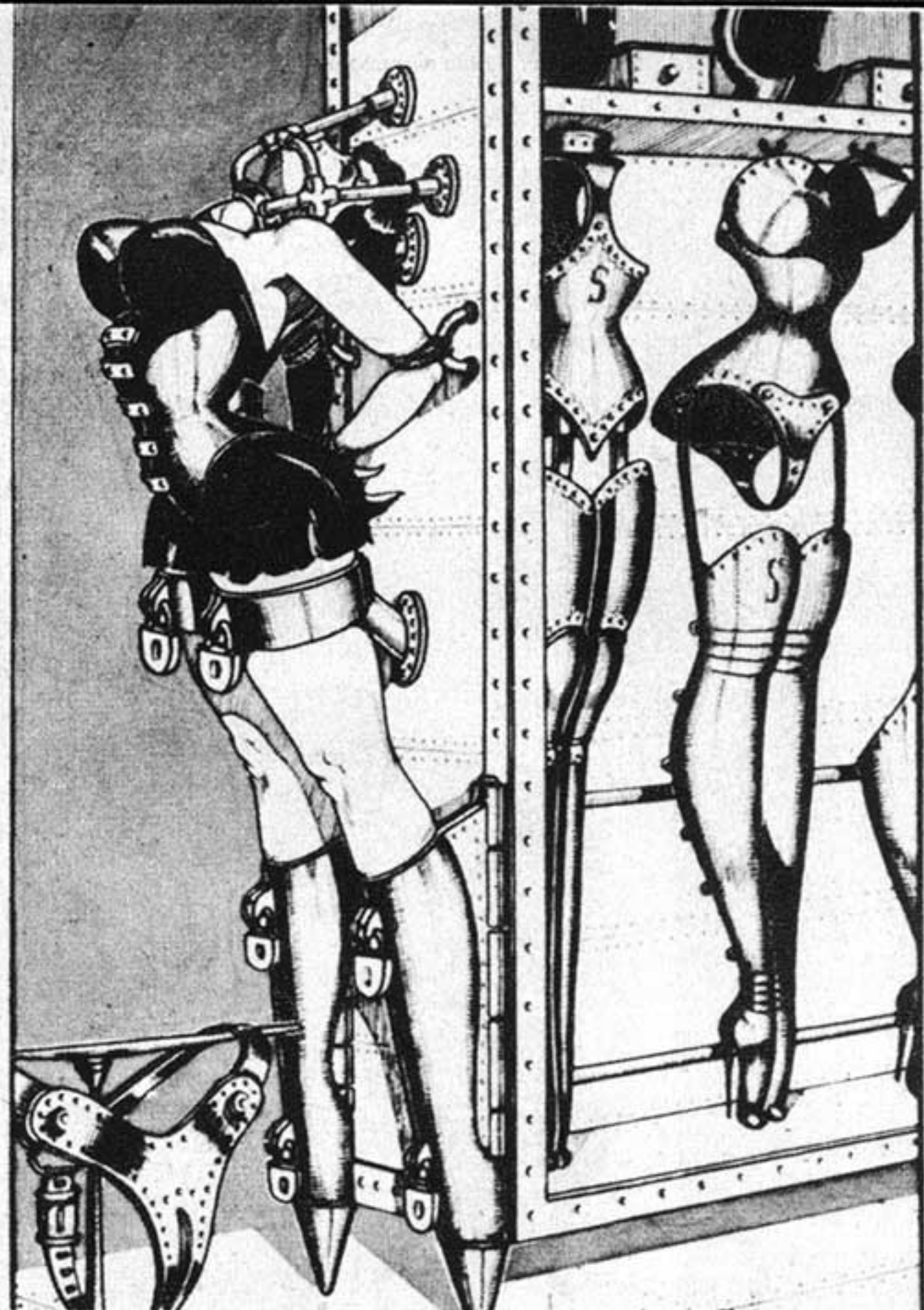
カルフォルニア・フェニクス商会・特約

--SECURE THIS SCAVENGER
IN THE DUNGEON--
I'LL TEACH THE
INSOLENT LITTLE
BEAST A THING OR
TWO! HELLO, ----
PREPARE
SABRE



THIS SAVAGE WENCH IS BEING
"DRIED OUT" BY INFRA-RED LIGHT
FOR EXPERIMENTAL PURPOSES.
ANNOUNCED CHO-CHA'S GUIDE...





25





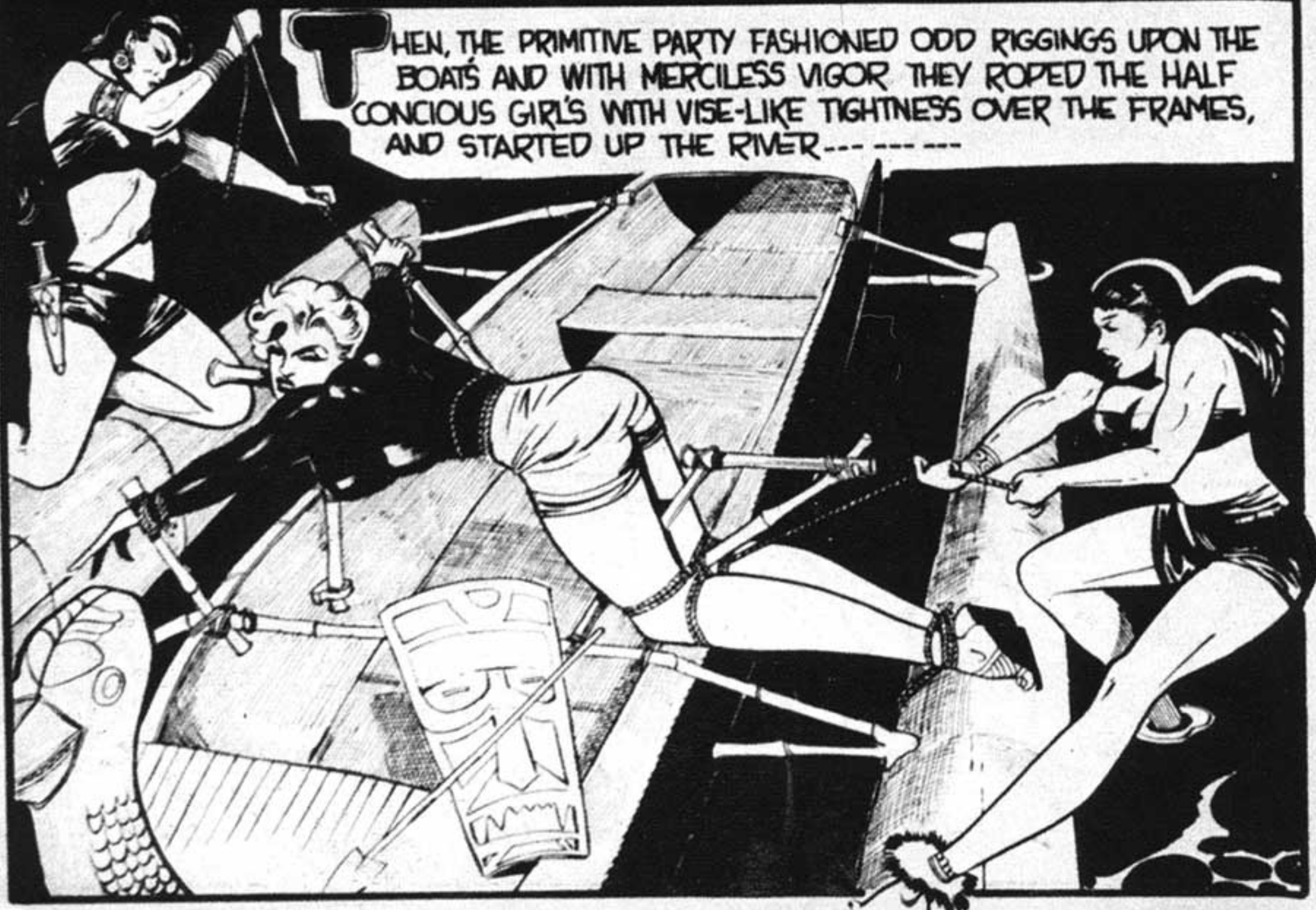
I AM "URAYNA,"--GRAND
MISTRESS OF THIS ISLAND,
AND I DEMAND AN
EXPLANATION AS TO YOUR
PRESENCE HERE--SPEAK!

"MY N-NAME---IS---IS
ELEXUS--WE--WE CRASH-
ED---OO-O-OH!" AT THIS,
THE GIRL FAINTED



53

THEN, THE PRIMITIVE PARTY FASHIONED ODD RIGGINGS UPON THE
BOATS AND WITH MERCILESS VIGOR THEY ROPED THE HALF
CONCIOUS GIRLS WITH VISE-LIKE TIGHTNESS OVER THE FRAMES,
AND STARTED UP THE RIVER-----



6

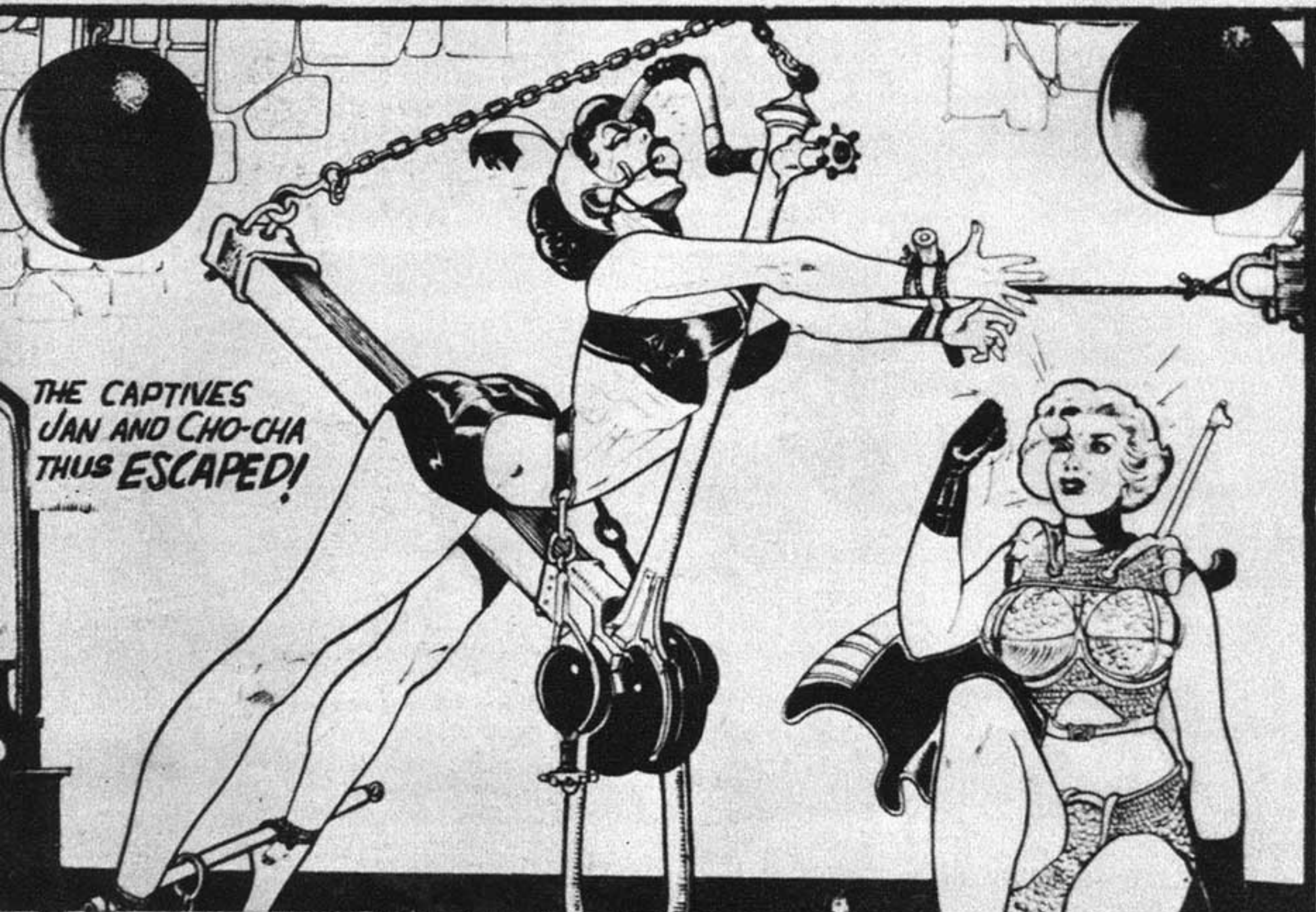


HURRIED OFF THRU
THE DENSE WILDS.....
THEIR BODIES BOUND
MOTIONLESS ATOP THE
POLES SEEM TO INTENSIFY
THE SHRILLING OF THEIR
WAGE CAPTORS!!



3

THE CAPTIVES
JAN AND CHO-CHA
THUS ESCAPED!



NOW... YOU-- YOU VILE WRETCH
-- A TASTE OF YOUR OWN MEDICINE!"

56



AFTER MANY HOURS OF RUGGED JOURNEYING UP ROCKY SLOPES, THE CAPTIVES AND CAPTRESSES ARRIVE AT A VILLAGE... JAN, COLLAPSES AS WEARY ELEXUS PONDER'S THEIR FATE.

FOR ENVIOUS REASONS, THE GUARD STILL DEALT OUT EVEN COLDER TREATMENT FOR BLONDE JAN. "THIS IS ONE TIME I'LL DEFY ORDERS!" THROATED THE GIRL. "KEEP THAT BALL OUT OF 'CHAKANDHAS' REACH BLONDIE OR HE'LL HAVE YOU FOR SUPPER!"



裏

窓



9 月 号

第 8 卷・第 10 号

雁島の山城悲史

小笹姫受難

潮一樹

小日向一夢絵



謀反

弘治二年秋。

芸備地方の豪族藤巻玄信は一族の布部道鬼に弑逆されて鷹ノ巣城に滅んだ。

玄信は弘治元年厳島に陶晴覧を撃滅して、

中国路に勢力を拡大し始めた毛利元就を恐れ、山陰の雄尼子晴久と盟約を結ぼうとして娘の小笹を人質に提供したいと申し送った。

強国に挟まれた小豪族の宿命であった。

藤巻一族に豪雄とうたわれた布部道鬼は尼子との提携を真向から反対した。野望に燃え

る道鬼は新興勢力である毛利と結びつくべきだと主張したが、尼子を支持する玄信の意志は譲えなかった。

道鬼の反対する理由は小笹であった。道鬼は小笹に懸想していたのである。

小笹は十九。白梅を思わせる美女である。

黒く艶やかな髪と雪白の肌がみごとで、涼しげな瞳としなやかな肢体は道鬼を恋の炎に焦すのも当然だった。

恋に狂った道鬼は、玄信が尼子との盟約の腹を固めた時に、叛乱を決意して毛利と接触を始めた。尼子攻略の拠点として毛利はそくさに道鬼の叛乱を支持した。

十月下旬、小笹が尼子に出立する二日前の夜、道鬼の手勢は鷹ノ巣城を襲った。道鬼に叛意があると夢想だにしていなかった玄信を弑逆するのは雑作もなかった。道鬼の手は城中にも伸びて、玄信を守って抵抗を続けたのはわずかな宿直の武者だけであつた。玄信は自ら館に火を放って腹を屠った。

道鬼は館に小笹を求めるべく武者を走らせて、大手門を背に佇立していた。炎が黒系緋しの甲冑を朱色に染めていた。

「殿もいよいよ鷹ノ巣城の主ですな」

傍らに立っている腹心の根津甚左が声を投げた。甚左が叛乱の大きな推進者である事は隠せない。痩せて骨張った顔、鋭く尖った双眸は狼のように狡猾で惨忍だった。

「甚左、俺はこのような小さな城では満足せぬぞ」

領主と小笹を得ようとする道鬼の胸は野望でふくらんでいた。黒く丸い眉、顎の張った

いかつい顔は得意気に輝いていた。

武者がひとり、館の六角から駆け戻って来る。道鬼が弾んだ声を投げかけた。

「どうじゃ、小笹は見つかったか」

武者は膝をついて喘ぎながら答えた。

「館のいずこにも小笹姫の姿はありません」

「なに、姿が見えぬだと。自害をしたのなら

屍があろうが」

「先君と奥方様の御遺骸はありましたが小笹

姫のものはいずこにも」

武者は困惑した顔を左右に振った。

「腑抜け奴。死んでも探し出せ」

苛立った道鬼が怒鳴りつける。気の短かい兇暴な道鬼を熟知している武者の顔が蒼ざめる。

「中田半兵衛はどうした」

道鬼と対照的に冷やかな口調で甚左が訊いた。

「小笹姫同様に見えませぬ」

「えっ、計ったな。あの爺奴」

甚左が舌を鳴らして吐き出した。

中田半兵衛はすでに六十をすぎた老爺で鷹

ノ巣城の軍師、小笹の身邊にいつもまといっている奇体な老人である。

「殿、半兵衛が小笹姫を連れて逃げたのかも知れませぬぞ。老人と女の足だ。遠くへは逃

げられぬ。城内をくまなく探せ。街道の要所を固める。急げ。半兵衛と小笹姫が尼子晴久の所へ逃げこんではまずい」

甚左の命令が飛ぶと、数人の武者が走り出した。刀槍をひらめかした騎馬の一隊が、旗差物をはためかせて大手門から駆け去っていく。

甚左は手にした鞭で首筋を軽く叩いた。

「おい、どうするのだ」

耐りかねて道鬼が言った。

「まず、小笹姫の侍女を捕らえて、半兵衛と小笹姫がどこに消えたかを訊き出しますな。国境の街道はすべて固めれば雑作なく捕えられましょう。殿にはそれからじっくりと楽しんでいただく」

にやりと甚左が笑った。

夜空を焦がして燃え続ける館は戦国武者の妄執のように鮮烈であつた。

道鬼は床几に腰を据えて、運ばれて来た酒盃を傾むけた。勝利感がゆっくりと拡がる。俺は一城の主になれた。俺の馬標が四隣を靡かせてやる。

道鬼は大きな眼を明滅する星に向けた。

三人の侍女

焼け残った兵糧蔵に陰惨な呻き声が響いて

いた。

夜は明けていたが、兵糧蔵にはわずかな光しか差さない。ほの暗い空間に白い肉塊がぶら下っていた。若い娘だ。剥かれた上半身に縄が喰いこみ、腕を背に折り曲げられ、手首を括った縄は梁に結びつけられて、つまさきは床から二尺ほど浮いていた。顔を伏せている。すでに意識はないのかも知れぬ。

さらに同じようなかたちに縛りあげられた娘がふたり、床にうずくまっていた。

根津甚左が冷酷な眼を吊り責めの女に当たった。

羞恥の情も失ったのか、女はわずかな動きも現わさない。

「こいつ、死によったわい」

甚左がいまいましたに吐き捨てた。長い時間、間に吊り責めを加えたために絶息したのである。小笹の侍女のひとり、甚左の拷問に黙して死んだ。

甚左の眼がゆっくりと動いた。ふたりの女

が体を硬くした。

「うぬらも死にたいか。生きてこの兵糧蔵から出たかったら素直に吐け。小笹姫と半兵衛はどこに消えた。美香とか申したな。答えてしろ」

鞭がほっそりとしたひとりの顎を持ちあげた。くびれこんだ縄が乳房を大きくふらませている。美香は細い声をあげた。

「お許し下さりませ。私は何も存じませぬ。驚きあわてて姫さまのおそばを離れたのでござりまする」

ぴしっと鞭が鳴った。剥き出された白い肌に赤い筋がはしる。

「あ、ああっ」

美香がのけぞった。

甚左の鞭が反転した。

「ひいっ」

朱色の腰布の裾を踏みしだいて美香が裸身をくねらせた。

「どうだ、これであっさり答えられような」

「お、お許しを、私は存じませぬ」

美香は喘ぐように言った。

「よし、その気ならかまわぬ」

甚左は鞭を取り直した。武者草鞋が美香の床に流れている黒髪を踏んだ。覚悟を決めたのか、美香は眼を固く閉じた。見下ろす甚左の顔に惨忍な色が浮んだ。

空気を裂く響きに続いて肌を打つ音が起った。甚左は狂気のように鞭を振うのだ。

「ひ、ひいっ、ひい——」

はねあがって悶える。

甚左の鞭は惨忍な効果を狙っていた。背を襲い、のけぞって避けようとする娘を反転して責める。悲鳴と呻きが唇から噴きあがり、肌は破れた。

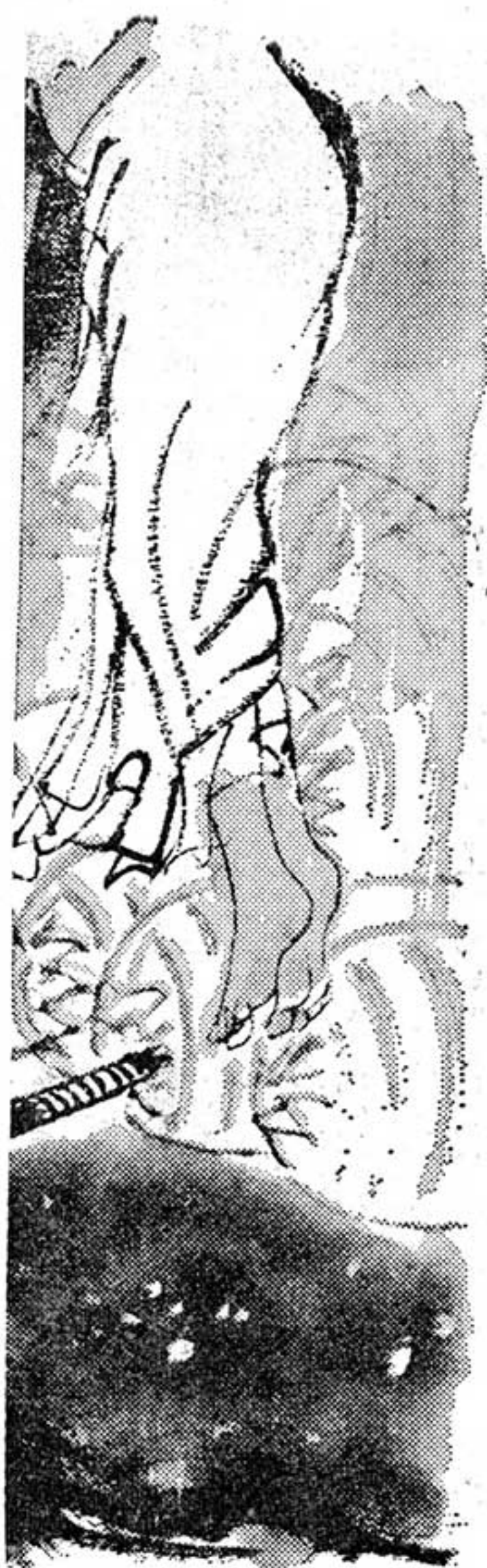
美香の白い上半身は無惨に変色していた。肌を這った十数条の鞭跡は血を滲ませて赤くなった。

甚左は舌を鳴らして手を休めた。

美香はもう意識を失ったのか、床にくつたりと身を横たえて動かぬ。甚左は鞭の先で突いた。

「ちっ、気を失ったか」

甚左は眼をあげて残ったひとりを眺めた。注がれる視線に恐怖を感じたのか娘はぶるっと体を震わせた。





「お前はあかねだったな。見ろ、素直に俺の問いに答えぬと、こういう目に合わされる。言う通りすれば、俺が殿にお慈悲を願ってやる。どうだ」

あかねという侍女がもつとも若い。眼前にくり拡げられた拷問に、凍るような恐怖を感じているのは当然である。

縄目の間から覗いている乳房もまだ固かった。美香の血を吸った鞭が、あかねの頬を軽くついた。

「お、お許し下さりませ」

蚊の鳴くような声であった。甚左、にやりと骨張った顔を歪めた。

「許してやってもいい。小笹姫がどこに消えたか白状すればここからすぐに出してやる」
「――」

甚左は鞭であかねの白い咽喉を突いた。

「さあ言え、小笹姫と中田半兵衛はどこへ逃げた。言わぬとお前もあなるぞ」

宙にぶら下っている屍を指差し、床に横たわっている美香を蹴った。

ふたりの苦痛の呻きが耳もとに甦えり、あかねはぞっとした。

中田半兵衛の老醜と言える顔が脳裡に浮んだ。命を失おうとも、口を割るなど言った半兵衛の不気味な眼。

あかねは首を振った。自分に加えられようとする拷問に耐えられなかった。

「隠し道です。姫さまと中田さまは隠し道から逃げたのでございまする」

「隠し道だと——」

甚左は眼をぎらりと光らせた。

隠し砦

鷹ノ巣城が布部道鬼の手に落ちた翌日の夕刻、城から北へ四里ほど離れた山裾を、ふたつの人影がたどっていた。街道から遠く離れて静寂の底にある山陰である。

「姫、お疲れでしょうな」

先に立つ老人が振り返った。頑丈な体は老人らしくなく、銀色の髪と黒ずんだ皮膚がなければ壮年の男と変りはない。藤巻玄信の軍師であった中田半兵衛である。

「半兵衛こそ疲れませぬか」

小笹が息を弾ませて答えた。

どこで衣服を変えたのであろうか、小笹は男の小袖をまとい、たっつけ袴を着けているのである。黒い男の衣服は、小笹の美貌をかえって冴えわたらせていた。

半兵衛の眼がぎらりと偏執的に光ったのを小笹は気づかなかった。

「若い頃から鍛えており申す。御心配は無用

じゃ。これより一町で儂のほかは誰れも知らぬ隠し砦にたどりつける。そこでゆるりと休息していただく」

半兵衛は振り向くと足を踏み出した。

木々に掩われた谷間を抜けると、大きな岩が重なり合っている所へ出た。その小さな岩の割れ目は人間がひとりくぐれる位の大きさである。

半兵衛がぐくりこむのへ小笹も続いた。

意外にも割れ目の向う側は深い碗の底のようにひらけていた。周囲は山肌で包まれて、中央には一棟の小屋までが作られてある。

「これが儂の作らせた隠し砦じゃ。絶対に敵の眼にはつかぬ」

半兵衛が自慢気に言った時、小笹は滲み始めた夕闇の中に異様な物を見つけて息を呑んだ。張り出している松の枝の下に、数体の白骨が転っていたのである。

「あれはこの砦を作らせた人足じゃ。秘密が洩れるのを防ぐために儂が斬った」

半兵衛は平然と言った。小笹はこの老人に潜んでいる惨忍な気性に冷たい恐怖を感じたのである。

小屋の内部には炉が仕切られ、薪木、乾飯や乾魚などの食糧が貯わえられてあったが、半兵衛はそれらが減っている事に気づいた。

食糧が減っているのは、野ねずみや狐の類いが喰ったのかも知れぬが、薪木の減る事は考えられぬ。半兵衛は炉の灰の中に焼け残った木片を見つけて歯を噛んだ。

この隠し砦は、誰れも知らないはずだったが、誰れかがここに現われたのである。

炉に火が燃えると、ふたりは粗末な夕餉を済ませた。夜は深くなり、深沈たる闇が沈んでいた。

「半兵衛、私は早く尼子晴久さまにお会いしたいのです。布部道鬼を討ち藤巻の旗をうち立てねば父上様に申し訳ありませぬ」

小笹の表情は必死なものを浮べていた。半兵衛は口に残った乾飯をゆるく噛みながら、にやりと嗤った。

「姫はもはや自分の意の儘にはなり申さぬ。姫は人形と同じ、いずれか高い方に買うてもらうか、儂がたっぶり可愛がってやるか」

半兵衛の口から意外な言葉が流れた。小笹は本能的に半兵衛の意図を察した。処女の本能であった。

「私を助けたのは父上さまの仇を討つためではないのですか」

小笹が叫んだ。

半兵衛はゆっくりと首を横に振った。

小笹が立ちあがった時、半兵衛はいつものま

にか一条の縄を持っていた。

「無礼なッ、お放しッ」

小笹が悲鳴をあげた。

半兵衛の骨張った指ががっしりと手首にまといついた。ふり放す事もできぬ強靱な指である。老人とはかけはなれた腕力であった。「ふふふ」

半兵衛の含み笑いが不味気に響いた。炉の炎に照し出された顔は血を浴びたように赤かった。影が壁にゆらゆらと躍る。

小笹はぞっとする感触にもがいた。

息が詰りそうだった。両腕は背に折り曲げられて、手首に巻きついた縄が肌をよじりながら締まった。胸のふくらみに半兵衛は縄をまわしてぐいと力をこめる。

「う、ううッ」

小笹が呻いた。

凄まじい半兵衛の力だった。小袖の上から縄にくびれこんで、小笹は顎を突き出すようにして衝撃に耐えた。

体中を締めつける縄は痛かった。

半兵衛は熱い息を吐いて小笹を見下ろしていた。うなじの白さが眼に浸みるほどであった。

狂老人

小屋の中に炎がゆらゆらと泳いだ。

半兵衛は一筋の布をよじって、固く結んだ小笹の歯を、親指で割り開くと、ぎりぎりと噛ませた。人里離れた隠し砦である。小笹がいくら助けを求めようとかわねのだが、舌を噛み切つて己れの生命を捨てる事を防ぐための猿轡であった。

小笹は歯を割った布が、口の自由を奪ってしまうと、絶望の涙を不覚にも滲ませた。もはや自決も許されないのである。

半兵衛は小笹の自由を総て奪ってしまったと炉端から離れて、小屋の隅に積まれてある食糧の中から、壺を取り出すと火の傍らに腰を据えた。

貯えていた濁り酒である。

半兵衛は木椀に満たすとゆっくりと口に運んで、くの字なりに横たわっている小笹を眺めた。

「僕は軍師という稼業は飽きあきしたのじゃわい。たつぷり稼いで余生を安楽に暮すか、若い女の肌を楽しみに暮すか、どちらかを選ぼうと思うてな。そこへ布部道鬼が謀反を起した訳じゃ」

半兵衛は木椀の酒をすすった。

「隠し道も隠し砦も、このために作ったものなのじゃ」

酒を干すと半兵衛は小笹の方へにじり寄つた。老醜を剥き出した奇怪な相貌であった。

小笹は逃げようとしたが、縛められた体は雑作もなく捉えられた。酒臭い息が小笹の顔に吹きかかる。

「姫、心配されんでもよい。僕はそなたを可愛がるのは後にしておるのじゃ」

楽しむように半兵衛は、露わになった小笹の肩を掌に包みこんだ。ざらざらした中に、ねっとりした感触を覚えて、小笹は閉じた睫毛を震わせた。

「尼子晴久殿が姫を必要としているか、殿が殺された今では判らぬ。姫に布部道鬼が懸想しての謀反じゃ。道鬼奴が姫をどれほど欲しがっているか、僕は尼子晴久殿と道鬼を天秤に掛けているのじゃよ。どちらも僕の言い値で買わなんだ時に、姫を自分の物にする心算じゃ」

奸悪無類の老軍師であった。半兵衛がこのように策謀を働けていた事を不覚にも小笹は気づかなかつた。むしろ、布部道鬼の手から隠し道を通つて、城から脱出させた目的は、道鬼を討つためだと思つていたのだ。

小笹は必死になつてもがいた。

「う、う」

声をあげようにも唇を割った猿轡は顎も動

かぬほどに厳しかった。

「これ、そうあばれるでない。静かにするのじゃ」

半兵衛がねっとりした声で言った。

背で握り締められた指が美しい。

と、半兵衛の眼がきらりと光った。

土を踏むかすかな足音が、静寂を破ったような気がしたのである。耳を傾むける。老いてはいたが、半兵衛の五感は常人と変りないというより、常人をしのぐほどに発達していた。

小屋の背後に引いてある窠から、したたり落ちる水滴の音だけが聞える。

半兵衛はこの隠し砦に誰れかが潜んでいると感じた。食糧を盗み、薪木を燃やして、この小屋に住んだかも知れない人間である。

半兵衛は小笹を離して立ちあがると、太刀を引き寄せて、戸の隙間に顔を寄せた。黒々と墨一色に包まれた無音の闇があるばかりであった。

戸をあけて外に出る。

既に、冬を思わせるほど夜気は冷たい。半兵衛がぞくりと体を震わせた時、空気を切る鋭い音を聞いた。

半兵衛は膝を突いて姿勢を低めた。ばしっ、と板戸に何かが当たった。半兵衛は



視線をまわして闇をすかした。動く何物も視界の中に入らなかった。半兵衛は油断なく立ちあがり、板戸に喰いこんでいる物を一瞥して顔色を変えた。

忍びの者が用うる十字型の手裏剣である。

悪党ども

鷹ノ巣城に仮の屋形が建てられて、藤巻玄信一族が新たな領主を祝って酒宴を張っていた。心底から布部道鬼を祝う者はない。また祝詞を述べられて満足する道鬼でもない。両方が本性を隠しているのだ。

新しい領主をめぐって、既に暗躍は始まっているのであろう。

布部道鬼は朱塗りの大盃を傾むけていたが酔わなかった。街道を固め、国境を閉ざした部隊から、小笹を発見した報告はない。不安と期待と焦慮が、この野心に燃えた男を捉えていた。

「皆、ゆるりと過せ。俺は休む」

言い捨てた道鬼が立ちあがり、急造の広間を出ると、影のように根津甚左が寄り添う。

道鬼は不機嫌な表情で甚左を見た。

「甚左、小笹はまだ判らぬのか」

「殿、その話は御寝所にて伺いましょう」

さり気なくかわして甚左は従った。

寝所の周囲には甲冑に身を固めた宿直の武者が道鬼を見て叩頭する。抜身の槍がきらりと光った。

杉戸を開けると、白く輝いているものが、

道鬼の眼に入った。

それは女であった。

「あれはどうしたのだ。甚左」

道鬼が甚左を振り返って訊いた。甚左の顔に奇妙な微笑が浮いていた。

「小笹姫の侍女のひとりであかねと申す娘。

小笹姫の代りにはなりますまいが」

「相変らず気が利くのう。捕えた侍女は三人だったな」

「左様、ひとりは吊り責めに掛けたところ絶息致し、残った美香と申す娘は未だ悶絶しております」

道鬼は敷きのべられた褥に座りこんだ。手を伸して、あかねの黒髪を掴み、伏せていた顔を仰向ける。あかねの顔半分は猿轡の布で

掩われていた。両腕は背に折り曲げられ、縄は素肌をくびれさせていた。

「ふん、仲々の美形だが小笹の足もとにも及ばぬわ」

「殿、今宵一夜のなぐさみでござる」

甚左がすかさず口をはさんだ。小笹が捕えられるまで、道鬼の機嫌を取らねばならない

のである。

道鬼が苛立しげに掌に巻き付けたあかねの黒髪を引きまわした。熟れ切っていない果実のように新鮮な肢体が苦痛にもがいた。

「う、う、むむっ——」

頬を歪める猿轡の下から苦鳴が洩れた。

どうやら、道鬼はあかねに興味を抱いたらしい。甚左は静かに体を移動させると杉戸に手を掛けた。

「待て、甚左」

道鬼が酔いのために赤く充血した双眸を向けている。

「小笹を明日中に探し出して引っ捕らえる。

おぬし、自分の首を賭けて働け。兵は、思うさま動かしてもよい。判ったな、甚左。判ったら行け。俺はこのあかねと申す娘を相手に遊ぶ」

甚左は叩頭して杉戸の外に去った。

酒宴は果てたらしく、急造の屋形はひっそりとしていた。屋形の外側は武装した兵で固められている。

甚左は骨張った顔を外の闇に向けた。

平服の武者がすすと近寄った。甚左が眼で合図を送ると、武者は低い声で言った。

「只今、戻りましてございます」

甚左は姿勢を低めると、顔を寄せて呟くよ

うに訊いた。

「尼子殿の様子はどうか」

「道鬼さま御謀反には御立服。兵を送って揉み潰すお考えでしたが、小笹姫の安否を確かめた上でとおうせになりました」

「よし、その方はもう一度尼子殿へ使いをせよ。小笹姫は根津甚左がお護りし布部道鬼を討ってお見せするとな」

闇の中で甚左はにやりと笑った。

彼には彼なりの策謀があったのだ。小笹を手の内に納めて、尼子晴久の援助を受けて、布部道鬼を倒して領主の座に着く。自らのために、道鬼をして藤巻玄信を弑道させたのである。

「行け、人眼につくな」

武者を去らせると、甚左は微笑を刻んだまま、道鬼の寝所の杉戸を凝視した。

道鬼は燃え狂っていた。

酔いがようやく体中を熱くしていた。道鬼は褥に転っているあかねを見下した。

小笹への執念が火を噴いた。

道鬼の足が縄にはさまれて、ふくれあがっているが、かたそうに見えるあかねの乳房を踏んだ。

つまさきに力をこめて踏みにじった。

「ぐ、ぐう——」

あかねが海老のように反り返った。

地獄の使者

隠し砦の夜は明けた。

小笹は小屋の柱に縄尻を結び付けられていた。喰いこんだ縄は腕の感覚を失わせ、幾度も結び直された猿轡が唇をしびれさせた。小笹の自決を恐れて、半兵衛は夜中に眼を覚ましたびに改めたのである。

朝の光が小屋の中に差した。

半兵衛は起きあがると、消え残った炉の火を掻き立てた。冷気が肌に浸みるほどだ。

「姫、寒いかの」

半兵衛が体を硬くしている小笹を眺めた。

小笹の肩は昨夜同様に剥き出しにされて、寒気でそそけ立っていた。

「ふふ、もうじき儂が暖めてやるわい」

半兵衛が言った時である。

「俺も暖めてもらおうか。軍師殿」

低い陰気な声が小屋の外から流れこんだ。

「だ、だれじゃっ」

半兵衛が太刀を握んだ。

「忘れはすまいな。俺だよ」

小屋戸が軌みしなが開いた。佇立している男は武士であった。右腕がないのか、袖がたたりと垂れ下がり、額から左へ走った一筋

の刀創は左眼を失わせていた。

「う、うぬは、疾風の左源太だな。生きて、生きていたのか」

左源太は憎悪に顔を歪めた。

「伊賀の忍者崩れの俺を貴様はうまく丸めこんだ。俺は習い覚えた忍法で隠し道と隠し砦を作った。貴様が俺を取り立てるといふ甘言に釣られてな。貴様は秘密の洩れる事を恐れて俺と人足の五人を斬った。右腕を斬られ、眼を失ったが、鍛え抜いた体でどうやら生きのびた。貴様が忍者を甘く見て止めを刺さなかったお陰でな。松の根方を調べるがいい。白骨は四体しかないぞ」

左源太は視線を動かして、後手に括りあげられている小笹姫をみた。

「軍師殿は抜かりがないな。俺、布部道鬼とやらが謀反を起したと聞き、必ずここで貴様と会えると思って待っていた」

「ま、まて、左源太。儂が悪かった。謝る」

半兵衛は手で左源太を制止ながら言った。

「小笹姫を布部道鬼に渡せば相当の金になるのじゃ。それを全部おぬしにやる。それで儂を許してくれ」

闘争では敵う筈はなかった。酒にしびれ薬を混ぜて、人足共を斬ったようにはいくはずがない。



「出る、貴様とは外で話を付けてやる」

左源太が背を向けた時、半兵衛は全身に斗志を噴きあがらせた。太刀を鞘走らせて、背後から左源太を一颯した。

左源太の体が低く沈み、空を切った半兵衛の太刀が、がっと柱を噛んだ。狼狽が半兵衛の顔をよぎった。

「俺と同じようにしてやる」

左源太は沈んだ声音で言った。

「助けてくれ——」

肉と骨を断つ重い陰惨な音が響いた。左源太の刀身が半兵衛の右腕を肩の付根から斬り落した。血がびゅうと噴いた。半兵衛の体がよろめいて転り出る。

「今度は眼だ」

左源太は太刀をまわして言った。

「た、たのむ、助けてくれ」

血が地面を赤黒く染める。半兵衛の顔は苦痛と恐怖のために醜悪だった。片手で体を支えながら、這いまわって逃れようとする。左源太は朝の光を一断するように斬った。

異様な絶叫が半兵衛の口からほとばしり、血が虹のように散った。顔は噴き出す鮮血で染まり銀髪も朱と変っていた。半兵衛はもはや動かなかった。

「俺の慈悲だ。止めを刺してやる」

左源太が半兵衛の体をまたいだ。死魚の眼のように白い瞳孔が見あげている。左源太の刀尖が咽喉に沈み、半兵衛の四肢にびくびくと痙攣がはしった。

左源太は血曇りを残した刀身を下げて、小屋の中に足を踏み入れた。小笹が恐怖の眼で見詰める。

左源太は縄目を切り離すと、太刀を鞘に納めて背を向けた。小笹が猿轡をはずし、剥き出しになった肩を隠すまで待っていた。

「街道と言わず間道と言わず、布部の手勢が固めており申す。命を承らえたくば、ついて来られるがよい」

小笹は襟を整えて息を弾ませた。この奇怪な牢人者は敵か味方か判らぬ。しかし、いまの小笹にとって救いの神に違いなかった。

「半兵衛はどうしました」

「地獄へ墜ちた。俺と同じように片手片眼になっただけ」

左源太が小笹に向き直った。

「姫、俺の顔は醜くないか」

「私はそう思いませぬ」

小笹が答えると、左源太は黙って先に立った。

死の代償

小笹姫を捕えた者には黄金十枚を与えると、いう高札が到る所に立てられた。そして、鷹ノ巣城の城下に竹矢来が組まれ、ふたりの娘が引き据えられていた。

布部道鬼の発案であった。

五日後の夕刻までに、小笹が軍門に降る時に、ふたりの侍女、美香とあかねの首をはねると言うのである。

竹矢来の中央に二本の杭が打ちこまれ、腰布一枚をまとっただけの裸身を、後手に縄で縛りつけられている。ふたりの肌は何度も責め苦に合された跡をとどめていた。疲れ切つて、がっくりと垂れ下る頭は、雑兵どもの手で無惨な格好にされていた。

あかねと美香の頭は杭に固縛されて動かぬのだ。額に二筋、猿轡の代りに口を割った縄が一筋。

深々と肌によじれこんだ縄は、知覚を失わせ、すぐに意識は濁っている。五日間は死なしてはならぬと命じられている雑兵どもは、時折、口の縄をゆるめて、水や粥を流しこむ

のである。縄で歪んでいる乳房が喘いでいるのは生きている証拠だった。

朱色の腰布は乱れて、白磁の太股が剥き出しになっている。羞恥は苦痛のために消えていたが、見まわりに来る雑兵が野卑な眼を光らせて、槍の石突きで悪戯をする時には、美香とあかねは必死に体を硬くするのである。いまも、ふたりの雑兵が槍を抱えて歩み寄った。ひとりずつ、あかねと美香の傍らにしゃがみこむ。

「どうじゃ、少々参ったろうな。それにしても、若い娘の肌は不死身じゃのう」

髯だらけの雑兵が淫らな笑い声を響かせ、顔を近寄せる。あかねは顔をそむけようとすめるが自由にならぬ。ただ、しっかりと瞼を閉じて、全身の筋肉を硬くするだけであった。「眼をあけて俺の面をとっくり眺めてみい。存外の男前じゃ」

雑兵は指を伸してあかねの瞼を押し上げにかかると、鋭い痛みが突き刺さる。

「う、うう——」

絶え入るような苦鳴が咽喉からあふれた。美香の唇からも呻きが噴きあがっていた。脇差の鞘が胸の縄に差しこまれ、力に任せてひとこじりしたのだ。

「く、くう、くえっ」

「どうじゃ、こぼれ落ちる」

雑兵はにたにたと突った。

乳房がまりのようにふくらんで、とがった乳首は紅色に充血している。胸を締めつけられて呼吸が苦しい。美香は鼻腔を一杯にひらき切なく息を吸う。

全身をくねらせて苦痛に耐えようとする。

その時、駆け寄って来る足音が聞えた。

「うぬら、何をしておる」

駆け付けた鎧武者が手にした鞭を振った。

雑兵が悲鳴をあげて、あかねと美香の傍から離れると地面にうずくまった。

「殿の命令が判らぬのか。この娘たちは五日の間は殺すなと仰せられたのだ。うぬらは勝手な事をして、この娘たちを殺す気か」

「で、ですが、隊長——」

ひとりが声をあげた。

「待て、待てえ」

竹矢来の外から叫んだ者がある。隊長が振り向くと、馬に乘った根津甚左であった。甚左は竹矢来の中へ馬を乗り入れると言った。「叱るな。雑兵どもには俺が命令したのだ。奥村五兵衛だな。かまわぬからやらせい」

隊長の奥村五兵衛が気色ばんだ。

「根津様、拙者は五日の間は手荒な事をせぬように扱えと殿に命じられております。こ

の者どもは拙者の部下、勝手な真似はさせませぬ」

鞍上で甚左は不機嫌な色を刷いた。

「奥村、この娘たちは殿を裏切ったのだ。また、少々は痛い目に合わさぬと、小笹姫も覚悟を決めて出て来ぬぞ」

甚左は馬をまわしながら唇を歪めた。

道鬼の計略通りに小笹が出て来ると、甚左の策謀に破綻を来たのである。小笹は道鬼の手に渡さず自分の掌中に確保せねばならぬ。甚左は美香とあかねの命を縮める事に決めたのだ。既に美香は拷問を受けて弱っているし、あかねは一晩中狂気のようになった道鬼に責め苛い込まれている。ここで、雑兵どもに責めさせれば、衰弱しているふたりは五日も生き永らえる事はできない。

小笹を釣る餌を失えば道鬼も断念するであろう。その間に甚左は手勢の全力を挙げて小笹を捕えるのだ。

甚左は馬腹を蹴った。

百舌鳥の鋭い鳴き声が野面に響きわたっていった。

野 盗

い山を背にし、人里離れた一角に大きな木小屋を建て、二十人ほどの男たちが住んでいるのだった。

左源太は部下たちには口を閉ざして、小笹を奥の一室に招じると、夜は太刀を強いて戸口に座って眠った。男たちから小笹を護るためであった。しかし、左源太は小笹に優しい表情は見せなかった。

小笹が助けられて三日目の夕刻、部屋の中に左源太が入って来ると声を潜めた。

「姫、美香とあかねのふたりを御存じか」

「はい、ふたりは私の侍女です」

小笹はこの不思議な牢人者を見詰める。左源太は小笹の冴えた美貌を眩しげに眺めた。「領内に入る所に高札が建っておる。小笹姫を捕えた者には黄金十枚をとらせる。野伏りどもの中で、小笹姫と知ったら布部道鬼に売る奴が必ずいる。気を付けられい」

小笹にはあかねと美香の事が気になった。

左源太に訊いた。

「あかねと美香がどうしたのです」

「うむ」

と、左源太は口ごもったが、決心したように唇を開いた。ふたりとも、鷹ノ巣城の近くにいる。素裸に剥かれて杭に括りつけられていた。五日の間に小笹姫が軍門に降らぬとふ

たりの首をはねると高札に書いてある。

小笹の顔が蒼ざめた。立ちあがって部屋を出ようとする。その腕を左源太が掴んだ。

「どこへ行かれる」

「あかねと美香を助けるために名乗って出るのです。私のためにふたりは殺せませぬ」

左源太の独眼がきらりと光った。

小笹の真剣な表情が、左源太の胸を鋭く突いた。

「姫、それは危い。道鬼は姫が名乗って出ればふたりの命を助けるとは限らぬ。犬死をあせる事はない」

小笹は朱唇を嚙んだ。愛らしいあかねと美香の面影が浮ぶ。道鬼への憎悪が火を噴いていた。あの娘たちに何の罪があるのだ。

「左源太殿。私が名乗って出なければ、ふたりは殺されましよう。私には耐えられぬ」

にやりと左源太が笑った。不敵な微笑である。傷を帯びた異相が精悍な翳をみせた。

「よかろう。この左源太が一肌脱いで進ぜよう。道鬼の眼の下から、ふたりの娘を救い出してみせるのも面白い。田舎武者の計略を破る位、雑作のない事だ。姫、これより皆を連れて出掛けて参る」

「左源太殿。頼みまする」

小笹は床に手を突いた。

左源太は小笹を凝視していたが、黙って部屋を後にした。やがて、馬のいななきと馬蹄の轟きが静寂を破った。左源太が部下を連れて出発したのである。

左源太の姿が見えなくなると、ふたつの人影が小屋の裏から、ひょっこりと現われて、狡猾に笑い合った。

虎八に金助という左源太の部下である。

「頭は俺達がいねえ事に気づくまいな」

髯だらけの丸顔を、虎八に向けて、金助が心配気に言った。

「頭はひどく気負って出かけたぜ。あの調子じゃ先ず気づくめえ」

金助と対照的に痩せている虎八が答えた。ふたりは企みを秘めて残ったのである。

「あの女は確かに小笹姫かと、金助が眼を光らせた。

「小笹姫を捕えた者には黄金十枚だ。引っ括って、小笹姫かどうか口を割らすのよ。小笹姫なら黄金十枚。違ってもあの異形だ。

楽しんで売り飛ばしても黄金の三、四枚になる」

「どうやら、悪智恵を働かせるのは虎八のようであった。」

「頭はどうするんだよ」

虎八が顔を歪めて得意気に言った。

「行きがけの駄賃よ。布部道鬼の手勢に疾風の左源太が、道鬼の命を狙っていると駆けこむんだ。そうすりゃ、鎧武者がこの小屋にわんさとやって来る」

「成程、お前は智恵がまわりやがる」

感心したように金助が言った。

「さあ、早いところ仕事にかかろうぜ。縄を忘れずに持って来い」

虎八が命じて、小屋の中に入って行く。金助が縄の束を抱えて、あわてて後を追った。

虎八が昂奮して乾いている唇をなめて、息を消ましている金助に顎をしゃくった。

美女危難



小笹は人の気配を感じて顔をあげた。

野卑な顔つきの男がふたり。険悪な面構えで立っている小笹は危険を感じた。

「へへっ、小笹姫でござんすね」

虎八が声をかけた。

「違う、違いまする」

「違うもんかい。おい、金助。手っとり早く片づけようぜ」

「何をする、お放しっ」

襲いかかる虎八から逃れて、壁際に後退した。ふたりの男が大手を拡げて近寄って来るのだ。小笹の背は壁に貼りついた。

「い、いや、お、お放しっ」

虎八に羽搔締めになされて床に転される。虎の膝がぐりぐりと小笹の背骨を押えた。ふたつの手首に貼りついた指は強靱であった。まるで、折り曲げられるように、小笹の両腕は後へ捻りあげられた。

「金助。縄だ、早くしろ」

「合点」

金助がほどいた縄束を虎八に渡した。手首を噛み締めた縄は胸を二巻き。隠し砦の小屋で、中田半兵衛に縛りあげられたよりも、強烈な縄捌きであった。胸を締めつけられて、小笹は呻いて顎を突き出した。

縛り終わると、虎八は転っている小笹の、



一筋

黒髪を掴んで無理矢理に顔を仰向かせた。

「小笹姫を捕えた者には黄金十枚をくれるんだよ。俺たちはお前さんの物腰から、てっきり違えねえと思うんだがね」

「私は違う、小笹姫ではありませぬ」

黒髪を吊られる痛みを、眉を寄せて耐えながら小笹が叫んだ。このような野伏せりどもに捕えられるのは口惜しい。

「俺達はおまかせねえねぞ。どうだ」

虎八は掴んでいる髪を左右に大きくゆすつた。小笹の顔が苦痛に歪んでゆれた。頭皮から痛みが脳髄を掻き乱した。

「い、いたい、あ、あっ」

「痛かったら、さっさと白状するんだ」

虎八が冷酷な言葉を浴せた。

「おい、小笹姫じゃないのかも知れねえよ」

金助が口をはさむのへ虎八がわめいた。

「馬鹿野郎。これ位の責めで仏心を出すんじゃない。お前はその指を折り曲げてみる」

小笹の黒髪から手を離して虎八が命じた。

「こうするのかよ」

金助が小笹の白魚を思わせる指を掴んだ。

指を反対側に折り曲げ始めた。しなやかな指が反り返ると、小笹の全身が硬直し、荒い息が唇から流れた。

「う、う、うっ」

骨の折れるような痛みに呻いた。

「見ろ、こんなきれいな指は姫君じゃなきゃ持ってねえ。幾ら隠しても判るんだ」

「ち、ちがう。私、私は小笹姫ではありませぬ——」

小笹は叫びをほとばしらせた。

責め苦に負けて、身を明かしてしまえば、左源太の行為は空しいものに終る。小笹は負けまいと懸命であった。

「これでやめなきや指が折れちまう」

金助の方が脂汗を滲ませて手を離れた。小笹が拷問から解放されて大きく喘いだ。小袖の胸のふくらみが、激しく起伏するのを、虎八がぎらぎらと輝く眼で凝視した。

「よし、小笹姫であるかないかを体で調べてやる。素っ裸に剥いてしまおうぞ」

小笹が慄然として息を詰めた。本当にやりかねない語調であった。

「や、やめて」

小笹は総てを捨てて哀願した。

羞恥が小笹の全身を燃えるばかりに熱くした。今までは足下に見おろしていた野卑な男どもに、隠している肌を剥き出される屈辱は決定的であった。小笹は舌を嚙んで死のうと思った。だが、左源太の成果を目にするまでは死ねなかった。

胸を締めている縄は、小袖を脱がせるのに邪魔と見た虎八が、後手をその儘にしてゆるめた。

「金助、ぐずぐずするな」

昂奮した虎八のうわずった声があがる。

「あ、あれ——」

絶え入るような小笹の悲鳴だった。

凝脂の光った肩をすべり、小袖は後にまわっている手首のところへ固まった。小袖の上半身は露わに剥ぎ出されていた。

腕を伏せたような、白磁の乳房が羞恥をたたえて、熟れた小梅を思わせる乳首を震わせていた。

白磁の肌

ふたりの野伏せりは黄金十枚よりも、すでに美女の裸身に心を奪われていた。彼らは疾風の左源太が帰って来る前に、小笹を布部道鬼に売り渡す心算なのだが、兇暴な欲望が噴きあがって来るのを押えきれなかった。

「小笹姫かどうかはつきり白状しろい」

虎八の声が小笹の耳に陰惨に聞えた。

剥かれた肌に、秋の冷気が浸み通った。小笹は無惨な肢体を床の上に横たえていた。後手に縛りあげられた裸身はうつ向きに転され、折り曲げられた両足首を揃えて括りつ



けられて、縄は手首と足首とをつないでいるのだ。

腰のなだらかな円味が、赤い腰布に包まれて男たちの眼に艶めかしく映る。

小笹は黒髪を振り乱して呻いた。

「金助、女の髪を引っ張って背中中の縄に結びつける」

虎八が鋭い口調で命じた。金助とは対照的に冷酷な顔つきで立っている。

「こうすりゃいいのか」

金助の震えを帯びた声が流れた。

小笹の黒髪は後手の縄に巻きつけられて絞られた。顔が自然に傾向く。反り返った白い咽喉がびくびくと震えた。

小笹は逆海老責めにされたのである。

「う、う、う——」

耐えようとしても呻きは唇を洩れる。喰い縛った歯がぎりぎりとうめった。

「どうだ。お前は小笹姫に間違いねえな」
かがみこんだ虎八が訊く。

「ち、ちがう。私は、私は姫ではない」

「強情な娘だぜ。まあいいや。たっぷり責めあげて口を割らす楽しみが出来る」

「だがよ、虎八。ぐずぐずしてると頭が戻って来るぜ」

「おっといけねえ。忘れていた。金助、この娘をかつぎ出そうぜ。霧ヶ沢の炭焼き小屋でじっくり責めあげよう」

「合点だ。早いところ行こうぜ」

彼らの言葉を聞いて小笹は愕然とした。この小屋から連れ出されては戻って来る左源太に会えない。

「外でわめかれちゃ困る」

虎八が言いながら、剥ぎ取った肌衣の袖をちぎってまると、小笹の顎を掴んだ。口を塞がれる。小笹は必死に歯を閉じた。虎八の指が顎の下に喰いこんだ。鋭い痛みが、こめかみを走って、意志とは逆に小笹の唇はひらいた。虎八が布をまるとこむ。

異様な感触が口腔に拡がるのを手拭いが押さえつけた。

金助の持ちこんで来た丸太に、逆海老責めのまま、括りつけられた小笹である。このふたりの野伏せりは、獲物を取った狩人のように、小笹を吊り下げて運ぼうとするのだ。

小笹は気の遠くなるような恐怖を感じた。

「出掛けるか、金助」

虎八が声を投げた時、冷めたい風が吹き抜けたような気がした。

「裏切った奴は生かしてはおかぬ」

意外にも疾風の左源太の声であった。しかし、姿は見えぬ。

虎八と金助がぎよつと顔を見合せた刹那、小屋の屋根裏から、黒い化鳥が舞い下りてきた。伊賀の忍者崩れである左源太ならではの行動であった。

声もなく姿勢を凍らせたふたりへ、床につま先が着くや、左源太の太刀が左右に大きく光った。

鐸の鳴る音が小笹の耳に届いた時、虎八の瘦せた体はふたつに割れ、金助の丸い顔をのせた首は、血の尾を引きながら転っていた。

「気になったのでひとりで戻って来た。やはり戻ってよかった」

左源太は呟き小笹の縄を解きはじめた。小笹は安心から気の遠くなるのを感じた。

小笹の意識が鮮明になった頃、彼女の眼に澄んだ蒼空が映っていた。左源太の腕が体を支えていた。

「左源太どの、いずこへ」

小笹が訊ねた。

「これより部下と共に娘たちを助けに行く。

姫も共に来られよ」

左源太は大声で答える馬の腹を強く蹴って精悍に笑った。

二十騎の野伏せりが山裾をまわった所に待機していた。

「者ども、続けえ」

その夜、左源太は暗にまぎれて、あかねと美香を救出して、小笹と共に尼子晴久のもとに走った。

小笹を失った布部道鬼と根津甚左の間に暗斗が起こった。その機を逸せず、尼子晴久は布部道鬼を攻めた。

勇猛果敢な一部隊は、凄まじい勢いで布部勢を破り、鷹ノ巣城に突入して、豪勇をうたわれた道鬼の首級を奪った。

部隊の先頭に立って、阿修羅のように戦った将は、隻腕隻眼の疾風左源太であった。







■女房なんかほしくない

特製マゾキン

嶋岡 晨

山田 彬 弘・絵

1

抽象画家堀川英吉の技法はちょっと変わったものだった。絵筆のかわりに女体を用いるのである。

親友の真辺昭弘は、その夜も堀川の製作過程を、アトリエの隅の長椅子によこになったまま、つぶさに観察していた。真辺は、ごく最近勤めさきの私立の女子高校をクビになり、暇をもてあましていた。クビになった理由がふるっている。試験監督中に、つい指先が動いて、女生徒のスカートの下にもぐりこんでいたというのである。

「真辺君、ちょっと照明の角度を変えてくれないよ」

と堀川が、汗ばんだ額に垂れさがる髪を振りはらいながら言った。真辺は、のそりと起きあがると、アトリエの一角にとりつけた舞台用のライトの角度を変えに行った。舞台監督の助手のように。

じっさいアトリエは、残酷劇の小さな舞台だった。真っ赤な光線が波立ちながら注いでいる中央に、床の上に腹匍いになったまようごめている裸の女がいる。まっ白な肌が、炎のように燃えると、画家は、バケツに溶かした多量の赤い絵具をその背中にぶちまけた。



「そのまま立って！」画家が叫ぶ。

裸の女が手をつき、ものうげに立ち上ると、その緩慢な動きにつれて、赤い絵具はたらたらと滴り、張りきった乳房や腹の上、そしてふとももの間に流れ落ちていった。

画家は大きなブラシに、白い絵具をたっぶり含ませると、

「ううむ、むうッ……」

と呻きながら、モデルのやわらかい咽喉のつけねからヘソの下まで、断ち割るような勢いで、一気に白い線を引きおろした。

ついで、彼はダブルベッドよりも大きい床にねかしたカンパスの上に、女を連れていき再びそこに伏せさせると、——つまりカンパスの表面に、絵具を塗りつけた女の肌を密着させると、裸足で女の背中に飛び上がって、ぐっぐつと踏みつけ、肉のふくらみとくぼみがつくる色彩の濃淡の跡を押し残す操作にうつった。

堀川の足が、血みどろのしなやかな背すじを踏むたびに、女は、苦悶にゆがんだ表情を見せ、あえぎつつ、野鳥の叫ぶような声をたてたが、やがて、片側が焼けたビフテキを裏返すように、裏返され、画家の両手が力をこめて肩をおさえつけ、胸の二つの隆起をもみしごき、腹やふともものを圧迫しはじめると、

汗にぬれた頬にみだれた髪の毛をまといつかせながら、恍惚とした歓喜の表情に変わっていった。

画家自身、モデルの体をいためつけ、絵具といっしょに女の体液までしほりだすほどに、熱情をこめて「表現」しているうちに、妖しい快感に酔っていくふうであった。

「もうダメ、……やめて……」

女がぐったりした体をカンパスから剥がして哀願すると、制作の第一段階は終わった。

ひろいカンパスの上には、よくくびれた胴やむっちり盛りあがった腰、またぶるぶる動く乳房やかわいいヘソの跡を、さまざまの小の円や曲線として散らばらせ、中央にひとすじ、白い滝のような直線がみごとに印しのごされていた。りっぱな抽象絵画の構図である。

堀川は、うまそうに煙草をふかしながら、ライトを消し、青白い蛍光灯のあかりのなかで、疲れてうずくまっているモデルを、いら立たしげににらみつけたまま、真辺に言った。「ひとやすみだ。これからだよ、おれの芸術的意図が、はっきりした形をとってくるのは——」

観察者である真辺も、なぜかだるい疲れを覚えていた。アトリエの中にたちこめた、む

んむんする画家の奇妙な情熱に、頭をやられかけたのか。……サイド・テーブルに置かれた一鉢のサボテンは、悪魔がにやりと笑ったような、毒々しく赤い花びらを開かせていた。「おもしろいよ、とても。邪魔でなきやずっ

と見せてほしいな」

「いいとも」
浴室で絵具を洗いおとしたモデルの肌がかわくまで休憩すると、画家は第二の段階に入った。

裸の女は、二十四五だろう、……女ざかりの体にすでに疲れはなかったが、商売ずれした石膏のような顔に、大きな目ばかりがギラギラと病的な輝きを帯び、啞かと思われるほど無口だった。

湯を浴びてつやつやとバラ色にほてりなまめく肉体を、堀川はこんどはぐるぐる荒縄でしばっていった。肉体の要所要所が、食いこむ縄目からはみ出して盛り上がった。両手は後に、両足は揃えて、きつくきりと縛り上げた。女は唇をゆがめ、眉をしかめながらも、頬を紅潮させていった。

立ったままの姿勢で、女を縛り上げると、画家は、ぱっとその足を払った。女は、「あッ」と叫んで、カンバスの上に倒れ、赤と白の絵具の上に無数の縄の跡を刻んでこ

がった。

「おい、そいつを取ってくれないか」

画家の目くばせで、真辺は壁にぶら下っている鞭を渡した。

「そのサボテンもだ……」

「え？」

いぶかりながらも取って渡す。

画家は、花をむしりとり、手袋をすると、鉢からトゲだらけの丸いサボテンをひっこ抜く。鞭が、よこたわる女のほてりした腰の下に入って、ぐいとこね上げると、そのすき間にサボテンを入れ、上から裸足でふんづけた。

「きゃッ、いやッ、痛いッ、……」

女はごろごろ転げまわり、カンバスにおのずから新しい模様を描く。鞭が、さらに縛られた女の上に鳴った。そして、すばやく黒い絵具の溶液が、全身にぶっかけられた。

くわえた煙草の灰がなくなつて、ぼとりと床に落ちて、真辺は気づかずぼう然と見ていた。——第二段階は終わったようだった。

幽霊のような印象の、和服に洗い髪の女が盆を捧げて入ってきて、

「お茶を……」

と呟き、テーブルにのせると、またそのまますうっとひっこんだ。堀川の妻である。

「このごろすごいヒステリーでね……」

画家は、鞭を放り出し、モデルを解放してやりながら、妻の去ったドアをにらんだ。

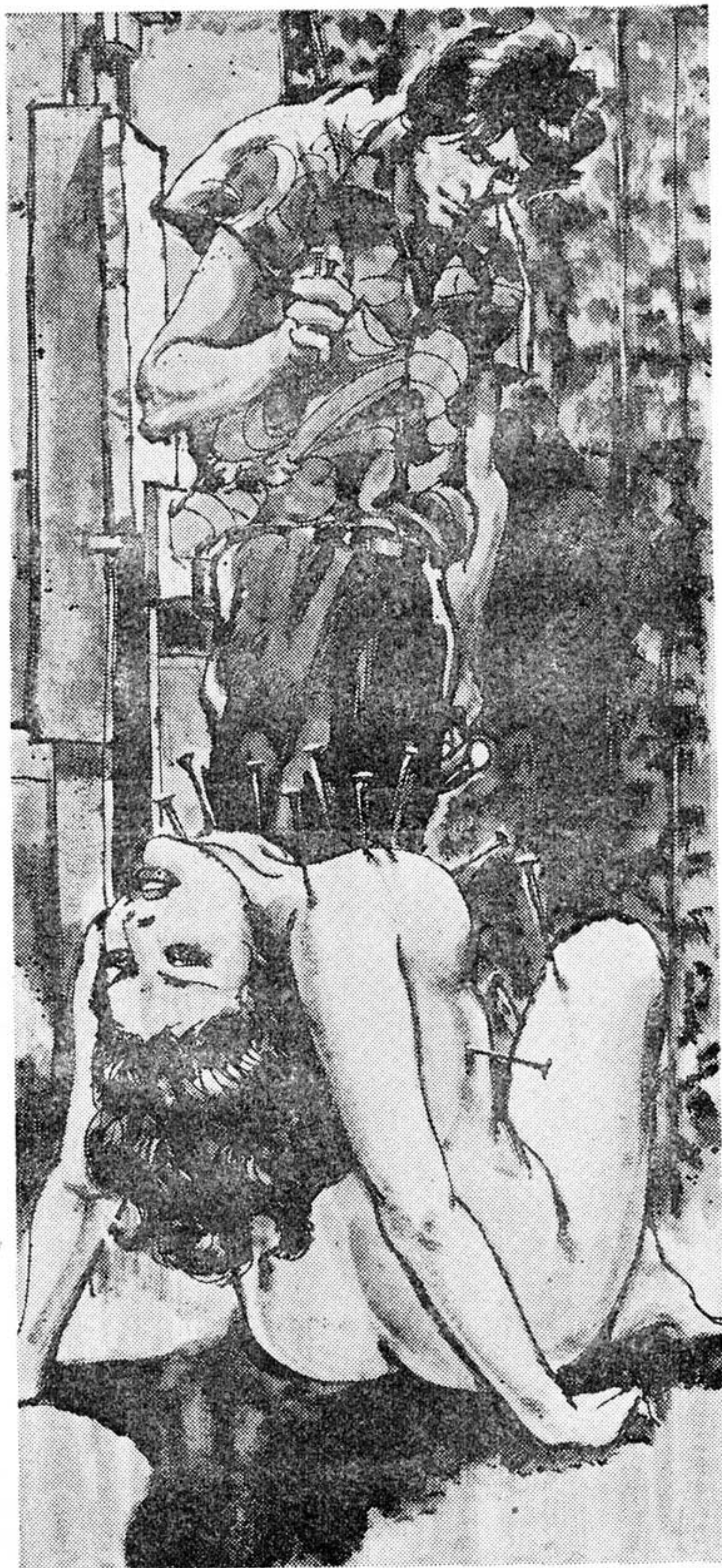
2

真辺の胸に、彼自身にとってはすばらしいと思える着想が湧いたのは、堀川の奇妙な製作ぶりを、まざまざと目にしたときからだっ

たようだ。
数日後、彼はそれの製作に没頭しはじめた。幸い彼の家には、製作を邪魔する者はだれもいなかった。妻も、一匹の猫すらも……。書齋があやしげな工房となった。

すっぱだかのマネキン人形が一個、床にねかされている。彫塑の要領で、石膏でマネキンの型をとる。薬局で買ってきた粉末石膏を水に溶かして練りながら、彼はふとなつかしく高校生時代の美術部での活動を思い出した。ほどだ。

型どりが終ると、その凹面に、庭にそなえた大釜で煮溶かした良質のゴム液を、最初はうすく、次第に濃く流しこんだ。石膏とゴムの間には、むろんうすく油の膜が張ってある。ゴムが硬化し、型をはずせば、すでにマネキン人形そのままのゴムの像ができ上がっていた。



「ゴム製品か……」

ふっとくすぐったいものが突き上げてきて、真辺は汚れた作業服のままソファに倒れると、ゲラゲラ笑っている。

「頭は生きてるうちに使うもんだぜ、見ろ、なんてグッド・アイデアだ。これだけでおれはひと財産かせげるぞ——」

ゴムの表層が完全に乾くと、表面——とい

うより「彼女」の皮膚を、たんねんに磨き上げ、顔、髪、乳首、爪その他に、リアルな彩色をほどこした。……

たそがれの、灯ともさない部屋のくらがり、白く浮き上がっているのは、製作第一号の等身大のゴム製の裸女である。彼女は、あたかも生きているかのように、にこやかに笑いかけ、これからおこる情事を期待するか

のように、濡れた赤い唇をなかばひらいてふるえていた。

「そうだ……マゾキン——これでいこう。いか、これがおまえの名だ」

真辺は満足げにうなずきながら呟いた。それから、そっと裸の彼女を抱きしめた。やわらかくあたたかい肉体、……内部に湯を入れたばかりだが、そんな人工的なことさえ忘れ

させる美しさである。

真辺のゴム人形がダッチ・ワイフとちがう点は、単に性的な行為に必要な部分がそなわっていないということだけではない。人形がM的嗜好の性格をそなえているというおそろべき一点で、決定的に区別されるのだ。

彼は、彼女の腰のわれめに備えつけたボタンを押す。すると、内部にしかけられた小型の永久廻転式レコーダーが、喜びのくるおしい音色であえぎ叫ぶのだ。

「もっと、もっとよ、……ぶって、——なぐってちょうだい、鞭で、きつくぶって、——早く、ここにも、あそこにも釘を打ちこんで蹴って、踏みつけて、くたくたにして、——ああ、ああ、……」

名づけてすなわち「マゾキン」である。

その夜、興奮のため目を血走らせ、車で、毛布にくるんだマゾキンを、堀川のアトリエに運びこんだ真辺に、堀川は、いつになくはれぱれた顔つきで言った。

「うれしいじゃないか、女房の奴、男ができたらしいんだ。近所の若い学生だがね、いまも寝室でいちゃついているところさ、……」

真辺はいきなりそんなことを聞かされて気がくじけてしまった。隣の浴室から、バスタオルで体をくるんだ女が出てきた。この前

とおなじモデルだった。

「先生、今日はちよつとひどすぎたわよ、湯がしみて痛いったら、……」

——ほら、と女がまくって見せた大きな尻に、みみずばれになった長い鞭の跡がそのまま残っていた。

「この次ぎはもっとひどいぞ！」

画家はうれしげに吠えた。

「いいわ、でもモデル代はたんとくださいな」

女は、両手をのばして堀川の首にぶら下った。バスタオルが落ちて、赤く血のにじんだ背中がむき出しになった。

「こんなかわいそうな女のためにも、マゾキンは必要なんだ」

彼らしくもないへんな道義心に勇気づけられたかたちで、真辺は言った。——

「おれの芸術品を見てくれないからね」

彼は毛布をはがし、マゾキンをアトリエのまん中まではこぶと、腰のわれめのボタンを押した。画家の表情が一変した。

……翌日から、モデル女は使われなくなつた。

3

堀川のアトリエに運びこまれた「彼女」は三人になった。

ひとりの裸女は、あごに縄の輪をかけられ天井からぶら下っている。ひとりの裸女は、壁にむかつていつまでも逆立ちし、いまひとり床に匍いつくばっている。

彼女らはいっせいにわめき立てていた。

「もっと、もっとよ、……ぶって、——なぐってちょうだい、鞭で、きつくぶって、——早く、ここにも、あそこにも釘を打ちこんで蹴って、踏みつけて、くたくたにして、——ああ、ああ、……」——吊り下げられたまま、逆立ちしたまま、匍いつくばったまま、いっせいに三人は喜びの叫びを放っていた。

画家は手に金鎚と五寸釘の十数本を握っていたが、いきなり匍いつくばっている彼女の背に馬乗りになり、まるまると盛りあがった腰に、すさまじい勢いで五寸釘をつぎつぎと打ち込んでいった。

鎚に打たれて、鋭い五寸釘は、ブスリ、ズブリと深くささっていく。血のような赤い溶液が、打ち込んだ箇所から噴水のように吹き上げ、「ああ、ああ……」という、息もたえだえなあえぎ声とともに、全身はびくびくとケイレンした。

もし彼女の裸体の下に白いカンバスがあつて、ふしぎな色彩の模様をおのずから描きとめていなければ、画家のしぐさは完全に狂人

のそれだということになるだろう。

吊るされた首吊り人のような彼女の真下にも一枚のキャンバスがあった。画家はぶら下っている女の脚につかって自分の体を宙に浮かせた。

ギリリと縄のきしる音がし、女の首は十分に締め上げられ、全体がくるくる回転した。画家はナイフでヘソから切り裂いた。赤い液体はたらたらと、ふとももを伝ってしたたり落ち、回転速度につれてキャンバスに、ラセン形の血痕模様をえがいていく……。

「いいわ、とても、とっても、死ぬわ、もうすぐ天国へ行っちゃうわよ、ああ、あああ……！」と呻きながら。

逆立ちしつづけている彼女の下にもキャンバスがある。壁に添えられた足先から、画家は黒い液体をぶっかけた。それはそのままぬるぬると裸の腹から乳房さらに顔、そして両手を伝わってキャンバスの上にしたたり落ちる。

彼女を蹴倒せば、あとにくっきりと白い手型が二つ残るだろう。画家の試みはそれだけでは終わらない。鞭をとって、腹といわず顔といわずめった打ちにした。飛沫がいちめんに散った。それから彼は、数本のナイフを投げつけた。ナイフはつぎつぎに、女の胴体に突きささり、ぴゅっぴゅっと、音立てて赤い液



体が黒い液体の上に散らばり重なっていった。

「すごいぞ、美の極致だ！」

画家は興奮し狂喜した。吊り下げた裸女を力まかせに引っばると首がすぼりと抜け、そのいつの両脚をつかまえたまま、新しいカンバスの上にたたきつけた。ドサッドサツと音たてて、血だらけの乳房の二つのまるい円型が、カンバスの上にたたきつけられて、迫力ある抽象的構図を残していく。

彼自身、もはや自分の体のなかにわき立ちほとぼしる情念をとどめることができないようだ。三人の裸女が、蹴ころがされ床に折りかさなったのを、画家は炭俵をしぼるように荒縄で束ね、ぐるぐる巻きにしぼり上げ、なおもしばらく鞭打っていたが、やがてその上に絵具用の油をぶちまけ火をつけた。

彼女たちはしばらくたまま、コンクリート

の床の上でめらめらとその白い肉体を燃やした。ゴムの異様な臭気が鼻をつき、焼けこげた肉体はまた、あらたな着想を画家に与えるふうだった。

それらの光景をうっとり眺めている二人の男がいる。ソファアに坐っているその一人は、今や「マゾキン」製作販売業者となった真辺である。

「また堀川の奴から、新しい注文がとれるぞ。どんどん片づけちゃってくれ」と彼は、ほくそ笑んでいた。

「おれの商売は図に当った。あれからひと月とたたないのに、注文が殺倒。今では助手二人使って、一日十体作っても追いつかないほどだからなあ。一体一万円として、一日十万円、製作費人件費を差し引いても五万はかたいいんだ」

もう一人の男は、堀川の妻と（画家がむし

ろ喜んでいるので公然と）姦通している大学生で、彼はアトリエのドアの隙間から、こっそり覗いていたが、ついに異常な快感をおぼえ、こらえきれなくなり、飛び出してくると叫んだ――。

「すばらしい人形だ、これを作っている人をほくにも紹介して下さいよ、ねえ、堀川さん。ほくはこの裸の女がすっかり気に入っちゃった、頼みますよ！」

4

助手たちはとっくに帰っていた。

「マゾキン工房」の隣の小部屋で、裸のマゾキンたちに取り囲まれ、真辺はやたらとパイプ煙草をふかしていた。じっと目をとじて、すばすばと口もとを動かすだけだ。

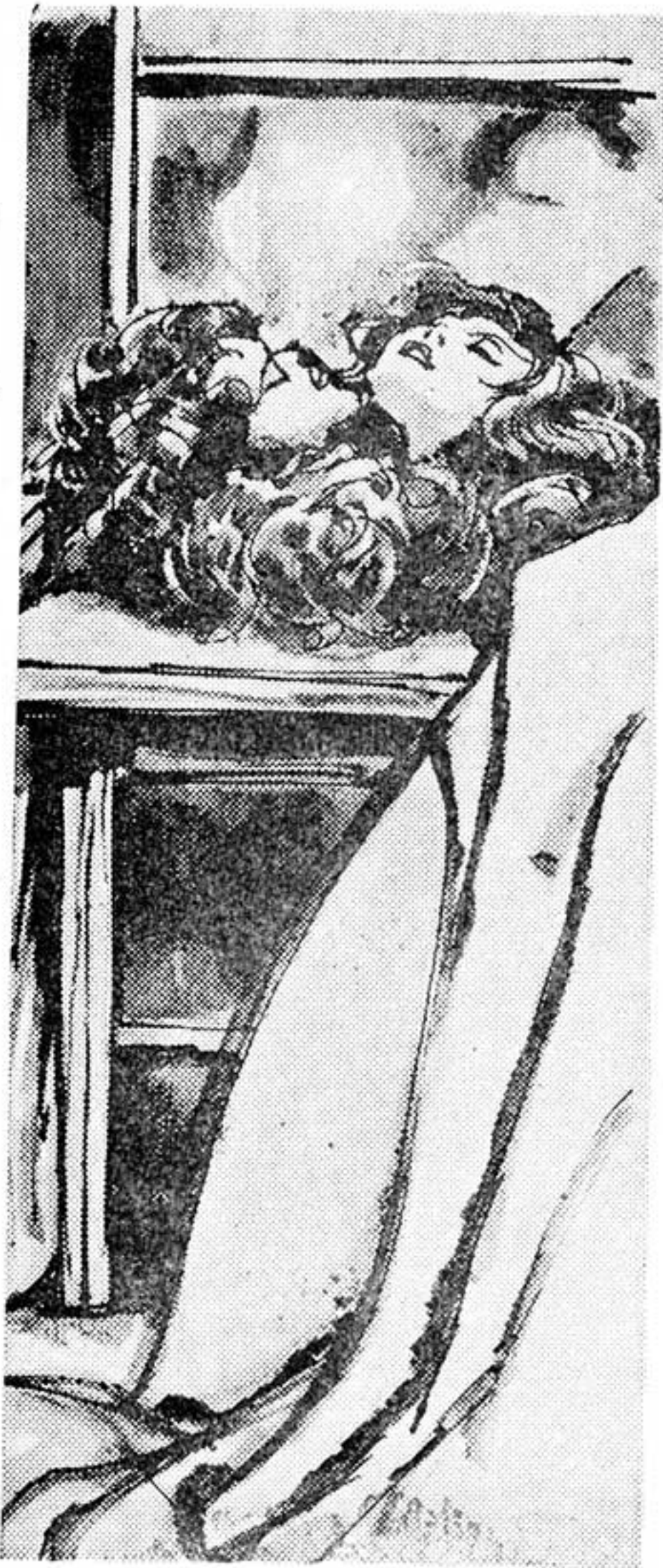
「思いついたぞ、こいつはいける。特製マゾキンだ！」

やがてそう叫ぶと、彼は勢いよく立ち上がり、工房に入ってしまった。

電気仕掛けで、マゾキンたちを自由に動かして、生きている裸女にきわめて近いものに仕上げたい。

「今のままでは、あまりに無抵抗すぎて面白くない」

そういうマゾキン愛用者の声をきくように





なってから、売れ行きがとまりかけていた。

三時間ほど、真辺は工房にとじこもったきり出てこなかった。その間に、台所から幽霊のような女がしのびこんだことは、むろん知らない。青ざめてこわばり引きつった表情のその女は、堀川の妻である。

彼女は、小部屋のマゾキンの一体を——それは内部に仕掛けをほどこしていない、表側だけ仕上げた未完成品であったが——その一体を抱きとると、かくし持ったナイフで側面をまっすぐ縦に切り裂き、すっぽりとその等身大の裸女の形をしたゴムの袋のなかに入りこみ、中からびたりと裂け目をふさぎ、息を殺しながら、じっとなにかを待っていた。

工房から出てきた真辺は、実にはればれとした顔つきで、実験の成功を無言のうちに語っていた。

何と！ 彼のうしろを、なやましげな歩みで、ふとももとふともをこすりあわせるような歩きぶりで、むっちりとふくらんだ両の乳房をもみ上げながら、湯から上がったばかりのようなバラ色の肌をかがやかせながら、すっぱだかの一人の女が現れた。

「死んでもいいの、いいのよ……」

女はかすれたような、低い声でささやきながら歩いてきたが、テーブルの角にぶつかる

と、ゴトリと音たてて前に傾きこんだきり動
かなくなった。

新しい芸術作品とも呼ぶべき「特製マゾキ
ン」だったのである。実にみごとに巧妙に作
られたゴム人形だが、まだどこかしらぎこち
ない所が残っているのは当然だろう。

真辺は、その箇所に手を加えるために、ふ
たたび工房に引きかえし、リモート・コント
ロールの部品や配線図や電気装置のためのこ
まかい道具を両手にかかえて持ってきた。

「さてよ、こっちもちよいと油をささないこ
とにはアイデアの歯車がとまっちゃうぞ」

彼は、そのまま台所にいつてウイスキーの
角びんとグラスを持ってきた。グラスについ
で飲みながら、考えを練っていった。

マゾキンは、まだテーブルの上に屈みこん
だまま、低くつぶやいていた。

「愛して、死ぬほど、……ねえ、もっと強く
……」

疲れていたのでアルコールがジーンと頭を
しびれさせた。

このところ大事業に熱中していて、その方
は抑圧されつづけていたのである。まるくふ
くよかに割れた女の尻がテーブルの角で挑む
ように持ち上げられている。彼は耐えられな
くなって、立ち上がるとウイスキーを彼女の

裸体にぶっかけ、つい自分の製作物でしかも
「特製」のしろものであることすら忘れて、
平手でピシピシ尻をたたいた。

「ううん……」彼女はかすかにうなった。

「もっと強くぶって……」うつ伏したままテ
ープの声はささやく。彼はそばにあるノコギ
リの片面で、ビーンとなぐりつけた。女の腰
はぶるぶるふるえ、はずみをつけてはね上
がった。ついで歯の方をガツと打ちつけた。

「ああ、あああ、……」

そのとき彼は異状に気づいた。マゾキンの
胴の側面がかすかに割れて、なま白い肉のよ
うなものが、はみ出しているのが見えたので
ある。

彼は目をこすった。そんなはずはない。そ
っと指先で触ってみて驚いた。なまあたたか
いほんものの肉体が、ゴムの下にかくれてい
るではないか。

一瞬、自分のすぐれた技術が、ついに神業
に達して、奇蹟が起こり、人形が完全に人間
化したのではないかと錯覚した。が、すぐそ
の妄想をふりはらって事実と直面せざるを得
なくなった。

なぜなら、マゾキンはほかっと胴体が割れ
て、そこからまぎれもないほんとうの裸の女
が髪をふりみだして現れたからだ。——堀川

の妻だった。

顔はやせて陰惨な青白さを帯び、目はギラ
ギラと狂人のように光っていたが、体つきは
さすがに三十女のおでやかな肉づきをたもっ
ていた。真辺は思わずノコギリを手から落し
ていた。

「わたしよ、堀川の家内ですわ、わたしから
夫を奪い、さらに恋人まで奪ったあなたがわ
たしは憎い」

「なにもぼくは……」

「いいえ、あの人たちを夢中にさせて、完全
にわたしを無視させることになったのは、こ
のいやらしい人形を作ったあなたのせいよ、
あなたが憎い、……モデル女をいためつけて
るうちはまだよかった。生きている人間の体
力には限度がありますからね。でも人形にな
ったらもうどうしようもないわ。それに、あ
のわたしのかわいい青年、わたしの愛の最後
のよりどころだったあの子まで、人形に夢中
になってしまふなんて。——もうわたしには
生きてるのぞみはないのよ、——この罪な人
形を作ったあなたを、こんどはわたしが、い
たぶりさいなんで死の道づれにしてあげる、
……」

「待ってくれ、ぼくは……」

しかし、女の手には鋭い刃物が握られてい

■見たもの聞いたもの

「甘い暴力」

た。じりじりと迫られると、どうすることもできず、真辺はその場にへなへたと腰をおとしてしまった。

女の足が、彼の頭を蹴りとばした。一方の手に持ったノコギリの歯が、ガツと彼の首の根に食いこんだ。必死でそれをはねのけ、逃げようとする彼の上に、堀川の妻は裸のまま

おおいかぶさり、彼の首をはさんで、がっちり締めつけたまま、刃物を鼻先にさしつけると、もはやすこしも動けなかった。

「あはははは、ひひひひッ……」
彼女の神経はすでにすこしの正常さもなくなってしまうていた。刃先を男の眉間に突き立てんばかりにして、彼女は放尿した。なまぬ

るく臭い液に顔中濡れながら彼はただ、うめいているだけだった。
ソファの上では、さきほどの「特製マゾキン」がしゃがれ声でしゃべっていた。
「いや、もっと、もっとよ。……強く、きつく、ねえ、……死んでもいいわ、いいのよ……」

「青春時代にだれしもが経験する、理由

のないいらだちと、目的のない反抗のいまじった、みたされない時間の毎日を送る若者たちを描いた」フランス映画。

とにかく、どういう階級か知らないけど、ヒマとお金に全然みだされている青年男女たちが、南仏のニースでいろいろとたのしい遊びをするおはなし。

ものすごく豪華なヨット「甘い暴力」号の船内で、縛りごっこもやる。

ヒロインのエルケ（エルケ・ソマー）が、うしろ手に縛られ、ごていねいに、股間にまで縄を通される。股間縛りである。ただし、びっちりしたストラップの上からではあるが。この縄のかかりかたが、たつぷりと大寫しでうつる。

縛った青年が、

「さあ、この女をいくらで買う？」

と、一同に呼びかける。

そんなことをしている最中に、甲板から火がでる。船火事である。

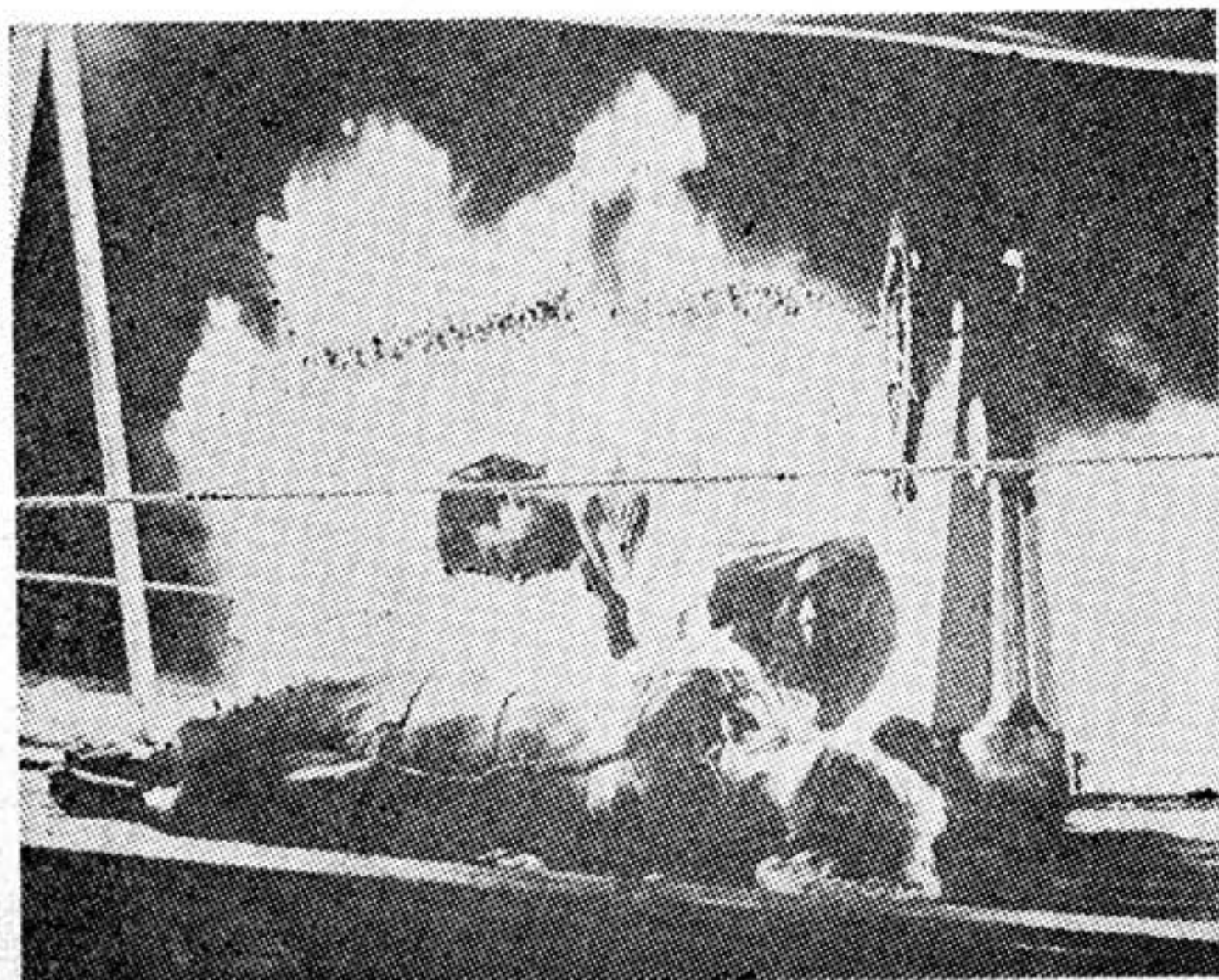
一同われさきに海の中へとびこむ。

縛られた娘だけが、船内にとり残されてしまう。

そこで二人の青年が、また船にもどって、娘を救いだそうとする。

けむりと炎につつまれた船室では、うしろ手股間縛りのままの娘が、悲鳴をあげてころげまわっている。

ようやく抱きあげて甲板の上で縄を解き放つ。股間縛りなどというシロモノがスクリーンに登場したのは、おそらくはじめてで、珍重にあたいる数シーンであった。



囚人船

汽船ニージニイ・ノブゴロド号は、ゆっくりと北へ向かって進んでいた。霧のなかに、海は銀色にかすんで静まりかえっている。

船の左手には、シベリア大陸の東のはて、沿海州のごつごつした岩山が迫り、右手には遠く、ラベルーズ海峡がひろがっている。

一八七×年の夏の夜である。

汽船ニージニイ・ノブゴロド号は、もう何十日もこうして岸づたいに進んできた。航海の目的地はサハリン。シベリアの流刑囚たちのあいだで「悪魔の島」として恐れられている牢獄島である。

ニージニイ・ノブゴロド号の積荷は、ここ数年のあいだいつもきまっていた。船倉に押しこめられているのは、鎖につながれた囚人たちである。今度の航海では四〇人、サハリンへは最初の女の流刑囚ばかりを積みこんでいた。

甲板室には水さき案内人と、当直士官の姿がある。

甲板の下、天井の低い、うす暗い船底には、首と足に長い鉄の鎖をはめられた女囚たちが、棒のように倒れて一列に寝ている。

船底の中央には、一本の廊下がはしり、そ

■シベリア女囚物語

魔女アクーリカ

春 川 光 彦

中 川 彩 子・絵



の両がわの部屋には鉄格子がはめこまれて檻房になっていた。しかし、今度の航海では、女囚たちは右がわの檻房だけに無理に押しこめられている。左がわの部屋には、同じこの船でサハリンに赴任する女看守長アクリカの希望で、おびただしい数の責め道具、さまざまな形をした巨大な拷問具がところせましとばかり、いっぱいに積まれていた。

囚人たちを監視する看守、兵隊の数はきわめて少くない。だが、もし囚人の暴動がおきたとき、それをしずめる手段は完全にとのっていた。

兵隊たちは、廊下から鉄格子のなかへようしやなく鉄砲を撃ちこめばいいのだ。

それでも、さわぎがおさまらなければ、船長は命令を下す。

「てこをおろせ！」

そのひとことで全てが終る。

機関室から、ものすごい蒸気のほん流が船倉へ流れこむ。鎖につながれた囚人たちは、それで簡単にいのちを絶たれるのだ。

流刑囚たちは、みなニージニ・ノブゴロド号のこの仕掛けを知っていた。いまだかつて、暴動のおこったためしはない。航海はいつも無事に終っていた。

ナターシャ

寝しずまった船倉に、低い、悲しいうめき声が、とぎれとぎれにつたわってくる。

責め道具のおかれた左の部屋の中央。ローソクを片手に立っている女の姿がある。赤く染めた皮のチョッキに皮のズボン、女看守長のアクリカだ。

彼女の足もとには、白い肌の女がからだをくの字に曲げて倒れている。女の胴には、三十センチもあろうか、恐ろしく太く、厚い鉄環がガッチリと嵌められている。つい、さっきまで、この鉄環で宙に吊られていたのだろう。鉄環に付属した鎖が天井にのび、いまだに滑車にまきついていて。女の手首にも足首にも枷のあとであろう、赤いあざがくつきりとつき、せなかにも、ももにも、鞭のあとが無数に走っている。

女の名はナターシャ。まだ二十歳にはだいぶ間のある、かわいらしい娘である。

ナターシャがこの拷問部屋に連れこまれたのは三日まえである。

その日の朝、点呼のときにナターシャはアクリカと視線をあわせてしまった。看守長の前では、囚人は従順に眼を伏せなければいけない。数秒間、じっとアクリカの顔を見



つめてしまったナターシャの態度は、当然とがめられた。

反抗心のあらわれであるとして、ちょう罰がきめられ、三日間、アクリリカの手でさんざんに責めぬかれたのだ。

半年前のナターシャには、まったく想像もできなかった今の境遇である。半年前、ナターシャはしあわせだった。彼女はペテルスブルグの郊外にある農園、ソーリン荘で小間使いをしていた。子供のいないご主人は、まるで実の娘のようにナターシャをかわいがってくれた。農奴の娘として生まれた彼女にとっては、夢のような、めぐまれた毎日だった。

そのご主人が亡くなった。

親類が集まって、遺言状が開られた。

「ナターシャを農奴の身分から解放し、ソーリン家の養女として遺産の三分の一をあたえる……」

誰にも意外なことが書かれていた。

突然、イリーナ未亡人がヒステリックに叫んだ。

「でも、あの娘はもう、ここの者じゃありませんのよ。今朝、恐ろしいことをしました。

そうです、私の宝石を盗んだのです。もうすぐ、警察がああ娘の身柄を引き取りにくるはずですよ」

未亡人の決定にさからう者はいなかった。

遺言状のことも、宝石のことも、何も知らずにナターシャはその日のうちに警察へ連れていかれた。

そこで約一カ月調べられた。宝石を出せ、と何度も拷問にかけられた。

しかし、ナターシャにはまったく身に覚えのないことである。

もう二度と顔を見たくない、というイリーナ未亡人の希望で、ナターシャのサハリン送りが決められた。終身徒刑である。

アクリリカは、ナターシャの細い胴から鉄環をはずすと、廊下をひきずって檻房の扉口へ連れていった。

やみのなかに鎖の音がして、一人の女があらわれた。囚人たちの組長、ゾーヤである。

「ありがとうございました」

組長は、礼を言ってナターシャのからだを受けとり、首と足に鉄の鎖をはめてやって、自分のとなりへ寝かせた。

裏切者処刑

帝政時代のロシアでは、囚人を護送したり流刑地で労働させたりするとき、彼等のなかから数名の責任者をえらび、組長と名づけて

囚人仲間の世話役をやらせていた。

囚人のなかに、反抗したり脱走する者が出れば当然、組長は責任を問われるのである。

警察は、組長中心に囚人たちの自治を、ある程度みとめていた。

ノブゴロド号の組長は、三十女のゾーヤだった。それに助手が一人つく。助手は一週間交代で、その日から順番はナターシャにまわってきっていた。だが、アクリリカの連日連夜の責めにまったくつかれきっていたナターシャは、そんなことも知らずに深い眠りにおちていた。

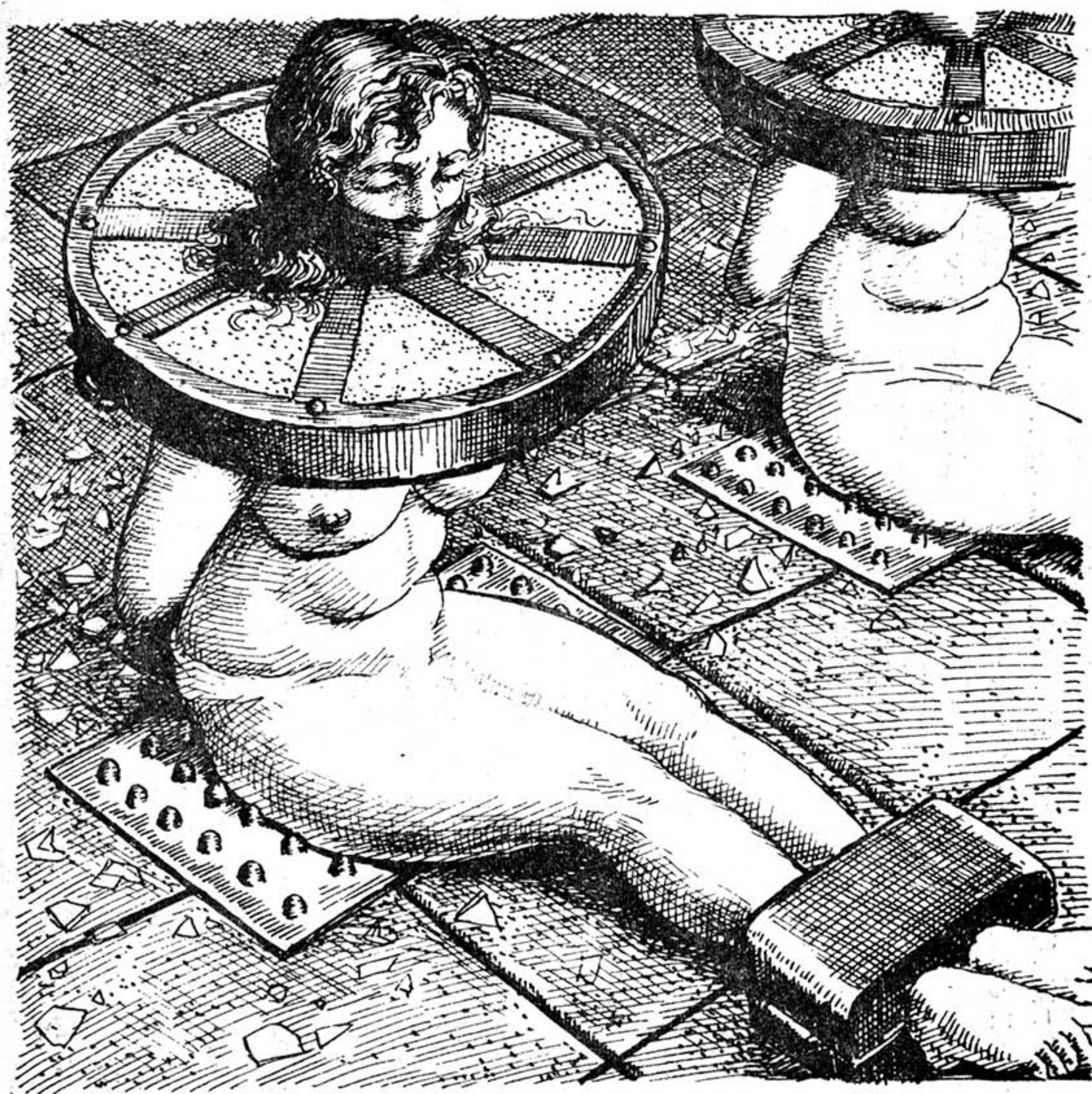
その夜、事件がおきた。

流刑囚たちのなかには必ず「組合」がそしきされている。「組合」は、ひそかに確実にはたらいで囚人たちの安全をまもるのだ。

その夜、「組合」の手が裏切者の上にのびていた。深夜の檻房のなかで「組合」は鎖の音もたてずに、裏切者三人の息のねをとめていった。

翌朝、点呼のときにも、その三人は整列しなかった。

兵隊が檻房にとび込んで、顔にかけたきれをはぎとった。兵隊には一目で事情がわかった。三人は手足をおさえつけられたうえで、顔に厚いきれを長時間、強く押しつけて、ち



っそく死させられていたのだ。

三人ともアクリリカのお氣にいり、忠実な密告者だった。

アクリリカは激怒した。

多数の囚人の犯行であることにまちがいない。一人づつ、拷問部屋へ呼び出された。

鞭が鳴った。悲鳴が絶えまなく船倉にひびきわたり、訊問は一日中くりかえされた。

しかし、誰一人として、犯人の名を白状するものはいなかった。「組合」のちからは、囚人仲間でアクリリカの鞭よりも恐ろしいものだったのである。めったなことをしゃべれば、次は自分が裏切者として、暗い夜に消されてしまうのだ。

こうをにやしたアクリリカは遂に、責任者を処罰する、と言いだした。

責任者とは、組長のゾーヤと助手のナターシャである。

ナターシャは、昨夜はぐっすりと寝ていて、まったくなにも知らなかった。しかし、そんなことは認めてもらえない。

処罰の方法は、二日後、サハリンへ船が着いてから決定することになって、それまでの間、二人のからだを拘束するさまざまな枷が持ち出された。

足枷はよこ六〇センチ、たて三〇センチ、

厚さ一〇センチほどの鉄のかたまりである。中央を開らいて足首をはさみ、鍵をおろすともう二人は自分のちからで足を動かすことはできなかった。

両手首は背後に組み合わせて、冷たい鉄の枷が喰いこみ、さらに細い鎖がつけられた。

黒い皮製の、大きな猿轡まで用意された。くさい皮のかたまりが口のなかに押しこまれ、堅い皮が鼻からあごまですっぽりとかぶせられて、後頭部でギリギリと締めあげられた。

最後に持ちだされたのは、巨大な円型をした石の首枷である。直径は一メートルに近く厚さは七、八センチもあろうか。灰色の石材の周囲を、黒い鉄板が車の軸のように放射状につつんでいる。

兵隊が三人がかりで首枷を持ちあげると、ナターシャの肩の上にのせた。

「うーっ……」

ものすごい重さだった。肩が、背骨が、いまにもくだけそうだった。

兵隊はようしやなく首枷を閉じ、手枷の鎖をギリギリと肩のほうに引き上げて、首枷にむすびつけた。

アクリリカは二人のそばに立って、さも楽しそうに枷にうずまっついていく囚人の姿をなが

めている。

「枷が苦しかったら犯人を白状するんだね。」

あと二日間、そうしてゆっくり考えてごらん」首枷は拘束具というよりも、重さによる残酷な拷問具だった。枷にはさまれた両足を投げだして、ゆかに坐っているのだが、首枷の重量には背骨がたえられない。すさまじい苦痛がおそってきた。

「坐りごこちをよくしてやろう」

アクリリカがそういって、薄い鉄板を持ってきた。その表面には無数の突起が、小石くらしいの大きさのイボが、いちめんに突き出しているのだ。

二人は腰を持ちあげられ、鉄板を下に差し入れられた。グリグリッとする感しよくが肌につたわってくる。時間がたつにつれて、それはすごい苦痛にかわった。

「うっ、うーっ……」

きびしい猿轡からうめき声がもれる。

「横に寝てしまおうといけないからね」

アクリリカはそういって、二人の周囲にガラスの破片をまきちらした。

女性独特の残酷な思いつきである。

ナターシャとゾーヤは二日間、まったく同じ姿勢で、からだじゅうから脂汗を流して苦しみぬいた。

悪魔の島

船はサハリンに着いた。

ごつごつした岩山の高い岬をまわって、船は入江にはいった。平地には、そまつな囚人小屋が、点々と散らばっている。

島の司令官はウラーソフ中尉。彼は、島のなかでは囚人を、比較的自由にあつかっていた。

「悪魔の島」に送られてくるのは、すべてが終身徒刑囚である。過去の例でも、脱走に成功したごくわずかの数を除いて、すべてが島でいのちを終っている。もし、ひどい待遇をして、囚人がいのちを捨てて反乱をおこしたら、島の兵隊だけではとても防ぎきれないのだ。

だが、囚人のほうでも、ほとんどの者は人生をあきらめている。もし脱走してシベリアやヨーロッパへ帰っても、生活の苦しいことにはかわりはない。島の生活とたいした変りはないのだ。

そこで、ウラーソフ中尉と囚人たちは、どうやらうまくやってきた。反抗したり、脱走しようとしたら、恐ろしい刑罰が待っている。しかし、そんなことはめったになかった。

囚人は森で木を伐り、小さな島をたがやし

て、おだやかに暮していた。
ノブゴロド号は、この島にはじめて女囚を
はこんできた。岸まで出むかえた囚人たちは
女囚がひとり残らず鉄の足枷をひきずり、首
をお互いに鎖でつながれているのを見て、す
っかりおどろいた。

ナターシャとゾーヤは、首枷を他の女囚に
持ちあげてもらっても、まったく歩くことは
できなかった。鉄板に腰を痛めつけられて、
足はすっかりしびれてしまっていた。
アクリリカは、岸辺に集まった囚人たちが
枷をつけていないのにあきれて、ウラーソフ

中尉に強く抗議をした。
「そんなことをしたら暴動がおこりますよ。
私は、あなたの囚人の扱いかたのほうが問題
だと思いますが……」
アクリリカの女囚たちは、ひとりひとりが
自分専用の枷類を、ひと揃いつつ持っていた。



ふとった女には大きな枷を、やせた女には小さな枷を、アクリリカはちゃんとそろえたのである。金属製の猿轡、首枷、手枷、足枷、胴を縛るふとい鎖まであった。

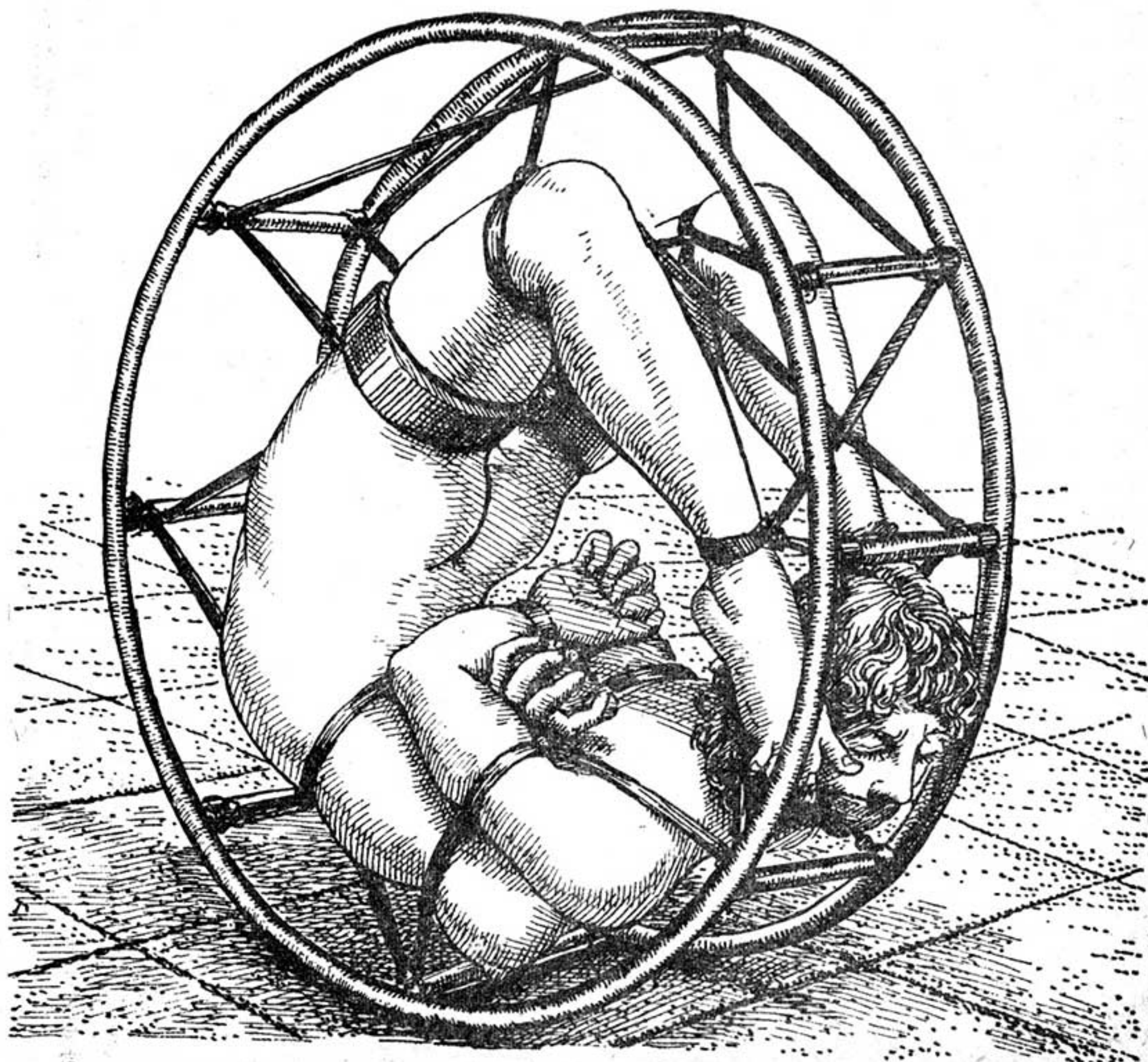
アクリリカの説明を、ウラーソフ中尉はだまって聞いていた。

「シベリアの魔女」として、女囚たちの恐怖のまどになっていくアクリリカのことは、ウラーソフ中尉も以前からよく聞いていた。アクリリカは、彼女の囚人たちがいつも枷をからだに嵌めていなければ気がすまないのだ。彼女のやりかたは、いつもきまっていた。囚人のなかに、つねに、二、三人の密告者をつくり、その情報で、ちょう罰を受けるぎせい者を絶えまなく選びだすのだ。

アクリリカにちょう罰を言いわたされた女囚は、彼女があきるまでさまさまの責めを甘受しなければならぬ。長いときは、その責めは一ヵ月以上つく。ぎせい者が死ぬか、または、ものすごい責めによるけがで、ひどくみにくいからだになってしまったときに、アクリリカの責めは中止されるのだ。

彼女はきれいなからだを責めるのが好きだった。ぎせい者には、若い健康な肉体を持った女囚がよく選ばれた。

「悪魔の島」では、アクリリカの着いたその



日のうちに、彼女の希望で、石造りの頑丈な倉庫が、拷問室に改造された。

「私のやりかたは皇帝もごぞんじです。私の囚人たちには、私のやりかたで、きびしくあつかいますからね」

アクリリカは中尉にそう宣言した。

脱出計画

ナターシャとゾーヤは、船のなかと同じ枷にうずくまった姿で、囚人小屋のすみに坐らせられていた。ただ、島に着いてからは、石の首枷を夜間だけは、はずしてもらえた。

島へきて三日目のことである。島の囚人の「組合」から、ペトロフという男がひそかにたずねてきた。

「お前たちもまずいことをしたもんじゃないか。あの二人をどうする気だね」

ペトロフは、二人の首枷をいたいたしそうに見た。

「ひどいことをしやがる。あれじゃ男だつてたまらないぜ。お前たちはどう思っているか知らないが、あの二人のいのちは助からないね。いま、書類がアムール総督のところ送到られている。十日たって書類がかえってきたときは、二人はまちがいなく死刑だ。男なら銃殺だが、アクリリカのことだ、どんな方法

で殺すか想像もできないよ。

それでだ。「組合」としては責任があるだろう。俺たちは前から考えていた脱走を実行することにしたよ。ここの生活もそう悪いもんじゃないが、できれば島では死にたくない。この島は東へ行けば岩山だけだ。鳥のえじぎになるのがおちだ。南と西は海。北へ向かって歩いてゆけば、脱出できるチャンスがある。兵隊の目をさけて、北へ十日も歩けば、海峡へでてアムールへ渡ることができるんだ。北のはしに住んでいる、ギリヤーク人衣服をやって、小さい船を貸してもらうんだ。

俺たちは用意をした。食糧も、堅パンを以前から集めてある。人数は十人。特に、あの二人の女を連れていくよ。看守を買収して、手枷と足枷の鍵は手に入れよう。夜、首枷のはずれるときに出発だ」

ペトロフは、ナターシャとゾーヤの前にきて、二人をいたわってから姿を消した。

ナターシャはどうしてもよかった。こんな苦しい毎日を送るくらいなら、早く死刑にしてもらったほうがいいと思った。

小屋のすみで、「組合」の密談を聞いていた女囚がいた。新しく、アクリリカの子分になったオルガである。

オルガの密告で、脱出計画はその日のうち

にアクリリカの耳に入った。

そして、ナターシャとゾーヤは、すぐさま完成したばかりの拷問室へ移されたのである。

搾衣

「やあ、とうとう来たな」

アクリリカは、ナターシャを太よろこびでむかえた。まだ、あどけない、少女のようなナターシャを、アクリリカは徹底的に責めてみたかったのである。

「まず搾衣からはじめようか」

訊問はなにもされなかった。脱送計画をたてた人間を白状しろ、というところだが、ペトロフの名前は、すでにオルガの密告でわかっていて、それ以上のことを、ナターシャがまったく知らないということも、アクリリカはよく承知していたのである。

ナターシャのからだから枷がとりのぞかれた。かわりに、灰色のズックのような厚い布が二枚、せなかと胸にあてがわれた。布はナターシャのからだを、肩から股間まですっぽりとつつんだ。

左右の脇腹のところにつけられた二本の締め紐を、アクリリカはオルガにつだわせてグイグイと締めつけていく。女とは思えない恐ろしい力だ。ナターシャのからだを横に倒し、肩

や腰に足をかけて、ふみつけながら紐を締め
ていく。肩も、股間も縛られた。たつぷりと
時間をかけて、ナターシャの胸は小さく押し
つぶされていった。

「あつ、あーっ、あーっ……」

呼吸ができない。眼球が飛びだしそうだ。
ナターシャが今まで経験したことのない。ま
ったく新しい種類の苦しみだった。馬鹿みた
いに大きく口をあけ、唾液が、とめどもなく
流れてくる。その口へ、ようしやなく鉄製の
猿轡が咬まされた。

手と足だけのこして、からだは搾衣にぎっ
ちりと閉じこめられてしまうと、今度は引き
ずるようにして、拷問室の外へ連れだされた。
建て物の入口のところに、木製のさらし台
が二台置かれていた。首と両手を、枷にはさ
まれて、台に立たされるのである。

さらし台の首枷は、ずいぶん高いところに
あるので、こがらなナターシャは、背のびし
なければとどかない。つまさき立ちになって、
やっと両手と首を枷のなかへ入れた。両手を
左右にひろげたかたちで、木製の大きな枷に
固定される。

ナターシャのかわいらしい顔は鉄の猿轡に
ゆがみ、さらし首のようにすこし上を向いた
位置で、首枷にはさまれて動かせない。から

だは長くのびて、つまさきがやっとさらし台
のゆかにとどいている。

ゾーヤも搾衣をはめられて、さらし台にな
らんで固定された。

アクリリカとオルガが、バケツに水を入れ
て持ってきた。前と後から、搾衣にたつぷり
と水をかける。やがて、布が水を吸ってちぢ
んできた。搾衣が急速にしまっていく。

「う、うっうっ、うーっ……」

ほとんど息ができない。胸が、石のように
なって、いまにもつぶされそうだ。

さらし台に何分、いや何時間立っていただ
ろうか。ナターシャは、しだいに意識が遠
くなっていく。

乳房圧潰器

意識がもどったとき、ナターシャは搾衣を
解かれていた。目のまえにアクリリカの顔が
ある。

「かわいそうに。苦しかったかい。お前の立
派な乳房に気がつかなくてごめんよ。その見
事な乳房を搾衣でかくしてしまったから、お
前は気にいらなかったのだろう。それで、気
絶なんかしてみせたんだね。たいして苦しく
もないのに。今度はお前にびったりの搾衣を
探がしてきてやったよ」

アクリリカは、ふたたび、ナターシャに搾
衣を着せはじめた。

今度のは胸のところに穴が二つ。乳房がす
っかりそとへ出るようになっていた。

まえと同じに、搾衣をぎっちり締めあげ
ると、ナターシャの乳房は、不気味なほど大
きく、搾衣の窓から突きだしている。

「ほんとにお前の乳房は見事だよ。小娘のも
のにしては立派すぎるね。うらやましいくら
いだから、すこしつぶさせてもらおうよ」

アクリリカは、妙なかたちの道具を持って
きた。二本の鉄の円筒が、はばの広い皮ベル
トでつながれている。円筒の直径は、ナター
シャの乳房の大きさにぴったり、長さは一〇
センチもあろうか。二本の筒を左右の乳房に
きっちり嵌めると、皮ベルトをせなかへまわ
して強く締めあげた。両手も背後で縛りあげ
られる。

「これは、私の発明したすばらしい器械さ。
まあ、乳房つぶし器、圧潰器ともいうのか
な。しばらくはこれで泣かせてあげようね」
円筒の周囲には、乳房の上と下にそれぞれ
二個、左右に一個、計六個のねじがついてい
る。

アクリリカはなれた手なれた手つきで、そ
のねじをまわしはじめた。



激痛がナターシャのからだをつらぬいた。
鉄筒のなかで乳房がつぶされる。

「うわーっ、ぐっ、ぐーっ……」

ねじの動きとともに、鉄筒のなかで、六本の棒がいっせいに突きだして、ようしやなく乳房を押しつぶしていくのだ。

左右の乳首から、たらたらと鮮血をしたたらせて、ナターシャはふたたび失神した。

それから数日のあいだ。アクリカの大好きなこの乳房つぶしは、何度もくり返えしくり返えし、ナターシャの肉体に加えられた。

円型パイプ

拷問室の壁に、鎖でつながれていたナターシャの前へ、妙な道具がころがされてきた。直径七〇センチほどの円形の鉄パイプが二

個、ちょうど彼女のからだのはば程度のかんかくに置かれて、パイプの横棒で連結つされている。

ナターシャは、両手を鉄枷で背後にきっちり固定された。猿轡はいっそうきびしく締められた。ものの上にも鉄枷が巻かれた。

アクリカは、ナターシャをうつぶせにながたと寝かせ、そのせなかにパイプの器械

をのせた。首をつかみ、大きく上へのけぞらせる。パイプの横棒にくくりつけた。

アクリリカの意図は明きらかだった。

ナターシャのからだをまりのようにまるめて、パイプの中間に押しこもうというのだ。パイプがせなかの上を、足のほうに向かって回転した。ナターシャはぐつとのけぞる。せぼねが鳴った。

「くうーっ……」

頭が足のさきについた。

もつと強くアクリリカの力が加わる。足首で顔をはさむくらいにして、やっとアクリリカは満足した。

ナターシャのからだの要所要所はてぎわよく、皮ベルトでパイプに縛りつけられる。細い首には、やはりパイプ製の首枷がはめられて、横のパイプに固定された。

ナターシャのからだは、見事な円型に変って、パイプのなかにおさまっている。

アクリリカは、うれしそうに器械をけとばした。

ガラ、ガラッと音をたてて、パイプは石のゆかをころがる。

「くっ、くーっ……」

悲しげなナターシャのうめき声が、鉄の轡からもれて、石の拷問室にひろがっていく。

ナターシャが拷問室へ連れこまれてから、すでに十日以上たっていた。

オルガの密告で、ウラーソフ中尉はペトロフを捕え、規則どおりにベンチへ寝かせた。ベンチへ寝かせる、というのは中尉がこの島でおこなっているただ一つのちよう罰法で、脱走をくわだてた者にかぎり、ベンチへ寝かせて死ぬまでせなかを鞭で打つのだ。

ペトロフはベンチで処刑された。他の囚人は、中尉の処置をなっとくした。そして、他の九人は追求されないことになった。

ゾーヤとナターシャに対する、アムール総督の返事は、やはり死刑だった。

アクリリカは、ゾーヤに対してはただちに刑を執行した。ナターシャの知らないところで、ゾーヤは拷問台の上で、背骨を折られて死んだのである。

ナターシャに対しては、いつまでも刑がこなわれなかった。それどころかアクリリカは、ナターシャのからだに充分注意して殺さないでいどに、いつまでも責めを楽しんでいるのである。

うわさは女囚のあいだにも、男囚のあいだにもひろがっていった。ウラーソフ中尉は、なんとかしなければならぬと考えていた。

反乱

ウラーソフ中尉からかなり手きびしい忠告を受けて、アクリリカは荒れた。

オルガをはじめ、三人の女囚を手先きに使って、すこしでも規則に違反した囚人たちを、片っぱしから拷問室に連れこませた。

激しい責めが毎日つづいた。ある者は天井から逆さまに吊るされて鞭打たれ、ある女は拷問台の上で、手足をちぎれんばかりに引きのばされた。日ごとに、アクリリカの手によって生命を奪われる女囚は数をましていった。

そのすさまじいようすを、ナターシャは特製の椅子に坐ってながめていた。

特製の椅子。もちろんアクリリカがこしらえたものだ。石の壁に、両手を鎖で吊られていたナターシャのところへ、アクリリカはその椅子を持ってきた。

「お前も立っているばかりじゃ疲れるだろうから、たまには椅子に坐らしてやろうね」

それは、どう見ても椅子ではなかった。ふとい、二メートル近くもある丸太ん棒がたてに突き立っている。棒の先端は、細くけずられてとがっていた。

アクリリカは、ナターシャを後ろ手にきつ

ちりと縛ると、からだをかかえて棒の先端にまたがらせた。

「ぐうっ……」

丸太ん棒から落ちないように、ナターシャの後ろ手に縛った鎖は、そのまま天井からたれさがった鎖に結びつけられた。棒をはさむようにして左右にたれた足首には、無慈悲にも鉄のおもりがくりつけられた。

ナターシャが拷問室に入ってそろそろ一ヵ月。石の首枷、搾衣、乳房つぶし、円型パイプ、棒の椅子と、アクリリカの考案した責めはくり返えし彼女の若い肉体に加えられた。

そして、ニージニイ・ノブゴロド号で運ばれてきた四十人の女囚は、いつか三十人足らずに減っていた。

このありさまにウラーソフ中尉は、最後の手段をもちいなければならないと考えていた。彼はアクリリカの行為に対して、男の囚人が反抗をはじめる場合を心配していたのである。

中尉は女囚たちの枷の鍵を手に入れると、腹心の男囚に渡して命令をつたえた。

その日。アクリリカは一人でナターシャを責めていた。

新しく考案した車輪吊りである。

巨大な木製の車輪が一個。中央をふとい口

ーブで縛って天井から吊り上げられた。

ナターシャは、うつぶせの姿勢から、手足を大の字にひろげて、一本づつ車輪の外わくに縛りつけられた。猿轡の顔も上に向けて、髪の毛が車輪にくくりつけられた。車輪は宙に高く引き上げられる。

ナターシャは手足をいっぱいにのばして、ぶらんと吊られた。

「お前は体重が軽いから、まだ楽だね」

アクリリカはそう言って、吊られたせなかへ鉄のおもりをいくつも背負わせるのだ。

アクリリカはゆかに立つと、思いきり車輪を押しした。

大きな円を描いて回転するように力いっばい車輪を振りまわした。

「ひいーっ」

ぐーん、とナターシャのからだは、手足を上縛られて宙を飛んだ。

アクリリカは下にかまえて、飛んでくるナターシャに鞭をふるった。

長い皮鞭がまきついて、ナターシャのからだに、さらに小さい回転が加わった。

そのときである。

拷問室の扉を破って、女囚たちが乱入してきた。

手に手に棒切れを持っている。

アッと言う間に十数人の薄よこれた女たちが、アクリリカに襲いかかった。

シベリアの魔女アクリリカは、こうしてわずか数分のあいだに、女囚たちによってなぐり殺された。

そして、その女囚たちも、ウラーソフ中尉の指揮する兵隊の銃で、全員射殺されてしまった。

ナターシャは車輪に吊られたまま、そのすべてを見守っていた。

ノブゴロド号で悪魔の島へ着いた女たちのなかで、一番あとまで生きていたのはナターシャだった。

しかし、彼女も枷類から解放されて、二日目に息を引きとった。

ウラーソフ中尉は、警視總監にあてて手紙を書いた。

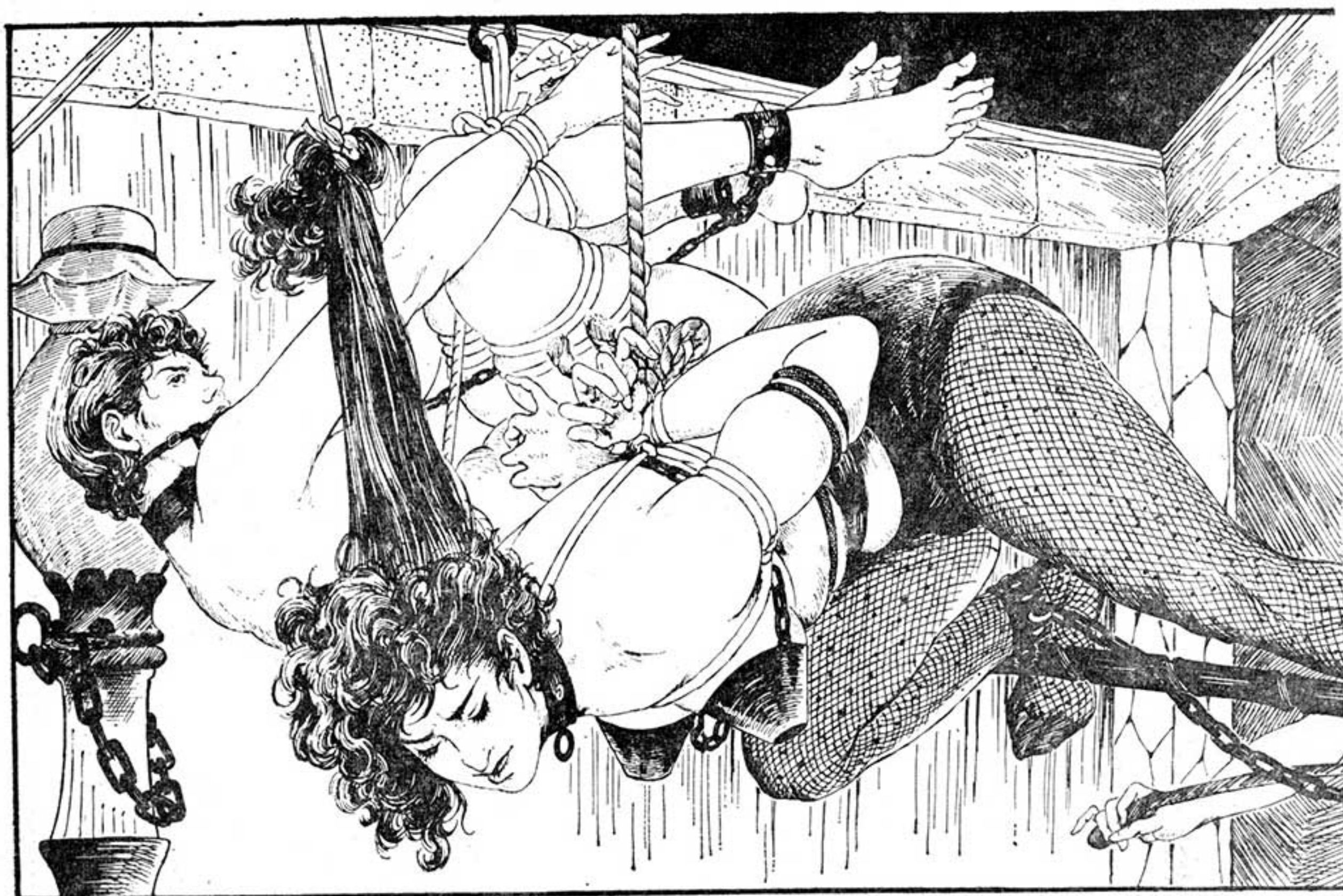
「女囚たちが、反乱をおこした最大の原因はこの島の気候風土が女囚のからだに合わなかったことにあると思います。したがって今後サハリンには女囚を送らせませんように」

そして悪魔の島では司令官中尉と、男の囚人たちとの奇妙な、平和な生活がふたたび始められたのである。

■ 鬼頭 暁 画 集

美しきけものの檻









嫌悪の青春



立原道夫

1

銀座裏のゲイ・バーで働くようになってから、早くも半年。私はいつのまにか、女性的なことばやしぐさを、すっかり身につけていた。

お店を終えて芝公園裏の家に帰れば、四人の仲間たちとの共同生活である。

右をみても、左をみても、いわゆる日かげに咲いた美少年たちばかり。

「ああ、みんな私の同類なのだ。おなじ湿地に咲く花なのだ」と思い、たしかめ、私は、あま

ずっぱいような、ふしぎなやすらぎをおぼえるのだった。

はじめのころ、さんざん泣かされた女中のような仕事からも、ようやく解放された。

後輩が、二人もはいたのである。

先輩も一人、去っていった。

エミーというその美貌で聡明な先輩は、いいパトロンをつかまえて、横浜のほうに、自分のお店を持っていたのである。

下っぱ時代の苦勞がなくなり、だれはばかり先輩風を吹かせる頃になると、私も早く一軒の店を持ちたいと考えるようになった。

これは、ママに使われているゲイ・ボーイの、ほとんどだれもが抱いている夢である。

ママの懐中に入る夜ごとの利益を、横目でひそかに計算し、やがては、としをとる、将来の自分をおもうとき、それは当然の野望といえよう。

お店でうたう私の歌は、恥ずかしいしろものだったけれど、お客には、けっこうよろこばれた。

男のくせに女の姿をし、女そっくりの声と媚態でうたう倒錯のけばけばしさが、都会の極彩色の刺激に溺れたがる人種のお気に召したのであろう。

そんな夜ごとの私に、めずらしく女性のファンがついた。

銀座裏のバーのマダムである。まだ三十を越したばかりの、長身の美人だった。自分の店がひけてから、三日に一度はきて、私をペットのようにもてあそぶ。猫か犬をかわいがるようにもてあそん

で、それでご満悦なのだった。

明かるく陽気で、さっぱりした気性のマダムを、私も姉のように感じていた。

もっとも女らしい体臭をつけていなければならぬバーのマダムなのに、彼女には女特有のあの不潔なおいが稀薄なのだった。私はそこに、親しみを感じた。

マダムはその夜、それまでにないほど泥酔していた。

「ねえ、ミチ。今夜は、あたし、とてもひとりじゃ帰れないわ。あなたに送っていてもらうわよ」私の肩に噛みつくような格好でいうと、よく肉のついた白い手で私の手をにぎりしめた。

カンバン近い時刻だった。酔い痴れたマダムの姿態は、やはり、女そのものだった。

私はしかたなく、赤坂の彼女の自宅まで、タクシーを走らせねばならなかった。

これも商売、商売、と思いが

ら、ぐでんぐでんになったマダム
のからだをささえ、私は車のなか
でも介抱した。

通りすがりの人が車内をのぞい
たら、酔っぱらいの女を、またべ
つの女が介抱している図である。

マダムは、逃げようとする私を
むりやり、彼女の家のなかへひき
ずりこんだ。

かなり、ぜいたくな調度をそろ
えた家だった。

男の気配はなかった。

マダムは家につくと、それまで
のぐでんぐでんがなおり、ふらつ
いてはいるが、ひとりで歩けるよ
うになった。

私の手首を乱暴につかみ、居間
までさそいこむと、レコードをか
けて、踊ろう、といった。

私は、危険を感じた。ステップ
を踏みながら、私の耳や首すじや
頬や、のどに接吻した。私は、不
快な異性の体臭を耐えた。

マダムの手の指が、私の素肌に

ふれるとき、私は蜘蛛が肌を這っ
ているような錯覚をおぼえ、戦慄
にちかい嫌悪を感じた。

ダンスが終わっても、彼女はま
だ私をはなさなかった。

片腕を私の首にまわし、べつの
手で、私の手のなかに数枚の千円
サツをにぎらせた。

「わかってるでしょう」

というと、私を抱くマダムの腕
に、酔っぱらいとは思えない力が
こもった。

私は憤然とし、抵抗した。やっ
ぱりそうだったのか、と思うと、
こんなところまでついてきた自分
に、いや気がした。

「マダム、ちがうわよ、あたしは
そんな女じゃない」

マダムから逃げながら私はいっ
た。

「なにいつてんのよ。あんたは男
じゃないか。あたしのかわいい、
かわいいミチ！」

私をみるマダムの目に、嘲笑が

あった。いっそうはげしく、おそ
いかかってきた。

腐ったリングのような、あまず
っぱい不快な体臭は、私の胸に、
吐き気すらもよおさせた。

私は逃げた。部屋のなかを逃げ
まわった。女たちのなかで、この
マダムは、私のもっとも好きなタ
イプの女だった。その好きなマダ
ムにしても、私の生理は受けつけ
なかった。

マダムが酔ったふりまでして、
私を家までつれてきた目的は、と
うとう達せられなかったのだ。
「へんたい！」

と、彼女はののしった。

「男のくせに、女とねられないな
んで、これ以上のへんたいはない
わよ。カタワよ、お前はカタワだ
よ！」

目がすわり、その目の奥から、
毒のある炎のような憎悪がふきだ
していた。

女をむきだしにした、醜悪その

ものの顔だった。私は正視できな
かった。

「もうお前なんか、ぜったい、
お小使いなんかやらないよ。もう
かえれ、出ていけ！ ばかやろ、
へんたい野郎！」

唾が私の顔にとんだ。

私は、一言の弁解も返答も復讐
もせず、外へ出た。

私の心は、怒りよりも、かなし
みにうちひしがれていた。

街をあるいているとき、通行人
たちに好奇の視線でみられたり、
きこえよがしの悪口をいわれたり
することには慣れている。

だが、これほど徹底的に面罵さ
れたのは、はじめてだった。

そしてこの罵言は、マダムひと
りの口から吐かれたのではなく、
おそらく、世間一般の人々の口か
らも、無言のうちに、私たちへ投
げつけられていることばなのだ。

私の心は、この悲しきときびしさに耐えきれなかった。

深夜のタクシーをひろい、私は代々木へ走らせた。

代々木のそのアパートには、かけだしのジャズ歌手のPがいるのだ。

銀ブラをしているとき、偶然、声をかけあって、そのまま、築地裏のホテルで、最初の交歓をしたあの美少年のPである。

あれから後、私とPとは五度も会い、そして私は彼に、この道のたのしさを教えこむことに、成功していたのである。

むろん、P自身にも、この愉悅を受けいれる感覚があったにちがいない。

私は彼を愛し、彼のことを、ひそかに「恋人」とよんでいた。

深夜の私の訪問に、Pはおどろいたような顔で、ドアをあけた。

「なんだ、きみか。なんだい、こんな真夜中に？」

ねほけまなこのPは、訪問客が私だと知ると、とがめるようにいった。

「ごめんなさい、無理に起こしちやって……。ううん、なんの用もないのよ。ただ、あんたの顔がみなくなったの……。ごめんね、ほんとに……」

Pの顔をみたときに、私は、ふッと、なみだぐんだ。

そして、その泣き顔をこまかすように、てのひらににぎっていた数枚の千円サツを、Pの手に渡した。

そのお金は、マダムからにぎらされたものだった。私は抵抗し、必死になって逃げたが、いちど得たお金は、はなさなかったのだ。

これは、バーに勤める者の、いわば、下根性だった。かなしい、醜い下根性だった。

「ありがとう」
お金を受けとったPは、無表情にいった。

私は、ドアの前に立ったまま、くちびるを突きだした。

Pは私のくちびるを吸い、しばらく、私を抱きしめた。

「ねむいや」
と、ほんとうにねむそうな、投げやりの口調で彼はいった。

かなしみが、また私の心をおそった。まあ、あがれよ、とも彼は言ってくれなかったのだ。

「かえるわ、あたし。ごめんなさいね、起こしちゃって。怒らないでね」

私は、Pの肩にもういちどさわりながらいった。
「ああ、おやすみ」

ドアがしまった。私はそのドアを背にした。

私はPに、お金を渡しにきたようなものだった。

それでもいい、と私は思った。彼は、お金の餓えている。

かけだし歌手の彼は、収入がすくない。それなのに、洋服代や交

際費がひどくかかる。財布のなかには、いつもカラだった。

私はすこしでも余分の金がいると、すべて彼にあたえた。私は彼が早く一人前の歌手になることを願った。それまでは、すこしぐらい自分で貧乏しても、彼を援助してやりたかった。

私は、彼の顔をみるたびに、貢ぐようになっていた。

惚れた男に貢ぐ女の気もちが、私にはよくわかるのだった。

3

恋人のよろこぶ顔をみたいために、私はあまり気にそまないお客まで相手にし、ときには外泊もした。お金を得て、そのお金を、Pのところへ持っていく。

そんな自分の心や行動を、卑しいと嫌悪しながらも、それをせずには、いらなかった。

ある夏の夜、私はひとりの客と浜松町近辺の旅館へいった。

中年の小柄な紳士だった。私よりも背がひくいのだ。

メガネをかけていて、そのレンズの奥に、小心そうなひとみが、まるで盗み見でもするような光りかたで、私をみつめる。

私の、もっともきらいなタイプの男だった。しかし、背広の布地は高級で、腕時計も靴も、かなり高価と思われる品を身につけていた。お金さえ持っていたら、私はがまんして目をつぶる……。

私と紳士は、部屋へはいった。

ふた間つづきの和室だった。

私は自暴自棄の心で媚態をつくり、相手の襲撃を待った。

しかし、いどんでくる気配がない。

手のかかる客だな、と思い、シヤクにさわった。さきにふとんの中へはいり、タバコを吸った。

私の背後で、紳士はぬぎ、旅館

の寝巻きに着がえる気配がした。

それから、寸時の静寂。

私はタバコをふかしながら、襲ってくるな、と思った。

まくらもとの灰ザラに、タバコの火をもみつふした。

しかし、私の態勢とは、全然、べつな方法を、紳士は要求したのである。

「ねえ、ミッチちゃん。わたしを抱いてちょうだいよ。いいでしょ、ねえ、おねがいだから」

ひくい猫なで声で、私の耳へささやいたのである。これには私もおどろいた。

紳士は、なおも、あやしげな嬌態までつくって、私にもたれかかるのだ。背すじの凍るような悪感

が走った。

「ねえ、抱いてよ。わたし、一度でいいから、ミッチちゃんのような美少年に、愛撫されてみたいの」

紳士は、哀願するようにかきくどく。

いつのまにか、メガネをはずしていた。ネズミのように小さく、

おどおどと光る目。醜い目。

どんなことでもがまんするが、受け身である私が、男役になれるはずがない。まして、こんな、うす気味わるい紳士に……。

私の胸もとに、植物の青白い根のような紳士の指がのびてきた。

思わず、私はその手を、はらいのけた。

「ごめんなさい。あたしって、こんなでしょ？ からだも心も女みたいなのよ。だから、自分から積極的になれないの」

私は、ゆかたの襟をかたく合わせながらいった。

「だって、だって、きみ……」

紳士は、うめくような声をだした。両眼が衰れっぽい光りをたたえて、私をみつめた。

紳士のくちびるに、よだれのような液体がたまっているのを見て私は、ぞっとした。

「だって、あさってもないの。それはお客さん、ほんとに無理と

いうものよ。ごめんなさい。でも

こうして時間をつぶして、旅館まできたんだから、お小使いはきちん

と頂きたいわ」私は、決然と右手をさしのべるのだ。私の目的は、リツ（お金）

だった。このままでは帰れない。

「しかし、きみ……」紳士は、にがい表情をした。あきらめきれぬというそぶり

で、女のように肩や腰をくねらせてみせた。

「あたしだって、商売よ。お金ちょうだい」

私はひるんでいなかった。ふとんの上に起きなおって要求した。

紳士は、ようやく、ぬぎすてた背広の上着に手をのばした。内ポケットから、財布をぬぎだした。数枚の千円サツが、私の手に、しぶしぶ渡された。

「すみません」

それをつかんだとき、私の心は形容しがたい屈辱感にまみれた。

私は立ちあがり、ズボンをはきはじめた。

「ちくしょうッ」

という、ひくい声とともに、下品な舌うちが、私の背後に鳴る。紳士もゆかたをかなぐりすてていた。その気もちは、私にはよくわかるのだった。

私に、はげしい悲しみがおそった。なんという、汚れ果てた青春なのか！

私は、その部屋の畳の上に、声をあげて泣き伏したかった。

しかし、耐えた。泣いたところで、どうにもならないのだ。

自分がえらび、自分が踏みこんだ異端の道ではないか。いま後悔することは卑怯だ。

私は、紳士よりも、ひと足さきにその旅館を出た。

旅館の前のせまい道から、やや広い通りへ出ると、目の前に、夜の東京タワーがそびえていた。

赤や青の色ランプをつけた昇降

機が、黒い鉄塔をのぼっていく。

私の足は、ひとりでにその鉄塔へむかい、昇降機の客のなかに混じっていた。

夜の東京を、ほんやりみおろした。安っぽい色ガラスをくだき、ばらまいたようなネオンの群れ。

そこが、私の職場。

あのネオンのなかで生まれ、もう十数年も暮らしているような錯覚をおぼえる。

だが、現実の私は、一年ちよつと前に、いなかから出てきたばかりなのだ。

私の脳裡に、また「墮落」ということばがよぎり、私は殊勝にもおびえるのだ。

いや、それは私の遊戯的な自虐心理であって、私は墮落という意識をもてあそび、ひそかな愉悅を味わっているのかもしれない。

私はまた、ふいにおもいだすのだ。

あのゴルフ場をみおろす土堤の

上から、高級車で私をひっさらいた。

私の肌には、はじめて、「金色の胸毛」をおしえた白人の紳士を。

また、銀座の雑踏のなかで知りあつた二十三歳のアメリカ青年、サム・ルームスの青く澄んだひとみを……。

若い異国のジャーナリストの裸身にそよいでいた、たくましい金色の胸毛を思いうかべたとき、私の顔面いっぱい、強烈にその体

臭がよみがえった。

「ルーミス！」

私は、小声で呼んだ。せつない気もちだった。

マニラへ転勤したルーミスからは、約束したにもかかわらず、一片の便りもこなかった。

私は、叔父の家から現在の家へ移り変わったとき、すぐその報告を、ルーミスのところへ書いて送ったのである。

ナシのつぶてであつた。しかしこれは、予期していたことであつ

た。

異端のまじわりに、愛の永続なんか、ありっこないのだ。存在するものは、遊戯だけなのだ。その

場かぎりの、なまぐさい肌のぶつかりあいがあるだけなのだ。

私は、ひとりきりで泣きたいと思つて、この展望台にのぼつてきたのだった。

だが、私の心は、ただ乾くだけだった。

自己嫌悪だけが、ふたたび胸にひろがり、感傷に浸りたいというあまい期待をおしつぶしていた。

時間がすぎていく。

チャイムが鳴り、スピーカーから、声がながれた。昇降機も鉄塔も、もうねむりにつく時刻だと知らせていた。

だが、この時刻から、私の同類たちは息づき、活動を開始するのだ。そして私も、もういちど、その夜の巣へ帰っていくのだ……。

マルキ・ド・サド著

「食人国旅行記」を読んで

エダ・キリコ

わいせつ罪などというきわめて覗見趣味的な裁判沙汰のおかげで、私はマルキ・ド・サドと親しくなった。

初対面は勿論「悪徳の栄え」においてである。

強烈な「毒」笞刑、殺人、など、数々の惨虐性、しばしば読むに堪えない思いをしながら、それでも私はサドに恋してしまった。それにしてもなんとおっかない恋人であることか！

私を夢中にさせたその激しい毒性。

エゴイズム。

そう、私の恋人は、素晴らしいエゴイストな

のだ。

彼のエゴに対しては、誰がなんと言おうと素晴らしいという形容詞をヒツツけたい。

だが、私はサドへの賛美者ではない。

何故なら、サドが真実求めていたものは、

美德そのものであって、そして、単純で、素朴で、純粹なものへひたすら憧れていたのだと、また彼の惨虐性を追求すれば、それは外ならぬ女性への賛美なのだ、人間の内部に在る悪の可能性を徹底的にえぐることで、当時腐敗を極めた支配階級の偽善を激しく非難し、毒づいた、そういう彼の強さは、人間そのもののへ対する深い愛、つまりヒューマニズ

ムに裏づけられ、彼自身、犠牲者であることの弱さにも通じるのだと、そういった逆説を何度か彼との逢引きを重ねていくうちに、私は単純に受け入れていいものかどうかかわからなくなってしまったからだ。

正直なところ、私はサドが解らない。

その解らないってことが魅力なんだなあ？ 嫌悪や反撥の感情が人間の弱さだと思ったら、サドの弱さは、大変な怪物だと思ってしまう。そして、その弱さに私は、どうしようもなく魅かれてしまいうって訳だ。

だが、「悪徳の栄え」以後、何度か彼との馴れあいを深めて、私がようやくたどりつい

たひとつの答は、サドに関して公式的な解答は不要だということ、それを見いだそうとすること自体が徒労だということ。

だから、ここで「食人国旅行記」に対して私に可能なことは、素直に私なりの貧しい感受性を示すことだけなのである。

食人国とは、勿論実際に人間を喰う話もでてくるが決して「げてももの趣味」ではない。

あくまでも悪徳の国、弱いものが虐げられ強いものが偽善と、暴力と、放蕩をはたらく国としての象徴的な表現にすぎない。

主人公であるわたしと、レオノールという、誰もが追い求めたくなるようなひとつの理想である優しく、美しく、そして無邪気な女性との甘美な輝きと、響きをもった恋愛、これがサドかと疑いたくなる程、それは優しさ、香気と、夢に充ちていて不気味なのである。

「わたしがその時まで、将来自分の妻とすべき女の純潔を大事にしていたという事は、神さまが証人になってくださいます。

情熱に身をまかせて純潔を奪うようなことをあえてしたならば、結婚から期待する価値

は半減してしまうのではないか、とわたしは考えたものです」

いったいこれをどう解釈したらいいのだろう！

ロマンティズム。

女性崇拜。

優しさ。

いえ、これはエゴなのだ。

素晴らしいエゴ。

同時に辛辣な皮肉のにおいもする。

でありますから、私はこれをそのまま肯定

しようなどとは思わない。

処女性など、はたちを過ぎた私にとっては決して美しいものなんかじゃないんだもの。

「からだ」は、私にとって精神の墮落したすがたではないんだもの。

さて、はたせるかなサドは、「わたし」の愛するレオノールを、得体の知れぬ集団に剥奪させてしまう。

そこでレオノールを求めてこの物語は始まるのである。

「わたし」の旅行記が展開するのである。

それにしても、いままでになく、常に明る

さに支配されているという点で、私は心地よく読むことができるのだ。

「わたし」がたどりつく二つの架空の国、ビュテュア王国とタモエ王国、前者を食人国、悪徳の国として、後者を美徳の国として凝集させている。

ビュテュア王国で「わたし」と交友と結ぶポルトガル人サルミエントを、サドの反抗のすがただとってもよいだろうか。

また、タモエ王国は、サドの理想郷なのだ。

そして、ここで、理想郷をうちたてたことだって、ひとつの反抗なのではなからうかと。

サルミエントにしろ、タモエ王国の支配者ザメにしろ、サドの反映であることは勿論のことだが、この相反する二つのすがたが、サド自身の凝集されたすがたなのではなく、サドの多面性のなかの一部にすぎないこと、この矛盾を、いずれをも否定してないということ、だが、肯定という言葉は、ここでは役目を果さない。

さて、悪徳と美徳に関する論争、政治だの、

法律だの、宗教だの、教育だの、そういったことがらに関しては、相も変わらず同じような毒を投げかけている。

ここでしつこいと言いたところだが、その毒は、今日でも依然として毒であり、新鮮なのだってことは事実なのだから、どうしようもない。

で、ここで私がこれらの問題に関して詳細に考察していたならば、革命でもおっぱじめないかぎり、とても言葉だけでは追いつけない。

だから、それらの難しい問題は、革命でもって片づけるとして、私はやはり性本能について触れてみたいという欲望を満たすことにしたそう。

快樂について、サドは、与えることではなくて、あくまで受けることでなければならぬと記している。

「男と同じように楽しむ女は、いきおい男の快樂以外のことに気をとられ、自分のことに没頭せざるを得ないので、こうした不注意によって、彼女は、男のことしか考えてはいけないという本来の自分の義務を疎かにするに

到る。

安全に楽しもうとする男は、女からすべてを奪わなければならないのに、女が快樂の總量の一部を費消してしまうと、それが男の快樂の總量に響いてくることになる」と。

サドに性的特異質があったこと、事実、数々の放蕩と惨虐性を示したこと。

女性嫌悪。

そういったサド自身に関する伝記に結びつけて考察しようなどとは思わない。

ごく単純な私の頭のなかで考えることは、

快樂がエゴイズムに裏づけされ、サディズムに通じるということである。

たがい恋するものの優しさのなかの快樂、それはひとつの幻影としてしか受けとることはできない。

はつきり言えば嘘なのだ。

たがい合一することのできない二つの存在。

私と、その対象との間にある孤立感。

いつ、どんな場合にもつまきとう自己客観性。

そして、その対象へ、からだは、からだと

して、意識は、意識として突き進んだとしたら、そこから得られる快樂は、ひとつの幻惑にすぎないのだ。

ふたつの存在がたがい孤独のまま得る快樂は、独り芝居にすぎないのだ。

そして、そういった快樂もまた、私は、嘘だと言いたい。

合一への欲求は、人間性の反映なのだと思うし、ふたつの存在がたがい一体となって享樂するためには、それが物体と化さねばならないということ。

精神とからだが一いつにならなければならぬということ。

で、合一への欲求が強ければ強いほど、受けることを切望するものだと思うし、惨忍性は、激しさを加えるものではないだろうか。

そしてまた、快樂のあとに、なにひとつ、

感覚としても、かたちとしても残らないということで、受けるということは、すくなくとも、そんな非現実感に支配されている私にと

っては、それを超越しようという激しい欲望にもつながらるのはないだろうかって気もするのだ。

自己の存在を確めると同時に、他者のそれをも確めたいという欲求にもとづくエゴイズムであり、サディズムであつてはじめて、私は、素晴らしいという形容詞を用いたい。

何故なら、強引なやり方で自分だけ勝手に欲望を満たして、相手が感じようと、感じまいと、そんなことには、おかまいなしで、つきはなしてしまふそんなやり方、きわめて動物的なそれ、それを、エゴイズムと結びつけるのは不当だし、エゴイズムとは人間であることの産物なのだからだ。

私は、だから、エゴイズムを賛美したい。自己と他者との存在の確認、それは、もちろん性本能に関してだけ言えることではない。

例えば、悪徳の国で、サルミエントが種族の繁殖に対する嫌悪感を述べる個所がある。そして、こうだ。

「地上にたった一人の人間も存在しなくなつたとしても、やはり依然としてすべてはあるがままの状態にあるだろう。

おれたちは目の前にあるものを享樂する。しかし、おれたちのために創られたものは

何もないのだ。」

これは、種族の繁殖に対する嫌悪感ではなく、存在の意味に対するひとつの啓示ではないだろうか。

自然が我々に対して、或いは我々が自然に対して何の責任もないのだとしたら、我々はそれこそ自由そのものではないか。

だが、自由とは？

勝手気儘にふるまふことでもなければ、死へ向うひとつの動きでもない。

死は、ここでは問題外なのだ。

いつ、いかなる場合に於いても、死は我々にとってどんな意味も課さない。

自由とは、要するに無なのだ。

我々の存在は無から始まる。

そして、無は存在への欲求へ結びつく。

存在への欲求、それははたらきかけ、選ぶということ、参加させるということ。

他者のなかへ突き進むということ。

だがその対象とすべき土台が腐っていてはどうしようもないのだ。

「もし、すべての麦の粒が芽をだすことを自然が望んでいたとすれば、自然は土地の組織

をもっと良好なものにしていたにちがいない。

土地が収穫をもたらすことができない状態があれば長く続くというはずはない。

いつも地味豊かで、種子を受け入れる準備が整っているような土地は、蒔けば必ず収穫をもたらすにちがいないのだ。」

誰もが望むこと。それは、いつも地味豊かで、種子を受け入れる準備の整った土地、蒔けば必ず収穫をもたらすような土地に生れたかったってこと。

だが、各人が自己のなかで各々の理想郷をうちたてなければならぬってことは、悲しい現実なのである。

そうして、私はと言えば、「もう、どうでもいいや！」

などという不貞腐れた心境にまで墮落してしまっている。

だから、サドのそのユートピアが私には、馬鹿馬鹿しく、「なんとまあ無邪気な！」などという感嘆詞を發せずにはいられないのである。

さらに驚くべきことは、私の周囲で意気ま

いているコミュニストかぶれや、たまごたちに、うんざりするほど拝聴させられた共産主義思想に結びついているという事実である。

勿論、彼等の借りものの、青くさい思想に征服されるような私ではないが、人間の本質へ向った政治や宗教や法律の在り方に、私はいちいち、うなずいてみせなければならなかった。そうして、悪徳と美德への定義は、文中に「尊重すべき唯一の美德、人間を満足させ得る唯一の美德は、その人間が住んでいる国の美德である。…美德とは習慣である」と、こう示されているように、その国の政治や、法律の在りかたに左右されるものだとい

うこと。そういったものが、善と悪との区別を創りだしたものであって、それらは決して自然の産物ではないのだということだ。

ここで、どうしても書いておかねければならないことは、サドの毒が、我々女性のうへにも向けられているということである。

主体性の欠如。男たちの投影としての存在。

女であることへの特権と弱さに甘んじ、無能で、常に受身で、従順であることへの嫌悪は、やはり、私にとっては痛いのだ。

女性の地位というものに対して、サドが投げかけた毒も、いまだに新しいものである。てことは、まちがいのない事実である。

でありますから、私はやっぱりサドが怖い。怖いってことは、要するに素晴らしいってことなのでしょう。

私にとって、最も大きな、そして重みをもった収穫は、単純、素朴、純粹という私のいちばん好きな言葉を、サドのユートピアのなかにどっさりと頂戴したことである。

だが、ここで安心してはいけない。その心地よさに酔ってしまっただけではない。

サドは依然として、くせものなのだ。怪物なのだ。

これから、きつと、サドとの馴れあいには重ねていくだろうな。

■ マルキ・ド・サド著

「食人国旅行記」の理想主義

安 東 泉

マルキ・ド・サドという、不気味な男が門口に立って、私に微笑を送ります。人づてに聞くところでは、彼は残忍な男だということ

です。手にムチを持ち、口唇に残酷な笑みを浮かべ、犠牲者となるべき女の悲鳴を、鳴らすムチ音の前にもう全身で持ち構え、聞くの

です。人のいうところでは、サドの信条は快楽にありということです。そのためのどんな悪徳も許されるということです。いや、悪徳こそ

法律という番犬で擁護された巨大な国家権力の、あらゆる快楽の源泉だと。

「悪徳の栄え」なるほど、人づてに聞くサドの様相では、当然そういうことになるのでしょう。姉のジュリエットは悪徳に栄え、妹のジュスチイヌは美德の不幸に陥る、という筋立てを聞くまでもなく、サドの世界は良識ある健康な社会では、およそ理解することのできない、悪徳に満ちた快楽の勝利をこそ謳歌し、その詩を口ずさむのでしょうから。

門口に立って私にはおえみかけるサドの不気味な微笑から、サジズムという妖気が立ちこめて、何かしら私をゾッとさせます。そこには墮落というフシダラな世界以上の深淵が顔をのぞかせています。カッと血の逆流するような、底の知れない深さであります。

もちろん、サドの存在した十八世紀以前にも、この世には残酷がありました。はなやか西欧文明の裏側で、ほこるべき人類発展の文化史の裏側で、どれほど多くの凄惨な残虐が行なわれたか、これは周知の事実であります。博愛慈悲の名を借りた宗教や人道の教義が、どれほど一方ではほしいままの殺戮をあ

えてしたか、これも周知の事実であります。が、恐しい牢獄でもって、むごたらしい拷問でもって、鉄のクサリをがちやつかせ、幾度となく血のムチを振るいました。これとて周知の事実であります。

十八世紀、サドの生きたフランス大革命はまさに血の大革命でした。ここをせんとど、絶え間なく働き続けたギロチンの重く鈍い光沢の刃先は、少しも血ノリのおいにかわく暇さえありませんでした。アナトール・フランスの小説ではありませんが、へ神々は喝くゝであったのです。

サドの没後、現在に至るまでの道は、なおいつその加速度をもつての残酷史が繰り広げられました。アウシュヴィッツや広島の名がそれを象徴します。

2

こうした周知の、天下にあまねき公然たる大悪徳史を踏まえながら、なぜ私は、サドのおとずれに、特に敏感な不気味さを感じるのでしょうか。

本来人間は、自己弁護の本能的な習癖が身

についています。大義名分という、もっともらしい隠れ蓑に隠れたがります。いつわりでもよい、アリバイを作りたいがります。こういう隠れ蓑やアリバイが、人間を大胆に、しかも残酷にします。血にうえ逆上した、残酷な復しゅう心が、正義人道による戦争裁判という大義名分、隠れ蓑、アリバイを得るとき、公然たる殺戮を可としてしまうのです。合法的という名の偽証的悪徳がこの世の春を謳歌するのであります。

サドはこの偽証をまず摘発しました。隠れ蓑をはぎとりました。本然的な、自然な欲望の有りようを、むき身のまま取り出し突きつけました。自己弁護をしませんでした。残酷はそのまま残酷なのであります。自然の望むまま、そのままに、残酷そのものが目的であり、快楽であり美学であり、道徳でありました。これには詭弁も偽証もまやかさもありませんでした。

人づてに聞いたところで判断するサドという男は、そういう人だったのです。

残酷さの持つ美学、残酷さの持つ愉楽、これは私にも想像はつきます。いや実感さえさ

れます。もともとマゾヒストとして自認する私が、サドを実感するなんて、少しおこがましい言い方かもしれませんが、サドを実感することをまるで抜きにして、マゾヒズムを味にすることは、やはりできないことです。

いいながら、サドが投げかける不思議な微笑、血のはてるような悪徳へのいざないが私にとってはやはり一足それに踏み出す共通の場としての世界となるためには、大きなためらいを禁じ得ないのでありました。

3

桃源社の「マルキ・ド・サド選集」に「食人国旅行記」というのがあります。これはサド晩年の大作「アリーヌとヴァルクール」の第二巻「サンヴィルとレオノールの物語」のうち、サンヴィルの語る特異な旅行冒険記の部分のみを抜き出して、訳者沢沢龍彦氏が、適宜に「食人国旅行記」のタイトルを付したものだそうであります。これは最愛の妻、レオノールを何者ともしれぬ者に誘かいされて心優しき青年サンヴィルが、愛と死をかけてその後を捜し歩き、アフリカ一帯から遠くニ

ュージーランド近海の南太平洋まで、限りない冒険と波らんを越えて踏破したその物語を一大ロマンの形式で収めたものであります。

それは壮大なスケールを持つロマンではありますが、本質的にはこれはサドの哲学論であり随想録であり、文明批判の書であることが一読してわかります。サジズムの秘密がここには期せずして語られています。

食人を日常の風習とし、女奴隷をひとり占めにする兇悪無残の独裁君主が君臨するアフリカのビュテュア王国と、完全無欠な人民民主主義を骨子とする、謙譲と美徳の平和国家タモエとの、まるで両極端な二つの土地の民族、風習、モラルが、一方はポルトガル人サルミエントの口をかり、一方は最高の理想的道徳の体现者、サメの口をかりて語られます。その語り口は性急で、理屈ばって、説論じみており、実のところ少々退屈さを禁じ得ないところがあります。

快楽派で警句の天才、オスカーワイルドの卓抜な比喩や逆説の、あの才走ったひらめきに比べむしろ地味で、鈍重でさえあります。

だが、一応小説という概念のワク付けを離

れて、せっかちではあるがどもりがちで地味なこのサドの説論に、よく耳をすまして最後までその論を聞くと、ここにまるで新しいサジズムの通念とはかけ離れたひとりの理想主義者の真の面目が、思いもかけぬ装いで、ホウフツとして浮かび上がってくるのを感じるでしょう。

マゾヒズムが究極のところ一の先鋭な理想主義であるのと同様に、サドは先鋭な理想主義者であり、サジズムまた先鋭な一の理想主義であることが、あの不気味な微笑のヴェールの奥に、はつきりと輪郭づけられて見えてくるのです。外見上の装いは両極端に对照されても、悪徳の権化サルミエントと、美徳の完全な体现者、サメの説論との間の、本質的な差異は何一つ見いだせないであります。両者で一致する本質的な共通点、これがサジズムを産み出す土壌であるとする、逆説的に言って、サジズムほどの道徳はほかに見つめることができなくなってしまうでしょう。

4

一方を悪徳、一方を美徳と名づけることに



まずサドは異議を申し立てます。サルミエントの口を借りて言えば

「美德によって高尚になろうと、頽廢によって破滅しようとして、こうした有為轉變つねなき様相こそ、おれたちを支配している根本的な法則なんだよ。だから悪徳は必要なものだ」

つまり悪徳も美德も、二つの様態の違いはあっても本質的な差異はなくただ自己の保全ないし利益のために、二つのうちのどちらかを選ばよいのです。悪事というものは、その人間が住んでいる地方の習慣との関係によってしか悪事とは言えません。美德にしろ相対的なものにしかすぎなく、それはみんな習慣であり、地方的なものでしかありません。地方的なものを越え、時間を越えての美德や悪徳は存在しません。ナチ時代のドイツにおける美德も悪徳も、そのままの基準ではもうどこにも通用はしません。現在只今の日本における悪徳や美德が、かつてのあの軍国主義時代の道徳として通用するか、というと、もちろん論を待つまでもなく全くその基準は所を変えてしまっているのです。アラビアやイラクといった中近東の道徳と、ロンドンやパ

リーでのそれと、ニューギニアのそれとは明らかに基準が違います。もっと範囲を広げて他の遊星での道徳基準と、地球でのそれと、果たして二つは合致するものと考えられるでしょうか。それはそれぞれの地方的制約のもとにおける仮の約束にしか過ぎないのではないのでしょうか。動物には動物なりの習性があります。人間には人間なりの習性があります。基準になるべきは美德や悪徳による区分ではなくて、自然のままの習性があるだけです。やりたいことをやるだけであります。何のためらいことがあるのでしょうか。ためらいこそ、悪しき習慣にただ慣らされてきた余尽のくすぶりみたいなのです。

〈ソドムの百二十日〉 〈ヘジュリエット〉 〈閨房哲学〉 〈アリーヌとヴァルクール〉 等これら苛酷な作品群は、あたかも強い酸のように、上昇期にあったブルジョワの十八・九世紀をおびやかしたつづけたが、原子力時代と呼ばれる二十世紀、マウドハウゼンや広島、〈審判〉や〈嘔吐〉の病める時代たる二十世紀には、逆に解毒剤の役目を果たすであろうと、或るフランスの文人は言っています。

それは旺盛なサドの、まやかしの美德に対する公然たる攻撃と弾劾の、恐るべき自由回復への熱情が巻き起こした効果について述べるところのものでありましょう。

5

食人国ビュテュアでは、その名が示す通り食人が一般の風習になっています。一般的にサド好みとされる残酷シーンが食人の風習を軸にして説明的に展開されております。捕虜の処刑場面、そしてその肉を切りきざんでむさぼり食うこと。貢物として送られてくる女たち二千人を、奴隷以下のものとして後宮に飼う王さまの専制的生活、王さまは女の中のひとりに欲望を感じると、その愛の印にまず百回のムチ打ちを加えるという残酷なしきたり。女は牛馬と同じ労働に、男の振るうムチにおびえながら従事し、あるいは神々への生贄として祭壇で殺される――、としても、この疑似悪徳世界の説明的部分は、寓意の意味合い以上の迫真性はないのであります。ナチ収容所の実態をあばいたフランクルの〈夜と霧〉戦犯者のさんげになる告白〈三光〉の迫

真性にはついに及ばないのであります。サドのあの強靱な悪徳世界への空想力をもつてしても現実社会が、実際にその内部に包蔵する巨大な悪徳のメカニズムの前には、遂に色あせ敗退せざるを得ないのです。

これこそ、実はサド自身が声を大にして弾劾し、身をもって攻撃しようとした美德への不信なるものを、サドの証人として保証証明するものであります。

サドの描く食人国の世界は、一つのユートピアであります。

理想主義的ユーモアが真率に過ぎるほどの表情で語られております。

ところが「夜と霧」や「三光」は、無残にあばかれた美德の残骸であり、生けるがごときその亡霊であります。

モラリスト・サドは、一見悪の権化であるかのようなサルミエントの口を借り、猛烈に一般的良風美俗の内臓するまやかしと墮落と偽瞞を、小気味よく痛罵しております。

もっといつわりなく、大胆に率直に、人間の実際を知ることと声を大に提唱しております。

「おお、ありとある治世の、ありとある国家の殺戮者よ、投獄者よ、馬鹿者よ。いつになつたら君等は、人間を閉じ込め死なせる学よりも、人間を知る学を尊重するようになるのだらう」

これがサルミエントの悪徳に満ちた立場、食人国の世界であります。ブルジョア支配秩序の根元を揺さぶる、この正当な文明批判の背骨がサドになかったら、サドは現在までのように、これほど多くの人たちから、悪の使徒としてのレッテルのもとに、いみきられわれ禁断の書として放逐されることはなかったでしょう。

それほどまでに、サドの攻撃は、正確的に射て、時の宗教、時の法律の絶対的権威を根本において揺さぶる何ほどの力を持っていたわけであります。

サドが政治体制の変化に左右されず、一貫して死刑に反対してきた事実が、そのことを証明しております。

法律に対する不信、宗教に対する不信、人間の真の開放への熱意、これが一方では悪徳の国、ピュテュアとなり、一方では美德のユ

ートピア、タモエとなるのでありますが、両方共、人間の自由と、法律宗教への不信が、強固なその国成立の支柱となつてゐることを、見のがすわけにはいきません。

ただ冒頭でも述べたように、「食人国旅行記」と題された「サンヴィルの旅行記」は、これを一編の小説としてみると、物語の進行部分のあのロマンチックな情緒に富んだ香気が、せつがちで冗長にすぎるサルミエントやザメの直接話法による説話で、ちくはぐな印象と幾分冗慢な印象を残すくらいがあることが、サドのために十分惜しまれるのが気がかりです。

が、執筆のねらいからいって、これは決して、この作品の致命傷ではないでありましよう。



必殺のデリンジャー



早射ちコルト勝つか、決死のデリンジャー
か西部の町にこだまする暁の銃声！

祖 父 江 新・文
落 合 竜 二・絵

① 胸さわぎ

町へ買物に出かけていたローズが家にかえり、ドアを開けたとたん、部屋の異ような気配を感じとった。

妹のキティの姿が見えない。そのみか、倒れた椅子、床に割れ落ちた皿、日ごろつましいキティのしたこととは思われない。

もしや……。ローズは不吉な予感に胸のつまる思いがした。

床に、キラリと光るものを見つけた。



② ローズとキティ

ローズがひろい上げてみると、それはローズが、かつての情夫だったトニー・グラントに与えた愛のしるし、クロスネックレスだった。トニーは出獄したのだ――。

六年前、小娘ローズはたくましいガン・マン、トニーにあこがれたのはたしかだった。が、甘い生活は短かった。好色で残忍、酒と喧嘩で明け暮れるトニーに、ローズは後悔した。

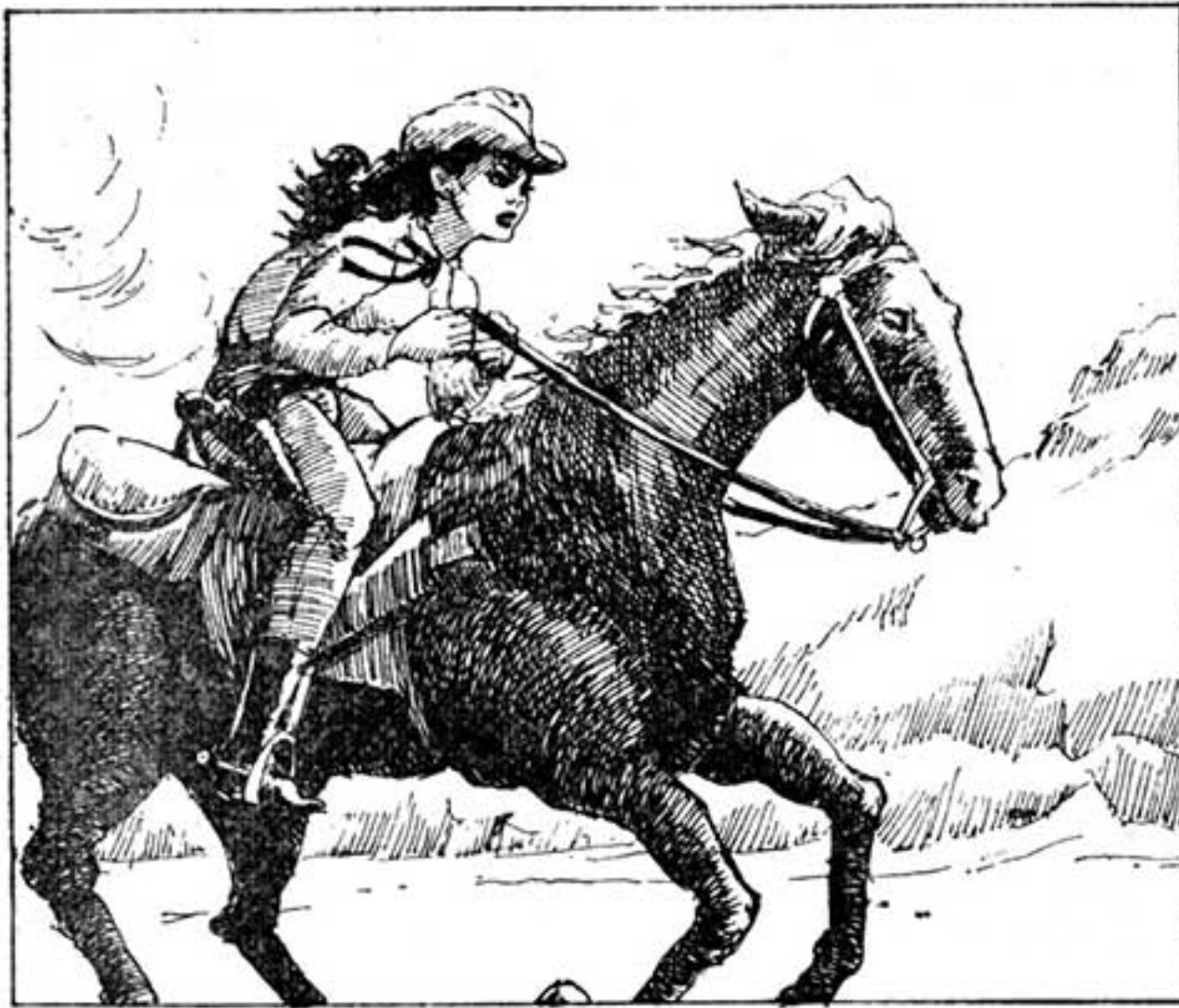




③ 古傷

ノース・ホークにトニーの妻のいることを知ったところ、トニーは不法な決闘事件の罪で刑務所入りをした。ローズは、むしろ救われた思いがしたものだだった。

そのトニーが、刑を終えて帰ってきた——五年ぶりに、ローズを訪ねてきたトニーの目に、昔、少女だったキティの、美しく成長した姿がどう映ったかは明きらかだった。トニーは、キティをさらったに違いない。



④ トニーという男

ローズは手早く旅装をととのえ、トニーのあとを追った。行く先は、彼の女のいるノース・ホーク以外には考えられない。

ローズは、拳銃にかけてもキティをとり戻す決心だった。だが、トニーに勝てるだろうか。トニーは名負うての使い手である。彼は得意の早射ちでまず相手の拳銃を落とし、息のかかるまで近寄ってから、恐怖にゆがむ相手の顔へ銃弾をぶちこむのが好きだった。



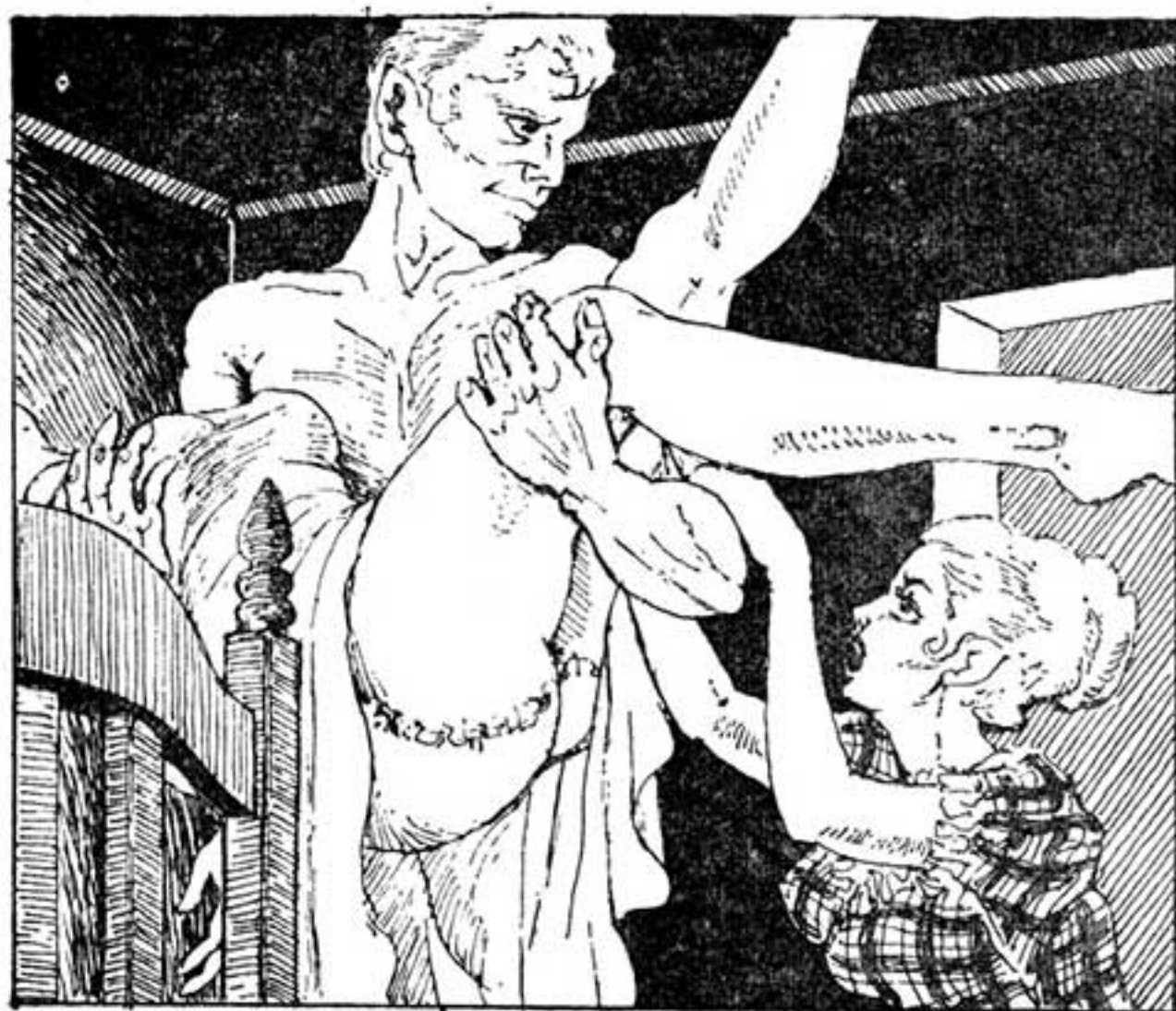
⑤ パトリシア

真夜中の二時だった。パトリシアは表戸を激しくたたいた音に目をさました。

外に、五年ぶりに見るトニーが立っていた。が、トニーが連れてくる女の姿に、思わず息をのんで立ちすくんでしまった。

女は、猿ぐつわをされ、後ろ手に縛られた腕をトニーに握られていた。

「パトリシア。五年ぶりに帰ったんだ。キスクらいしたらどうなんだ」



⑥ 不安

愉快そうに笑っているのはトニーだけだった。キティは恐ろしさのあまり縄を解かれても、食事をするどころではなかった。そしてすきをみて逃げようとしたため、再び後ろ手に縛られてしまった。

従順なパトリシアには、どうすることもできなかった。が、トニーが食事をすませて、キティを寝室に連れこもうとしたとき、「やめてッ、トニー、それだけはやめてッ」

⑦ けもの

パトリシアは、必死にトニーの腕にとりすがった。——が、むだだった。

トニーはキティをベッドの上に投げだすとパトリシアを捕らえて、傍の椅子の背を負うように縛りつけた。悲鳴をあげる口は、かたく猿ぐつわで覆ってしまった。

「おめえには長い間苦勞をかけたお礼に、これからおもしろいものを見せてやるぜ」
彼は片頬に、残忍な笑みをうかべた。



⑧ 空しい搜索

翌日の朝早く、ローズはノース・ホークに到着した。彼女は休むいとまもなく、酒場から酒場へと、トニーの立ち寄りそうなところをたずねあわせた。

だが、町の人たちの口はかたい。うすら笑いをうかべて口もきかない男。気の毒そうに首を横に振る女。ローズは、それらの人々がすべて、トニーの仲間か、彼を恐れる人間であることをしった。





⑨ 二階の灯

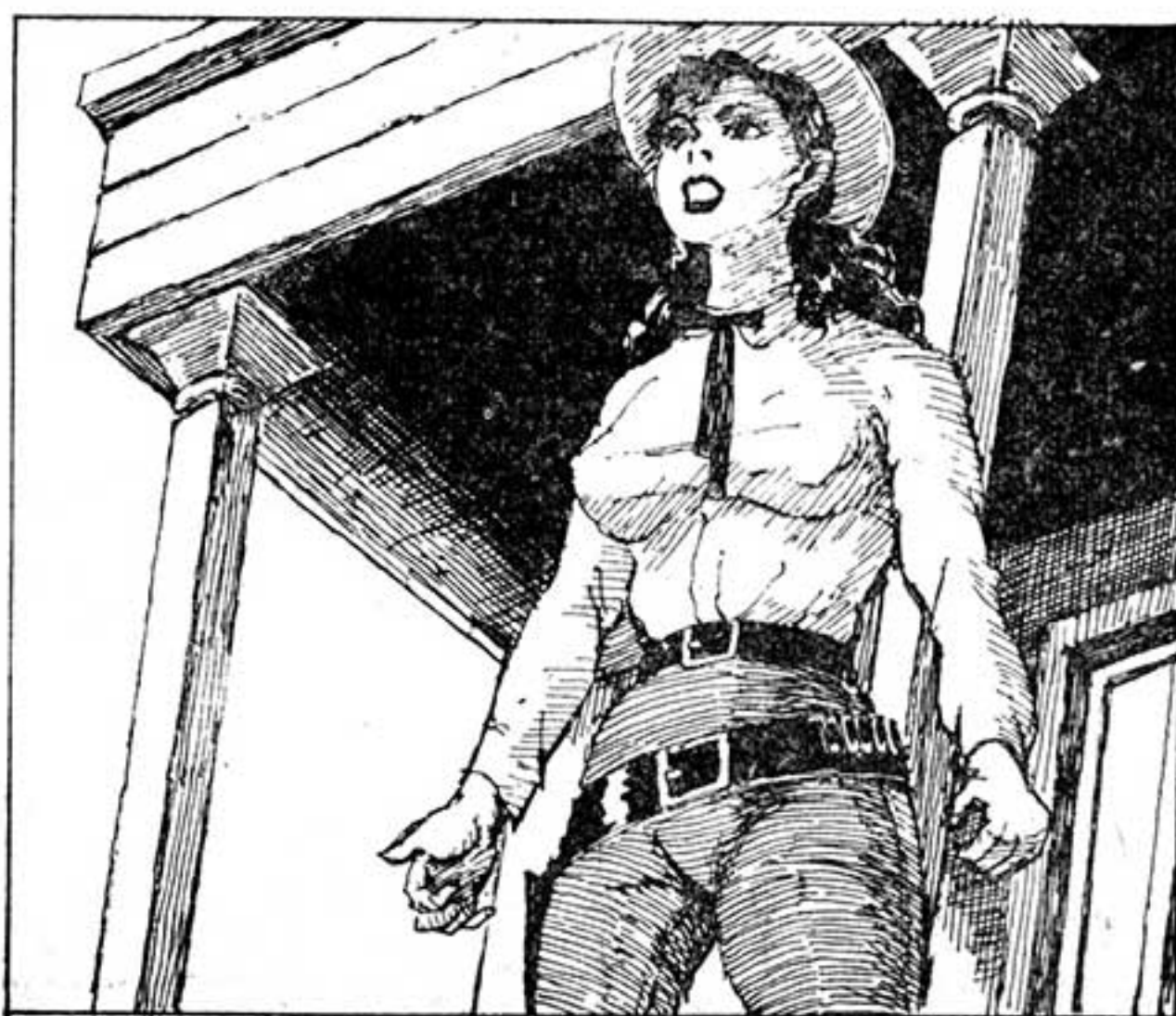
とうとうその日も暮れてしまった。ローズはホテルに帰ると、ガックリと椅子に腰をおとした。ローズは今日、遠くの牧場まで出かけてトニーを探したが、すべて無駄だった。トニーのことだ、いまだにキティが無事にいるとは考えられなかった。

ローズの部屋からみえる向いの雑貨店の二階の灯りが、いつまでもついている。そのとき、誰かがドアをノックした。



⑩ 二人の女

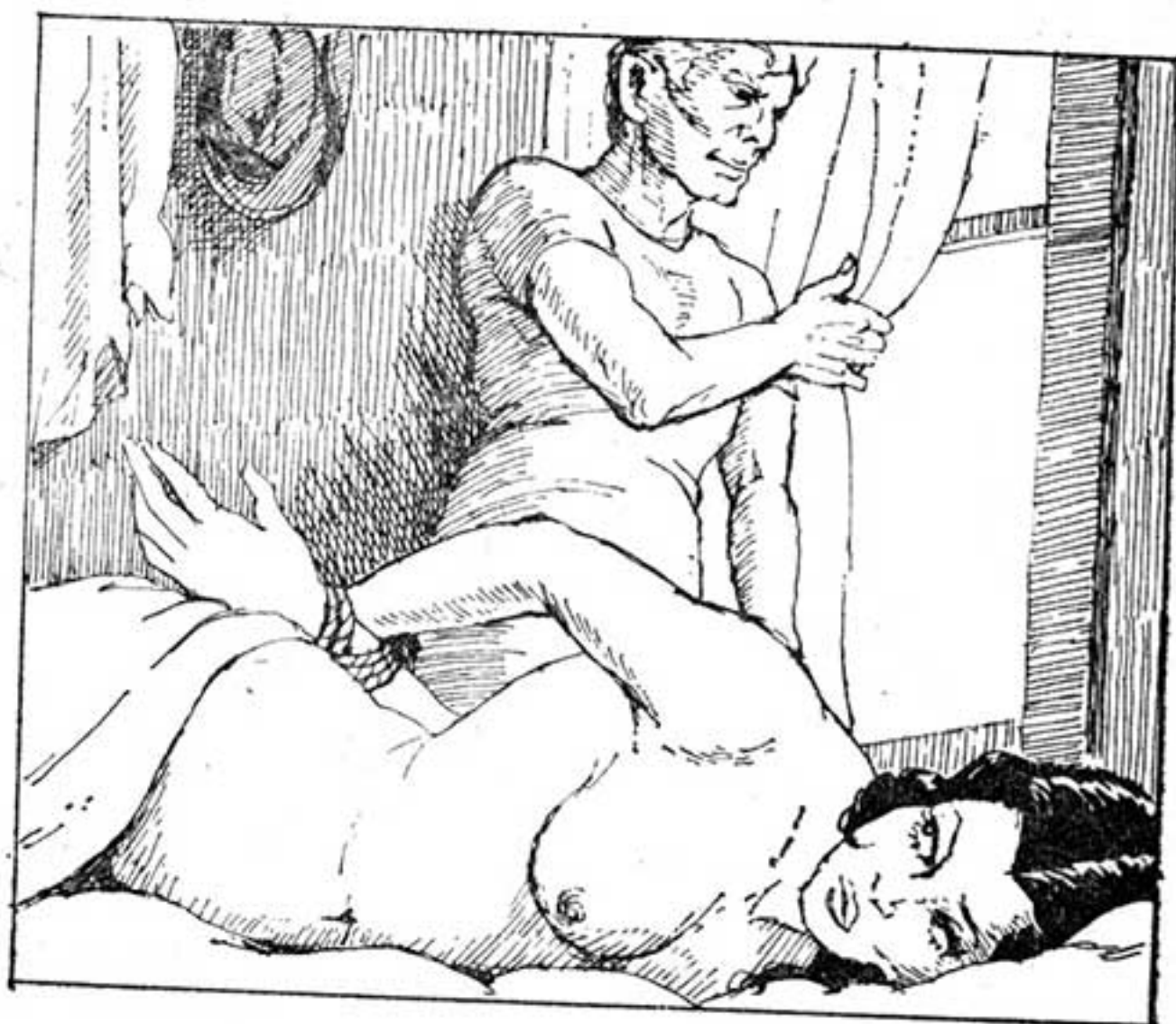
入ってきたのは、小柄なブロードだった。「ローズね、わたしはパトリシア。トニーは向いの部屋にいるわ、キティも一しょよ」「キティは、キティはどう……」パトリシアは、横に小さく首を振った。「殺してやる。きっと殺してやる」「できたらわたしが殺してやりたいわ。ローズ、さあわたしの拳銃をもって……」パトリシアは何ごとかをささやいた。



⑪ その朝

あたりが白みかけると同時に、ローズはホテルを出た。ローズはホテルの前に立ち、雑貨店の二階を見あげた。

ローズの靴の中には、パトリシアのデリンジャーがしのばせていた。腰のコルトを奪われたとき、トニーに一瞬のすきができるかも知れない。だが勝算はなかった。一か八かだ。「トニー！ ローズよ。ここへきて勝負するのよ！」ローズは、大声で叫んだ。



⑫ 二階の部屋

ローズの声に、トニーはベッドから起きあがった。窓から表を見ると、すきのない構えで、ローズがこちらを見あげている。

キティも手足を縛られたまま、ベッドの上でローズの声を聞いた。

(ローズめ、飛んで火に入る夏の虫だ)

ふと、トニーの頭に残忍な計画がうかんだ。

「キティ、おめえの姉の勇ましいところを見せてやるぜ」

⑬ 哀れなキティ

トニーは、裸のキティを窓ぎわに連れてくると、カーテンのレールに吊るしてローズにも見えるようにした。

「あつ、キティ！」ローズは思わず叫んだ。

だが、キティの悲鳴は非情な猿ぐつわに押しもどされていた。

「はっはっはっ、さあキティ、ローズがどんなぐあいにおだぶつになるか、ここからゆっくり見物しておきな」



⑭ 決闘

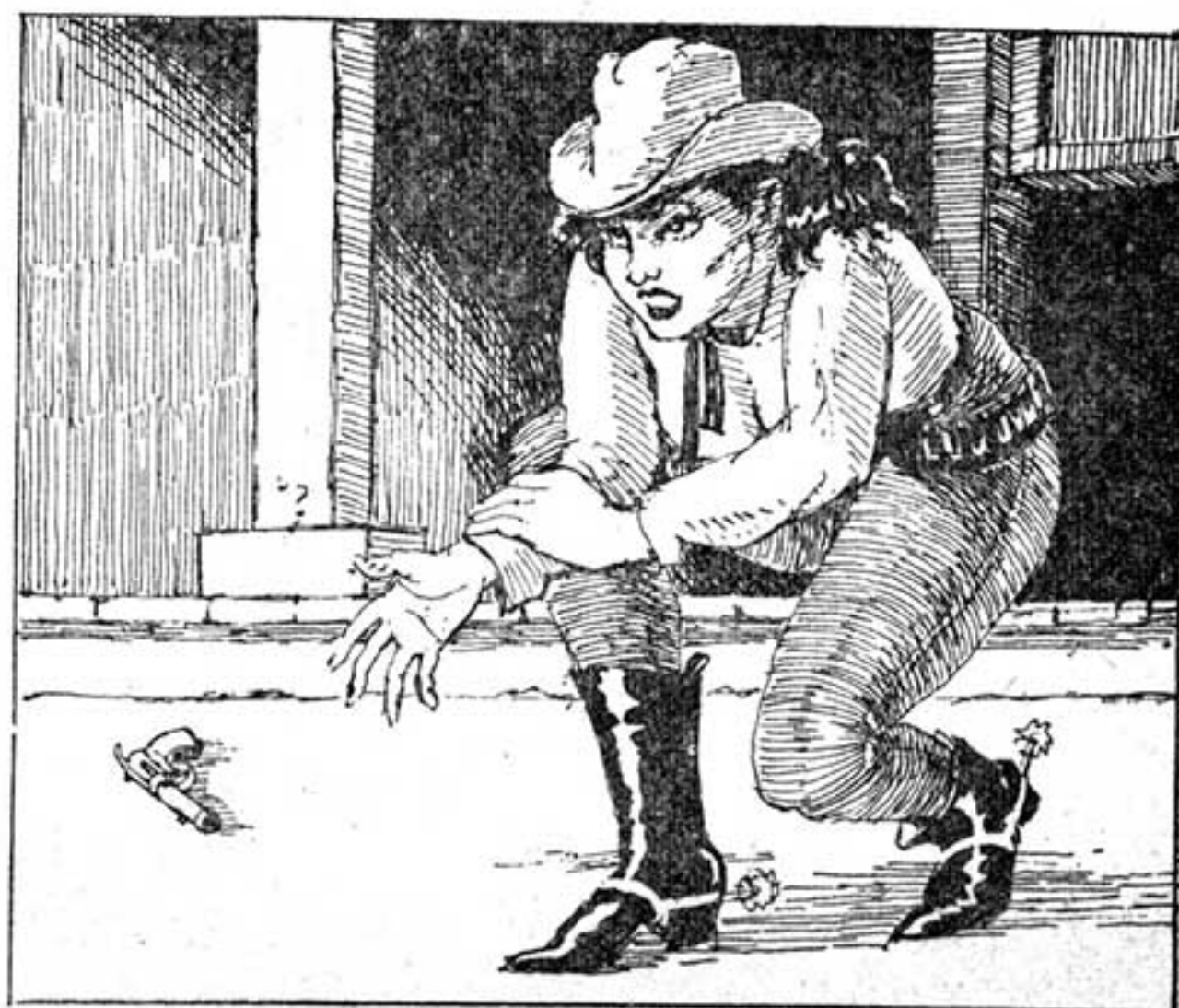
トニーはゆうゆうと対決した。

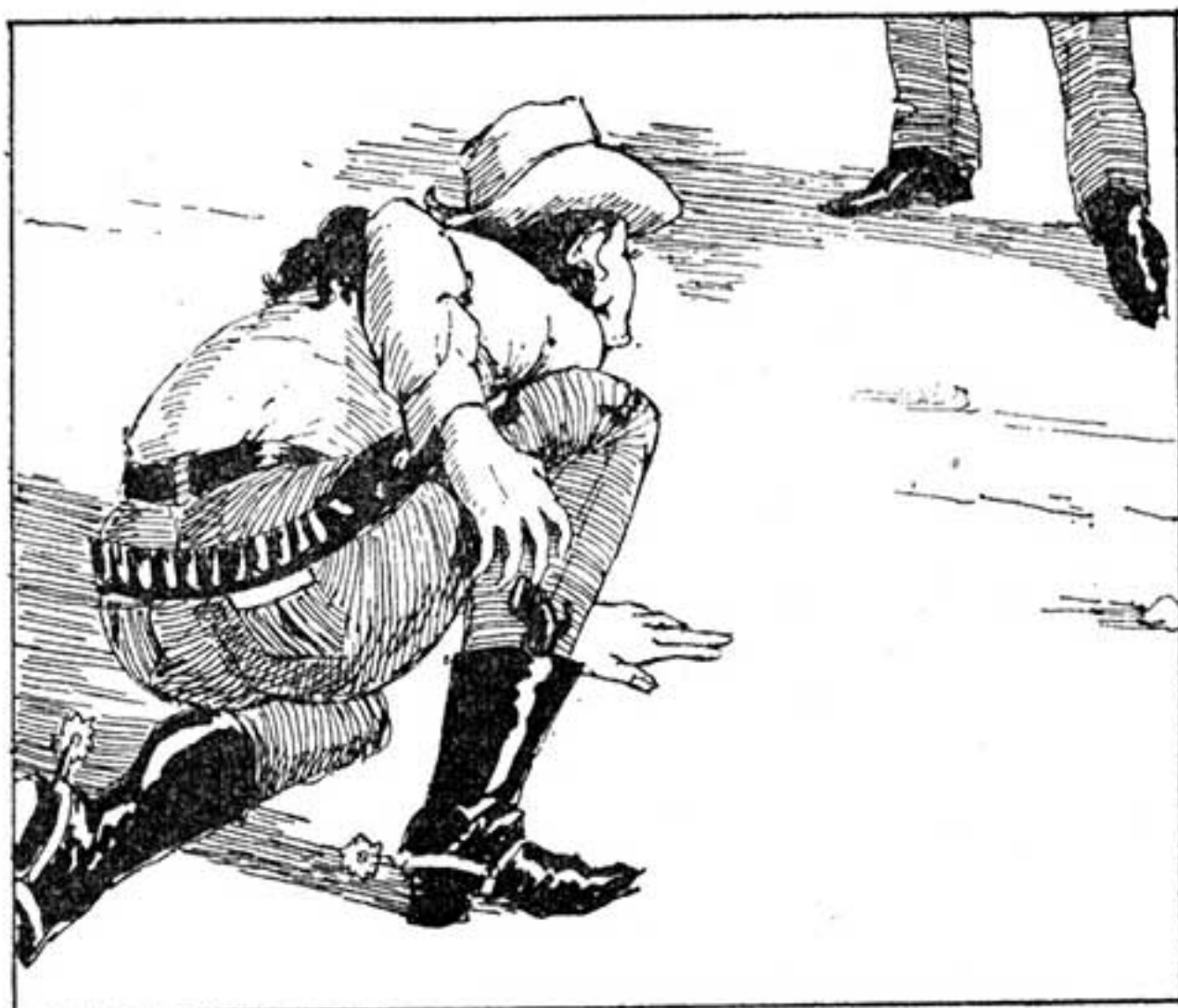
ローズの手が拳銃にかかった一瞬、トニーの拳銃が火を吹いていた。

腕に、しびれるような激痛が走って、ローズはその場に膝をついてしまった。

片頬を冷たくゆがませて、トニーはゆっくり近づいてきた。

「ローズ、どうした。まだ勝負はついていないはずだ」トニーの言葉は意外だった。





⑮ 絶対絶命

「さあローズ、パトリシアからうけとったデリンジャーはどうしたんだ。おめえか抜くまで待ってやるぜ」

トニーは、あざわらいながら言い放った。万事休す！ トニーは知っていたのだ。が、いまはどうすることもできなかった。トニーに捕らえられて、キティとともに辱しめを受けるより、いさぎよく死んだほうがいい。ローズは、デリンジャーを抜いた。



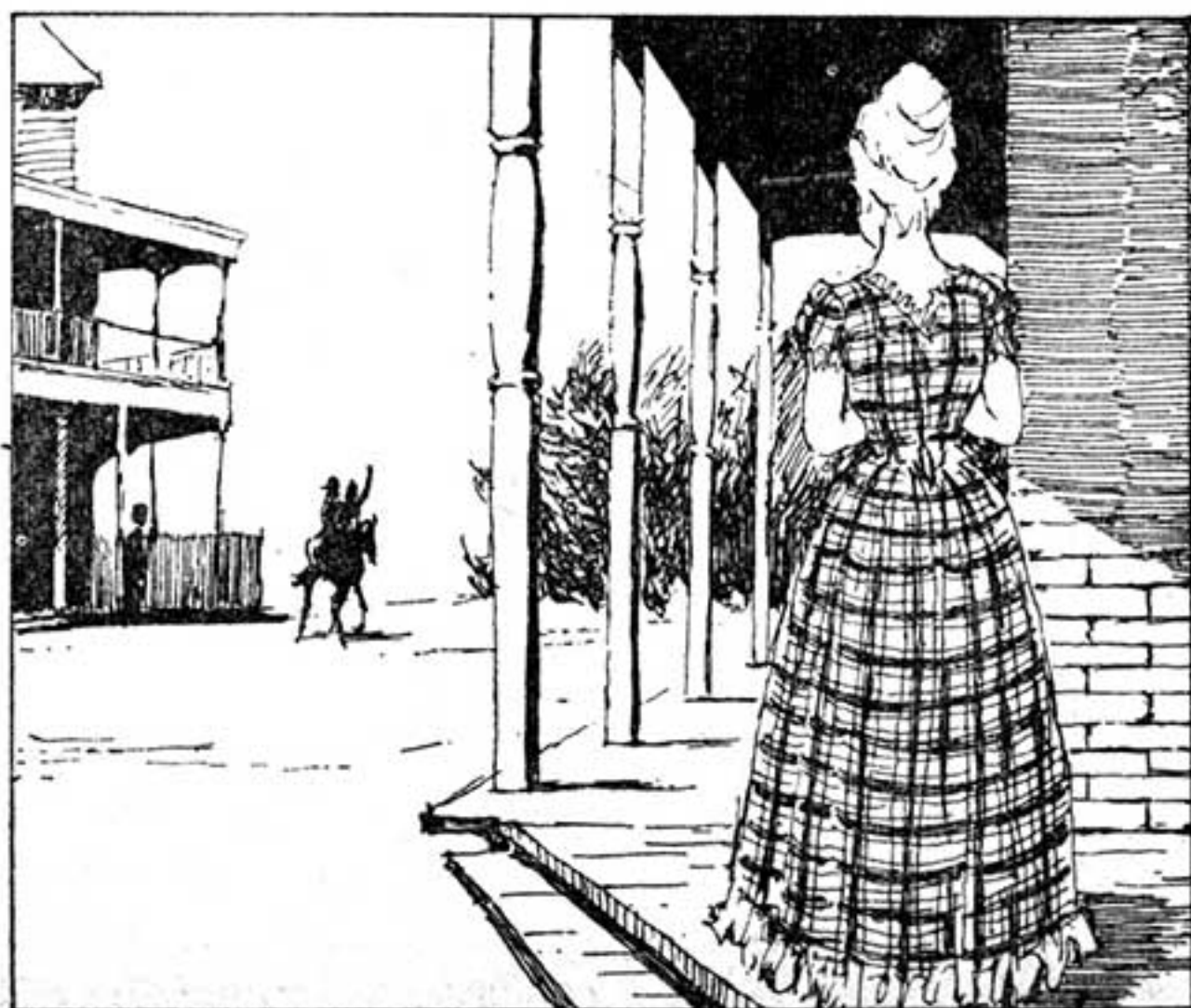
⑯ 火を吐くデリンジャー

わずかに早く、トニーの拳銃の引き金の音がした。

デリンジャーは火を吐いて、弾はトニーの胸を貫いていた。

まるで信じられないというように、トニーの目はいっぱいに見ひらき、しばらくローズを見つめていたが、やがて、どっと膝からそこにくずれ落ちていった。

トニーの拳銃は、発射されなかったのだ。



⑰ 晴れた朝

トニーの残忍な好みは、遂には彼自身を倒す結果になってしまった。

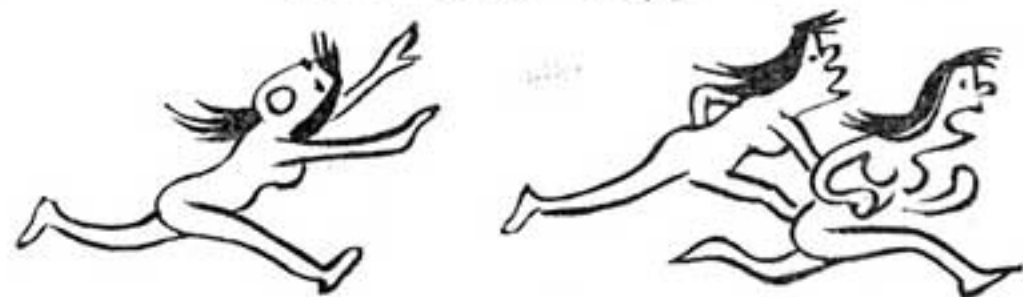
トニーの癖を知っていたパトリシアは、彼の拳銃から二発目の弾を抜きとっていたのだ。

ローズとキティ姉妹が去る日、二人を乗せた馬が見えなくなるまで、パトリシアは立ちつくしていた。姉妹が幸福でありますように、そしてわたしは強く生きようと誓いながら。

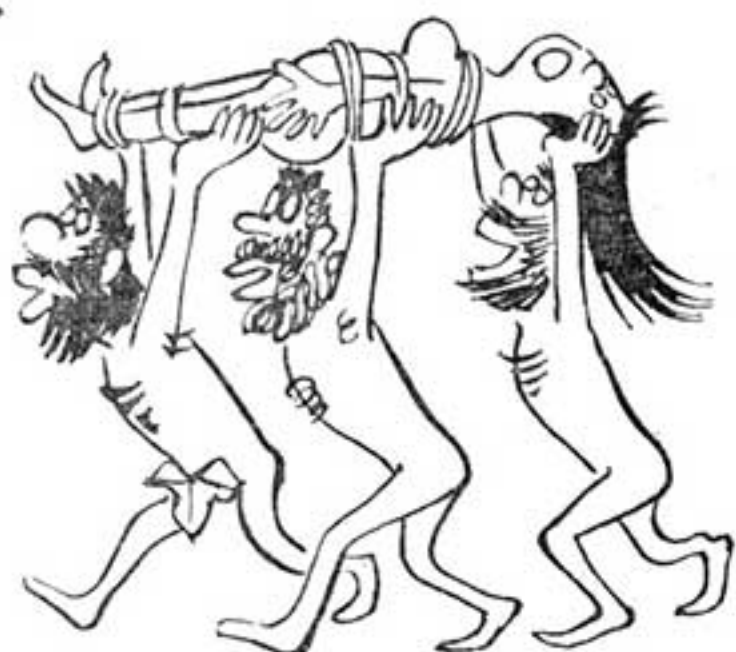
コレハオドロ記 ④

髪を愛する男

左次郎



3.



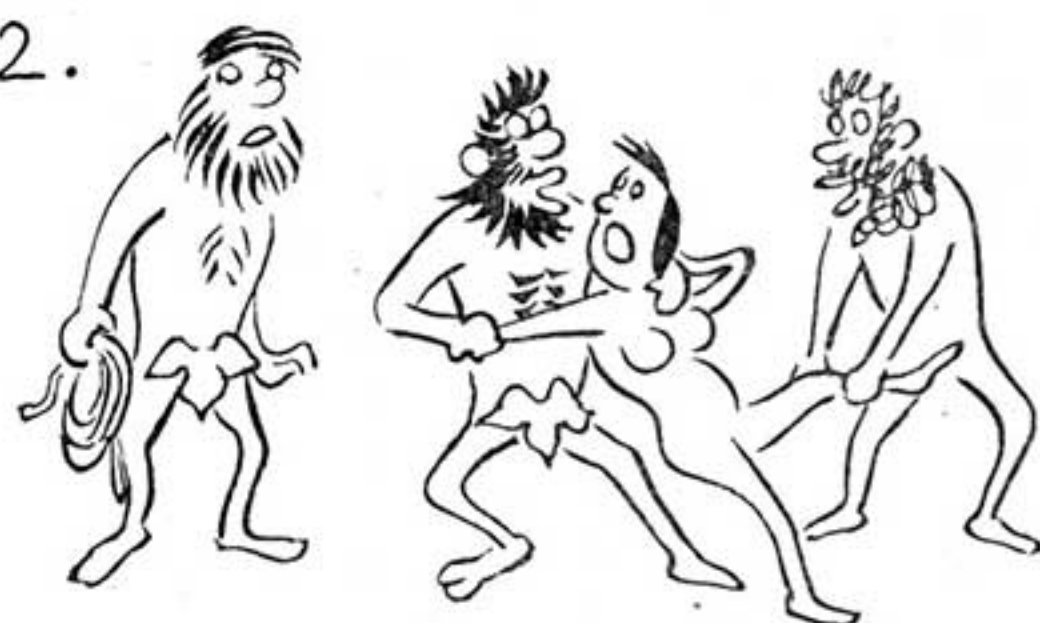
4.



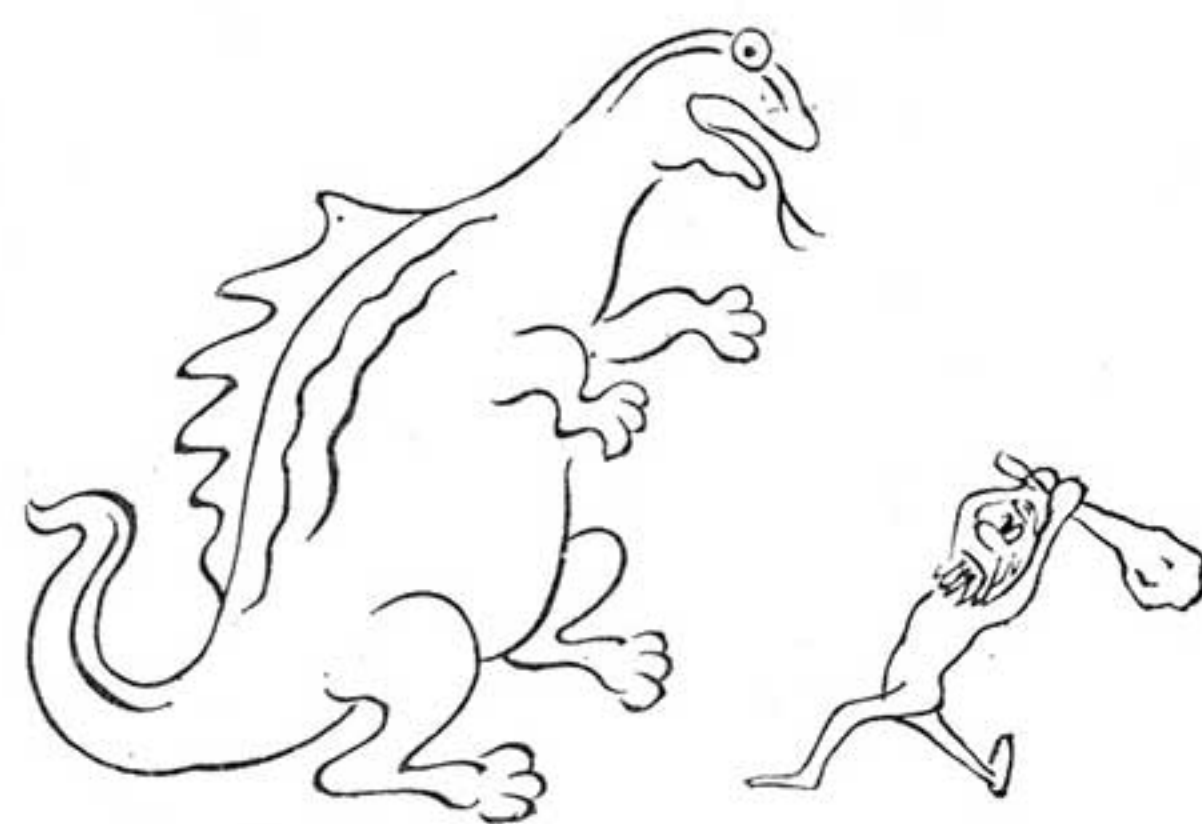
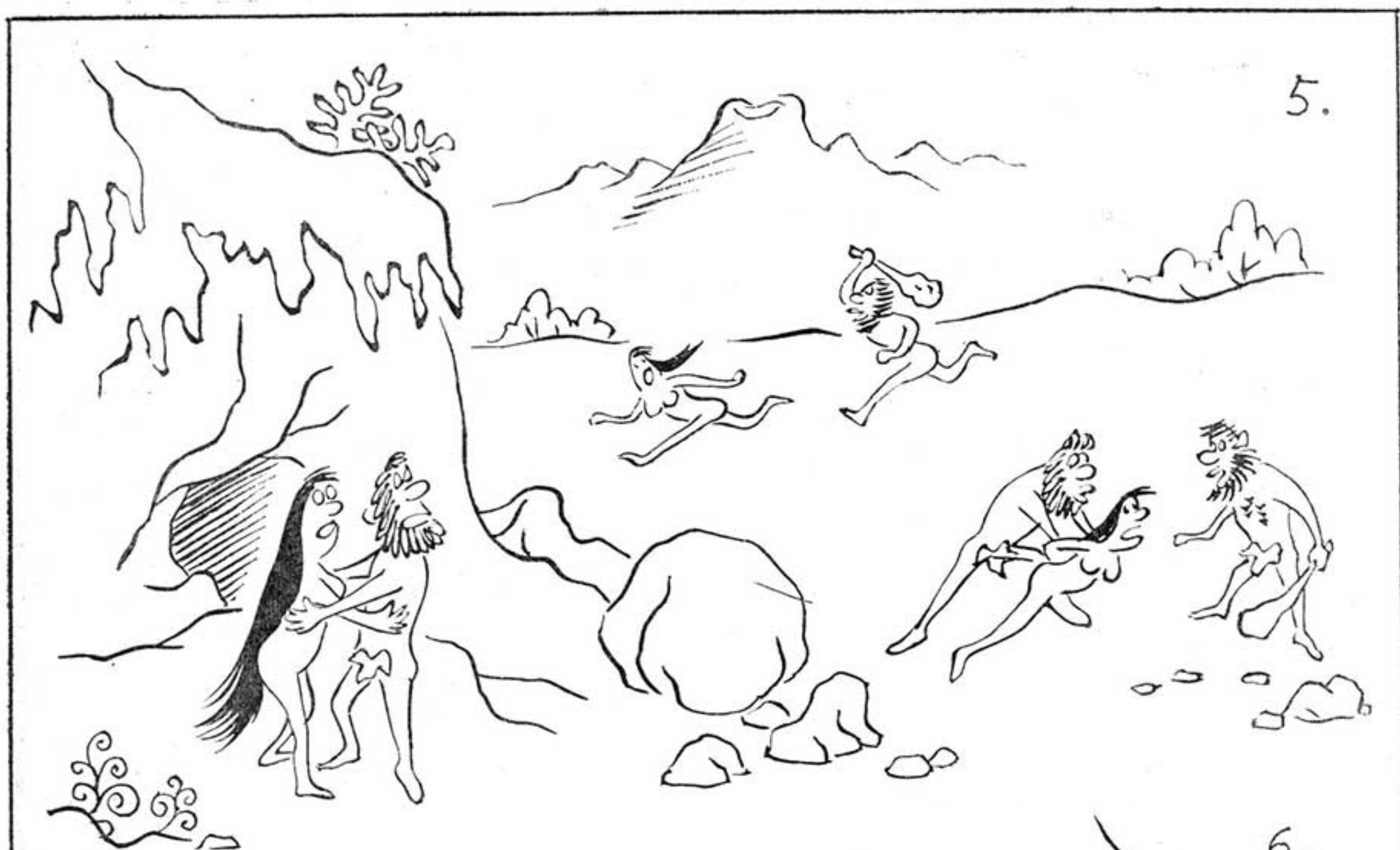
1.



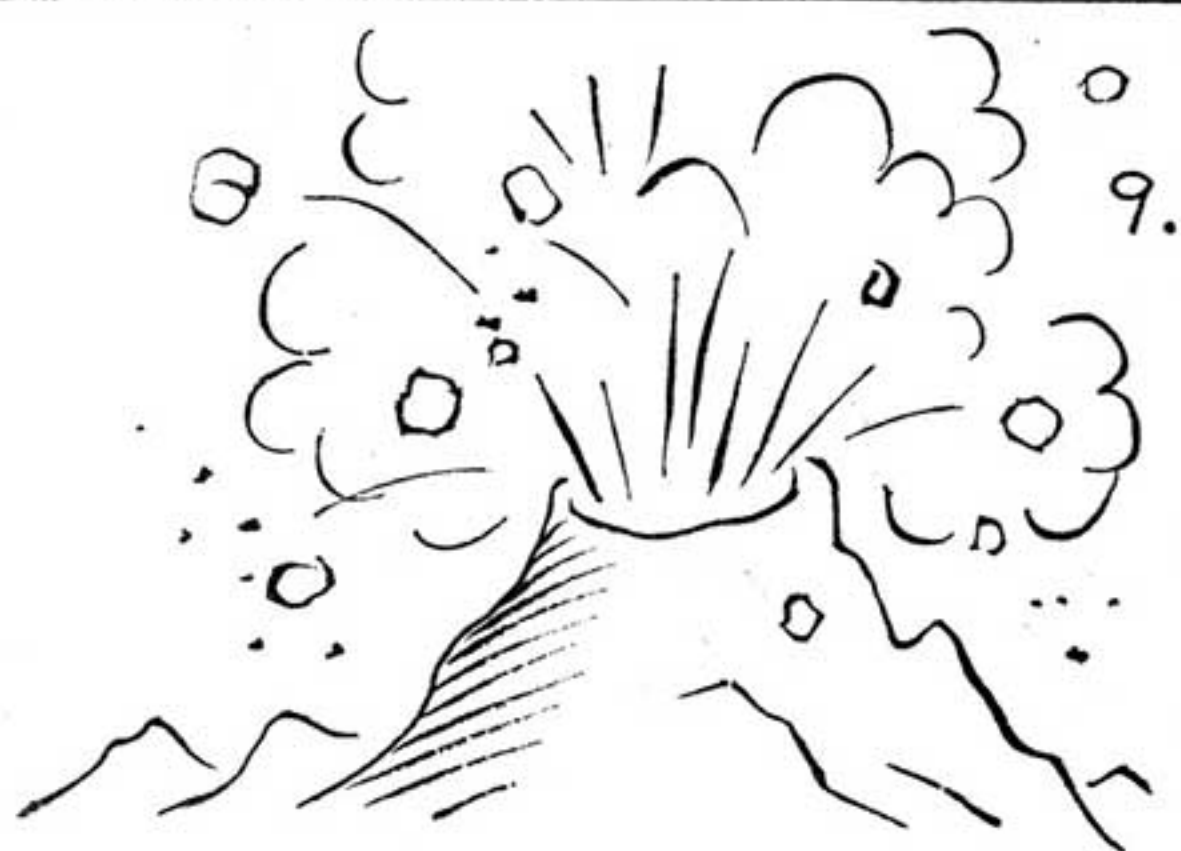
2.



怪獣の出現に
おどろいた男
たちは相談の
結果毎日女を
一人づつ怪獣
に供えること
にした

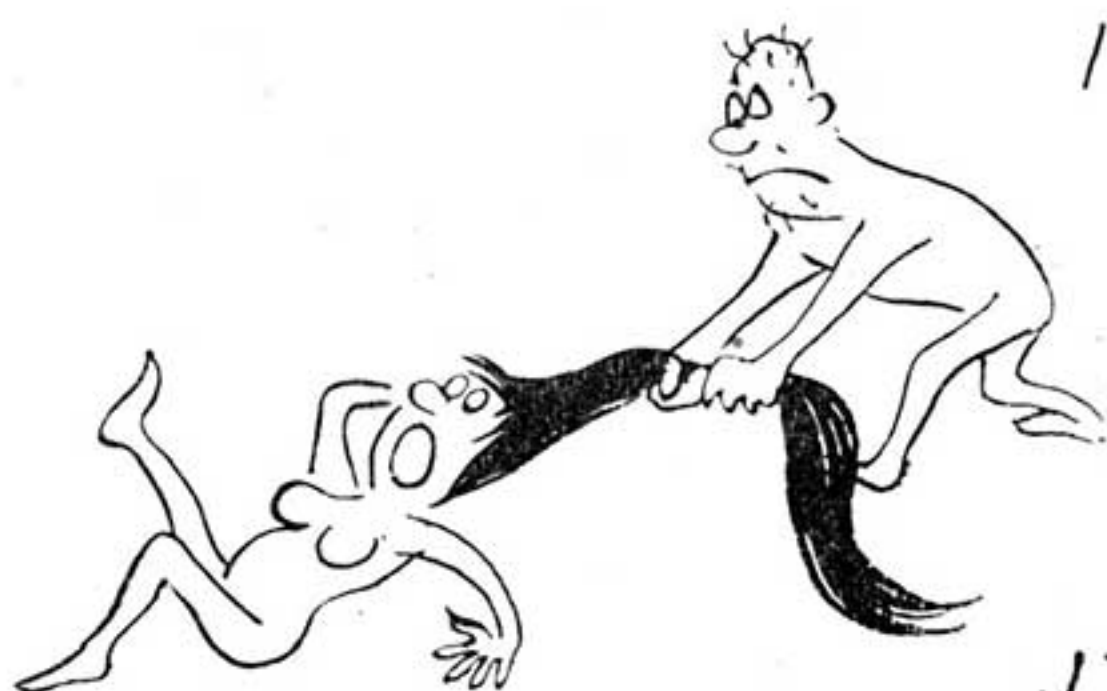


毎日女狩りがつづいた
ネブリはなやんだ
恋人のフササが狩られ
るのも時間の問題
なやみを解決するため
ネブリは怪獣退治を決
意する



突然トンガリ山が爆発
 さすがの怪獣も倒れた
 よろこんだネブリがフササ
 を抱こうとすると
 火山灰に焼けた顔
 をきらって逃げだ
 した
 後世の千姫と同じ
 女とはひどいもの

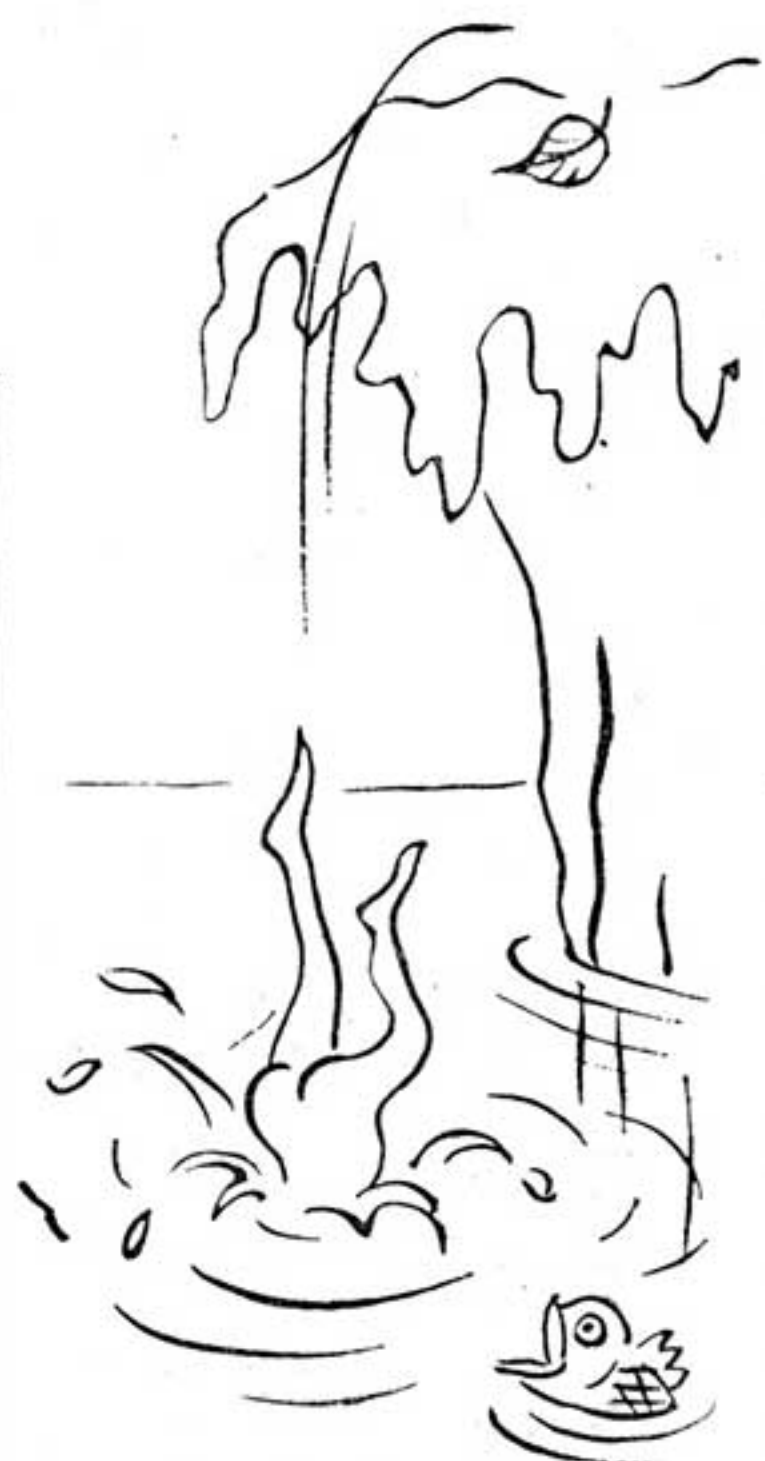
16.



17.



18.



19.



20.



怒ったネブリは
フササの髪を
切ってしまう
自慢の髪をなく
したフササは
沼へドンブリ
自殺史上第一号!!
その後フササの髪
を愛撫するネブリ
の姿が見られるよ
うになった

そして現代!!

髪を愛するものの
出現と
なるのである



寄稿作品

ご紹介と

短評の欄



「羞恥の花」……………三田 進

▼あらかじめカツアイ部分を心得て青い
ている。そうなるまでの話をも少し書か
ないと……………(B)

「妙順尼のこと」……………(東京) 倉重 芳彦

▼題名から妖美な内容を期待したが、S
Mムードのまったくないきわもの。妙順
尼も尼さんらしいところがない。(C)

「刺青無情」……………(京都) 宗林 誠樹

▼短篇ながら、女ごころの変転がよくわ
かる。脂こい描きかたが肌を感じさせて
いる。品のないのが難。(A)

「サールン捕虜収容所」(東京) 庭野 房雄

▼Mもの全般にいえることだが、話が殆
んど戦後—現代に固着してしまったよう

だ。ストーリーもまたしかり、女士官も
のではまたかという感じ。(B)

「ホシ(犯人)」……………(大阪) 馬淵 三郎

▼着想はおもしろいのだが、筆がすすむ
につれて中だるみ、尻きれトンボになっ
ている、ガツカリする。(C)

「田舎の宿」……………(徳島) 中川 達

▼いい意味でなく、題名がびったりした
作品。全体にうすよごれた感じ。セクス
の場面はちよつとひどすぎる。(C)

「映画の責め場に関する一考察」谷 俊六

▼この場合、次期作品に取り組む作家か
監督のつもりで書いてほしい。スーチル
なしで旧作映画を紹介するには相当の筆
力が要求される。(C)

「煮殺しの刑」……………(京都) 中塚 誠一

▼古い文体、ありきたりのストーリーだ
が、そこによさもある。文字があまりに
も読みづらい。(B)

「敗戦に散った満洲のやまとなでしこ」
……………(北九州) 富蘭 桃夢

▼実話らしい。それだけに新聞記事のよ
うな文ではどうも……………裏窓的味つけで
読ませるのが作家の腕。文のたつ人だけ
に惜しい。(C)

「沈黙の人」……………(愛知) 永松三喜久

▼もりあがりの足りないきらいはあるが
作者の性格かも知れない。構成はいい。
このままで使えそう。(A)

「佐土博士の虜囚」……………(横浜) 中田 良

▼題名から危険を感じたが、うまいとこ
ろで逃がっている。あり得ないストーリー
ながら、身近かに感じさせる。(A)

「FとMの行き戻りII忘れ得ぬ人」
……………(京都) 光谷 東穂

▼バイ・プレーヤーの一人ひとりがよく
生きていて、主人公の容貌までほうふつ
させる。フィクションならたいした腕、
多彩な人だ。(A)

「ニセ刑事物語」……………(奈良) 梶間 治郎

▼つばを心得た作者のようだが、なにぶ
んにも長編の一部だけでは評価できな
い。龍頭蛇尾ということもあるので……………

「開かぬ扉」……………(東京) 森 洋三

▼単調なストーリーには独自の筆性が必
要。使いふるされた表現では興味もうす
い。全体にセクスの匂いが強い。(B)

「労働下宿を覗いてみると」
……………(北九州) 富蘭 桃夢

▼あっさり読ませるわりに、作者の生活
がにじんでいて印象深い。文句をいうな
らSM的なところが少しほしい。(A)

「鮮紅色のスーツの女」(横浜) 中田 良

▼S場面を主に置く場合、思いきり現実から飛躍したい。スーツの女のイメージもうすい。さわりのところは、なかなか堂に入ったもの。(A)

「王女」……………(東京) 福岡 五郎

▼Sの本質は実話、フィクションにかかわらず、生きた女を描くことだから、こういう話もおもしろい。第一話だけだからまだなんともいえないが……………(A)

「性倒錯者の論理」――

サドを中心として」(東京) 田代 利夫

▼むやみにこじついたり、深追いせず、誰にもわかりやすいのはいい。それだけに、深い読後感のないのも止むを得ないところか。(B)

「月の夜の浜辺で」……………(横浜) 中田 良

▼被縛者が少女の場合は、時代、アクションものか、現実から遊離しないと掲載はむづかしい。頽廢的な内容のものならなおさらのこと。(B)

「永井ゆうこ始末記」……………(東京) 香川 雪夫

▼「切腹」をあつかったものは、どうしてもストーリーを極端に省略したものが多い。この作もご多聞にもれず。描写よりも構成に重点をおけば……………(B)

「SM心中」……………(東京) 鳴門 波子

▼心中現場はもっとほかに表現のしかたがあったはず。現場写真を見るようなのは掲載不可能。(B)

「ある妄想」……………(東京) 足立 和雄

▼Sの基本ともいえるべき読みもの。それだけにもっと構成に苦労したい。スタンダードすぎても困りもの。(B)

「私は違う」……………(東京) 沖田 白詩

▼これも同様、ちがうところは被虐者の立ち場から描いている。心理描写に重点をおいた方がいい。(B)

「伝奇笹黄金秘聞」……………(東京) 玉木 重信

▼一おう出来上がっているストーリーも大時代な文章でぶちこわし。ざっと読んで長編のあらすじを読む感じ。(C)

「地獄へおちた女たち」(東京) 鬼島 三平

▼乳房責めあり、木馬責めあり、股間縛りあり、まことに痛快なサド小説だが、公刊誌としてはとてもものせられない。残念ながら、没である。

「お紋お美津逆吊り峠」(横浜) 勝本三之助

▼時代サド小説。ストーリーというものはなく、二人の美女が徹底的に責められる小説。かなり強烈で、これも店頭にだす公刊誌としては掲載無理。(C)

「冬、忍ぶ亜矢子」……………(東京) 鳴尾 新吉

▼文章は非常にうまい。しかし、乳房責めの描写があまりに露骨すぎるようだ。全裸シーンも多い。惜しい作品。(B)

「中近東向け貨物第一―第四便」……………(神奈川) 若杉 卓男

▼S小説としては水準作。が、妙にリアルなのは危険。舞台を次元世界に移すとか、コミック調にするとか、なんとか術がなかっただろうか。惜しい。(B)

「園は汚された」……………(神戸) 石島 雅彦

▼カマトトモデルと偽クリスチャンである洋裁学園講師のたましあい。あまり露悪趣味なのは考えもの。それと、本誌に向かないというのが致命的。(C)

「悲しい美保子」……………(京都) 光谷 東穂

▼ストーリーと、責め場を巧みに配していうまい。書きたいところ、読ませたいところの程度を心得ているので編集者にはありがたい。(A)

「エム・プラス・エス」(東京) 池田 和夫

▼Mの作者ながら、S派のものにもおもしろく読ませる。熱っぽい寄稿の多いなかに、デザートのような味がある。(A)
「裏窓からのぞいた俚言と金言」佐々木 力
▼Sの描写ではありきたりの、しかし、

けっこう興味ぶかく読ませる。このひとの独得のM感覚はすてがたい。

「妊婦おさだの実記」……(東京)津山 定

▼非常に変わったS小説。実記とはあるが小説にちがいない。腹をムチ打つシーンがすさまじい。残念ながら、公刊誌では発表不可能。

「ぼくは犬のポチ」……(神戸)坂田 八郎

▼冒頭シーンは巧妙な筆でおもしろい。若い美しい人妻とポチとの出会いなど、リアルな情感があり、変身の場面など、なるほどと思わせるのに、Mに入ると俄然、力みすぎて、主題から飛躍してしまう。こういうものは、もっと枯れたところがある。

「バスガールの怒り」……(東京)三月 水恋

▼おかす部分だけが印象に残る。それだけに危険。単調なストーリーなので、文章の古さが目立つ。

「マゾヒスト殺人事件」……恒川 文彦

▼書きたりない。よいテーマも上すべりにしている。登場人物が、なにかご都合主義な感じ。

「暗夜」……(横浜)藤山 昭

▼文章がきれい、少年と、少年を愛する女もよく書けている。ほのかな、甘い味

わいがある。

「奇談・かみそり屋敷」(東京)連珠連三郎

▼サスペンスものとしても、S小説としても中途半端におわっている。どちらかに主眼をおいたほうがよかった。

「白鳥汚れる日」……(京都)京山 三男

▼欲ばって、書ききれなかったきらいはあるが、意欲は買いたい。話もおもしろい。おかされる場面は露骨。

「淫獣の家」……(長崎)須藤 完

▼秘密映画を刻明に記録したような書きかた。女を責める場所も、一点に集中しすぎる。フロに入りたい。

「変態雌」……(東京)京極 美岐

▼書きなれた文章で、着想が変わっている。氏の作品は他にも多くいただいているが、本誌に適した作品といえば、これが抜きんでている。

「狂視時代」……(東京)栗林 誠

▼読むほどに興味湧く、原稿の書きかたを知らない人にしては達者なものである。トイレをのぞき歩く男の話のわりに、たんたんとして清潔。

「黒い吹雪」……(大阪)森田 信

▼こんなのは一番困る。SMとはほどと

きれいなだけに気の毒である。

「トモ子とタバコ」……(東京)西本 誠

▼ありそうな話から、中ほどで急に飛躍している。それがネライでないなら、一貫したほうがいい、コミカルな文章が好調である。

「流転の女」……(名古屋)風巻 裕

▼文字どおり被虐旅行というところだが巻頭からサドシーンの連続では「流転」の意味がない。描写が汚ない。

「学園のバカンス」……(札幌)龍 弦一郎

▼流行語をフンダンに用い、徹底的にドライなタッチで書いているのがいい。そのかわり、盛り上りのなくなっているのがこの作品の弱点。

「白磁の肌」……(京都)光谷 東穂

▼Mものだが作者の本質はSとみえて、ちよっぴりSシーンを入れることも忘れていない。SMどちらの読者にもおもしろく読ませる。

「マゾに憑かれて」……(東京)会川トシオ

▼露骨な個所は削除して下さい、とことわってあるが、この作品の場合、とり除けば文にならない。ネクターがでていかに表現するか、ということ。

「ご主人はお尻で殺せ」(新潟)佐々木 力

▼散文的な序文がうまい。が本題に入ってから散文ではいけない。ネライであるM描写も足りなかった。(B)

「奴隷への道」……(京都) 南郷 京助

▼文章がふるい。三七年三月号「黒い鉄の扉」の筆者だけに不勉強と思う。よくあるストーリーにはもつと構成や表現に新しいものがほしい。(B)

「裏窓ダイジェスト①②」

……(大阪) 弓削 左門

▼筆者の試た改革の意図は壮としよう。

ただ、読者がサルトルやリラダンから何を感じとるか、というのが第一の問題。

鋭くときすまされた感覚も、SMの主幹から遊離した枝葉であってはならぬということ。(B)

「黒い夏休み」……(姫路) 万里 史朗

▼現代ものに講談調の文章は絶体禁物。

少女の腕をむんずと掴み、などはいただけない。女の年令にも難がある。(C)

「飼育される」……(東京) 阿武 美須

▼マゾ小説でも、よい作品は必ずS趣味の読者にも読ませるものです。もう少し気のきいた題名がいい。(A)

「三津子の脚」……(京都) 西村 将

▼達者な文章だが脱線しているところも

ある。ストーリーの構成も、しっかりと地についている。(A)

「金色のお下げ髪」……(佐賀) 横地 信夫

▼混血の少女を愛する少年の心理を主に描こうとしたためか、文章がたどたどしくなりすぎた。ストーリーはよい。(B)

「裏説・荒神山」……(東京) 児島 隆

▼たった一つのSシーンに、講談を一席語ったような感じ。それも、ただお菊を後ろ手に縛って、かごに乗せるだけではちよつと芸がなさすぎる。(C)

「王妃サルビア」……(大阪) 辰野 昇

▼乾いた筆性が、どうも内容とびつたりしない。作者は現代ものを書いた方がいいのではないか。(B)

「女を縛れ」……(仙台) 高田 重雄

▼的がはずれている。SM的なところもまったくない。といってミステリーものとしても、初めから犯人が割れている。内容がなさすぎる。(C)

「雌獣の園」「不可解なエピソード」「悪女の奸計」「都会の淫獣」(東京) 京極 美岐

▼「雌獣の園」がやや裏窓的ムードをたたえている。他の三篇はSM外の読みものとしても興味不足。思いつきで書いた感がつよい。力作だけに残念。(BC)

「佐度屋旅館の女主人」(山口) 二階堂英彦

▼本誌の海外SM画から、ヒントを得たのだろうか、いろんな責め道具が出てくるが描写力不足、たどたどしい。変なところだけ匂いまで書く必要もない。(C)

「帝都秘密クラブ」……(青森) 柘植 一造

▼文章も描写も実にうまい。そのくせ、かんじんな個所をあつさり片づけて、ものの足りない。削除を意識しすぎたせいかもしれない。書いてほしかった。(A)

「冷たく愛して」……(東京) 椿 梨花子

▼単調なストーリーの告白記は出つくした憾があるので、いちばんむづかしい。ほかに欠点のない人だから、思い切った改革を望みたい。(B)

■AII水準作。または書き直せば掲載可能なもの、出来るかぎり掲載したい。

■BII掲載には思い切った書き直しが必要。惜しいとは思いますが……。

■CII本誌に不向きなもの。直しようのない作品。まず、没と思って下さい。



か……」

「われわれのような男が社会と調和するために、いかに自分を欺瞞してることでしょうか。たとえば腹のなかではいやでいやでならな

いの、同僚の前では、女の話をさもおもしろそうな顔をつくって、しなければならぬのです。

そんな些細なことまで、世間体をつくらなければなりません。

こうしたことから、しぜんに孤独になっていくのではないでしょう

本篇の主人公 S・G は、私を招

いた新宿の料理屋の一室で、女中を遠ざけたのち、こんなふうな話

しだした。

五年ほど前の十二月初旬のある

日の晴れた午後のこと、座敷の窓さきにつるされた鳥かごに、な

んという名の鳥が、美しい翅の小

鳥が、うつくしい音色でしきりに鳴きつづけていた。

S・G は当時五十三歳、ある知名な会社に三十年近くも勤め、資

ほも紳士録⑨

失われたものをとめる

老いの旅路

かびや・かずひこ

秋吉 巒・絵



材課長の位置にしているというのは、四十四歳の春であった。ことだった。

おのが同性愛の性向は、十代のおわりころに自覚していたという。ペデ傾向であった。

が、少青年期のことについては

S・G はあまり多くを語らなかつ

たし、語ったことにもとりたてて特筆するようなこともないので、

ここにはかれの四十代のころからの告白について、記したい。

S・G が、勤めさきの大阪の支

社から東京の本社へ転勤してきた

三鷹に家を借りた。家庭には妻

と大学生の長男があった。この妻については、

「もう十五年余も、夫婦としての交渉がありません。これには女性

に性的な関心がないというほかにいろいろ事情もあるのですが、と

にかく、それでいて世間ていのために、いっしょに生活してるので

すから、われながらあきらめるほか

ありません」

うんぬんとかれは自嘲してい

る。

上京してまもなくの夏の初め、こんなことがあった。

そのころ、都内のそこここに小芝居がかかっていたが、芝居のすきなGは、ある夜、そのひとつを覗いた。

歌舞伎ばりの芝居であった。

見ているうちに、Gは、その一幕の狂言で二枚目を勤めている十八、九歳の役者に、心をひかれるものを覚えた。

かれは二、三日つづけて、その芝居に通った。そして三日目の夜劇場が閉館って、役者たちが帰るのを待ちうけ、目当てのRという若い役者に、なにがしかの金をあたえた。

「毎度ごひいきいただきました、ありがとうございます」

Rはかたわらにいた座長ともども、ていねいに礼をいった。チラリとRがGに流し目を送った。

これはモノになりそうだな、とGは感じた。

あくる夜、そのコヤに行つたと

き、Gは、下足番に金をつかませて、楽屋裏へ案内してもらった。

Rが化粧前から立ってきて、Gにあいさつをした。そのようすにこの社会の者らしかぬウブなところがみえた。

「今夜、はねてから、いっしょに

ごはんでもたべませんか」

心中踊るものをおさえながら、Gはいった。

「はい……」

とRは頭をさげた。

その夜、Gは、近くの小料理屋へRを伴い、三、四本の銚子をあけ飯をたべたのち、自分の家へRを誘った。

二階がGの部屋で、妻と長男は階下に寝ていた。その二階で、Gはついに本望をとげることができた。

Rはこの社会にはめずらしく、男色の遊びをはじめたのだといい、また童貞でもあるようだった。フイモーゼで、さいしよは、エジャクレートもしなかった。

が、そうしたことは、Gにはむ

しろ、この上ないよろこびであった。Gのようを、根からのベデラスト（少年を好愛する男）にとつては、ふつうの成年の男性が、処女の破瓜を随喜するごとく童貞のわかものを意のままにすること

に、征服感の最上のまんぞくを覚えるのである。あくる年の真夏の土曜日の午後

この夜を機として、Rのこうしたデイトが、月二、三回程度で、半年ほどつづいた。が、そのうちに、金銭上のことで、Rにお

へ目をやったとき、二メートルほども先きのところに、人待ち顔に立っている学生服のわかものと、視線が合った。

もしろくないことがあったため、GはRの「出入りをさしとめ」——Gのことばを借りれば——てしまった。

十九か二十、眉毛のこい、りりしい顔立ち、小柄だが、肉付きのよさそうな体軀。

Rとの交渉を経てから、Gは、

Gはバツがわるくなって、目をそらし、しばらくしてまたそつちをみると、また学生と眼があつた。

相手のない寂寥をまぎらわすために、ホモの男の集まる場所として、その道の者のあいだに知られている公園をぶらついてみたり、公衆便所のらくがきを、たんねんによんでまわったりなどした。

くつみがきがおわると、Gはなにげないふうで学生の前を通り、精養軒の食堂の前を通りぬけて、ふたたび元の場所にきてみた。学生の姿は、そこにはなかった。Gはちよつとがっかりして、再度精養軒のほうへ行きかけると

先刻の学生が、そこにたたずんてしまつた。

Gはてれかくしに、料理のサンブル・ケースのほうにちかずき、

いかにも物色しているふうをよそおつた。すると、学生もかれのそばちかくにきて、おなじようにケースをのぞきこんでいる。

Gはおもいきつて、

「お茶でものみませんか」

と声をかけた。

学生は無言でうなずくと、もうすっかりGのつれのような態度になつて、かれのあとについて店内にはいった。

コーヒーとサンドウィッチを注文して、Gはそれとなく、二、三

学生に話しかけてみた。その返辞によると、その青年は大学の夜間部の学生で、先刻は友達を待っていたのだが、その友達は来なかつたということだつた。

見ず知らずの学生を、こんなふうに誘つたことなどはじめてなので、すっかり固くなつてしまつたGは、もう訊ねることがなくなつ

なにかさぐりをいれてみたいと思ふのだが、それもできなかった。

ものたりないままに、Gは学生といつしよに精養軒を出た。

心残りながら、Gが「では……」と改札口のほうへ行きかけようとする、

「おじさん、すこし散歩をしませんか」

と学生がいった。

Gにとつて、まさに「待つてました」である。二つ返事で承諾して、学生といつしよに京橋に出ると、銀座のほうへ歩いた。

学生の態度はなかなかわりきつていて、この道のヴェテランのようにも思えるが、そうでないのかもしれない——相手の正体が不明なので、Gもうっかりしたことはいいだせない。

あたりさわりのない世間ばなしなどしているうちに、ふたりの足は、いつのまにか四丁目へ来てしまつた。

あきらめようとGは思った。

「じゃあここでぼくは帰るから……」

と、いった。と、学生が「おじさん……」と呼んだ。

「おじさんは男同士で遊んだことがありませんか」

Gの顔をじつとみつめながら、そういつた。

「男同士で遊ぶつて、どんな……？」

いよいよ来たナと思ひながら、しらばくれた顔できいた。

「知つてるんでしよう、おじさんは」

「いや……」

「では、もうすこし歩きながら、おはなししましょう」

学生はすっかりGをリードした顔になつて、有楽町のほうへ曲つた。

そして数寄屋橋を通り、日比谷

から濠端を歩いて、また東京駅まで一巡するあいだに、学生はいろいろな知名の芸能人などの名を挙げて、だれとはこうして遊んだと

か、だれとは箱根まで遠出したとか。いった話を縷々としてつきるところないふうで、Gに語つてきかせた。

この若い身空で、よくもこれほどに……とGはつくづくと相手の顔をながめた。

私の察するところ、この学生の話は、おそらく大半がつくりばなしだろう。この種のゲイ・ボーイ(?)には、知名人と遊んだという虚構をつくりあげて、そのことをさも事実のように、得々としてひとにいいふらすものが、すくないのだ。

が、このときのGは学生の語るところをすっかり真にうけて、煙にまかれてしまつたらしい。

その夜、Gは、学生から誘われるままに、かれの行きつけらしい新宿の旅館に行き、遊んだのである。

Gが若年の同性からうける魅力のポイントは、真黒な、つやのある、ふさふさとした頭髮・引き緊まつた顔の膚・おなじくしわひと

つない、はりのある皮膚の手などである。

すなわち、老いのちかずいてい
る自分から、全く失われたものに
あこがれ、魅せられるのだ。

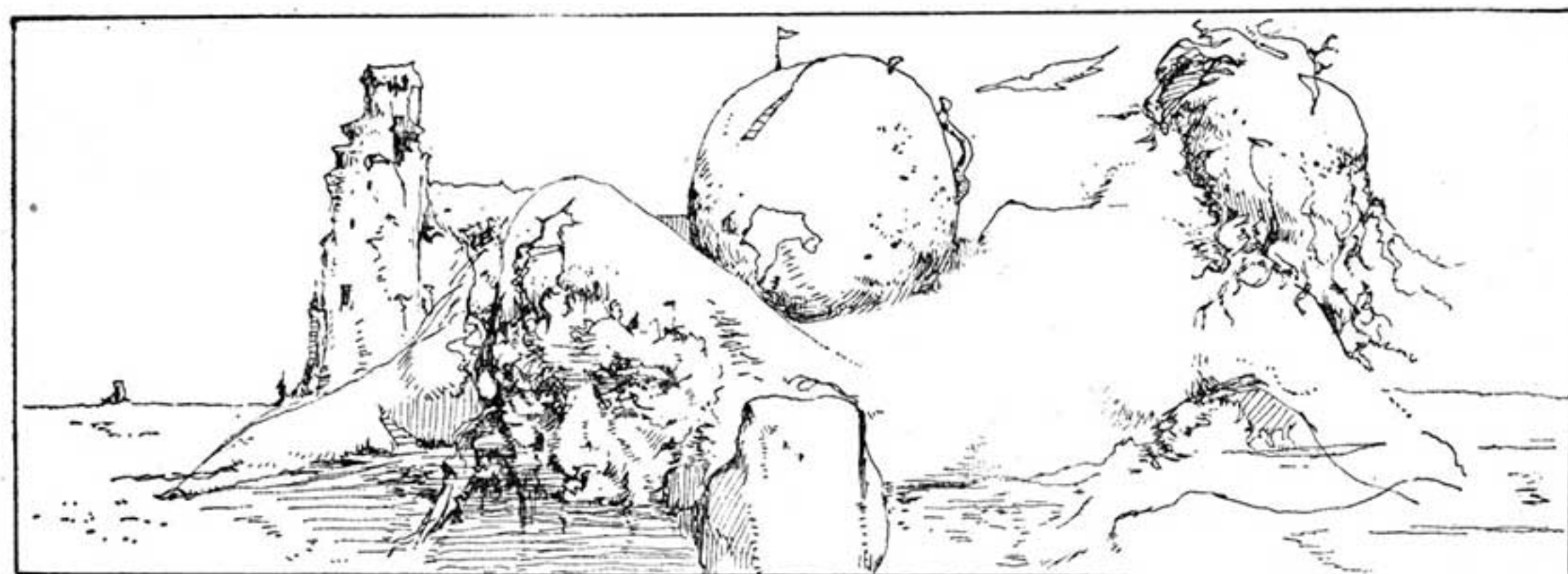
それはまた、相手のわかもの
なかに、青春時代のおのれのすが
たをみいだし、それを恋慕するナ
ルシスでもある。

その学生Kに、Gのそうしたも
とめるものを、十二分に具えてい
た。とくに長い光った髪が、魅力
だった。小柄だから、長身のGが
だきしめると、Kの美しい頭髪
が、ちようどの鼻のあたりをここ
ろよくくすぐった。

しかもかれの肉体的な技巧は、
Gのいままで交渉のあったいかな
る同性よりも、すぐれているよう
にGは感じた。

Gは充分にまんぞくした。
それ以来、GはたびたびKとデ
イトした。

Kはときどき、三鷹のGの家へ
も遊びにきたが、ある夜たずねて
きたときに、酒をちそうしたとこ



ろ、Kはすこぶる酒ぐせがわるく
飲むほどに酔うほどに、Gにから
んできた。

最初はいいかげんにあしらって
いたが、Kの態度はだんだんにひ
どくなつて、Gにケンカを挑んで
くる。Gもついにしまつに困つ
て、酔ったKをその場にねじふ
せ、むりにふとんのなかにねかせ
た。

このことで、Gは、いままで自
分の心身を取りこにしていたKに
たいして、一時に厭気がさしてし
まった。起こして追いかえそうか
とも思ったが、夜も更けているこ
となので、しかたなくそのままに
して、自分もKのわきに床につい
た。

が、わかものの寝顔をながめて
いるうちに、急にかれのからだ
がほしくなつて、そのそばにすりよ
り、だきしめた。Kは目を覚まさ
なかった。

Gは眠ったままのKを存分に自
由にした。

睡眠中の相手と情交することは

ふつうの夫婦間などでもよくある
らしいが、男色行為においてもす
くなくないことを、多くの男色者
からきいている。

これは屍姦と通ずる心理状況な
のではあるまいか。

その後まもなく、GはKと別
れた。Gのほうから交際を断つた
のである。

5

Gはまた場末の芝居小屋を覗い
てまわるようになった。

そうしたある夜、荻窪の小さな
こやで打ちつづけている旅廻りの
芝居をみたときその一座の化粧顔
のじつにきれいな若い役者に、心
を奪われてしまった。

Gは例によって、いろいろのて
だてを弄して、その役者にちかづ
いた。

相手は座長のむすこで、十七歳
の少年だった。

父親に金をつかい、当人に金を
あたえなどしてようやくGは、目
ざす相手と情を交わすことにこぎ

つけた。

その後も二回三回とその少年役

者と遊んだが、ただ金のためだけで自分とつきあっている相手に、

Gはそろそろ飽いてきた。

そんなおり、この一座に新たにはいってきた女形があった。二十歳というが、化粧顔ははたちぐらいにしかみえない、美貌の若者だった。

Gはその女形Cに目をつけた。

さっそく誘いかけたところ、案外容易に諸の返事を得た。

Cを近くの旅館に誘って、目的を達した。

完全なウールニングでCはあった。ことば、動作はもちろん、性格や心理まで、女性化しているのだ。

交情のさいも、すべてパッシブで、「女のようにあつかってほしい」とかれは要求した。

かれは十五歳のときに、旅廻りの劇団に女形としてはいつたが、十七歳のおり、一座の年長者にペラステイーされ、それ以来、い

っそう女性化したということだった。

Gは、このような完全に女性化したウールニングの男と知ったのは、はじめてなので、好奇心半分で三・四カ月ほどつきあっていたが、だんだんとCに厭気がさしてきた。

というのは、Gがもとめているものは、女性の代償ではないからだ。弓矢の道のわかものを欲しているのである。

が、Cのほうは、あくまでGにまといいついてくる。Gとても、他に相手がないので慕われてくれるわいるいきもちではない。そんなこんなで、その後も一年ばかり、ずるずるとCとの情をかさねていたが、ついに思いきってきれいに話をつけて、別れた。

そのころ、Gは、ある歌舞伎雑誌の会員となっていたので、ときおり歌舞伎座その他の劇場の楽屋に出入りしては、知名の俳優のサインなどをあつめて、楽しんで

あるとき、歌舞伎座のWの楽屋を訪ねたとき、かれの弟子のHが、座に居合わせていた。Hはそのころ十八歳、いかにもういういしい感じだった。

「いらっしやいまし」
ハキハキした口調で、HはGにあいさつをした。

Gはわれにもあらず、ドキマギとしながら、あいさつをかえした、ひとめでHに魂を奪われたのだ。

これがきっかけとなって、それ以来、Gは、歌舞伎座でHと顔を合わすごとに、親しく口をききあうようになった。

前のCとは違い、Hはいかにも男の子らしいさっぱりした気性とはつきりした言動の少年だった。

Gはかれと交渉をもちたいと思った。

金がものをいう楽屋裏のこと
で、Gはいろいろに気をつかい、金をつかって、ようやくその目的を遂げることができた。

Hは父親と早くから死別したた

めか、初老のGに父性をもとめるように、慕ってくる。Gは生まれてはじめて、ほんとうに愛慕されている自分を感じた。金は遣いしたものの、それは別箇として、真の愛情をしみじみと感じたのである。

Hはその後三年ほどして、映画界から時代劇の花形として、売りました。が、その寿命は数年ほどで、まもなく忽然として、映画界から消えてしまった。

GとHの間は、歌舞伎という大床の関係から、不即不離のかたちで、その後もしばらく続いたということである。

4

Gははじめて私を訪ねてきたのは、そのころである。

あごの張った、蒼白いかれの顔には、長年月にわたる宮仕えの苦労——それも男色者という秘密を周囲にかくしながらの勤めの気苦のしわが、きざまれていて、年令よりは三つ四つふけてみえた。



「そのことはいずれ、後日を約して……」

しどろもどろに電話を切った。そのまま、仕事にもどったが、いま聞いたばかりの若々しい声が耳の底にこびりついてはなれない。なんとも心残りでならなかった。

と、午後になって、またFから電話がかかった。

「これから会社のほうへ伺いますが、おさしつかえありませんか」というのである。

Gは大きなよろこびとともに、諾の返事をした。

三十分ほどすぎたとき、受け付けの少女が、きりっとした和服姿の青年を案内してきた。

Fであった。中肉中脊、童顔がやや羞恥をふくんで、微笑していた。

一目で、大床のHよりも品位があると、Gは思った。

Gが歌舞伎ずきなことは、社内ではだれも知っている。渋い和服姿のわかものが、かれを訪ねてき

男色者は多情といわれるが、Gの場合もご多分にもれず、上記したごとく、数年ほどのあいだに、男色の相手を五名と転々としていた。一年一人の平均だから、これはむしろながつづきしたほうかもしれない。

さて、Gは私のところへ訪ねてくるようになってまもなく、ある雑誌の読者交友欄で、一人の青年と交通するようになった。

その名をFといい二十歳、ある

知名の長唄の師匠の弟子だった。

二、三回ほどの文通ののち、ある朝、Gが会社に勤務中、Fから電話があった。

受話器を手にすると、若々しい澄んだ声音が、耳にはいつてき

た。

「もしおさしつかえがなければ、いますぐ有楽町駅でお会い申したいのですが……」

いかにも芸事を修業している者らしい、丁重な調子だった。

Gはちょっと困った。たがいに一面識もないのに、あのひとこみの駅でどうすればよいか。そのことを社の電話でこまごまとうちあわせるのも、秘密をもつかれに、うしろめたいきもちなのである。

たことは、格別に周囲の目をそばだてなかった。Gはすぐ、応接室へFを伴った。

ふたりは十五分ほど話しあつた。なにを話したか、Gはおぼえていない。それほどかれは夢中だった。

なか一日おいた次ぎの日の正午またFから電話があり、会社の近くの、客のすくない茶房で、Fと会った。

Fもまた、Hのように、父性をもとめる同性愛者だった。

乳児のころに、父親に生別して、母親の手ひとつで育てられたため、四十―五十歳年配の男性をみると、父親のように慕わしくてならぬというのである。

ファザー・コンプレックスからきたジェロントフリーなのだ。

ふたりは、その夜新宿駅前で逢う約束をした。

会社に戻ったが、Gは退勤時刻が待ち遠しく、仕事が手につかなかった。

会社をひけると、かねて約して

ある知人とともに、歌舞伎座へ楽屋のれんの写真を撮りに行き、用をすまして知人と別れたのち、小雨のなかを新宿へ車をとばした。

約束の場所で、数分ほど待ったとき、レンコート姿のFが、あいかわらず子どもっぽい笑顔で、Gにちかずいてきた。

Gは知りあいの旅館へFを伴った。

はなれ風の一室で、ふたりはさしむかいになり、しばらく話しをしていたが、そのうち、時間のたつのがいらだたしくなったGは、いきなり電灯を消してしまった。

ふたりは全裸となって、歓を交わした。

GはあいてのPにたいして、このみの型がある。Fのそれは、このみのものであった。

Fに完全にうつつをぬかしたGは、その後、ひまあることにFに連絡して、逢瀬をかさねた。Fもまた、「おじさん——」といってGを慕った。

歌舞伎のHとの場合を除いて

は、あいてからこんなに慕われたことはない。いやH以上であった。

GはさかんにFにいれあげた。逢うたびごとに、小遣い金をあたえるのはいうまでもなく、服やきものを作ってやり、こまかい持ち物を買つてあたえた。

Fの出演する長唄の研修会のことには、かれのかかりの費用いっさいをもった。

会社の休暇で、Gが大阪に帰郷したさいには、Fを同道して、京都奈良と遊びまわった。

これらの費用のため、預金帳の額が減るのを、Gはすこしも厭わなかった。

が、これほどに夢中になつていたFとも、一年半余の後、ついに別れたときいている。どんな事情のためか、私はすこしも知らないが、ほぼ察しはつくような気はする。

Fと別れると程なく、Gは会社を停年退職した。

するとGは、前々からの懸案だ

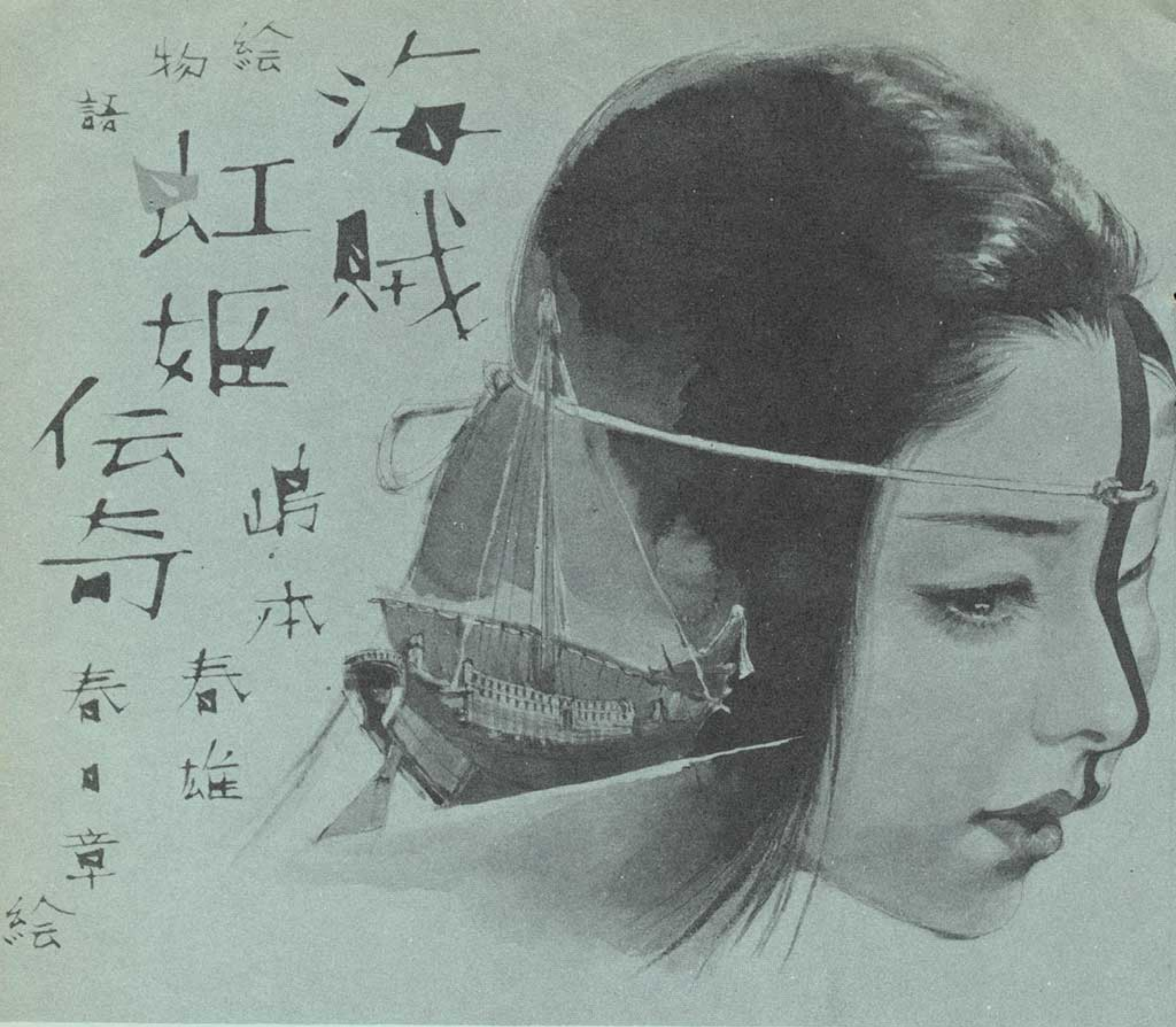
ったのかどうか知らぬ、退職金を基にして、都内の山の手で、ゲイ・バーを開店した。

そしてそれを機に、多年犬猿の仲となつていた妻とは別居し、自分分は店ちかくのアパートに独り住みした。

独り住みといつても、それは最初のわずかのあいだのことで、まもなくかれは、おのが店に雇われたボーイの一人で十九歳の少年と関係を結び、そのボーイと同棲することになった。

同棲は半年ほどつづいたが、その間、Gは、このボーイから、かなり金をしぼりとられたらしい。店の経営も、思ったようにはかばかしくなく、一年有余であつてなく閉店してしまった。

その後のGの消息については、全く知らないが、おそらく三鷹の家に戻って、あいかわらずホモの相手あさりに余念がないのではなからうか——。



① 虹姫呪文

紀州田辺の浜に、なんとなく暗い、陰湿な執念を思わせる、あの異形な漂着物があつたのは、嵐の前触れのようにつづつ苦しく曇りはじめた夜空で、続けさまに星が流れた直後のことであつた。

「なんだ、これは!？」

舟方見廻役の高須作之進は、供に連れていた舟大工の勘造を振りかへつた。

「——こ、これは……」

かがみ込んで、その漂着物を見つめていた勘造のひたいに、この一瞬、黒い稲妻が走つた。——それは恐怖の翳……いや、もっととすさまじい地獄の戦慄……だったといえる。

勘造の右頬は、ひっ吊れたように歪んだままの形になっていた。

「どうした、勘造?」

「これは……これは……虹姫呪文!」

勘造の歪んだ唇から、歪んだ声が出た。

「ううむ、虹姫呪文……これが天慶以来の海賊伝説にある、あの忌むべき舟呪符なのか」

虹姫呪文……舟呪符——その正体は、いま二人の足もとにあつた。一枚の大きな舟板が夜光虫に濡れて不気味に光っている。その上に女人の形をした素朴な人形がおかれ、その胸は釘打ちに、その首は荒縄でギリギリと絞首の状態にされていた。しかも、この人形の顔には眼も鼻も口もなく、そのかわりに、判読しがたいほど歪み、ねじくれた〈姫〉の字が不気味に浮き上っていた。



②十二の首絞人形

——その夜。田辺三万八千石・安藤飛弾守の城下町には、絶えて久しい大兇事が発生した。屋敷町の八方から火の手があがり、続いて町家、海辺の漁村の諸々にも血のような焰が吹き上った。

「虹姫呪文が流れついたぞ」

「首っ吊りの舟呪符だ！」

「女を隠せ！ 娘を……御新造を……美しい女子は山のほうへ……」

火と煙と混乱の中で、わめき散らしているのは舟大工の勘造であった。しかし、闇空と紅蓮の焰の中で、美しい女たちが、一人、二人、三人……と、いとも確実にその姿を消していった。

そのころ……田辺の浜の近くには、いかにも船足のはやそうな一隻の黒い船が、柿色の帆を一杯に張って、まるで幽霊船のように音もなく凝然と浮かんでいた。

小舟が次々と漕ぎ寄せてくる。

その小舟の中には、夜半の異変に叩き起こされて、寝間着一枚だけの肌もあらわな美女たちが、ある者は気を失ない、ある者は後手に縛られ、ある者はぐるぐる巻きにされた屈辱の姿で、まるで積荷のように乗せられていた。

——安藤藩舟方組の侍たちが田辺の浜へ駆けつけたときには、しかし小舟の姿も、幽霊船のような黒い船の姿もすでになく、ただ白砂の浜に、無数の足跡と、虹姫呪文の恐怖をまざまざと見せつける、あのいまわしい首絞め人形が十二体、整然と残されていたのみであった。

③ 虹島伝説

瀬戸内海に端を発した藤原純友の瀬戸海賊以来、連綿として伝わる海賊伝説の一つに、虹姫呪文の物語りがある。

伝説の発端は、平清盛がこの海賊を討伐したとき、根拠地の虹島にいた藤原海賊の棟梁、虹島忠純の十二人の娘を、次々と絞首の刑に処したため、以来、この忠純の血を伝える海賊大将に女子が生れると、祖先の霊をなぐさめるため、虹姫呪文を発して、十二人の美女を地獄へ送るようになった……というのである。

「バカな、それはあくまで平安、南北朝の昔話だ。これは海賊の伝説をかりた悪逆な徒輩の暴挙に相違ない。その証拠には、海賊船の姿を見た者が、この中に一人でもいるのか？」

安藤家舟方奉行の加倉玄左衛門はいきり立っていた。愛娘で城下一の小町娘といわれた於縫を奪い去られているのである。

「いえ、舟大工の勘造めが、しかと異形な船の姿を見届けております」

評定席の片隅から重苦しい声で云ったのは、高須作之進であった。そして、この男は、こう付け加えたのである。「虹島の所在さえわかれば……」——と。

「虹島？ それはあくまで伝説の島じゃ！」

「海虹の消えるところにある島……それは伝説にしろ、必ず、どこかに、別の名で存在するに相違ありません。げんに虹海賊と称する海賊に襲われて、積荷を奪われたあぐく焼打ちにされた廻米船がございます」





④ 帆柱の美女

高須作之進の推定は間違っではないなかった。虹島は存在した。しかし、それは瀬戸内海の島ではなく、稻垣摂津守三万石の鳥羽から遠州灘へ向う、志摩の海の小諸島の中にあつた。

伝説の虹島すなわち虹海賊の根拠地は、天慶以来、転々とその所在を変えたのに違いない。

そしていま海賊船は、波浪を蹴って根拠地への帰途についていた。

柿色の帆が一杯に風をはらんでいる。その下で、おぞましい地獄絵巻がくり広げられようとしていた。

「寄るなノ けがらわしい……たとえ舌を噛んで果てようとも、海賊ずれに肌身を許す女でないノ」

安藤藩の重職加倉玄左衛門の娘於縫は、その美貌もさることながら、側室にと望んだ主君飛弾守の好色の手を厳しく撥ねつけたほどの気丈な女であつた。

突きとばされてよろめいた虹海賊の副将薬王寺源十郎は、ひっ吊れた右頬を更に歪めて毒々しくいった。

「柔弱、腰抜けの揃っている陸侍なら、その一言でひるみもしようが、あいにくと天下に逆らう虹海賊の源十郎だ。その鼻っ柱を粉々に砕いて、そっちらから女房にくれと頼むようにしてみせるぜ」

この男には右耳がない。ザックリと斬り落されて、右半顔が醜くく歪んでいる。

「こうしてくれるノ」

帆柱に縛りつけると、於縫の襟前を、引き裂くようにグイとはだけて、美しい乳肌をむきだしにした。

⑤ 半仮面の女

鉛色の海、沿色の空——夜があけても、視界はどんよりと曇ったままであった。

「ヒイッ」

むきだしの乳肌之源十郎の綱鞭が飛ぶと、いかに気丈でも、しょせんは女……いや、女でなくても、悲鳴をこらえることはできなからう。於縫は両眼を血走らせ、紅い唇を歪めて苦痛の声をあげた。

「女房になるか？」

「外道！ けだもの！」

また、綱鞭が飛び、於縫の悲痛な声……。しかし、この美女は、乳肌の痛みに、その美貌を皺め、絶叫し、身もだえ、うめきつつも、容易に屈服しなかった。

もつとも源十郎の加虐の鞭にも手加減があった。せつかくおのれのものとなった美女を片輪者にしてしまったのでは、元も子もないのだ。

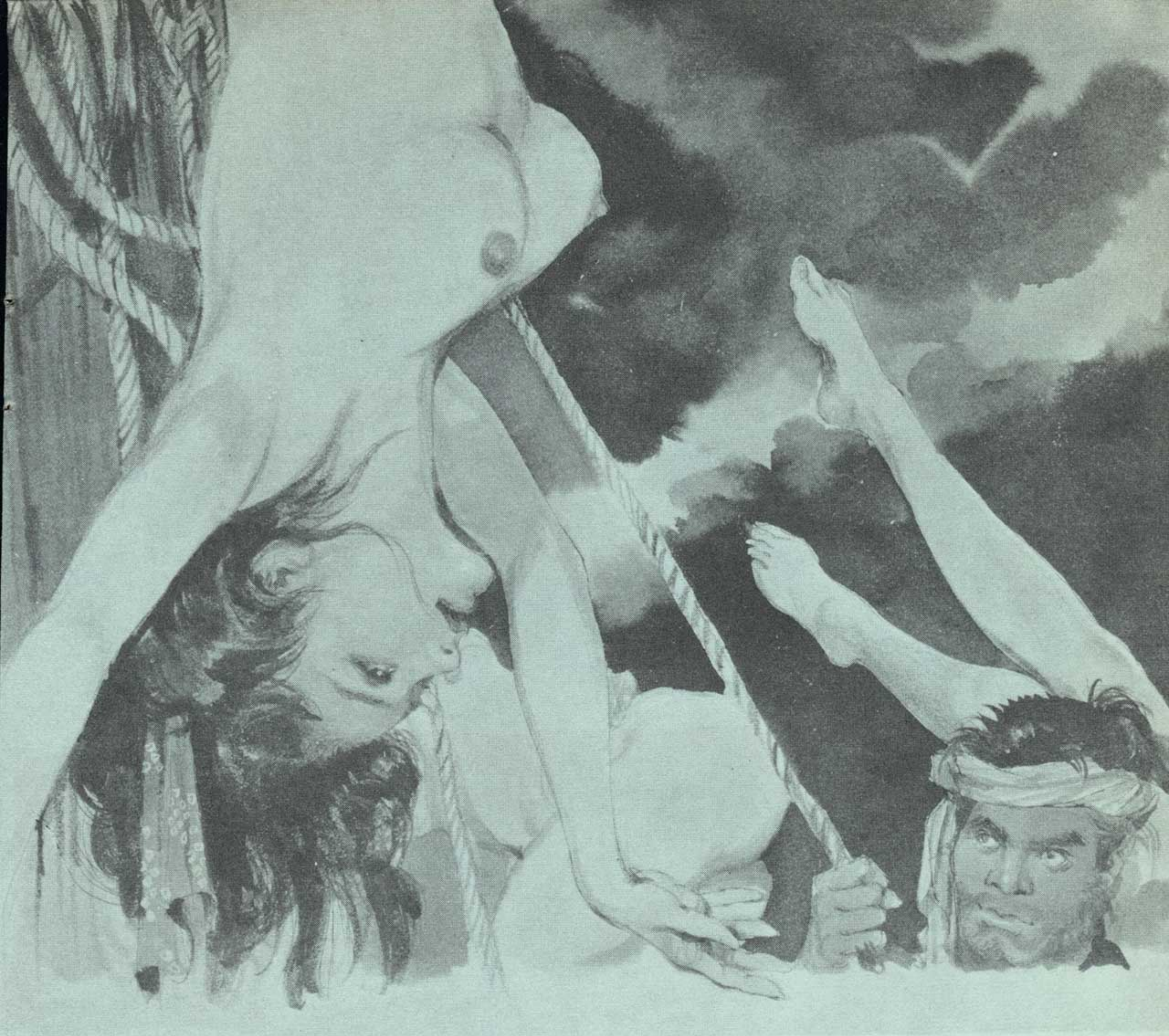
ところが、このとき、冷然とこのなりゆきを見つめていた半仮面の（女）——が、憎悪の響きをはっきりと押し出して、厳然と云ったのである。

「源十郎……手ぬるい」

その女は、まるで象牙細工のような、一点非のうちどころのない整った美貌の持主であった。しかし、異妖なのは、その左半顔に、ちょうど能面をたてに真つ二つに割った、その片側のような半仮面をつけていることだ。

唇が動き、眼が動き、右頬が歪んだりしても、つねに左半顔は微動もしない。その違和感が、なんともいえぬ不気味さを醸成する……。





⑥ 海賊責め

まるで巫女のように緋の袴をはき、その黒髪をおすべらかしにした半仮面の異妖な美女……その美女が、源十郎の加虐の鞭を、手ぬるい、というのだ。

紅蓮と大混乱の町から拉致されて来た他の十一人の女たちは、於縫ほどの気丈さを持たず、いずれも簡単に屈伏していた。

油屋の娘お栄は、銭禿の海賊作次郎に、素っ裸に剝かれたあげく片足縛りにされて船外へ投げられ、ほんのしばらく海中を引きずられただけで、完全に屈服してしまった。そして今はもう、作次郎のかたわらに寄りそって、その愛撫を受けている。

袋物商志摩屋幸吉の新造お常は、跛足の鮫吉に帆桁から逆吊りにされると、たちまち哀願の声を発して、この男に夜伽を誓った。

あとの女たちも似たり寄ったり——中にはもう、はじめから悲運を諦観して海賊の女房たるべく、易々として従った女もいる。

しかし——於縫一人が、この女だけが抵抗をやめなかった。

「源十郎、その女は、お前の手にはおえぬと見える」

半仮面の女にいわれて、片耳の源十郎はニタツと笑った。

「——姫、たとえ耳を削ぎ落しても、ウンといわせて見せましよう」

「そうなれば似合いの夫婦ができような」

姫——と呼ばれた半仮面の美女は片頬だけで笑った。



⑦ 海賊合戦

このとき見張りの男が、進路の右前方に唐様船の出現を報じた。

船内がこの一瞬、ピーンと緊張したかに見えたのは何故だろうか。

「源十郎、あれをなんと見やる」

姫海賊の声にも殺気が含まれた。源十郎も、この女も帆柱に縛りつけた於縫の存在を忘れたように、前方の船に瞳を吸われてしまっている。

「む。——まさしくあれは、鄭陣九郎の福建船……」

鄭陣九郎は、支那海賊鄭一族と倭寇陣馬一族との間に生れた混血の未裔であり、志摩の隠れ島を根拠地とする虹海賊としばしば交戦し、互いに仇敵視している関係にあった。

事実、鄭陣九郎の海賊船は、虹海賊の伝説を信じて、巨宝を秘めると伝えられる虹島を求め、しきりに、この近海に出没していたのだ。海賊船は互いに接近した。

戦いは弓矢の射程距離に入ると、まず弓戦から開始された。剛弓が唸り、潮風を切って矢が飛び交う。虹海賊得意の火箭攻撃がはじまったのは、鄭海賊が斬り込みの体勢に入ったときである。

鉛色の空に火の矢が飛び、やがて黒煙と焔が船上を乱しはじめた。

「斬るなっ！ 捕れっ！ 虹姫は殺すなよっ！」

六尺豊かな偉大夫鄭陣九郎は、帆布も裂けるような大声を発して、血刀をふるい続けた。



⑧ 虹姫の秘密

この戦いは、虹海賊の敗北に終わった。かれらが田辺を襲って女を拐ったのは、根拠地の虹島に女が不足し、成人しても島内で妻をめとることのできなかつた若者たちが、島外に女を求めざるをえなかつたからであり、そのため乗組んでいたのは、海戦の経験に浅い者が多かつたのである。これが敗北の原因であつた。

虹姫の乗っている船は、絶対に敗北しない——すでに信仰となつている虹海賊の伝説は、このときに消滅した。「虹海賊の秘宝の所在を知るものは、虹姫ただ一人と聞いている。そしてその虹姫は、常に異妖な半仮面にて左半顔を隠し、緋の袴をつけているとか。おぬしこそ、その虹姫に相違なし」

鄭陣九郎は、足もとに引きすえた半顔の美女に、刺すような声でいった。

無惨にも帆柱の於縫は、そのままの姿で鄭海賊の矢を乳房に受けて、すでに絶命していたし、片耳の源十郎も銭禿の作次郎も、冷たい屍と化していた。そして田辺の美女たちは、虹姫の背後で珠数撃ぎにされていた。

「さあ、虹島の所在を聞こう。そして虹海賊、天慶以来の巨宝の秘密もまた……」

虹姫は答えない。虹姫呪文——あの舟呪符を放って、女狩りに狂奔し、美女たちの被虐の姿を見てよろこんでいた異常な虹姫は、冷たく片頬で笑つたのみだ。

と——いきなり鄭陣九郎は、虹姫の半仮面を引っぺがした。左顔同様美しかるべき姫の右顔は、まるで青痣のように、べつたりと秘宝の刺青で埋められていた。

洋画のS Mシーン・スチル集



「コマンチ族」のリンダ・クリスタル





未公開作品 題名不詳



「ヘラクレスの逆襲」中央シルバー・コシナ



「大盗賊」左はクラウディア・カルディナーレ



「モホーク討伐隊」のライザ・ゲイ



海 辺 の う た

カメラ・吉 田 久
モデル・エダキリコ





ああ、夏よ、海よ、

無傷なところが どこにある

わたしの手がけた幸福の

ゆくえを だれが追いかけよう

わたしはもう なにこともねがうまい

いのちは快楽をむさほりすぎた

ああ、恋よ、けだるさよ

砂はひえ 太陽はしずむ

この快楽の消えるとき

すべてが おさらばの季節

ああ、夏よ、海よ、





私は茨のトゲを怖れはしない
よしつらいとしても めざめは甘美だ
これら観念の掠奪物は
ひとが安んずるのを望まない
ひとつの世界を奪いとるためには
深い痛手を負わねばならない
この海の砂へ 私は
みずからの血を みずからながすのだ







夜のなげき

夢は

みあきた。

夏の真夜中を抱くと

腐肉のにおいがする。

この乳房の埋葬は

夏の夜あけの倦怠の墓場に。



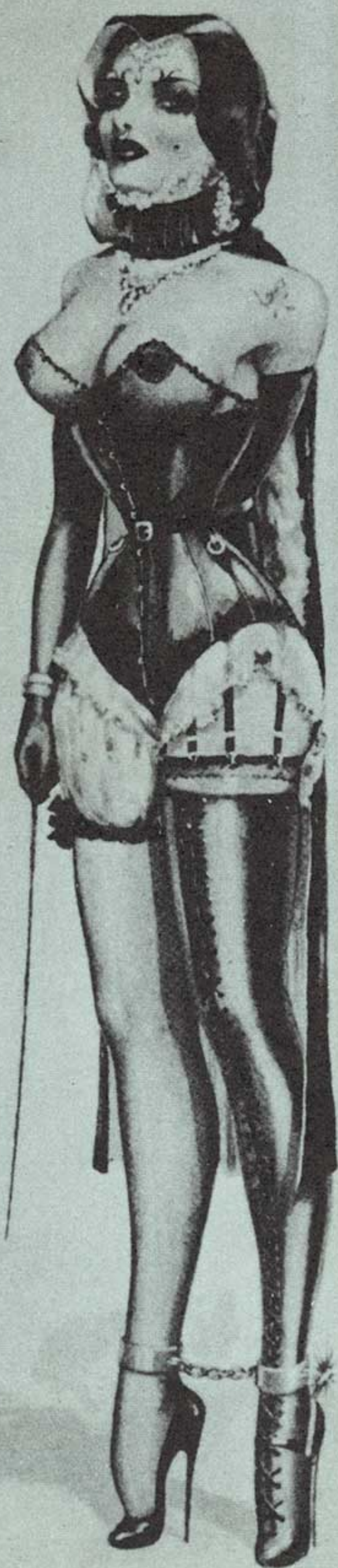


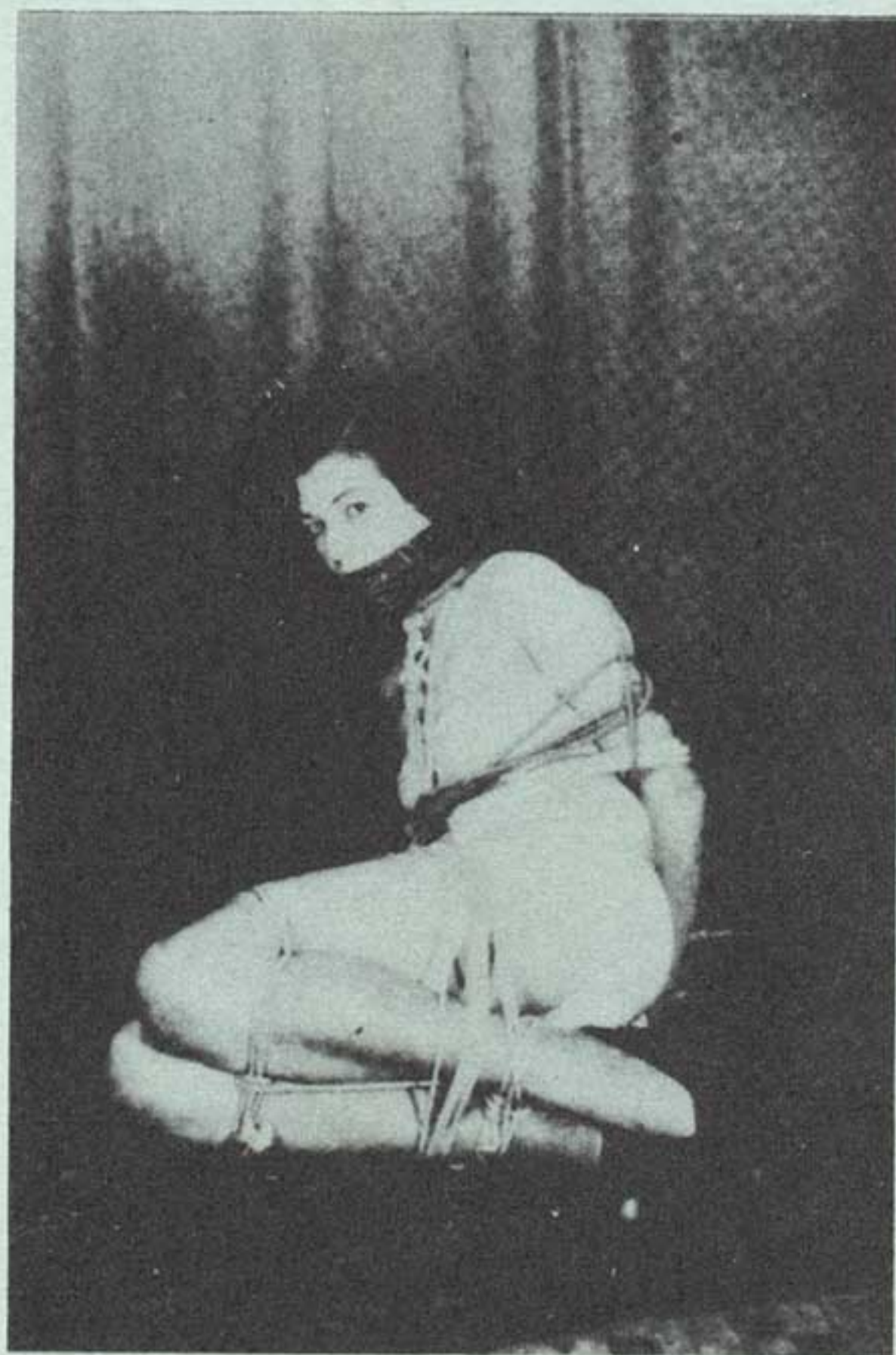


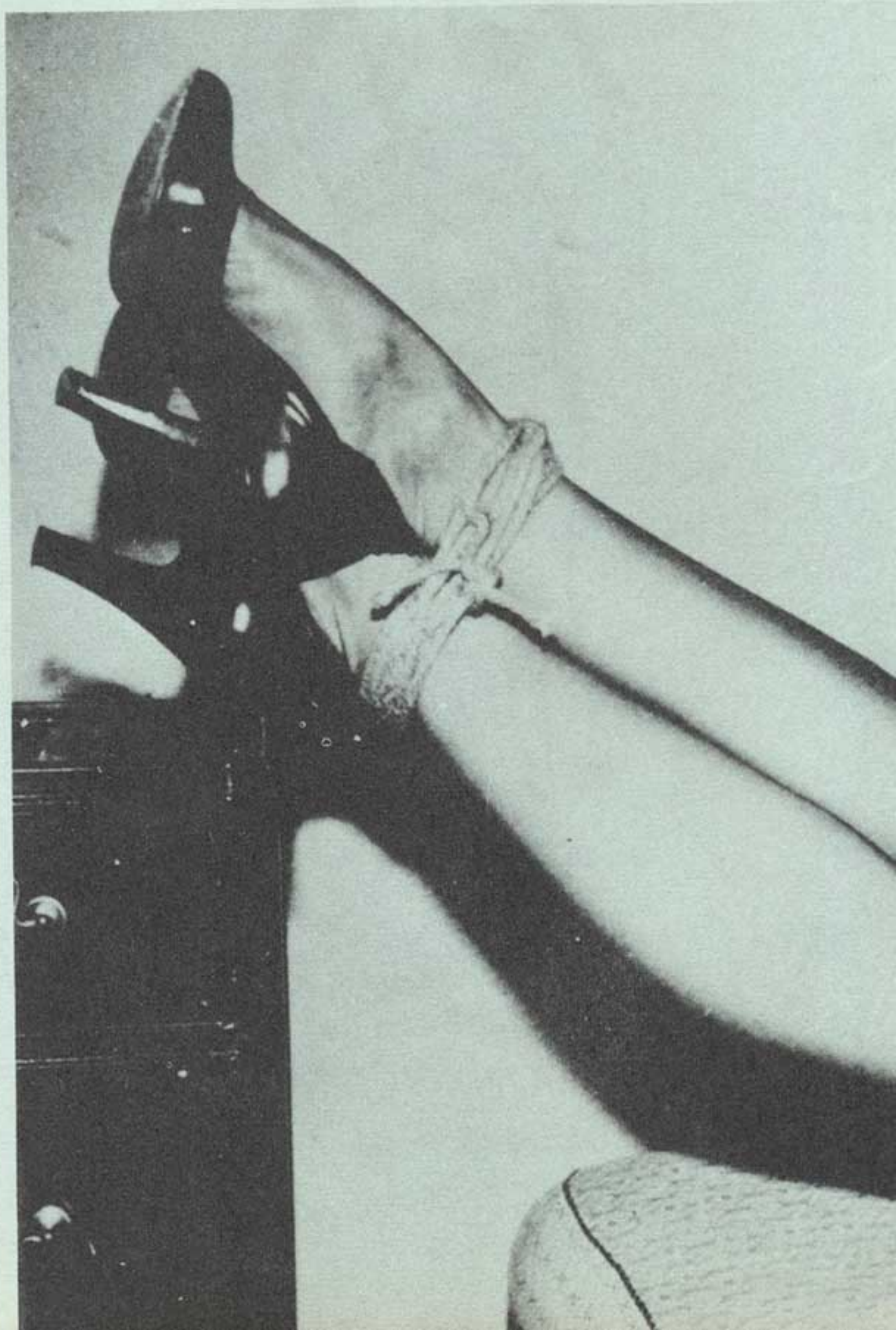
海外 S M 誌ご紹介

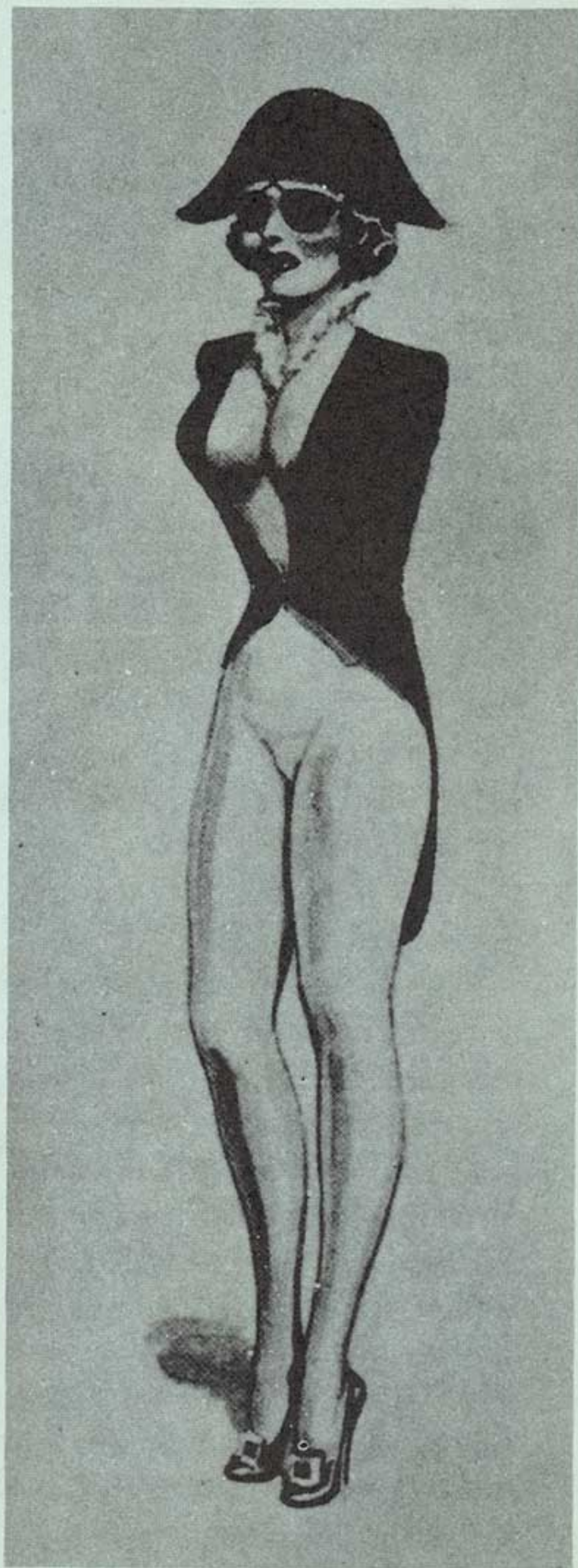
BIZARRE より

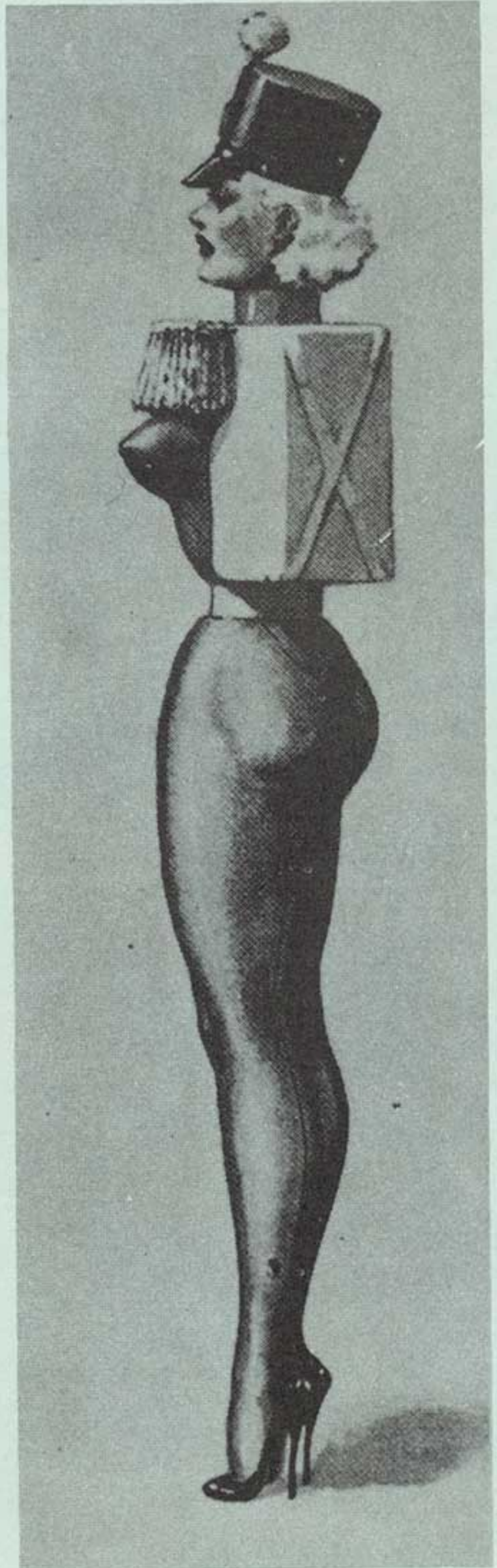
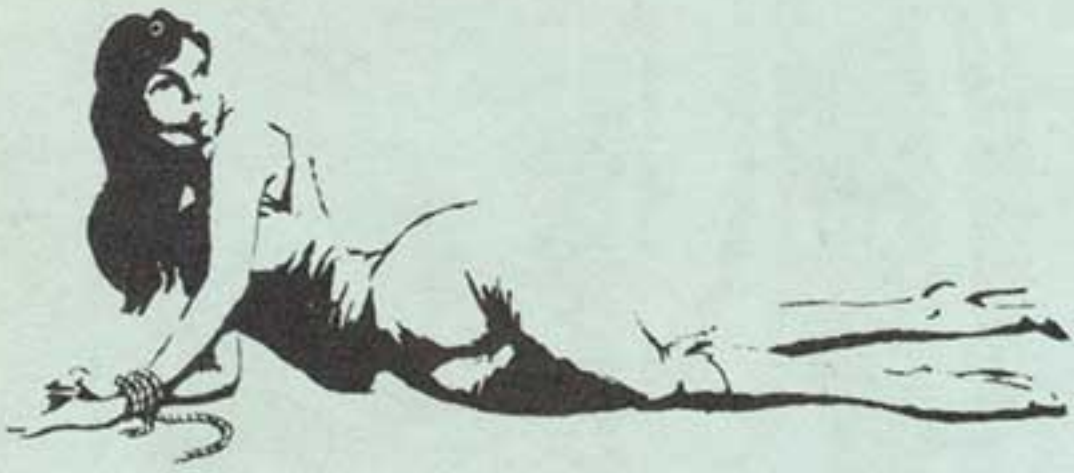
フェニクス商会・特約











AND GWEN IS DRIVEN RELUCTANTLY TO THE CAR.

ON!

But I can't go
like this!
Oh please!



Come on! -
Get in!

Well help me - I can't reach up!

OUCH.



As we aren't walking I don't see why
you should be able to move your feet.

Who cares what they think!

But
what'll
people
think?





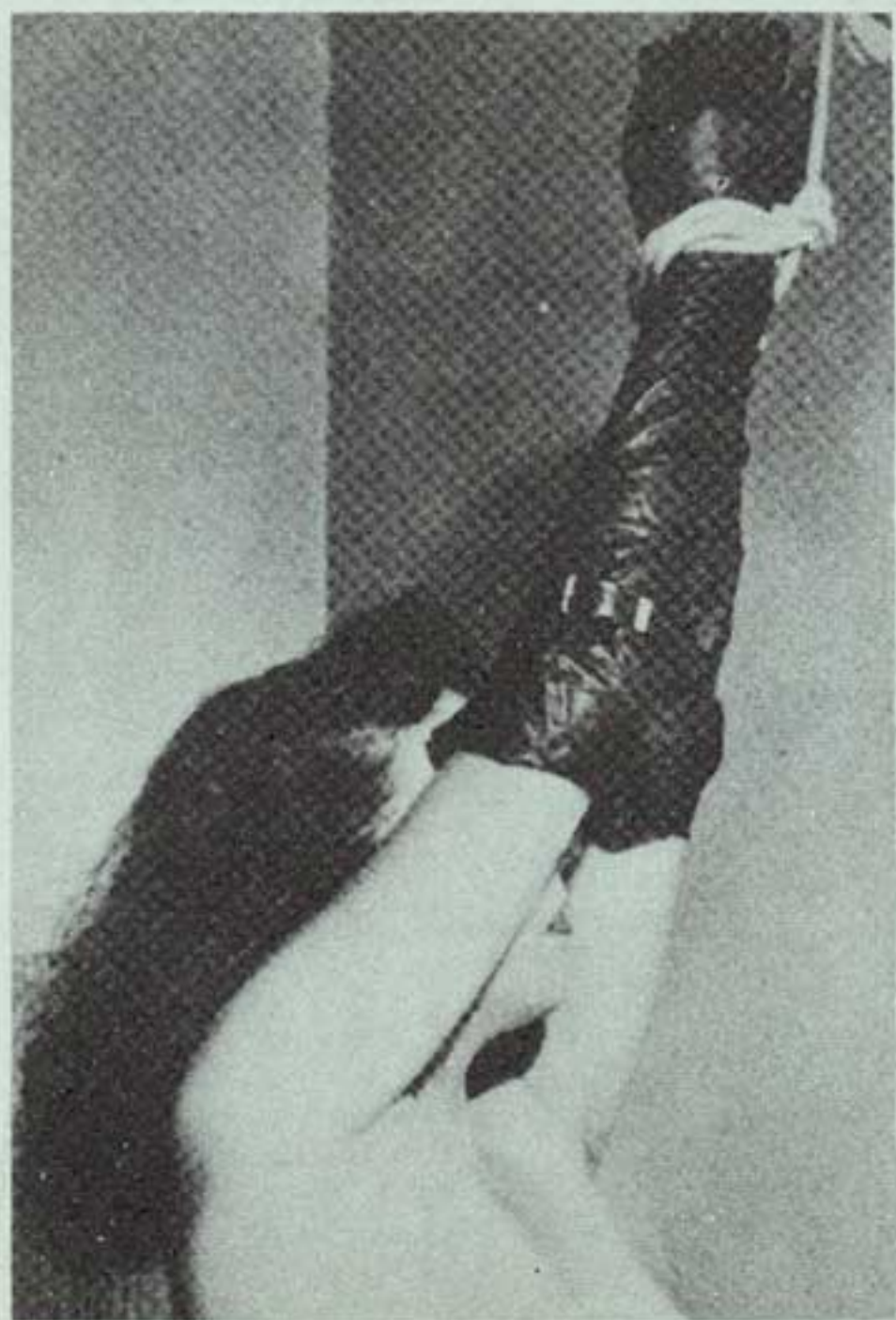
AT LAST THE TRAVELLERS REACH THEIR DESTINATION

Hello Auntie - Gwen didn't like the idea of corsets - so I had to use persuasion -

How very sensible! - How are you my dears?
- Now don't worry about corsets - just
run along and dress for dinner -
cocktails are ready when
you are.

I'm afraid I can't show
hands but you see how
it is.







「赤い氷河」

推理小説本格派の新鋭、とよばれる笹沢左保氏の長編書きおろし「赤い氷河」(ポケット文春・二百二十円・文芸春秋新社発行)は主題そのものが、ずばり「裏窓」的。

ものがたりは、三十をすぎたばかりの美しいヒロイン、瑤子を中心にくりひろげられる。

瑤子は、亡夫とのあいだにできた子の、十六歳になる竜一をつれて、伊集院鉄次の家へ再婚する。

鉄次は五十九歳。金儲けのうまい、富有的な事業家で、しかし、ものすごいケチ。

瑤子と竜一を、ことあるたびにいじめるのである。このいじめ方が、かなり異常。

少々原文を拝借させて頂こう。

——竜一は目を固く閉じて、顔を上げようとはしなかった。目で確かめなくとも、眼前の光景は手にとるように分かっているのである。簡単に言えば、鉄次が両手両

足を使って瑤子を打ちのめしているのだ。この定りきった折檻はもう見飽きていた。鉄次の日課のようなものだった。

鉄次は一日に一度、竜一の気に入らない点を探し出しては、瑤子ともども呼びつける。普通は二時間、長びいた時には三時間もかかって、鉄次は説教と称する罵詈雑言を竜一に浴せかける。それが終ると、鉄次は鉾先を改めて瑤子に向ける。竜一の短所は、総て瑤子の責任にあるというわけである。そして、殴る蹴るの折檻がはじまる。

鉄次は未だかつて、一度も、竜一に手を上げたことはない。

その代りに竜一の見ている前で母親を痛い目にあわせるという一種の拷問を用いるのだ。

瑤子を折檻するのも、鉄次の機嫌がなおるまでの一過程にすぎなかった。母子が解放されるのは、そのあとだった。

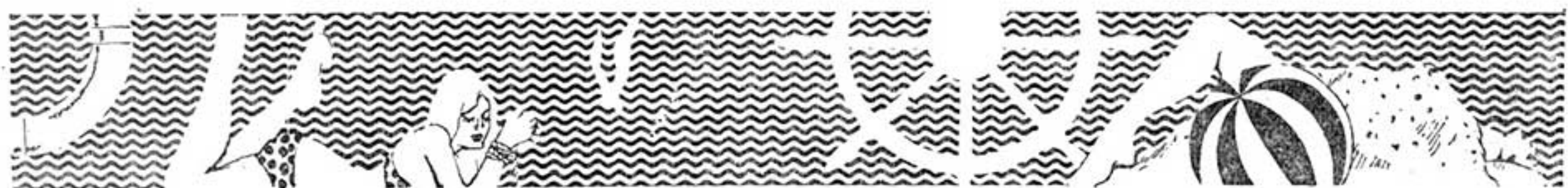
最近の竜一は、瑤子が鉄次の暴力に甘んじている間、目を閉じて

いることにしていた。勿論、母親が着物の衿をはだけ、裾を乱して男の乱暴に耐えている姿を目のあたりに眺めていられるはずはなかった。しかし竜一には、それ以上に見たくない理由があったのだ。

二ヵ月ほど前、竜一は折檻の情景に目を向けたことがある。確かに、暴行を加えている鉄次は興奮に目を充血させていたし、鉄拳を浴びる瑤子の方は苦痛に耐えていた。残虐なまでの、怒りと憎悪の激しいぶつかり合いだった。

だが竜一は、その場面に言いようのない美しさがあると感じ取ったのである。特に、この時のように真に迫った艶麗さに溢れている母親を、竜一は見たことがなかった。

瑤子は短い悲鳴を洩らしながら鉄次の手足を避けて身体をくねらせていた。眉をしかめ目を閉じて肩は荒々しく波打っていた。そんな瑤子の姿態に竜一は、普段の母親にはない甘くて弱々しい崩れを発見したのである。



竜一は虐待されている瑤子に同情する前に、母親が暴力を加えられていることに、自分も真剣になって調和しているのではないかと疑いたくなつたくらいであった。

この時の竜一は、慌てて視線をそらしたものである。母親の剥き出しになった白い胸や脚を、とても直視していられなかったのだ。それ以来、竜一は、この折檻に目を向けられないようになった。例え見ること強要されても、母親の女らしい肢体や、ひたむきな表情が恐しくて、視線を据えられないであらう。

——という描写である。

この数行が、あとになって、重要な意味をふくんで再登場するわけである。

いまここで、こんなことをバラしてしまつては、推理小説である以上、まだお読みになつていない方に対して、どうかと思うが、またすこし引用させて頂こう。——「実は……」

瑤子は、記憶を喪失した病人の

ように、もの静かな口ぶりで、それとも考え考え唇を動かした。

「主人が異常なら、わたくしも異常だったのかも知れません。笑わないで下さい。わたくしどもは、愛を一層甘美なものにするためにそうしたのです」

「それは、どういう意味ですか」

江藤検事には、瑤子の抽象的な表現が咄嗟に呑みこめなかった。

「主人はわたくしを、さんざ蹴つたりぶつたりしたあとで、もう夢中で……わたくしを求めるのです。竜一の目の前で、あらゆる苦痛を強いておきながら、そのあと二階へ連れて行って二人きりになると、狂おしいまでにわたくしを愛撫する主人を、最初わたくしは気違いじゃないかと思いました。ところが、そのうち……わたくしまでが、このあとのことを想像しながら主人の暴力に耐えていますと……ひどく、興奮を覚えるようになってしまいました。ぶたれたり、蹴られたりしているうちに……なんとなく……陶醉したように

夢心地になるのです。わたくしは到頭、主人にひどい目にあわされるのと、そのあとの行為を待ち望むようになりました。わたくしどもは、愛し合うために本気でいじめ、いじめられました。……このことだって、竜一には勿論、夫婦以外の誰にも話しはしません。端で見ていると、狂暴に虐待する主人と、甘んじて虐待されているわたくし……としか思えないでしょうけど、わたくしどもはその時こそ、真剣に愛し合っていたのです。だから……もう分かつて頂けたと思いますけど、主人にひどい扱いを受けていたから、わたくしがこを出て行くなつてことにはなりませんし、むしろそうだったのでわたくしは主人から離れられなかったのかも知れません」

口先で新聞記事でも読むような瑤子の話し方であった。

——ざっと、以上である。

群生した推理作家の新人たちが単なるリョウウ奇的效果をねらつてアブノーマルを餌にするのところが



い、一応、心理が真実性をもって描かれているところに、興味がある。

笹沢左保氏が、本格派として、重厚な人気を上昇させている条件は、こんなところにも、はつきりと現われている。

(夢)

女四人で

強盗退治

六月十六日午後十一時半ごろ、東京江東区南砂町七の三九一、無職、宇田川芳子さん(四七)宅に若い男が忍びこみ、二階へ上がるうとしたところ、同家で飼っているコロ、チロ、チビの三匹の犬がいつせいにほえた。

二女の彰子さん(十九) 11日大薬学科一年11がチロをなだめると首すじがふるえていた。

おかしいと感じた彰子さんは、芳子さんをよび起こした。騒ぎを聞きつけ、長女允子(いつこ)さん(二十三)と家政婦、上岡君子さん(二十一)も目をさまし、小柄な男を玄関まで追いつめ、首を

しめた。

お母さんは、男がひるむすきに電気をつけ、バットを持ち出し、三女、綾子さん(十六) 11日大二高一年11がふるえながら、心ばり棒でおどしているあいだに、前の家の歯科医、市東賢男(たかお)さん(三十五)と会社員、茂木久枝さん(四十一)が「一一〇番」をかけた。

パトカーは、べつの事件で近くにきていたので、まもなくかけつけ、男を住居侵入現行犯でつかまえた。

足立区新田三の二六、東和運輸労務者、庄司武夫(二十五)で、「間違っただけ」と頭をかいていた。

同家は、百年以上も続いている旧家で、部屋数は十一もある、立派な構えの家である。

(毎日新聞・六月十七日夕刊)
これはもちろん、たいへんなM派むきの記事。

百年以上もつづいている旧家で部屋の数が十一もある。お嬢さま

方も、それぞれ立派な学校にかよっている、かなりの上流家庭である。

新聞には、このご一家の顔写真が掲載されているが、みなさん、それぞれ愛らしく、美人ぞろい。この記事をよんで、下男兼、用心棒として、この女性ばかりのお邸にお仕えしたいという希望者はM派以外のところからも、出現しそうです。

(中)

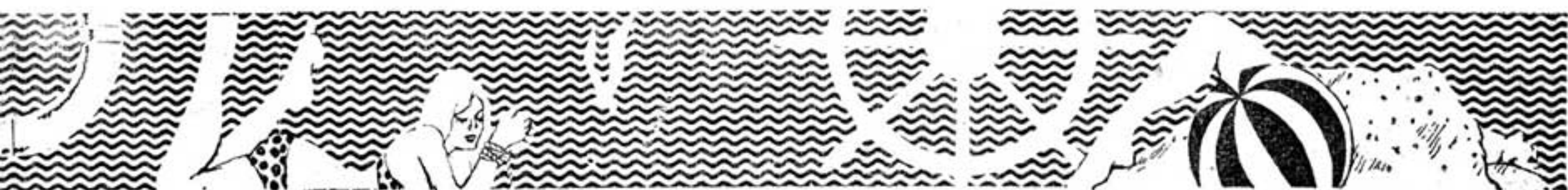
からだを

売ったオトコ

「週刊アサヒ芸能」六月二十三日号の「えんぴつ横丁」という読者欄に、妙におもしろい(といっては不謹慎だが)投稿が掲載されていた。

こんにちの世相の一端が、じつによく表現されていて、興味しんしんである。(といっっては、またまた申しわけないが……ゴメンナサイ)

とにかく、ご紹介してみます。突然、お便りします。僕はこの



恥ずかしい「手記」を通じてゆがんだ社会に対する怒りをぶちまけたいのです。僕は一人の男——この道のベテランのために一生の方向を誤ってしまったのです。

僕は東京・新宿のある大きな映画館で三十二、三の男にまわりつかれました。かれこれ半年前のことです。僕の背中や腰にさわるので、にらみつけ外の廊下へでたところ、その男はズウズウしく、「タバコの火を貸して下さい」と寄ってきて「とても他人とは思えない。ちょっとお茶でもつき合ってくださいませんか」とたたみかけ、席を立とうとすると、背中をひっぱるのです。

いまにしてみると、彼らはまず一段階で「タバコの火をかせ」とか「いま何時ですか」とか誘いかけ、第二段階では「お茶につき合ってください」というのです。

彼は「君はあんがい固い人だね。いまの若い者はもっとフランクでドライでなくちゃあ」といいながら、とあるバーのドアを押し

ました。そこはゲイ・バーでママさん（男）は下へも置かぬモテナシぶりでした。が、その男はママさんからスカウト料をとって僕の体を買ったのです。それから三日たってママさんから手紙がきました。「君は自分の体を資本にして稼ごうとは思わないか。君の若い体を買いたいスポンサーがいるんだ」

とり合わずにいと、翌日になって下宿にママがたずねてきてドライブにゆこうと誘うのです。行き先は湯河原温泉で、そこには重役タイプの女のような男が一人待っていました。

その日を境に僕の生活は豊かなり、かなり高級なアパートへ移りましたが、それは、いわゆる男妾の生活です。

このような例は、僕ばかりでなく、意外にたくさんあるのです。

池袋のあるゲイ・バーのマスターは「学生ぐるい」で有名ですが、体の逞しい運動部の学生は、コシタンタンとねらわれています。と

にかく、この悪の道に染まると夜ふかしはする、アルコールは飲む、たばこは吸う、夜遊びはするで、どんな選手でも、その前途は絶たれてしまいます。

それに気づいた僕は、素早く行方をくらまし、いまはある運送会社のアルバイトに精を出しています。もらうペイは少ないけれど、これは正当な労働の結果です。男としてのプライドを保てる仕事です。

最後に僕は叫びたい。僕たちを買いにきた中には、かなり有名な人がいました。奴らは有名なのでジャーナリズムはそれを知っているが書かない。それで奴らはいい気になって純真な若者たちを毒するので。

——以上である。

“変質者” ばやり

そんなふうな事件が、二、三、つづいて発生したせいで、このところ、マスコミ関係は、なんとかのひとつおぼえみたいにならな



ばやり”である。

とくに、けばけばしい表紙の週刊誌など、このニュースに、待つてましたとばかりに食らいつき、ことさらにセン情的に書きたてている。

「サンデー毎日」までが、そんな特集をやっている。(七月七日号・あなたのまわりにも変質者がいる)八ページにわたったの特集である。

一流誌だけに、さすがに、それほどバカバカしい取り扱いかたはしていない。

「裏窓」の誌面を埋めても惜しくないと思われる記事だけ、抜すいしてみよう。

——前略。

変わった犯罪や、動機がはっきりしない犯罪などがあると、警察では「変質者の犯行とみて」というのが通例だ。そこで、まず警視庁防犯課長、乗本正名氏にきくと「変質者という言葉は俗語で、精神医学上の「精神病質者」がこれに相当する。この精神病質者はい

ろいろあって、必ずしも犯罪には結びつかないものですが、警察では、精神病質者で犯罪傾向をもつものを一応、変質者と呼んでいるわけです」

東京都内にその数は三万三千人、一千万の人口に比べると少ないようだが、これは前に何か罪を犯してマークされているものだけの数である。法務省法務総合研究所発行の『犯罪白書』によると、精神病質者は人口の一〇％と推定されるから、都内で十〇万人の精神病質者がいることになる。あなたや私のまわりにも「変質者”はいるわけだ。もちろん、このなかには犯罪を犯す恐れがないものもある。しかし、まだ犯罪は行なわないが、なんらかの刺激で突然、犯す恐れのあるものもあるのだ。

もっとくわしく調べてみよう。

精神医学では、精神障害を①精神異常②精神薄弱③精神病質の三つに分けている。①は普通、狂人といわれるもの。②は知能指数が

常人より低いもの。③は「性格異常」「病的人格」とよばれるもので、一般に変質者といわれるものに相当する。このなかにはその異常性のため自分で苦しんで自殺を図ったり、逆に犯罪や非行を犯して社会を悩ますものがある。

この精神病質を十の類型に分けたドイツのシュナイダーの説が、日本では広く用いられているのでこれを紹介すると、

▽意思薄弱型 一般犯罪者や非行少年によくみられる型で、再犯率が高い。

▽情性欠如型 良心の苛責が欠如しているので、残酷な犯罪をくり返すことが多い。

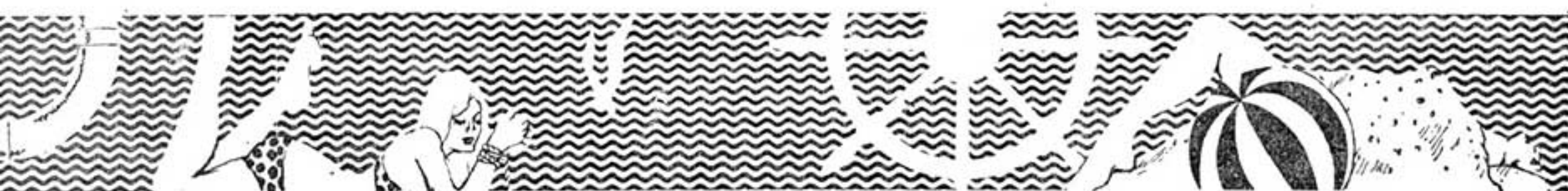
▽発揚情性型 気分がそう快で行動的で多彩な犯罪を行なう。

▽自己顕示型 詐欺犯に多く、施設に収容した場合、ヒステリーをおこして自殺を図ったりする。

▽爆発型 暴行、傷害、放火犯に多い。

▽気分易変型 火犯に多い。

▽狂信型 常習犯にときどきあり、訴えことをよくやるので、裁



判所や刑務所は迷惑する。

▽抑うつ型

▽自己不確実型

▽無力型

犯罪者のなかには割合少ない。自分が苦しみで一家心中したりするものもある。

このほか性犯罪の傾向を持つものをまとめて性的精神病質と名づけている学者もある。

アメリカでは、一九三八年イリノイ州が性的精神病質法ともいうべきものを設け、専門医に変態性欲と認められたものは一定期間、病院か刑務所に入れて治療するようになり、これまでに二十五州が同様の法律を設けている。しかし、最近では世界的に性犯罪をそれほど変質者の行為とみる必要はない、という傾向にある。

——(中略)

東洋大教授、村田宏雄氏(心理学)の変質者論は、「円満に人格が発達している人間は少ないし、多少の変質傾向はだれにもある。現在の『規格品時代』ではむしろ規格品外のものでなければならぬ。岸さんが人気がなく

て、池田さんに人気があるのは、放言などして規格品外の感じがあらためともいえる。

精神病は大別すれば内向性の分裂病と外向性のそううつ病に分けられるが、こういう性格はだれでももっている。そううつ病的性格はジャーナリスト、タレント向き、分裂病的性格は学者、純文学作家向きだ。この性格が極端にかたよったものが変質者ということもできる。この場合、そううつ病的性格は開放的で『あいつならやりそうなことだ』とわかるから始末がよいが、分裂病的性格は心のなかで何を思っているかわからない。むかし流にいえば『大物』の態度だが、犯罪面からは一番危険だ。

性的変質者の場合、どれが正常な性行為かというむずかしい問題もあるが、一応正常な性行為以外の『代償行為』でないと満足できない変態性欲者が一番こわい。変質者は刃物で突く、刺すという行為が多いが、これも『代償行為』

だということができる。性行為は心理的なもので刺激がないと起こらないが、その刺激の受け方が常人と違う点で問題なのです」

東大助教授、樋口幸吉氏(精神医学)も、常人にも精神病質者と似た性格があるという。

「精神病質者にも刑事責任はあるのですが、これは刑罰があれば、おかしいことをしないだろうという常人の『偽善的』な考えがあるかもしれないですね。ただ常人は刺激に対する反応が『普通』のワクを越えないが、精神病質者は軽い刺激で『普通』のワクを越えてしまふ。意思と感情のバランスがとれないのです」

——(中略)

むかしは刑事要視察人制度というものがあって、刑務所を出た人間の動向を見きわめることができたが、戦後、人権尊重の立場でこの制度はなくなった。しかし変質者などは刑期を終えても、性格まで矯正できたわけではないし、再犯の恐れが非常に強いのに、犯罪



予防の任に当たる警察が動向をみてはいけないというのはどうだろう」

これに対し村田教授は、

「ある人を変質者だと簡単に決めつけるのは魔女裁判と同じで、危険なことだ、変質者といわれている人のなかには、経済力があれば解消できる欲求不満なのに、経済力がないため変質的行為で欲求不満を解決しようとするものもある。」

まあ常識的なことが、予防対策としては、変質者の現われやすい場所を避けることでしょう。変質者といっても人通りのある場所やまっ昼間襲うというわけではない。

人にみつからない場所、時間を選び、みつかっても文句をいわれないような状況のある瞬間をねらうのだから、シマリのある美しさを心掛けることです。変なストーリーで欲情しても、バレで欲情する人はいないのですから……」
いまの法律でもフルに活用すれ

ば、何とかなる、というのは樋口助教授だ。

「精神病院に入ったことのあるようなものは、いまでもチェックできるから、結局、ひとり者の変わり者がいちばん問題になる。しかし、何も罪を犯していないのに、国が個人の生活に立ち入るのは人権上おもしろくない。まして医者でもないものが、やたらに変質者だときめつけるのはどうかと思う。」

改正刑法準備草案でも、精神病質者を保安処分にする対策が考えられたが結局、はぶいてしまった。これは治療のあてがなくて予防拘禁することは人権上の問題になるし、かつて治安維持法の「予防拘禁」の苦い経験をもつ日本では議會で通らないだろう、という配慮からのようです。これは治療を前提として、世論が社会防犯のため精神病質者の保安処分を認めるようにならなければできないことです。

しかし、現在の精神衛生法でも、通報義務がある。たとえば二

十四条は警察官、二十五条は検察官が挙動不審の異常者など精神病質者と思われるものを釈放するとき、都道府県知事に通報する義務があるし、一般人がどこかで異常者をみつけたときも、通報できる（二十三条）のです。この場合、知事は専門家に精神鑑定させて精神病質者と認めた場合、精神衛生相談所などに連絡して治療に当たらせなければならぬ。

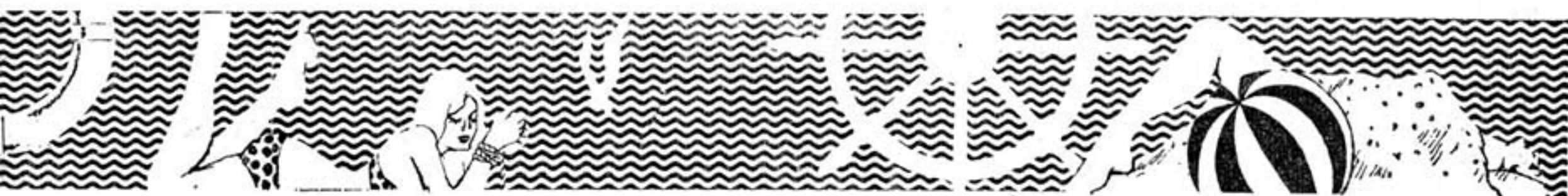
この点をフルに活用すれば、犯罪を犯さないものでも精神病質者かどうかわかるようになり、予防対策が行き届くのではないですか」

——（後略）

という、しだいである。

「最近では世界的に性犯罪をそれほど変質者の行為とみる必要はないという傾向にある」

「変質者という言葉は俗語で、精神医学上の『精神病質者』がこれに相当する。警察では、精神病質者で犯罪傾向をもつものを、一応変質者と呼んでいるわけです」



などということには、感情的ではない、科学的な態度がみられて、心丈夫な気がする。

話はここで飛躍するが「裏窓」という雑誌を、感情的な、戦前の修身の教科書的な、小ジユウト的な、直感的な、卑俗的な目でみられることが、いちばん、めいわくなのである。

これから、いよいよ我田引水になりそうで恐縮なのだが、だいたい、大枚二百五十円なりを支払って、こまかい活字の本を読む、という、かなり高度の知的作業を行する市民層に、精神病質者などいるものか、という気がする。

皆無、ということはいえないにしても「裏窓」の読者層と、それから犯罪的資質をもつ人種たちのあいだには、遠い遠い距離があるように思える。

接近しているような錯覚をあたえやすいが、それら精神病患者群とは、いちばん離れたところにいる存在が「裏窓」の愛読者たちだと思う。

思うだけで、断ずることのできないのが、残念である。

数万の読者の、私的生活を詳細にたしかめることは、やりたいとは思わけれど、難事業である。

ただ、これまで、編集部に素顔をお見せくださった読者のかたがた（お手紙もふくめて）の、千数百人に限っていえば、諸兄弟、きわめて善良にして常識をわきまえそれぞれ、社会的共同生活を踏みはずすことのない人格と、人間的魅力十分のひとびとであり、ご自分の性癖を、趣味として昇華させている方たちばかりであった。

だからこそ、この雑誌をつくり送りだす勇氣と自信をもちつづけることができるのである。

それはさておき、この「サンデー毎日」の特集の最後に、村田宏雄教授つくところの「性的異常度テスト」という、よくある程度のやつが掲載されている。

読者は一読して、このテストの幼稚さ、単純さ、非科学性、無責任性に大笑されることであろう。

せっかく、まじめな意図の特集が、最後になって三流誌趣味に堕したのは残念なことである。

ハイ・ミス登場

婦人公論六月号に女実業家として有名な美しきオバサマ、大山瑛子さんの由々しき一文ありて曰く。

『私には大学時代に同窓の婚約者がありました。クラスメートの中から婚約者を選んだのです。』

——時移り、私は若いながら今をときめく女実業家、彼は一介のサラリーマン。たまたま同じ列車の中で彼とデート。同時に他の私の仲間の婦人実業家のグループ。何をまちがえたのかお友だちのひとり（婦人実業家）が私の彼氏、未来のハズを私の秘書と見誤り、列車から降りる時、気をきかせて私の荷物を取って彼に持たせた上、ついでにこれもお願いね、とチャッカリ自分の荷物も。そして私に耳打ちしてなかなか気のきく、いい秘書じゃない。私は彼が気の毒



だとは思いましたが、あれが私の未来のハズだとは言いきりおぼれてしまいました」と。これにはまだその後がある。続けて曰く。

『或る社長と対談の約束でその会社に出向きました。どこで聞き知ったのか、彼が会社の廊下のあたりで私を待っていました。』

この前の列車事件の言いわけもまだ済んでいなかったし、ちょうどいい機会だと、用が済むまで待つてくれるように言いおいて、社長室へ。さて済んで社長を初めの見送りを受けて出てみると彼がいない。やっと向こうの廊下の隅で彼のしょんぼりした姿を見つける。彼は私を見るとふん然とした面持ち。

つまり、今日は大事なお客様があるから、そんなところに居てもらっちゃ困ると、守衛のおじさんや掃除のおばさんに追っただてられて、あっちにうろうろこっちにうろうろ。ところが大事なお客様だというのは、何と未来の自分の女房。さっきの守衛や掃除婦が、女

房にはまるで手のひら返す最敬礼。これじゃ、ぼくの面目は、と彼氏大ふんがい。それを聞くと私は、思わず大声上げてふき出してしまいました。ふたりは卒業以来歩んだ道も立場もすっかり違っちゃったんですもの』

そして婚約はその後解消された。まさに女は強し。M党勇躍して喜ぶべきか。

最近その呼名かまびすしく喧伝され始めたハイ・ミスとは、大山瑛子のような女性をもって嚆矢とするか。

三本立お化け映画

お盆にさがけて三本立てのお化け映画。和洋取りまぜてこつてりと楽しませてくれる。『パリの化け猫』『怪談異人幽霊』『女の生血を吸う吸血魔』、何と、題名を聞くだけでもゾクゾクとうれしくなるではないか。もっともこの三本立て、どうやら見られるのは『吸血魔』と、そして『化け猫』

がまあまあ、『異人幽霊』はちょっといただきかねる。とはいえ、大蔵氏のおめずおくせずのこの旺盛なゲテ物精神はむしろ壮絶かつ稚気満々。見ない先から、どうせ子供だましだ、なぞと、乙に気取ってフランス映画のムード物や今はやりのミュージカル、何でもかんでも『ウエストサイド物語』が最高と、デレデレ夢見心地のバカ面を女の子に見せるばかりが能じやない。

子供だましなら子供だましで結構。一見して作りものと知れる人魂や、ハリボテの生首であつたて、けっこう愉快なもんです。

変に深刻ぶったメロドラマや社会派ものより、何ほかこのほうが健康。深夜劇場で新東宝映画を再発見したという日本のインテリ諸公。新しきブーム大蔵映画のゲテ物精神の果敢さに、今のうち注目してほしい。



女性大集団

△私を深く埋めて▽という映画の題名ではないけれど、本当に深く埋めてもらいたいものである。耽溺とか惑溺とかいう。女性の中におぼれることだ。情痴の中におぼれきる放蕩三昧の世界はうらやましいものである。

もしそこに、女性と名のつく海があったら、さんぶと飛びこんで無茶苦茶に手を振り足をはね、輾転反側、無我夢中に水を飲んでもがき回り、ついには水底深く沈みきってしまうであろう。女性と名のつく山があったら、そのスソの土塊にミミズのようにもぐりこみ、土まみれになりながら奥深く埋没するであろう。

世界の人口が約二十五―三〇億あるとすると、その半分、約十二、三―十五億が女性人口である。そのうち三分の一、四―五億、十七、八歳から三〇歳ごろまでの、若い女性、それを思うと目がくらむ。四億ないし五億の若い女性、この圧倒的な女性集団のポリュームを思うと異様な戦慄を感じざるを得ない。しかしその中にはオカチメソコもたくさんいる。きらいなタイプの女性もいよう。それから好き好きということもある。

だから、嚴重に十人に一人、いや、百人に一人の割で美女を選ぶ出すとしよう。百人中の一人というのなら、たいていのわがままな面食いでも、まず妥当な女が選べるであろう。とすると、五億の中の百分の一だ。これは五百万という数字だ。

百人に一人の美女が世界には五百万も居るのである。その五百万人をもし一箇所に集めて、目のくらむようなその大集団の中へ、たったひとりで埋没するとうだろう。ミミズやモグラのように、五百万の美女の足のビッグジャングルに頭から分け入り消えていく――。

ああ、ぼくは女ばかりの集団に
こころもからだも埋めてみたい

水 尾 究
江 渕 晃 夫・絵



ああ、△私を深く埋めて▽の願いは切実である。或る女子大学の
集団旅行に付添った教授が、折りしもツユ時のこと、しめきったバ
スの中のいっぱいの女体の臭気にむれてどうにもならなくなり、と
うとう頭が変になってひとりだけ車を降りたという話を聞いたが、
ましてや五百万もの女性大集団の発する体臭の熱気はどんなもので
あろうか。その熱気の中に身も心も埋まり果てたいという悲願こ
そ、またマゾヒストのものである。

打水する奴僕

ということとは、これを一面から言えば、マゾヒズムは理想主義、
マゾヒストは理想主義者であるということと言うものである。ドン
ファンやカザノヴァを律するものは一の理想主義であつたと同様
に、マゾヒストは理想主義的愛の放浪者である。

ただひとりの女性の肉を、セックスを、即物的になぞり上げるの
ではなく、五百万の女性のエキスが抽象化され象徴化され、一の空
想的理想像として結ぶ觀念の所産としてある。ヴァンタや颯子がそ
の個別的な肉を離れた象徴としての女性として輝き出るとき、マゾ
ヒストの夢は完結する。

事実五百万の女性が、ただ一箇所に、ただ一点に、ただひとりの
女として現実に生きることにはない。しかしそれを生きさせようとす
るのはマゾヒストのはかない觀念的思惟の世界としてしかあり得な
い。その過剰な觀念過多の海の中へ、山スソの中へ、私を深く埋め
たいと希求する心、これはマゾヒズムのものである。

前号で述べたマゾヒストの三者願望は、また女性集団を志向する
意識でもある。群集の中へ埋没したい自己嫌悪の表情がちらつくの
である。自己よ呪われてあれ、足の下にじゅうりんされてあれ、女

性群集に埋められてあれ、である。

江古田の近くの或る女子寮の前であつた。木造の二階建て、表はこじんまりした植込みの前庭で、すぐ住宅地の通りに面していた。二階の明け放たれた窓からは、ヴァイオリンの音、ピアノの音が入りまじって流れていた。

そこは音楽学校の女性宿舎ではなかったかと、今思うのである。もう七年ほど前のことであつた。ぼくは当時武蔵野線沿線の療養所に入所中だつた。胸を患っていたのだ。だが気ままに、ときどきは療養所を抜け出して、こうして孤独な散歩に時を過ごすことが多かった。

足を止めて、その建物を前庭からのぞいてみた。ヴァイオリンやピアノの入りまじった音と共に、そこには集団としての熱気が表にまでこぼれ出ていた。女の城、女の館、禁男の家、四つか五つのそうした形容語が、ぼくの頭の中にわき上がり流れた。

あまり前後のことを考える余裕はなかった。砂糖の甘さに慕い寄るアリのよう、おのずと建物を半周する形で裏手に回り、勝手場近くからバケツを見つけて表側にもどつた。すかさずハダシになつて正門わきの蛇口で水を満たし、そのあたりへ打水を始めた。女性集団に奉仕する奴僕が、その足元へ打水で清めの祈りをささげるように。

警官

めがねをかけた、舎監とおぼしき中年の女が裏手から出てきた。そしてしばらく立ち止まって、じつとぼくの様子を観察していた。ぼくは皆から見られていることを、痛いほど全身で感じた。

いつのまにか、ヴァイオリンやピアノの音がやんでいた。建物全

体がシンと静まりかえっていた。ぼくは頭をあげることができなかった。ただシンとしびれる緊張だけがぼくを捕えていた。黙々とカラになったバケツにまた水をくみ、そしてホコリッぽいあたりへ打水をした。大っぴらな行為であつた。普通の怪し気な痴漢のようにこそそこそ隠れたような怪しい振舞いではなかった。堂々とみんなの前で、隠れ気もない行為であつた。その行為も、打水という奉仕的な行為であつた。だれに悪かろうはずもなかった。

先ほどの舎監らしい女が、まだ立ってぼくの様子を観察していた。それを視線の端でぼくも見つめていた。だがぼくを見つめているのは、その舎監女ばかりではなかった。建物中の女の目が、息を殺して見つめているのであつた。カーテンの端から、窓のスキ間から、ひそかにこのおかしな闖入者の行為を見守っているものであつた。

それは息苦しいほどの気配でぼくを押し包んでいた。かすかな、あるかなきかのしのび笑いが、ぼくの周囲にあつた。怪しい振舞いであるかもしれない。しかし、少なくとも危険な男でないことぐらひは、ぼくの行為があけっ広げで証明しているはずであつた。舎監女が何か一言、女性集団の代表としてぼくにことばをかけてくればぼくはいっそう全く危険のない男であることを、態度とことばで証明するはずであつた。といって、こちらから何かを先に訴えかけることはやはりできなかった。

ぼくの訴えかける相手は、その集団の全員に対してであつた。建物を相手に、建物全体に大声をあげ、双手を差し上げて絶叫するように語りかければよかったのか、しかし、肺を病むこの虚弱な男にそれはできなかった。

表通りに足音が聞こえ、制服の警官が一直線にやってくる。ぼくは視線の端でそれを認めたが、不思議に心に動揺はなかった。

愉快なゲーム

だれかひとりが、電話連絡で警官を呼んだのに違いなかった。そうして警官がやってきたことに動揺はおぼえなかった。しかし、なぜその前に一言ことばをかけて、ほくの様子を、意図を、確かめてからにしないかったのか。警戒心も必要であろう。他人を見たらドロボー、男を見たらオオカミと、おさおさ怠りなく警戒するのも必要な心構えであろう。

だが白昼、隠れ気もなく堂々と、奉仕作業にいそしもうとする男を、一言ことばもかけずに、ただ怪しい男として即座に警官を呼び立てる神経からは、少なくとも魅力ある女性像は結ばれてこない。男はケモノ、女は魔物、獣性と魔性との不思議な結び付きやもつれの世界を、ただ神経過敏なだけの女性の警戒心から理解することはできないであろう。

私鉄の駅近くの交番で、簡単な取調べを受けた。ポケットの所持品をみんな取り出した。ほくはほんやり、うつろな目をすえているだけであった。ポケットの中の紙片に、今入所している療養所の名があった。内心ほくはドキリとした。しかし半面、どうにかなるさ、とのクソ度胸もあった。警官は療養者だということで、多少のいたわりをほくにみせた。

第一、ほくには表だってとがむべき筋は何もないのである。無断で人の住居の前に打水をしていた、それが若い女たちの住む家の前だということに、多少変質じみたねらいがあったのではないかという推測はあったが、だからといってそれ以上、とがむべき点はなかった。ほくは何も改めて説明はしなかった。求められても、真の動機がわかってもらえるはずのものでもなかった。

警官はやがて、君は病氣なんだから、ちゃんと療養所の規則に従って、ふらふら出歩いたりしないで、安静第一に療養しなければいけないね。それに、悪気がないからといっても、相手は若いお嬢さんばかりだもの。いきなりだまって人の家の前の掃除を始められたんじゃ、若い娘さんにすれば驚くよ。今度から気をつけなくちゃね。

警官の言うことはもっともであった。その通りに違いなかった。ほくはおとなしくうなずいた。だが、警官に促されてあの建物の前を去る時、背後の窓がいつせいに開き、カーテンがかげられ、女の顔が鈴なりに重なってほくを見送ったあの時の印象は根強いものだ。

笑い声や喚声がしきりに起こった。また水まきに来てね、とひとりが叫んでいた。ドツとまた笑いが起こった。だったら、なぜ警官を呼ぶ必要があったのだ。水まきをしてくれるおかしな男を、笑いものにして興じるいたずらっぽい遊びは、実にこれほど女向きの愉快なゲームはほかにないのに。

甘い生活

ほくは学校にはいりたいと思った。女ばかりの学校に、ただひとりの男の生徒。そして教員もすべて若い女性、そこは女の園であり、女のエキスであり、女性集団の妖しい国、考えれば幻想的な空想にまで広がって、むせるような女のおいが、ただそれだけが立ちこめる場所、洋裁学校、美容学校、各種服飾関係の学校、いろいろと浮かぶのである。

あるいはもっと理想的に、ファッションの学校とか、チャームスクールといった女性美強調の学校まであるとしても、さすがに男の



身では、チャームスクール入学ということは許してもらえない。せいぜい洋裁、美容、料理、人形、服飾デザイン関係あたりまでなら十分入学可能ありとみたのである。

このところ、男の洋裁師、男の美容師はもう珍しくはない。積極

的に男の生徒を歓迎している学校さえある。といって、男の生徒がほかにも何人も居る、そういう男生徒歓迎の学校に入学したのではおもしろくもなく意味もない。ほかには男の居ない学校、女子だけを建前とする学校、そこにただひとりの例外として入学が許可され

る、としたらどうであろう。この高揚する気持ちはマゾヒストの場合、五百万人の奥深く私を埋めての、あの悲願に通じる願いでもあるのだ。

私はいつか入学案内のチラシで見たことのある、O学院の院長の面影を思い浮かべていた。彼女は写真で見ると限り若く美しかった。網ヴェールをおろした白い帽子をはすかいかぶって、じつと正面を凝視している写真であった。

O学院なら省線中野駅のすぐ近くであったし、通うのにも便利がよく、電車内からもよく見ることのできる学校の建物は、白壁の落ち着いた感じのいいビルである。外見上の建物の感じがよいと、中の住人たちまでも何だか理想的に感じよく思えてくる。ほくはぜがひでも、O学院に入学したいと思った。

当時年齢すでに二十九歳になっていたほくは、それでも心機一転の張り詰めた気持ちだった。十七、八から二十二、三歳の娘たち、それに教員といっても二十四、五から二十七、八歳が主体の若い女性に教えられる学校生活は、花のように甘い生活であるに違いなかった。

ピントはずれの男

電話をかけると、案外簡単にO院長自身が電話口に出た。

「何か私に」

院長はげんそうだった。私は熱意をこめて入学を許可してほしいことを必死に頼んだ。

もちろん院長は、当初、当学院は男子の生徒は入れておりません、の一点張りで、すげないあしらいだった。そして男の方だったら、ほかにこういう学校で入学を許されているようですから、と、

幾つかの学校の名をあげてくれた。

しかし、ほくにはそういう学校には用がなかった。あくまで男子禁制の学校にこそ入りたいのである。ほくは真剣に、まじめに、直接関係のないことではあったが、猛烈な女性崇拝者であることを自己紹介し、

「ぜひ先生の学校にはいりたいんです」

と言った。

受話器に院長の高くひびく笑いがあった、

「あなた、お年はお幾つ」

「二十九です」

ちよつと言いよどんだが、思いきって言った。

せつかく先方の気持ち動きかけたのに、こちらの年を聞いて二の足を踏むのではないか、せいぜい二十二、三位の若い男の子ならまあ今から洋裁を習おうという意気込みも、そして見込みもたとうというものを、二十九にもなって洋裁のイロハからを何のために勉強しようというのか。この危惧は、やはり当然院長の危惧するところであって、

「どうしてそうまでして洋裁が勉強したいの」

「女の人にサービスしたいんです。それで洋裁を勉強して——」

言い訳にもならない言い訳を、ほくはへどもどしながら何度もトチるようにして言った。

理由がはっきりする必要はなかった。何だか変わったおもしろそうな男、の印象を与えればよいのである。

「じゃね、一回学校までいらっしゃい。一度会ってよくお話を聞いた上で」

電話がそこで切れた。成功であった。あとは一押し二押し三に押

し、そしてひたむきなまじめさである。まじめなおかしさ、ピントのはずれたまじめさ、組しやすい男と見られる、そのことが何よりの要諦であった。

女以下

二階の院長室に、ほくは固くなってはいっていった。偉い人、崇拜する人の前に出ると緊張して固くなる、あの調子を誇張して、大げさに言えば、恐懼のあまり、その御前にひれ伏さんばかりの、恐れとおののきをあらわにして、院長のもとに伺候した。

院長は電話でのやりとりの様子と、そうしてはいってきた実直でピントのはずれたような青年の緊張を、さもおもしろいことのように笑って見守った。それはびったりと、彼女の自尊心にこび、くすぐるものがあった。

院長はほくと同じ位の年配の女性と思えた。写真での印象ほどの美貌ではなかったが、細面で足の皮膚にツヤがあり光っていた。大きな両ソデ付の事務机を前に、ゆったりと椅子に腰をおろしたところ、結構若い女性ながら院長らしい威厳が見られた。

「あんた、入学したいって話だけど、ここは女ばかりよ。いいの、そんなところには行って」

最初から相手を小バカにしたような言い方だった。それは相手の男に対しての、警戒心をすっかりといてしまっているということの表明でもあった。

「はい。女の人ばかりだと、恥ずかしいけど、ほくそのほうがいいです」

「どうして」

「女の人にサービスできるからです」

「まあ、女にサービスをね」

院長は高い声で涼しく笑った。

「ところであんた、およめさんは？」

「およめさんって」

ほくは下を向いてはにかみながら、

「ほく、頭が悪いから、およめさんなんて、もったいなくて、ほくやっぱりサービスするだけがいいです」

院長は今度も笑った。あからさまに無警戒な笑いだった。

こうしてほくの入学は破格の扱いで許可された。それも月謝免除という特待生並みの扱いで。といっても、女子のみ、というこの学校の方針が変わったわけではなかった。やはり入学資格は女子に限るのであった。とすれば、ほくの場合はどうだというのだろう。特別のケースであるのか、というより、それよりほくが、普通並みの男としては見られていないということであった。女並みか、いや女以下なのである。

暴力的事実

これほどの成功裡に入学し、大手を振って女ばかりの世界の中に沈淪できる資格を得ながらほくは、悲しいかな長く学校に通うことはできなかった。当時まだ療養所の患者であったほくは、週に三回という通学日を通い通すわけにはいかなかった。

無断外出にも限度があったし、身体にも無理があった。これは最初からわかっていたことではあった。どうせ初めのうちの何日かであとはシリ切れトンボで通い切れなくなるということぐらい、初めからわかっていて。しかし、それでもほくは、通える間の何日間の経験でも良いと思った。せめて何日間かの、女性集団の最中に、か

らだも心も埋めてみる経験は、必須のことであつた。
胸のおどるような入学式、簡単な院長のあいさつのあと、ほくら
のクラスの部屋割りがあつた。四十人位のクラスメートが居た。若
やいだ雰囲気かむれていた。ほくはみんなに見られていた。そのホ



てるような恥ずかしさの中で、おとなしく伏目がちに、多くを見な
いように務めた。

事務の女子職員がみんなを案内した。ここが裁断室、ここは研究
課の部屋、ここは事務室と会議室でと言いながら、一個所にとどま

ることなくズンズン歩いた。その後ろを、四十人の新入生がゾロゾロ、ガヤガヤでついていった。

みんな女同士の気やすさから、すぐにお互いなれなれしく口を聞き合った。そのにぎやかな行列が校舎内を東から西へ、西から東へと移動してゆく中に、ほくだけは置き忘れたようにみんなから無視され、口をきき合うこともなく静かな一点として異分子のようにまじっていた。

それでいて、この男は、といういぶかるような、軽い軽蔑を感じるような、何とも説明のつきかねるモモ色の濃密な関心と興味が、無言の圧力でひしひしとほくのからだを押し包むのを感じるのである。

研究課の教室には四、五人の生徒がめいめいのポーズで布にスケールを当てたりしていた。彼女らはもういっばし専門家の卵であった。部屋をのぞきにきたこのだらだらした行列は、とるにたらぬ幼稚園児と同じであった。今から洋裁の第一步を、イロハのイから、手に取るようにして教えてやらねばならぬ初心者ばかりであった。研究課の生徒は、大先ばいの持つあの気取った優越感を、この部屋の外をぞろぞろと歩く行列を見送る視線の中で示していた。

行列の中に二十九歳の薄ぼんやりした男がまじっていた。だれも何とも言わない。だがそれでも、この男は治外法権的なこの女性の世界の中での、最も無能力で軽蔑に価する男であることにはまちがいなさそうだった。集団それ自体が、既にほくにとっては一の暴力的事実であった。

埋められて

「これが物置、ホウキやバケツ、お掃除道具はみんなここにありま

す」

それから階段の下と、上とで「手洗所」と書かれた戸を示した。案内役の女子職員の口調は事務的なものだった。

「お便所はここですよ」

その一言の効果がほくにとってどってどんなものであったか、だれもが考え及ばなかったに違いない。ここでは便所に男女の区別はなかった。

「来賓用便所」というのがあったが、これは生徒たちにはオフリミットである。生徒は生徒用、もちろんにみんな女子用のものである。用を足すにはそこでたさねばならない。

どだい婦人便所というのは、男子にとってはいわば一の秘境である。公然ともぐりこむわけにはいかない。痴漢呼ばわりを覚悟して、これほど感興をそそる場所はないのである。

「お便所はここですよ」

この一言にささげるほくの感謝は、ただにマゾヒストのみの感慨でもなからうが、言いようのない興奮に襲われたものである。

ほくらの教室は二階にあった。それぞれに席が決まっていた。ほくの席は最前列、二人掛けの机にひとりだけ、これはやはり男だから、という考慮からされたものであるらしく、ほかを見るとみんなふたり掛けで教室中の机がふさがっていた。

教師がひとり教壇に立って、必要な注意と必要な用具の説明をしていた。学校指定のノート、スケール、教科書、——教師は二の腕からの肉付きのいい皮膚を向き出しに、キビキビした話し振りだった。二十五、六だろうか片ほおにえくぼがあった。ちゃんと人に物を教える教師としての話し方が板についていた。

「じゃ、今先生の言ったものを今度の時までにとそろえておいて、直ぐ授業にかかれるように。いいですか」

小学校の先生とあまり変わりはない。

こうしてぼくは、女性集団の中のみすぼらしい黒一点として、いや、男であって男ではない、女以下の妙な生徒として、その中に埋められていった。

圧倒的ポリウム

といっても、先に述べたように、療養所の患者としては週三日の通学は不可能であった。もちろん、学校にも院長にも、ぼくのその身分や、病気のことは隠していた。

授業は朝九時から午後の四時までである。すると朝九時と、午後三時の安静明けの検温時間をこまかすことができない。

一度や二度なら療友に頼んでこまかしてももらえるが、それがずっととなればごまかしきれものではなく、病身の身に健康上耐えられない。

ぼくが学校に通学したのは、第一週目の三日間だけである。そのあとはずるずると無断欠席のまま、そのまま断わりもなくやめてしまった。

かえすがえすも残念至極なことではあった。この千載一遇の好機を、十分に生かし得なかった身の境遇がくやまれた。

それだけに、三日間の経験は貴重であった。ぼくは積極的にクラスメートと口をきき、彼女らのマスコットとなるよう気を配った。

「お茶くみ頼むわね」

と気やすく使えるよう、走り使いにはもってこいの男だということ、彼女らの認識に植えつけた。

教師の助手然として、黒板の文字消しにも最前列のぼくは気やすく飛び出した。

放課後の掃除にも、女たちはぼくにだけ掃除をさせておいて、自分たちはそれぞれのおしゃべりに興じた。そういう雰囲気は三日間の短い期間、最初っから一気に作り一気にその中にふけり、そして縁を切った。

ぼくは病人であった。青い顔をし、肩で息をし、やたらにせきこんだ。机一つ動かすにも疲れ果てた。それでも、そのことにぼくは満足した。

ぼくは深く深く埋められようとしていた。その空想のかなたに、五百万もの美女の大集団があった。

大集団の山スソの下へ、おしつぶされるためにもぐりこむことを考えていた。

それは院長個人、教師個人、あるいは研究課の先はい諸姉たち、クラスメートのひとりびとり、各個別的な女性のイメージではなかった。

女性という抽象化されたエクスへのイメージであった。そのイメージが、五百万ものえりすぐりの美女の大集団という形をとって現われるとすると、集団そのものがイメージであった。巨大な圧倒的なポリウムをはらむイメージだった。

そのむせかえるポリウムの中深く、卑小な一粒子として、「私を深く埋めて」と叫ぶ心が激しくぼくの内部で息づくのである。



現代マゾヒズム文化時評 18

森下 高茂

ロジェ・ヴァディムと

「悪徳の栄え」(仏映画)

ロジェ・ヴァディムという若くて機会にめぐまれた幸運な耽美主義者が、ふたたび異常な魅惑を現代にふりまこうとしている。

はじめ彼のこの作品が未封切のアメリカ映画「フロイドの世界」や、すでに公開された「チャップマン報告」のごとくに凡作ではなicaと思っていた。同時に、それは「悪徳の栄え」に対する見当ちがいの賛否両論のためでもあった。

知識人と自称する落語の大家と質的になんらかわるところのない常識家であるというだけで、一見特権階級をかたちづくっているかに見えるこれらの人びとが、マルキ・ド・サドについて、それを「自由な精神」という大へん上品で、大衆受けのする呼称で受けとめた。

その上、それを自分流に勝手に変造してしまった。だから、実質的にサド侯とその作品が、ボードレールと『悪の華』とが本質的なちがいを持っているということなどは、まったく忘れさられているほどだ。

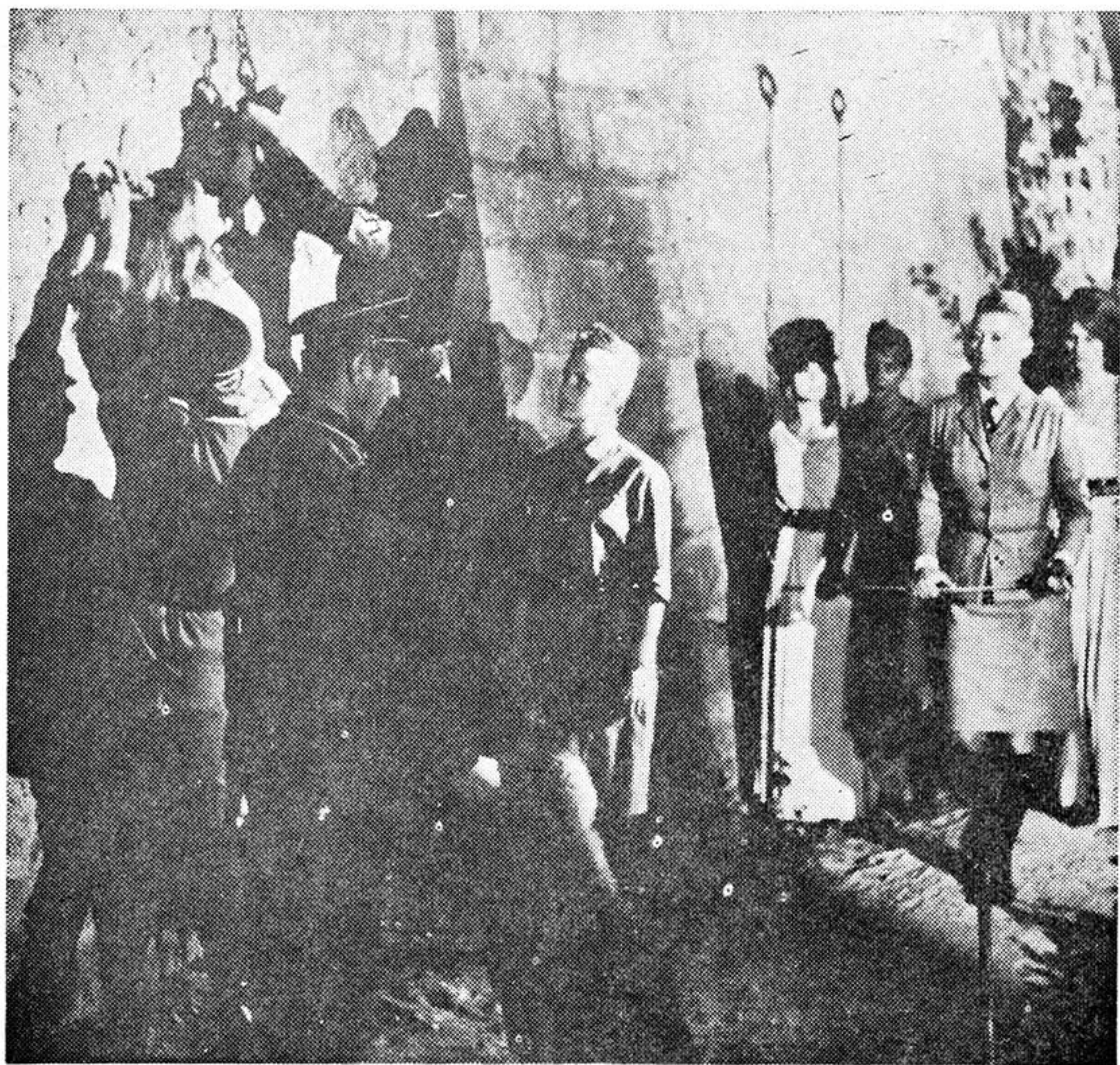
そこで私は、あえて言うことができる。かつて裁判ぎたになったとき、あのととき訳者として法廷に立った人や、それを弁護した人びとの多くは、内心では刑事事件という汚名をなんとかまぬがれるために「自由の精神」を持ちだして、そのかくれみのの後ろで、ただか、単なる商業上の興味と性的好奇心というかれらの本体を、すばやくダントンやマラーの、あるいはロベスピエールの若く燃えさかった悲劇的な歴史とすりかえようとしたにちがいない。

私たち自身をふくめて現代に生きる戦中派までの人びとの多くが、よくアイヒマンを指弾できるものだと思う。また、そう思わなくてはならない。

アイヒマンは、じつに凡俗な人間である。彼自身を刑場にはこんで行った数多くの人たち、積極的に彼を弁護しようと思えなかった人たちと、まったく質的に異なるころのな一個人、一市民でありすぎたとも言えるのである。

そして多くの新聞や雑誌が、書きつづけたアイヒマンは稀代の殺人鬼であると。彼は性的変質者であった。彼はサディスチックはナチスの一員であって……と。

この種の文章は、その実なんらの根拠を持



映画＜悪徳の栄え＞

たないことはあきらかである。かれら記者たちは、一六八四年『魔女の鎚』が刊行されたときの宗教審問廷における傍聴人のように、魔女だ、魔女だ！ 殺してしまえと呼びつづけたのと一脈を通じる叫びではないか。

『サディスチックな』この言葉が一番いい！かれらはそう思う。そして読者が生半可な知識でそれを読む。自分たちの家族には魔女はいないのだと安心しながら。

このおろかしい笑劇が、いったいなんどくり返えされれば終るというのだろう。それは果てしなくつづけられて行くのかもしれない。だからこそ知識人にとっては、上品な名目へのすりかえてこそが必要であったのである。

マルキ・ド・サドの作品に対する文芸家のみならず、いわゆる知識人の論陣は、同様のすりかえによる「自由な精神」擁護のためのものであった。

そこで、もしかかれらがサドの作品が「自由な精神」という言葉が持っている連想の可能性を拒否して、まったく別個の方向に、その根をのぼしていることを発見したとき、かれらの論議は、根無草のようなものになってしまう。だからかれらは、その上品できこえのよい「自由な精神」が出发点でしかないこと

を考えようとしなない。

多くの論者の言うところの「サド礼讃論」はじつは出発点即ゴールであるという珍妙な理論によって、やつとのことで成り立っているのである。

たしかにマルキ・ド・サドの思想は、フランス大革命の「自由」の思想に影響を受けているとも言えよう。だが、その程度は、ダ・ヴィンチやミケランジェロが、ルネッサンス、（文芸復興と人間の解放の精神）に影響されていたほどに強力に支配されていたとは言えない。

フランス革命はマルキ・ド・サドに身体的自由をあたえたが、精神の自由はあたえなかった。彼の作品は彼がかつてダンテ・アリギエリが、神曲に自己の精神図をえがいたとひとしく、彼の精神図であるとしか考えられない。しかし不幸にして、後年ルツジェロ・レオンカバルロが『大メチチ家の人々』を才能の枯渇ゆえに未完に終わらせたと同じく、天はマルキ・ド・サドのペンに自由なつばさをあたえなかった。

おのれのなかで、はてしなくひろがっていき新しい世界、それは既成のルールを打ちこわしていくすばらしい範囲でありながら、それをえがき、伝え、残すための才能に恵まれ

なかった焦燥が、彼の作品を少なからず晦渋した。その晦渋と無意味な反覆と同一の主題のかき切った展開——これがバークナーの失敗作「ジークフリート」やベートーベンの『第九交響曲』の一部に見られるのと同じ質のいらだたしい特長である。

そして知識人は、この晦渋、冗長のなかにこそブラームスの『第三交響曲』が示したわけのわからない、もったいぶった晦渋、冗長に通ずる深遠さがひそんでいるのかと、摸索するのである。

ところが、このような「悪徳の栄え」の原本に対する見当はずれの弁護や非難をよそにブリジッド・バルドーの前夫ロジェ・ヴァディムは、もっとも明快な零碎気描写をおこなっている。これは、マルキ・ド・サドの作品に対する低劣な描写と従来考えられていたものと、はなはだ近いものである。この低劣な官能をくすぐるために改変され、各国で転用、流用されてきたマルキ・ド・サドの作品に対する解釈は、しかし一面の真実を持っている。

この耽美派監督がけんめいにえがきつづけた現代の衣裳をつけた十八世紀の物語りに、この低劣さをえがき着実にそれを再現してゆくことによって、かえってマルキ・ド・サド

のみではなく、マゾッホやレチフ・ド・ラ・プレトヌヌをはじめとする、いわゆる「倒錯派の世界」の深淵をのぞき見しているのである。

そこには第七の官能ともいうべき、感覚の世界がひろがっている。すべての汚濁、悪徳は美しくえがかれ、ひたすらに風俗が既成の規範が、ヤユされ打ちつぶされてゆく。それは感覚の勝利であるのみならず、新世界を予知するものの勝利でさえある。

紀元前六六〇年代に、「大和は国のほろほ」とうたい、神武帝が神から人間への転心したという日本での伝説が意味する一つは、神の王国からすれば、より弱く、それゆえにすばらしい人間の世界の発見と、はなやかな世界への予知するものであろう。

それと同じ予知が十八世紀に引きつづいて十九世紀にも、今世紀にも語りつづけられている。七人の博士はおそれをもって、この未知の世界を語り告げる。そして、ある意味では、すでにマグサ桶の中の光茫を放つ赤子は発見されているのかもしれない。

ロジェ・ヴァディムは『血とバラ』において、また『悪徳の栄え』において、たしかに予知された世界の一部を、万人に伝えようとした博士のひとりであるのかもしれない。

★テレ・セット・ジュール誌
から

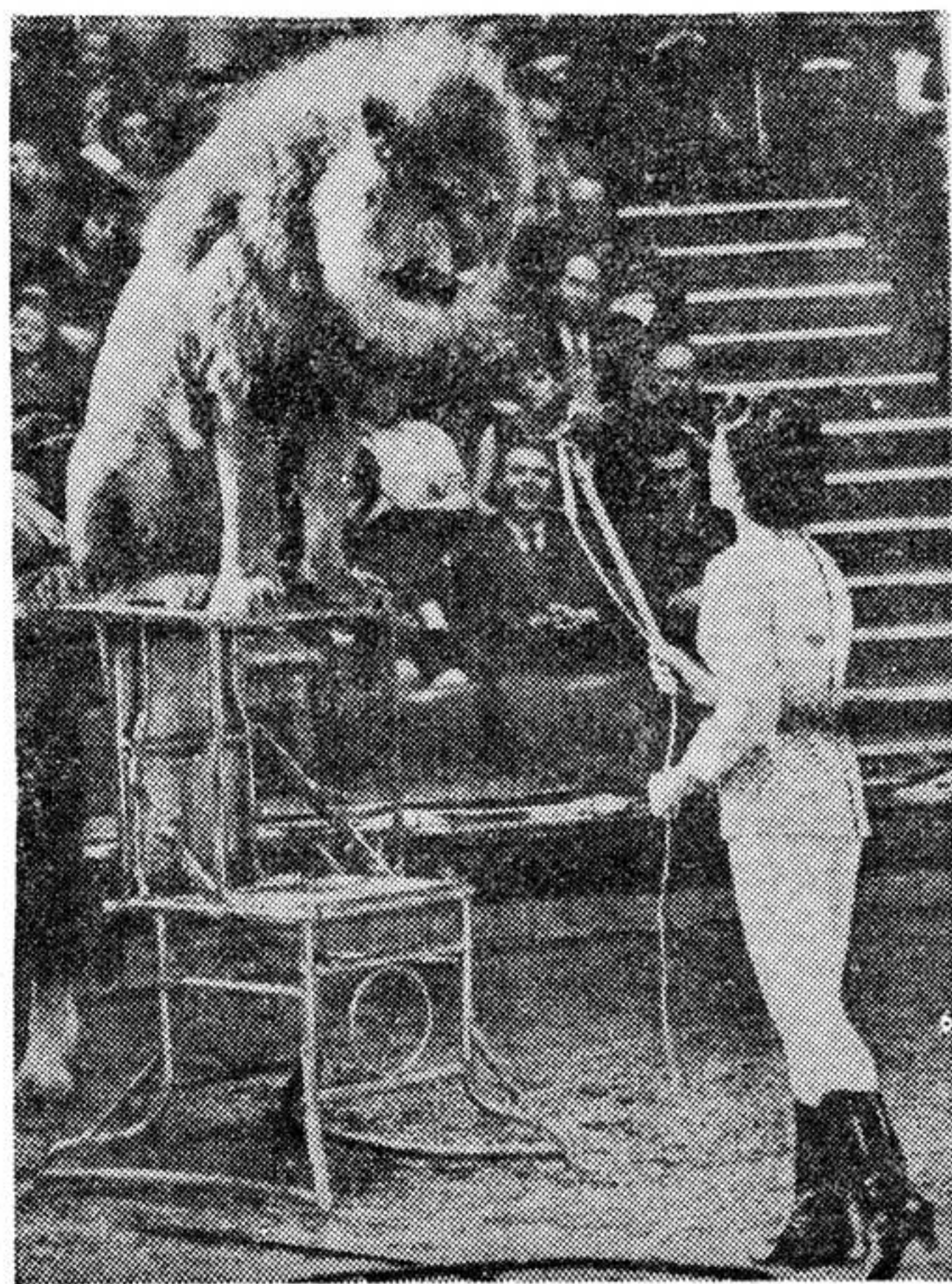


写真C



写真A

写真B



フランスTV雑誌「テレ・セ

ット・ジュール(一六〇号)

『モスクワのサーカス』——毎週連続して放映されているこのシリーズ番組に、タマラ・ブスライエーヴァ女史が、ライオンとともに出演しています。

タマラ女史は、若い時代からきわめて熱心に新番組を研究している人ですが、すでに、一九四〇年代に、イリア・ブルシモヴァ女史にさがかけて、ライオンを馬にのせる番組を考え、じっさいに公演しています。たしか、レニングラードの国立曲馬場だったと思います。

ここにかけられる三枚の写真のうち、Aは台上のライオンを鞭でさそいだして、用意してある馬の方にみちびくときのタマラ女史。Bは馬のそばの台にライオンを追い上げて、さらに馬の背中へと追いこもうとしているところ。Cは公演後、夫、アレキサンドル・ブスライエフ氏とともに、舞台から引き上げてゆくタマラ女史です。

このCでは、タマラ女史はかなり年のように見えますが、彼女は若いときから、こういった顔つきといわれ、写真の光線やカメラアイによって、年よりじみて見えるのです。い

かにソ連サーカス芸術家のなかでも先輩格とはいえ、もっと若々しいはずですが。

ところでサーカスの女調教師が、マゾヒストの系列にあり、大いに褒揚され憧れのマトになるということは、ザッヘル・マゾッホ自身の著作のなかにもあきらかです。とくに、現代に生きる人びとの間では、鞭を公衆の面前で手心を加えることなく、むしろ誇張してさえ自由に使う職業という意味で、非常に特殊な位置をしめております。

また、その相手となる動物と、彼女自身との立場の対位が、パギスム系マゾヒストの心を刺激し、さらにその職業の展覧性が、エクシビショニスト系マゾヒストを刺戟するので

す。

もちろん、なかには芸人風情にサジスチンを演じられるのは、イメージをこわすというふうな考え方をするマゾヒストもいます。

貴婦人、王妃、公妃の支配下におかれることをゆめみる人びとがいます。それはそれでよいのですが、古来、曲馬中でもシニールライテリン(女曲馬師)とか、猛獣使いとかいうのは、勇気が必要とする関係からか、名流婦人のなれのはて、という経歴が多いようです。

この例を有名な映画にとるならば、古くは

オーストリアのトビス社の『郷愁』における女流曲馬師。

新しくは『アンリエットの巴里祭』で、ヒルデ・クネフの演じたハンガー騎兵大佐の娘の放蕩末路イレ・ネという女曲馬師などがあります。

遊蕩と淫靡と、そして高貴な前半生と、これらがさらに例を上げるなら『フルフル』でのロシア公妃、彼女が革命後パリへ亡命してからの女調教師に、まとめて印象づけられるように、ひとつの異様な雰囲気と魅惑を形作っています。

そして彼女たちが、いちがいに下賤な女性とはいいきれないということにも興味と注意とを注いでほしいものです。

ともあれ、タマラ女史の三枚の写真のうちですし、その異様に黒ずんだ人生観は、シヨペンハウエルの垂流にも似て、すてがたい魅力があります。

なおこの番組は、今年(一九六三年)四月十三日から十九日までの一週間に放映されたものです。





変幻白だぬき

井村 錠・文 古正 英生・絵



① 白狸

嵐のまえの、息づまるような静寂がくずれると、なま暖い風が麓の方から吹きつけてきた。

帰りをいそぐ獵師の三次が、麓ちかい古びたお堂の前まできたとき、お堂の扉を内からガリガリ引っかく音を聞いた。

三次がそつとのぞくと、そこに小さな獣がうずくまっているのを見つけた。

白狸だ！ おおかた、開いたお堂の中へまぎれこんだところへ、風のため扉が閉まってしまったのだろう。白狸は神の使いとして、部落の人たちから恐れられていたが、無頼の三次には通用しなかった。

彼は、なんなく白狸を捕らえた。

② 神罰

その頃から、風は大粒の雨をまじえて、ごうごうと吹きつづいてきた。

三次は嵐が止むまで、お堂の中で立ち往生を余儀なくされた。どっかり腰をおろした三次のまえに、見ごとな、白い毛並みをした雌狸が、四肢をひとまとめに縛られて横たえら

れていた。

「これだけ毛並みのいい狸は、めったにいるもんじゃねえ。それに美しさといい、こいつの毛皮は高く売れるぞ。狸汁も悪くねえ」

と、急に三次の下腹が痛んできた。しばらくすると痛みはますますひどく、彼はそこに突っ伏してしまった。

神罰——。不吉な思いが、フと三次の脳裡

をかすめた。彼は、激痛に堪えかねて、お堂の床を七転八倒しだした。

「三次さん、もしえ三次さん」

女の呼ぶ声を聞いて、油汗にまみれながらも、三次は声の方に顔をあげてみた。

「げっ」

そこには狸が消えて、うら若い美女が四肢を縛られてころがっていた。



③ 美女変化

「ぼっ、化けやがったな」

女は、艶然と笑ってみせた。

「ほほほほ、たとえ四つ足を縛られていても
掌さえ合わせて九字をきれば、狸はいつでも
化けられます。見ればさきほどからたいそう
な苦しみよう、わたしを助けて下されば、ご
病氣もすぐさま治してしんぜましょう」

真けんな目の色で、女は三次を見つめてい
た。こいつは本当に神の祟りかも知れねえ。
それに狸は神通力とやらをもっていやがるか
ら、女の言うことは案外まっとうかも知れね
えぞ。

背に腹は変えられなかった。三次は身をね
じりながらも、女の縄を解くと、女は裾をひ
るがえして、お堂の外へ飛びだしていった。

——しばらくして、ずぶぬれになった女が
戻ってきた。手に何かの葉っぱを持っている。
彼女は三次の手拭いで葉っぱを包むと、か
いがいしく、呻き苦しむ三次を抱きおこし、
青い汁を彼の口にふくませた。

すると、まるで嘘のように、三次の腹痛は
消えてゆく。三次は、まじまじと女を顔を見
つめた。狸が化けた、といっても、それはい
ままで見たこともないような美しさだった。





④ 意馬心猿

「それでは約束どおり、わたしはこれで帰らせていただきます」

三次のようすにっこりして、女はお堂をたち去ろうとした。

そのとき、ちら、とこぼれたふくらはぎの白さに、さっきのしおらしさはどこへやら、三次の胸に淫らな欲情が頭をもたげた。

彼はやにわに女の背後から、両腕をとってねじあげた。

「あっ、なにを……、あれっ」

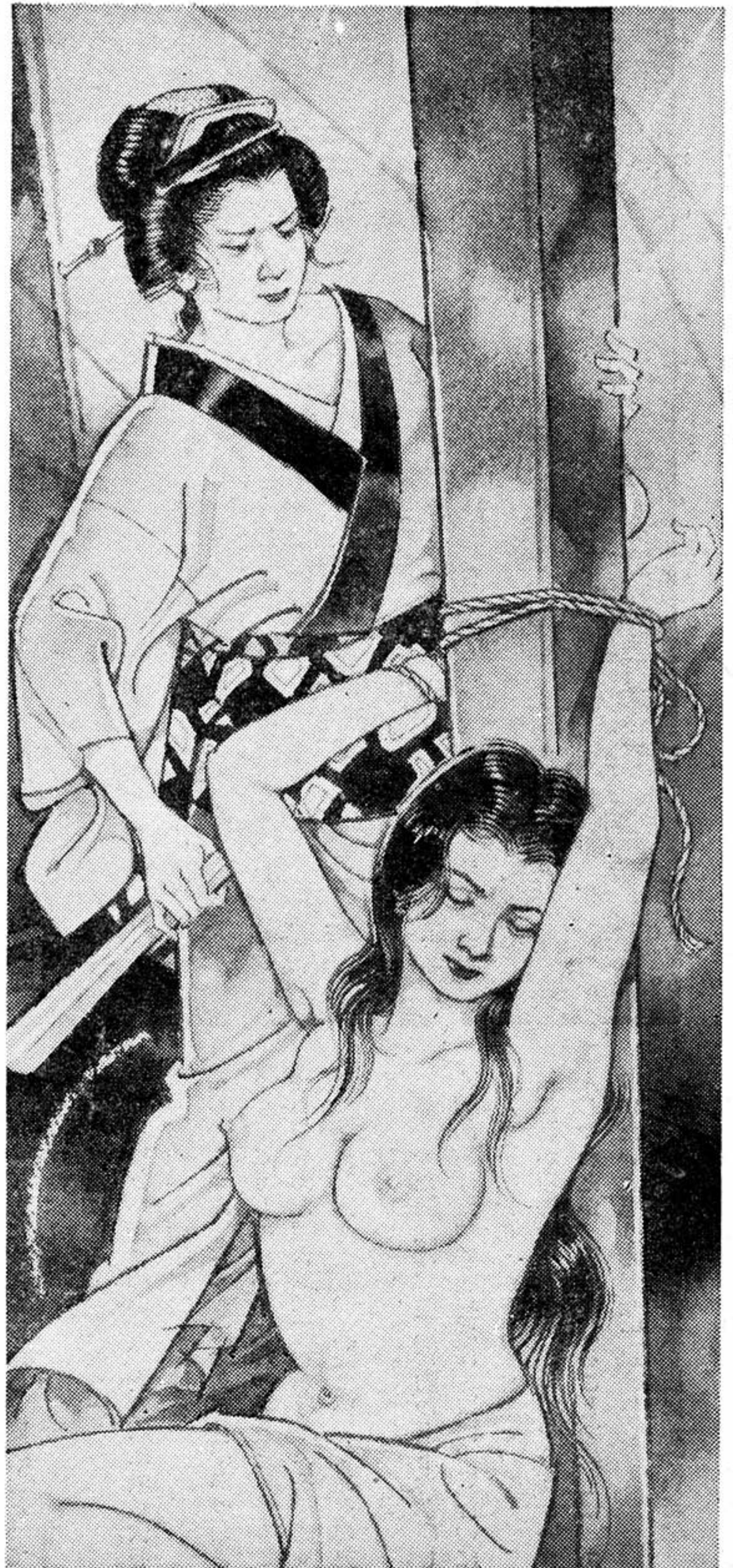
三次は荒い息をついて、女を床にねじ伏せると、手早く両手に縄をかける。

「ふっふっふ、さっきでめえが言やがったように、こうして後ろ手に縛っちゃえばもうこっちのもんだ。さあ、術をかけてみる。俺あ狸の毛皮なんぞより、人間でいるてめえの方がよっぽどいいぜ」

あまった縄尻は、豊かな胸の上下をきびしく締めあげた。悲鳴をあげる口に、青汁のにじんだ手拭をしっかりと咬ませる。

「これから毎晩、かわいがってやろうというんじゃねえか。狸汁になることを思えば、ありがたいと思うんだな」

三次は、縛りあげた女を肩にかついだ。



⑤ 悲しい女狸

白狸の女にとって、それから悲しい日がつづいた。お堂で捕らえられたときからずっと、後ろ手の縄だけは解かれることはなかった。夜毎に、彼女は三次のため、白いからだをさいなまれた。

そんな乱暴な三次よりも、彼女にとっては

三次の妹のお縞の方がもっと恐ろしかった。兄に似ず、どちらかといえばお縞は面長の美人であるが、目つきに底意地の悪い影をもっていた。そのうえ、明きらかに自分より美しい捕らわれ女に対しての、嫉妬が彼女の悪魔をあおりたてた。

三次が獺にでて留守にすると、待ちかねたようにお縞は女をいびりだすのだった。

「狸が着物を着てるのは、どう考えてもおかしいよ。さあ、こんなものとはってしまえ」お縞は女を裸にして柱にゆわえつけると、すりこ木をもってあらわれた。「狸のは大きいというけれど、さあ、どんなもんだかね」

女が悲鳴をあげると、お縞は三次のよこれた六尺で、女の口をふさいでしまった。

⑥ 色若衆

三次は山道で、びっこをひいて難渋している旅の若い侍を助けた。といって、別に彼にそんな情があるわけではなかった。

まだ前髪だちの、役者にしたいような優男ではあるが、身なりから見ても、どうやらふところの重そうにみえた。助けてやれば、相当

な礼金はもらえそうだと考えたからにはかならない。

三次は若侍を家に伴って帰ると、さっそく狸女の口にかく猿ぐつわを咬ませてしまった。よけいなことをしゃべられては、面倒だからである。

「こいつはあつしの女房ですが、間男をした折檻をしております。ま、気になさらず

に、ゆっくりくつろいでおくんなせえ」

お縞は、旅の若侍の美々しさに、すっかりまいってしまったようだった。

「さあさあ、ずいぶんとお疲れになったでございましょう。みぐるしいものをお目にかけて、さぞびっくりなさったことでしょうが」

喜々として酒をもてなし、ときどき妖しい光をたたえた視線を、若侍の方に送っていた。



⑦ お縞恋慕

三人は哀れな格好の女をさかなに、しばしのときを過ごしたが、その夜も更けると、三次は縛られたまま身をもだえる女をかかえるようにして、お縞と若侍もそれぞれの部屋にひきとった。

灯りが消えて――、しばらく女の呻き声がかこえていたが、やがて、それもハタ、と止んでしまった。

と、若侍の眠っている部屋の障子が、音もなく開かれて黒い人影がそっと忍び入った。

「どなたじゃ」

ふとんの上に、ムクリと若侍のおきあがる気配がした。

「あら、おきていらしたんですか、ま夜中になんてしてしのできたあたしの気持、もうお察しでございましょう」

さすがは女、お縞は暗闇の中でさしうつむいてしまっていた。

「と申しても兄上が……」

「それは大丈夫、兄には酒の中に眠り薬を入れて、地震がおこってもおきませぬ。ほほ」「そうか、それは上々、このような姿の、それが少しでもよいのかな」

若侍の顔を見てお縞はその場に失神した。



⑧ めおと狸

お縞がそこに見たものは、顔いちめんを覆った白銀の密毛、とがった口、らんらんと輝く金色の眼、それが若侍の正体だった。

雄狸はお縞に目もくれず、三次の部屋に押し入ると、大口を開けて、いぎたなく眠りかけている三次のかたわらに、手足を縛られて

横たわっている女の縄を解き放った。

「あっ、あなたっ、あなた……」

女は雄狸にとりすがって泣いた。

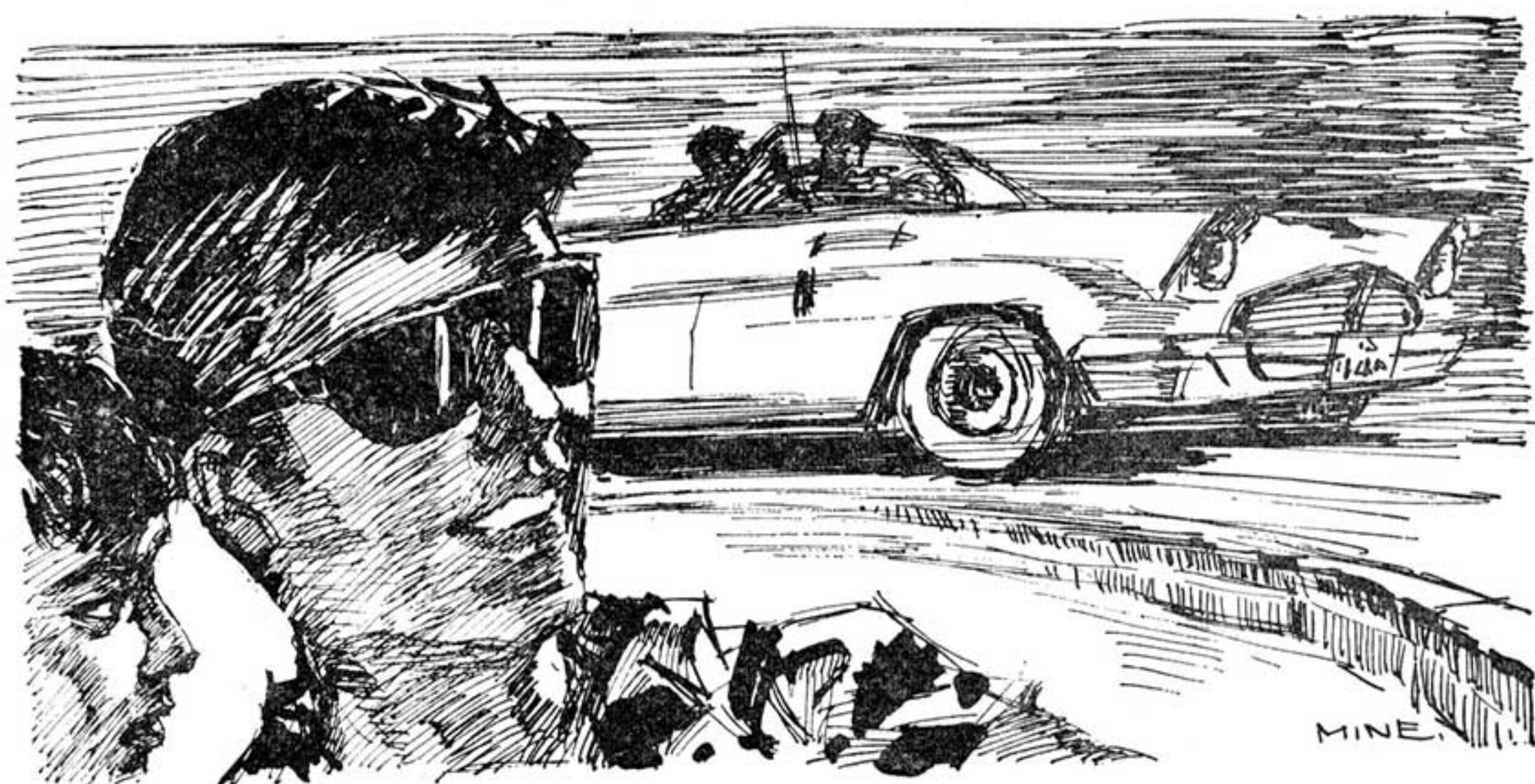
「おのれ、憎い男め、刺し殺してもやりたいが、われらは神に仕える身ゆえそれもならず、おお、そうじゃ」

雄狸は、腰の刀の鞘をはらうと、三次兄妹の髪を剃り落としてしまった。

夜の明け初めるころ、女狸をいたわりながら二匹が山に去ったあと、三次の家の軒に、素っ裸にむかれた兄妹が、手足をひとまとめにゆわえられた姿で吊り下げられていた。

村人に助けられた兄妹は、その後、ひたすら髪の毛のびるのを待ったが、とうとう生えてこなかったもので、仕方なく仏門に帰依したという。仏さまもさぞ迷惑だったろう。





穴

石 山 省 一
都 築 峰 子・絵



ドライブは楽しかった。

売出し中のスポーツ・カーを、あにきは、フルスピードで郊外へ向けて走らせた。

口笛がでる。ポータブル・ラジオが、ジャズやツイストをガンガンかなでる。それらがあにきとほくとの生活、そのかぎりない陶醉への前奏曲でもあった。

車は堤防の上に作られたハイウェイを、猛烈につっ走った。

すでに初夏の季節だ。ハンドルをにぎっているあにき、そのはだ

けた赤いポロシャツの胸元に、濃い胸毛の一部がのぞいていた。それを眺めながら、ほくは恋人のように胸をはずませていた。

あにきは全体に毛深い。それにくらべるとほくは色も白く、ずっとやわらかい筋肉や骨組みで、あにきの比ではない。

その上、あにきはわきがだ。そのにおいは強烈である。はじめ、とてもがまんできなかつたが、ふしぎなことに、いまでは、そのにおいのとりこにさえなっている。

なぜだろう。嗅覚のまひからかもしれないが、じっさいは嫌悪を感じていたわきがのにおいもエクスタシーにむすびついている。あにきの身体にふれることで、徐々にほくのからだが吸収してしまったのかもしれない。

そんなあにきの肉体や体臭に、ほくは日に日にひかれていくわけだ。風景など、どうでもよくなる。

あにきの横顔、わしの鼻の上にサングラスがかかっている。その精悍さに打たれ、つい手をのばしたくさえる。

そんな衝動をおさえながら、いっぽう夜への期待を大きくするのだ。

「おい、なんでそんなにおれの顔を見ているんだよお」

あにきは、いくぶんスピードを落としながら

ら言った。

「べつに……」

と、笑って見せたが、ズバリさぐられたときの気持だった。

見ぬいているあにきも、横顔に白い歯を見せていた。

郊外へのドライブは楽しかった。

ほくらは気分を一転し、その夜は、とくに激しいよろこびをわかちあった。あにきの太い腕や厚い胸は、ほくの愛撫によって、汗をたらしていた。

(一)

あにきとの出会いは深夜喫茶店であった。

そのときほくは、おやじから勘当同然に家から追いだされていた。そのおやじの怒りを見て、ふるえていた継母の姿を目にうかべながら、これからどうしようかとジャズに耳を傾けていた。

そんなほくのボックスの前に、あにきは、スカッとした出立ちで現われたのだった。

「おい。なにを考えているんだ？」

あにきは、親しげな顔で話しかけてきた。「おれについてこないか、いいところへ案内するぜ……」

と、ようすをさぐりながら誘った。

べつに行く当てもなく、かと言って、おやじのもとへなど帰る気は、さらになかった。だから黙って立ち上がった。

すでに午前二時ごろだった。

そんな出会いで、あにきたちとの奇妙な生活がはじまった。

あにきたちというのは、つまり、あにきにスケがいたのだ。スケと言えはきこえはよくないが、あにきより年上だと思われる女、クラブのホステスにつとめる女をまじえての三人の生活である。

女は色が白く、顔立ちも背丈も、十分に美人のうちに入るし、水商売の女にありがたな少し小肥りで、しかも襟足の美しい女であった。

彼女はほとんど和服でつとめに出た。

正直なところ、ほくは、年上でもあるという気安さから、ひと目ぼれしたほどであったが、どうしたものか、あにきは、スケよりもほくを好きだと言っている。

もっともあにきのことだから、このスケ以外にも女はいるはずだし、ひとりの女に、いつまでも心を止めておくはずもあるまい。とはじめはそんなふうにも考えてもみた。

ほくら三人は、かなり高級なアパート、二間つづきの部屋に住んでいる。もちろんバス

やトイレつきである。

あにきの所へきてから、ほくは学校もやめてしまった。とにかく学校など、どうでもよいくらい、あにきを知ってから生活は楽しくなった。

「おいミー坊」

あにきは、ほくをそう呼ぶ。

その言葉使いは乱ぼうだし、当たりさわりもごつごつしている。

しかし、そんなあにきの本心は、態度とはべつである。

それにくらべ、ずっと同棲してきたスケのことを、白ブタときめつける。ほくの前でも平気でつらくあたる。

それでも白ブタはがまんしている。あにきの言うままに金を出し、せっせとかせいでいるのだ。

あにきは、身体はでかいし腕力もある。街を歩いていても、ちょっと振りかえって見る連中がいるほどだ。風格からして用心棒みたいに、顔がきくらしい。

そんな男にみつぎ、そのあげくは、いじめつけられながらも、はなれることのできない白ブタこそ、思えばかわいそうでもある。

あにきと白ブタが寝ることもあるダブルベ



ッド、事後の余波を、ほくらは窓から入ってくる夜気にさらしていた。

「あにき、白ブタは、ほくらの関係に気づいてはいないのかい？」

「たぶんな。あいつは、ただの友情、そんなふうに思っているだろうよ。おれ、ミー坊の

こと、以前兄弟分だった男の弟だと話してあるんだ。それに、おめえといっしょにいれば

ほかに女関係を持つことも少ない。そう考えているかもしれないぜ。はっははは」

あにきは手をのばしたばこを取る。「ところで、じっさいはどうなの？」

「なんのことだ」

「白ブタ以外の女とき……」

「……………」

あにきはすぐに答えず、ぐーっと深く吸いこんで、煙をほくのひたいに吐きかけた。

「以前はあったぜ。しかし、おめえを知ってからねえ」

「ほんと？」

「ほんとだ。おれは、元来女より男の方が好きだぜ。女ってやつはなあ、変にねちねちしてうるせえや。そのくせ、あの方は案外あっけねえんだ。すぐ夢中になりやがってよお、こっちは物足りねえ」

「……………」

「そこへゆくとき。男ってえのはお互にわかっているからよお、なんて言うのかな、とにかく女では味わえねえ楽しみがあるぜ……」

「……………」

「ところで、おめえ、こんなことはじめてだったな。女とはどうだい？」

「もちろんないよ。ほく、女の子は妙に好かねえ……」

と、あにきの言葉の調子につられていた。

「しかし、男のおれが見ていてもかわいいと思うミー坊なら、学校で女の子にもてたじゃねえのか？」

「しかし……」

「どうしてだ？」

「ほく、ずっと以前に、たしか夏だった。夜トイレに起き上がったとき、おやじとおふくろの寝室から、変な声をきいたんだ。はじめは、おやじがおふくろをいじめているのかと思って、興味半分に立ちぎしたんだ。ところろが……」

「ふん、あれっていうわけかあ、つまりよおやじ、二度目の若いおふくろを楽しませていた、その声だったわけだな」

ほくはうなずいた。

ひたいに、あにきの胸毛がふれた。

「それ以来、女というものがきらいになった理由が、それにあるんだ。そのおふくろは年も若いし、後妻、ままだとして親切に面倒を見てくれたんだけど、それだけに、おやじと寝ているところを想像するたびに、胸がムカついてきたんだよ」

と、ほくは実母よりも記憶に新しい継母を思いうかべていた。

おそらくほくが家出してしまっているいまでは、おやじの狂ったような行為に、小柄なからだをさらけだしているにちがいはあるまい、と思った。

「じゃ、男の子はどうだ？」

「好きだったよ」

ほくは即座に答えた。

「ラグビーをやっている同級生だった。彼が出場する試合は、たいてい応援に行ったものさ。ラグビーは、雨だろうが雪だろうが、天気にかかわらず試合は決行されるんだよ。泥んこになって、かけまわっている彼を見て胸をおどらせたもんだよ」

「それだけか？」

「もちろん……」

「ほかに？」

「ほかに？ なにが……」

「男さ、おめえが好きになった男さ」

あにきは、いやに執拗である。だから、「……ないよ」と言ったものの、本当を言えば体育の先生に、ひどく引かれた記憶がよみがえってきた。

それは中学三年のころであった。

その先生は体育大を出たばかりで、しかも在学中に国体に出場したことがあるという、水泳が得意であった。

夏、プールサイドに立っていた、パンツだけの先生のたくましい筋肉のイメージが、目にやきついていく。

彼も毛深い男だった。

女生徒たちからも人気があった。それが、

ほくはくやしかった。特別に口をきいたことなどなかったが、水泳の時間に、ほくはわざと皆からおくれ、ゆっくりと、しかもあえぐように泳いだ。

もちろん先生の注意を引くためであった。

「おい、がんばれ！」

そうはげまされた声をおぼえている。

ゴールにたどりついてから、クラスの連中の目をよそに、ほくは先生の顔を見上げた。忘れられない先生というより男性であった。

しかし、いまそのことをあにきに話したくない。あにきにかくした理由とえば、いまの場合、お互の心の摩擦をさけるためであったのだ。

つまり、ほくとあにきの間には、もはや過去の出来事や人間は必要としない。

(二)

二カ月がすぎた。

ほくとあにきとの関係について、白ブタが気づかずに、長い間いるわけはなかった。ひとは、ほくとあにきは、激しく交わりをつづけるうち、しだいに、大胆なふるまいをおこなうようになったせいでもある。

もうすでに真夏であった。

ほくらは、あまりにも激しいプレイにつか

れ、つい寝入ってしまった。

そこへ白ブタがつとめから帰ってきた。

不用意にも、ほくらはドアのカギもしめな
いまま、同じベッドの上に身を横たえ、不自然な形でいたのだ。

もちろんむし暑い夜のことだから、抱き合
っていたわけではない。しかし見ればそれと
わかる姿であった。

つまり、ほくらは裸のまま同じベッドにね
むっていたのだ。

それまで、ほくらはひとりの女性と同じ部
屋の中で暮らしながら、異性である彼女を無
視し、無関係でいられることを、ひそかな悦
楽として暗黙のうちに、その関係をあにきと
の間に持っていた。

そのためにも、白ブタには秘密を見やぶら
れたくはなかった。少なくとも、ほくはそん
な考えであった。

いっぽう、あにきにすれば、白ブタと関係
を持たずにいることで、彼女への嗜虐を楽し
んでいたのかもしれない。

だから、それと感づかれるようなところを
見られてしまったことは、失敗とも言える。

そのとき、彼女は長いこと、ふたりの寝ざ
まを眺めていたにちがいあるまい。それに気
づいたのはほくであった。

スタンドの明りが、静かな部屋のようにす
十分にさらけだしていた。

いつもなら、ほくがひとりで寝ているはず
のベッドに、彼女は腰かけたまま、不動のま
ざしをすえているのを知ったとき、思わず背
すじに悪感を感じたほどである。

あにきを起こすことはためらった。

あにきは、いびきをかきながら大の字に横
たわっていた。それは、まさに大胆不敵とい
うにふさわしい姿にもとれた。

ほくが目ざめたことに、すでに白ブタは気
づいている。そう感ずると、タヌキねいりを
してはいられない。そんなことより、裸のま
までは恥ずかしくて仕方ない。

まして無関心をよそおっていようとする白
ブタを前にしてだから、なおさらであった。

白ブタが、なにか口をきいてくれることを
待とうとした。その方が、まだすくわれよう
もあるように思った。

しかし彼女は口をきらない。

それは気味がわるくなる。だから、それと
なく足を動かして、毛布をさぐった。

体を横に向け、彼女に背を向けた。

「ねえ……」

やっと彼女が口をひらいた。

それは、あにきに気づかれまいとする声で



MINE

あった。

なぜ、彼女があにきの眠りをさまそうとしないのか、そのとき考えてみても、それは納得のいかないことだった。

「あの人には黙っているから、あんたベッドを変わりなよ」

あの人には黙っている——この言い方は、あとで考えると、なにか、いわくありげな言葉となった。

ぼくは、そっとパンツをはいた。自分のベッドに移った。

それから朝まで、ほとんど眠られなかったと言ってもよい。

彼女は、しずかにパジャマに着がえ、あにきの横へ小さくなり、スタンドを消した。

ぼくの目はさえるばかりである。

寝がえりを打つあにきの動きはあったにしろ、彼女は、じっとして動くようすはない。おそらく白ブタも寝つかれずにいるはずだ。

ぼくは考えた。

これで、あるいはあにきとの関係も終りになるのではないか。それに白ブタに見られてしまつては、ぼくらの関係も、その意味の半分は失われてしまう。

そしてまた、今後ぼくに対して彼女はどんな態度に出るか、なに食わぬ顔で寝ているあ

にきにすれば、今夜のことは、白ブタが口を入れないかぎり知らずにいるかもしれない。

ひそかな楽しみが、他人に見やぶられてしまえば、その場かぎりですべてが徐々に失われていくような気がする。

興奮と感激さえいだいた、あにきの腕や胸毛や、そしてわきがのにおいさえも、なにか無意味なものに見えるような気もした。

それは暗い穴へ落ちこんでいくようにも見え、暗い穴の中で、こんどは、ぼくは別の、異質のものに嗅覚をうばわれていくような予感もした。

ところが、こんなことがあっても、ぼくら三人の生活に目立って大きな変化はなかったのだ。

つまり白ブタがあにきになにも言っていなかった。もちろんぼくも言っていない。それだけに、ぼくは不安と言えは正確ではないが、白ブタがこわくなった。

彼女に秘密をにぎられ、それがなにかの切札となり、ぼくの生活を狂わせはしないかということだった。

「どうしたんだよう、興にのらねえ顔しているじゃねえか」

もちろん、その後のプレイのときだった。

「おもしろくねえのか？」

「……………」

心もち笑いを作ったが、それがかえって、あにきを不快にさせたようでもあった。しかしあにきは、ぼくの心のわだかまりを和らげようとはしなかった。

むりやり毛深いからだを押しつけてきた。そして手を下にまわし、激しくというより、乱ぼうなくらいの仕草である。

そんなあにきの行為を受けていくうち、あにきの働きかけにはさからい切れず、ついには舌を用いながら、はじめのときみたいな嫌悪感に苦しみはじめた。

だから、こんな関係をいつまでもつづけられるわけはなかった。つづけるとすれば苦痛がつるばかりであると思った。

そこで、白ブタに気づかれていることを打ち明ければ、あにきとの関係も終るのではないかと考えた。

あにきは、たばこの煙で輪を作りながら、天井を見つめていた。

「おもしろいじゃねえか。やつが気づいてい

るなら、やつ目の前でやってもいいぜ」

「そんなこと……」

「できねえって言うのか。できるさ」

持っていた。

それはなぜだったろう。

「おい。やつの前でやるんだ。どうだ？」

「……………」

ぼくは黙っていた。

そのかわり、以前から考えていたことをたずねた。

「あにきは白ブタと、いまでも無関係でいるのかい？」

間をおいてから、あにきは、

「……………」

とかすかに言った。

が、それは信じがたいことだった。

「じゃ、どうして男とさ……………」

「そんなことはどうでもいいじゃねえか。とにかく、おれは、おめえが必要なんだぜ」

と言った。そのあと、

「白ブタのやつ、気づいていながら黙っているところは……………」よし！」

あにきは、そう強く言ったまま、なにか考えているふうだった。

それがどういふことか、少なからず、ぼくにも気がかりであった。

(三)

じっさい変な気持だった。

白ブタを前にして、ぼくとあにきが楽しもうと言うのだから。そうすることで、あにきの

考えていることが、狂いなく果たされるかどうか疑問であったし、また、白ブタなら逆に、ぼくらの行為を凝視するかもしれないとさえ、考えられた。

そんな白ブタの態度が、その後、それとなくぼくには感じられた。

「おい、ミー坊。やつが帰ってきたなら、おれがすることを、まず黙って見ていろ。いいな」

「……………」

彼女の帰る時刻が近づくにしたがい、ぼくは落ちつけなかった。

「そんなことできる。気分的にさ……………」

「できるさ。とにかく見ていな」

あにきは強固である。

そんなあにきを見ていると、ますます興奮させているのに気づいた。同時に、白ブタになにをしようというのか、そのことにも好奇心といっしょに、不安めいた気持すら起きた。

白ブタは帰ってきた。

いつになく、ぼくらふたりが起きているのを、不審に感じたようすだった。

「おい。おめえ、おれたちに言いてえことがあるんじゃないかねえのか？」

と、あにきは詰めよった。

「べつに……………」

「ねえはずはねえだろう。え？」

「……………」

彼女は和服のまま、着がえもできず立ちすくんでいた。あにきの勢いが、それだけすぎましかったせいでもある。

彼女の目もとには、酒気がただよっているようだった。その、とろんとした目が、余計に、あにきを刺激したらしい。

「おめえにしなければ、おれたちの方にあるんだ。いいな」

あにきは、ゆっくりと、しかも後ろにはひく手を見せずにせまった。

そんなところを見ていて、ぼくは自分がかにかにおびえているのに気づいた。それはさけられない身の危険に似たもののようにさえ感じた。

「なにをするのよ！」

あにきの勢いにのまれ、それでも後退しながら彼女はわめいた。しかし、あにきは手加減を加えることなく、白ブタの利き腕をねじ上げた。

「いっ！」

彼女は一瞬よろめいた。

あにきは、片方の手で彼女の帯をといった。

そして肌着だけにして、ベッドの上にねじ伏せ、用意していた細引きで、ぐいぐい両手首からしめ上げていく。

白ブタは足だけをばたつかせる。そのぶりぶりしたももから腰にかけての部分が、ほくの目を刺激してくる。

「やめて！」

必死にさからっているが、あにきは力をゆるめるはずはなかった。一気に彼女の自由をうばい、しぼり上げていた。

「さあ、ぞんぶんに眺めろ！」

ほくらが使うはずのベッドの方へ顔を向けさせられている白ブタに、あにきは言った。

自分の体重で押しつぶした格好になっている白ブタの、ふくよかな胸は、それでも大きくあえいでいる。かっと見開いた両眼は、異様なかがやきを見せていた。

「さあ、ミー坊。仲のよいところをお目にかけようじゃねえか」

あにきの言葉で、ほくはわれにかえった。

じつのところ、すっかりどぎもをぬかれた感じだった。それに、肌着からむきだしている彼女の肩やふくらはぎなど、ひどく目について、とてもプレイなどする気持は持てなかった。

「さあ、ミー坊」



あにきは、すでにパンツだけになってベッドに腰かけている。

「どうしたんだよお」

「……」

ほくは、足が床の上に棒立ちになっていて動かない、そんな心持ちであった。

その間に、部屋の中に沈黙があった。

「キッヒヒヒ……」

突然に、白ブタが甲高い笑いを立てた。

「ふん、何もできないじゃないの。あんた！」

なにをしようって言うのさ！」

気でも狂ったのかと思われるような、白ブ

タの言葉がつづいた。

「この野郎！」

あにきは、いきなり白ブタに近づき、平手打ちを、つづけざまにくれた。

「ぐっ！」

白ブタはなぐられている間は、わめきはしなかった。それがあにきを刺激したようだ。いきり立ったようにバンドを取りだした。

「このあま！」

白ブタの肉を叩きつけるベルトの音が、ほくの耳にこたえた。ベルトは腰やももだけでなく、肩口にも飛んだ。

「いっ！」

白ブタはうなった。

そんなリンチがなぜおこなわれたのか、また、あにきの怒りが、どこにその理由があったのか、ほくはのみこめない。

とにかくプレイは中止された。同時に、異常な興奮がほくをおそった。

そのあと、ぐったりしている白ブタをよそに、あにきは無言のまま、部屋を飛びだして行った。

ほくにさえ、一言も声をかけなかった。

それから長いこと、ほくは自分が立ちつくしていたことに気づいた。そして白ブタの方

に目を向けた。

彼女は片頬をベッドに伏せたまま、かすかに息をしている。

「あんた、あの人がそんなに好きかい？」

白ブタが言った。

ほくは答えなかった。

「そう……あたしはどうなの？」

「……」

彼女は、ひとりごつのようにつぶやいた。

「あんた、まだ童貞でしょう？」

「……」

「女のからだに興味ないの？」

「……」

「いまのあたしなら、あんたの手で、どうにでもなるのよ……」

「……」

彼女は身動きしないままである。

「あんた、こんな生活していて、これからさき、どうするつもり？」

「わからないね……」

はじめてほくは応じた。

「もしもよ、あんたがその気になるなら、あたし……」

と言いかけて口をとじた。

そのあと沈黙がつづいた。いったい白ブタは、なにを言いたいのだろう、と思い、その

間に、ほくはいらだちみたいなものを感じはじめた。

「あんた、あたしの……ナワをとくことができる？」

「……」

「できないでしょう？ あの人がかわいの。きつとそうでしょう？」

「……」

「それとも、こんな格好をしているあたしを眺めていたいの？」

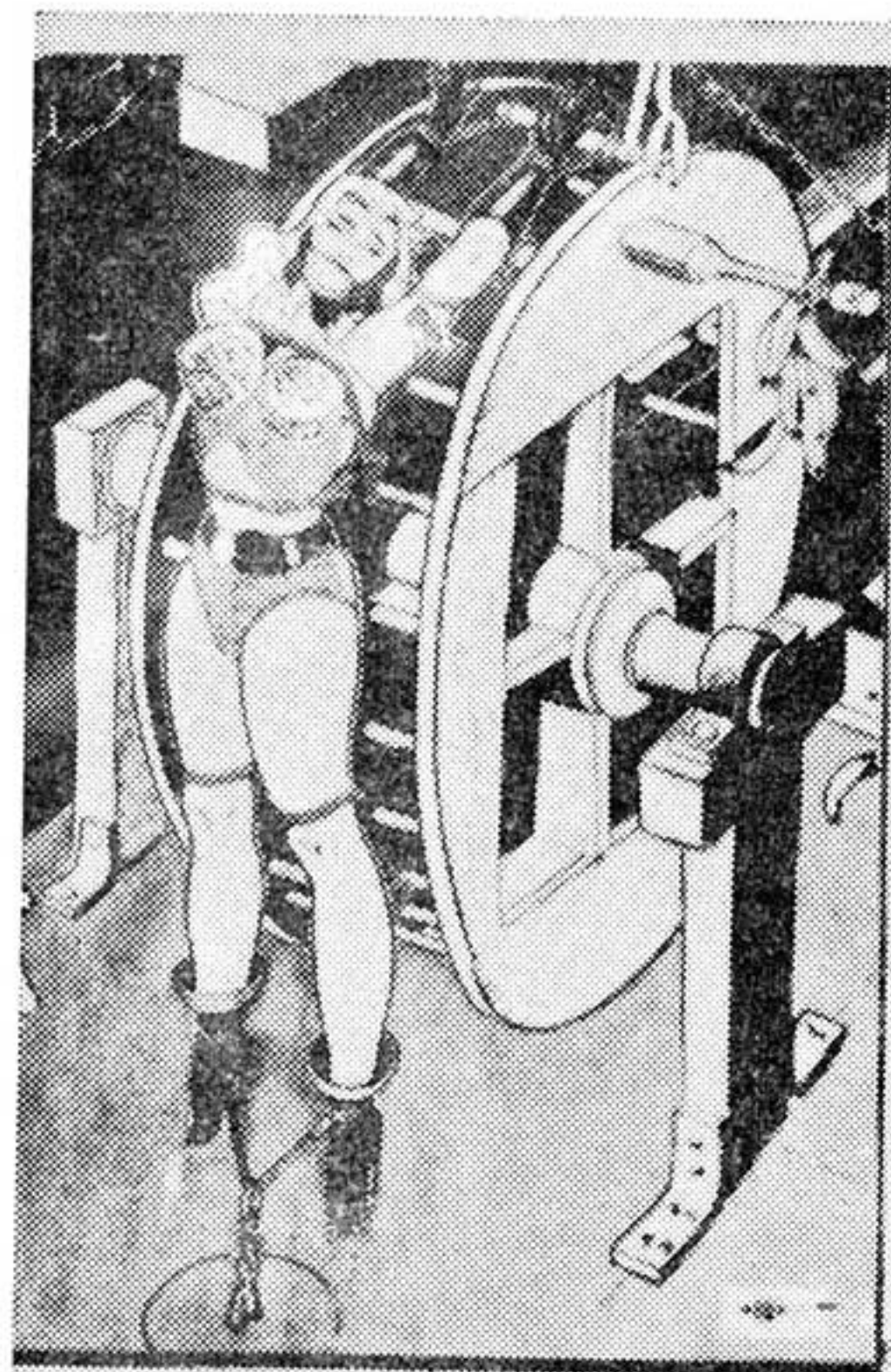
「……」

「あたしにも弟がいたわ。ちょうど、あんたくらいの年ごろね。……ねえ、いっしょにここからぬけださない？ このままだと、きつと、あんたもあたしみたいな目にあわされるのよ……」

彼女はほくに目を向けていた。

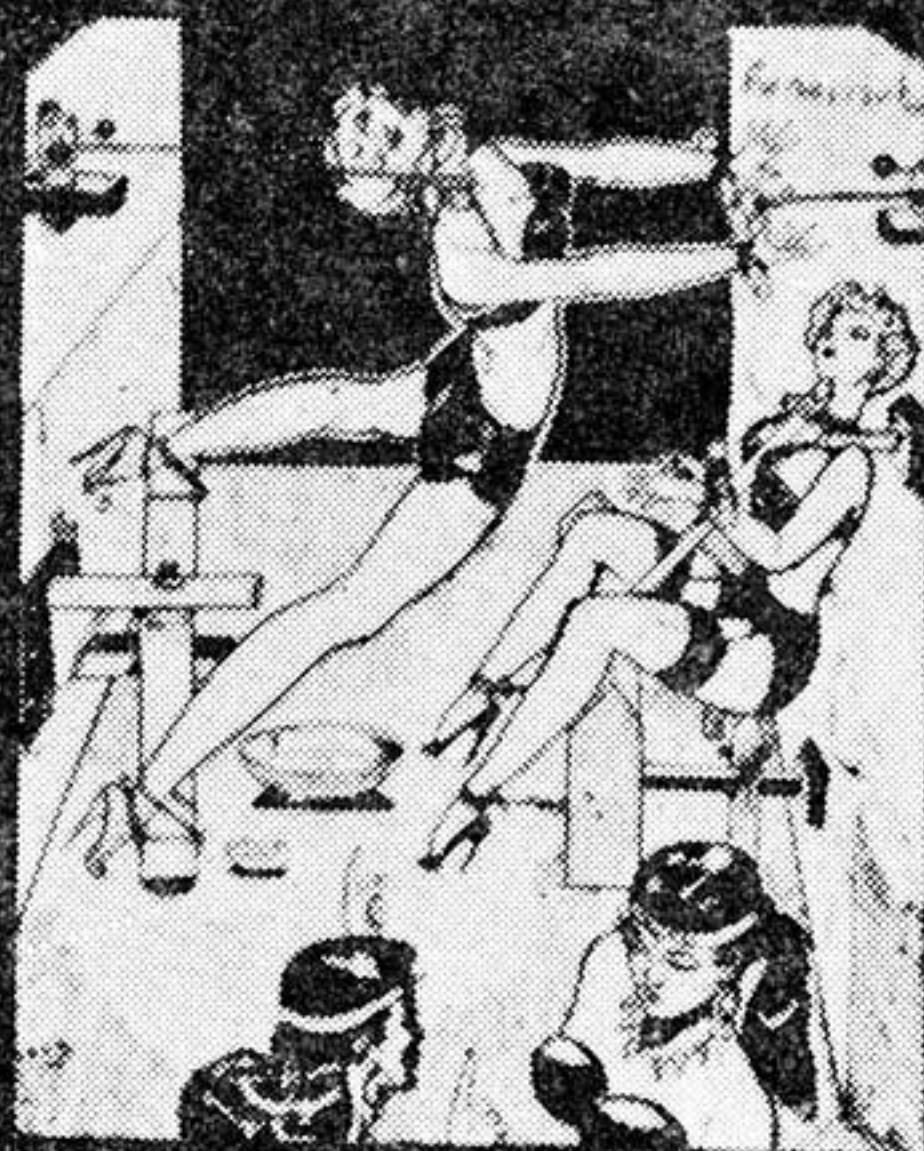
その乱れた髪やバンドで打たれた皮ふから受ける妖しげな悲愴感が、ほくを刺激してきはじめた。





BRUTAL PUNISHMENT FOR CAPTIVE GIRLS

Published by Nutrix Co



A BOOK SOUND TO PLEASE

ILLUSTRATED
WITH 60 DRAWINGS

■アメリカSM絵物語

男爵夫人の拷問博物館

フェニクス商会・特約

その博物館には、そこをひそかに訪ずれる大勢のお客さんたちを楽しませるために、たくさんの凝った部屋が準備されていました。それぞれの部屋のなかには、それぞれの美しい女性たちが飾られてあります。

いのは、美女たちを固定し、その四肢を屈伸させている各種の道具小道具なのでしたが、お客さんたちの視線は、どうしても、女性の容貌や姿態にばかり、むいてしまうのでした。

彼女たちは、鉄と鋼でできた、すてきなコスチュームに、なさけ容赦もなく全身を固定され、生きた装飾品として、声もなくうめいています。

この博物館にすむ女性たちは、むろん、非常手段でつれてこられたのではなく、これらの苦痛に応じた報酬を、きちんともらっているのです。

そのあまりにも迫力のあるポーズに、お客さんたちは思わず足をとめ、長いあいだ、目には畏怖の色さえうかべて、凝視しているのです。

男爵夫人にとって、お客さんたちに、いちばん観賞してもらいた

男爵夫人は、ほかの雇い主が、その使用人に支払う給料よりも、もっともつとゆたかな金額を、彼女たちにあたえているのでした。ですから、男爵夫人のどんなに苛酷な要求にも、厳格な懲戒手段にも彼女たちは、じいっと耐えることができるのでした。



この博物館に、ある日ひとりの女性が、あたらしく採用されました。彼女は、とくべつの美人でしたので、男爵夫人はこれまでにない大金をあたえることを約束し、「私の命令に、完全に服従してください、もっとたくさん、おかねをあげるからね」

と、ことばをたしたのです。

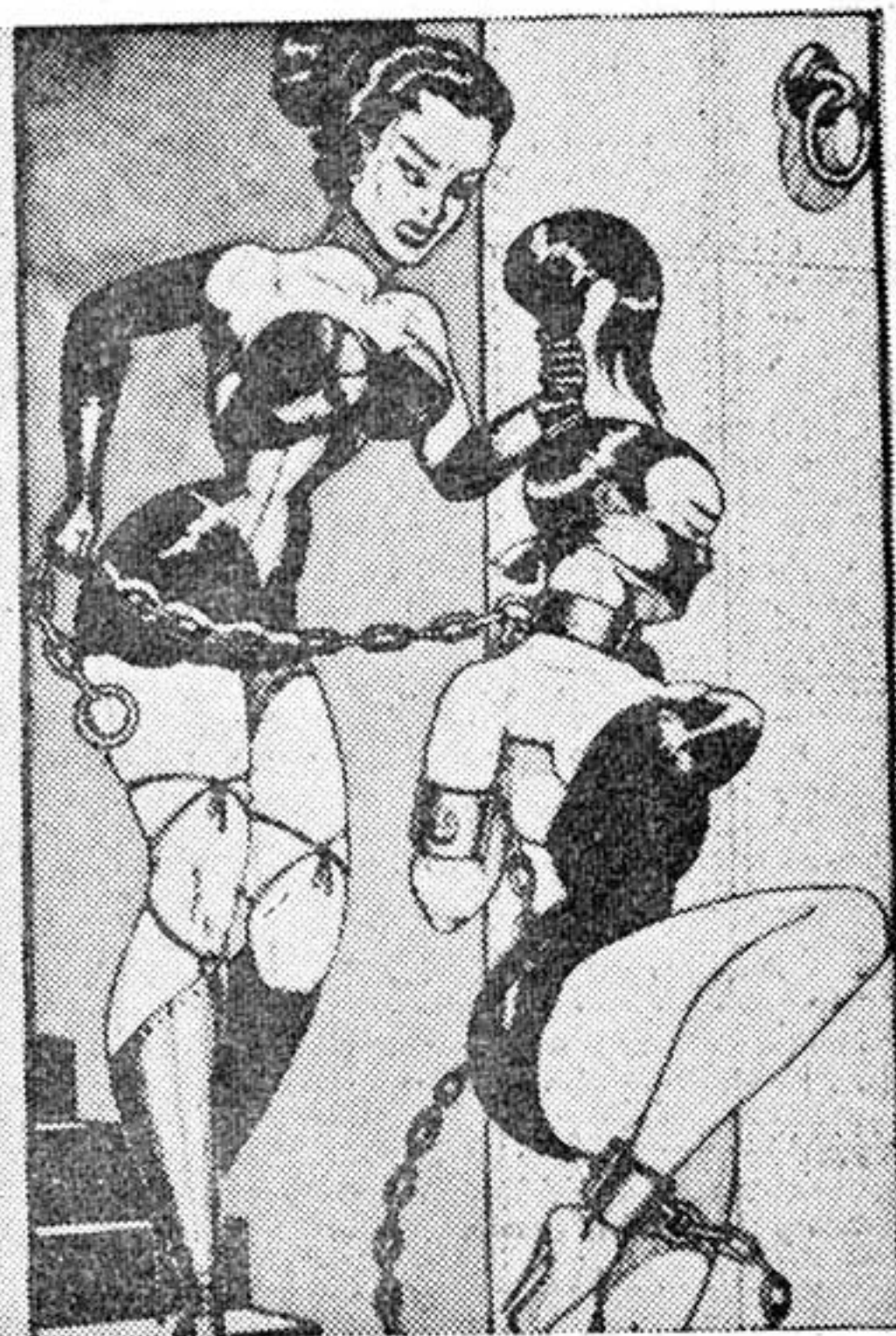
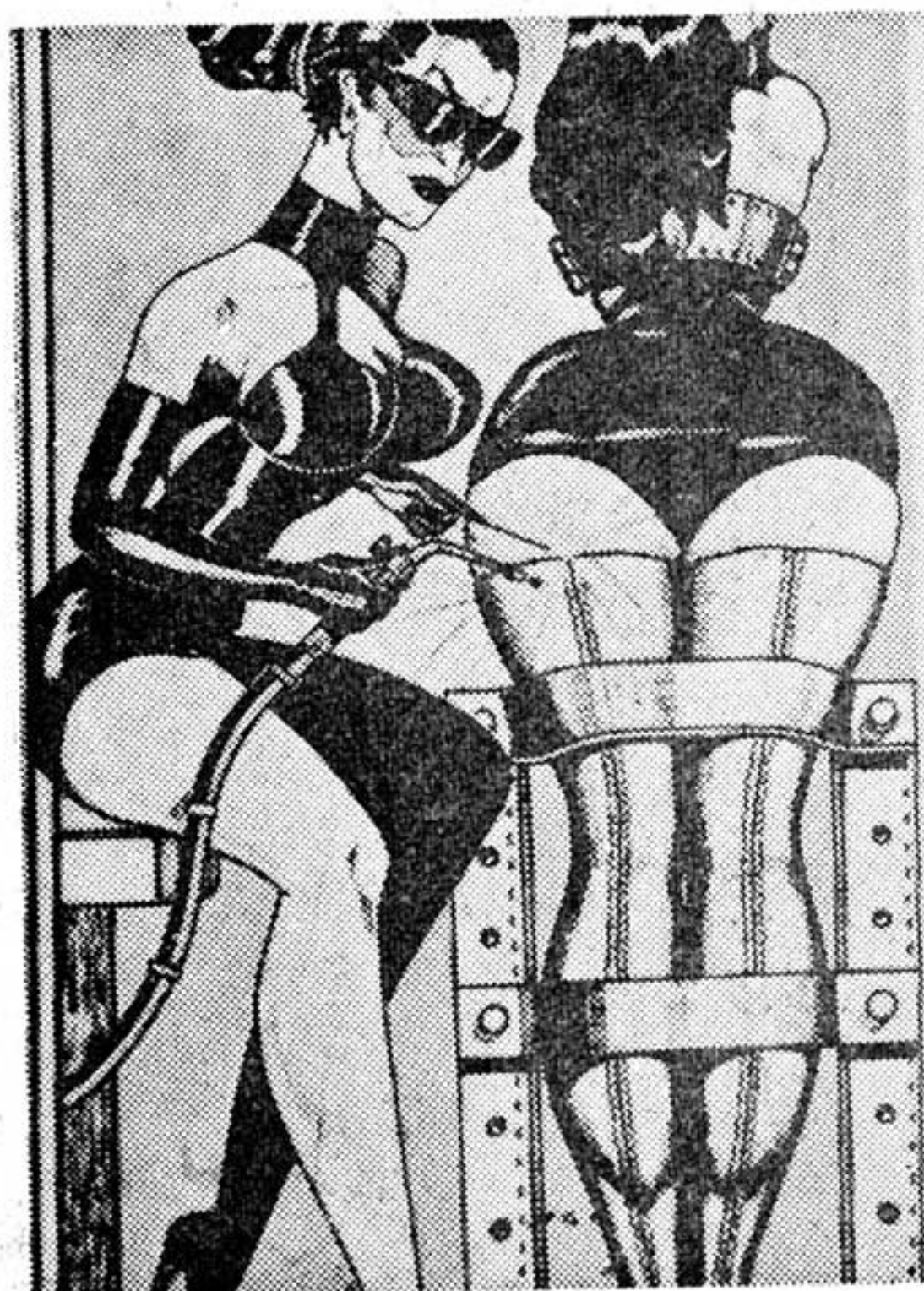
はじめのうちは、まず、館内の見学でした。

その部屋には、いま、ひとりの

先輩が、皮と鋼鉄製の、ニュース
タイトルをほどこされていました。
顔半面に、なめし皮のさるぐつ
わをはめられた女は、鼻の穴から
わずかな呼吸をゆるされているだ
けでした。

両腕は背中にまわされ、鉄のべ
ルトと、くさがりが、その白い腕と
胸とを固定しております。

鉄の首輪が、のどに巻かれ、両
足首にも、にぶい艶を放つ鉄枷が
くいこんでいるのです。



BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

Restraining the girl in a rigid position took a great deal of patience but the Baroness rose to the occasion by shifting the bondage a little at a time until the job was done.

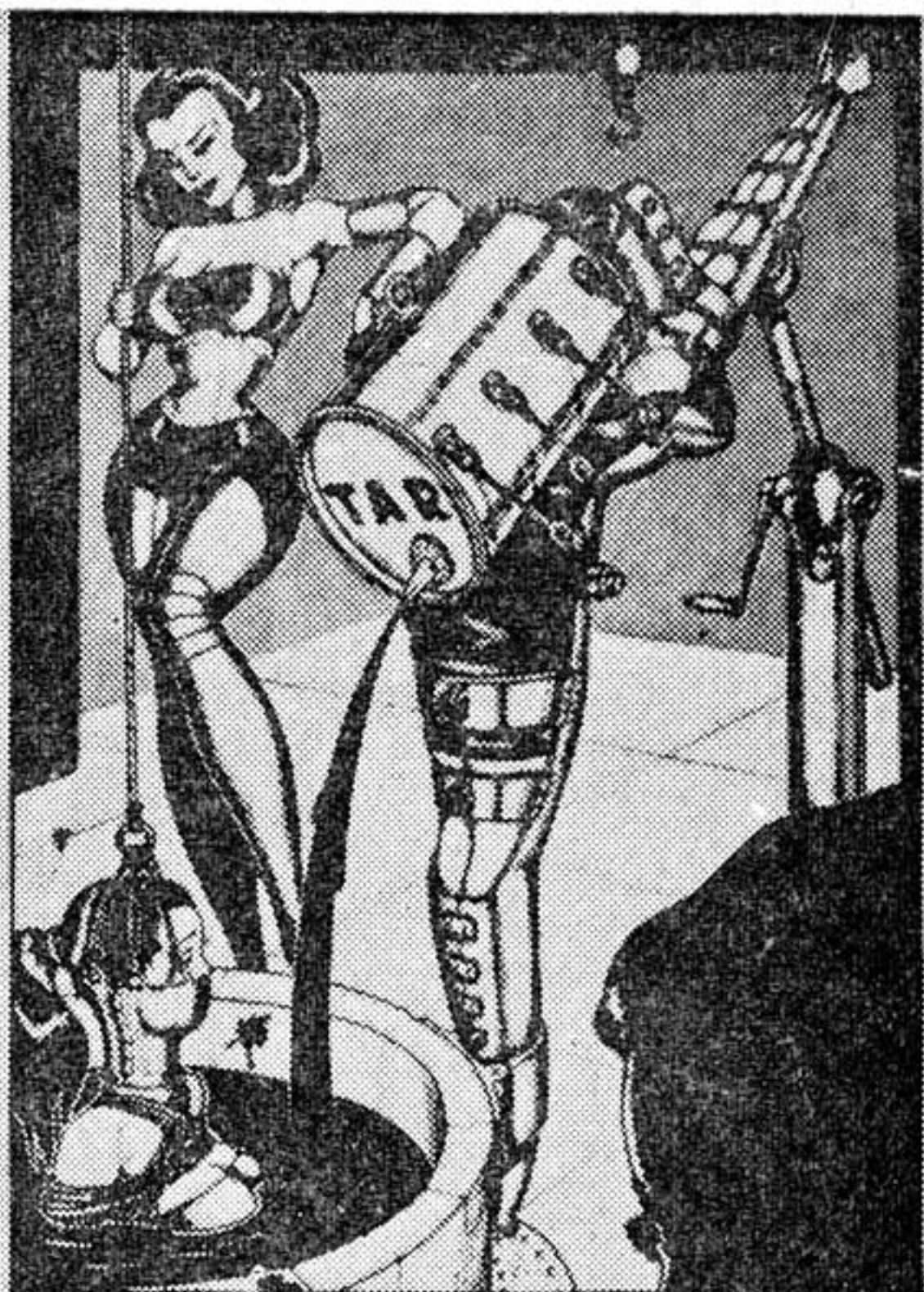
Laughing at the maid's discomfort and struggling to get away from the heat of the welder, as the iron boots constricted the circulation, the Baroness got her victim into the form fitting thigh boots.

After welding the steel high heeled boots on the servant so that they fit so tightly they clung to her like a second skin, the Baroness abruptly grabbed her by the chain welded to the steel bra and forced her to follow her around the premises. Being led around like a dog on a leash was not only extremely humiliating but also being made to walk around on still high heeled boots that she had protested against wearing broke down the strong will of the stubborn servant. By making an example of the girl before everyone in the matter of the refusal to wear the high heeled clippers was a warning to all that the Baroness Steel's stern discipline was sure to follow if there were any more disobedience to the Baroness' regulations.

The recalcitrant sobbing girl was hobbled with chains linking her ankles and upper thighs so that she could only take short halting steps, with every step sending a sharp tingle up from toes to thighs as the Baroness marched her triumphantly all around for everyone to watch and ponder.

Not a single servant dared to make any protest for fear of the consequences that might happen, even if they had the mind to complain against the disciplinary methods of the Baroness.

42



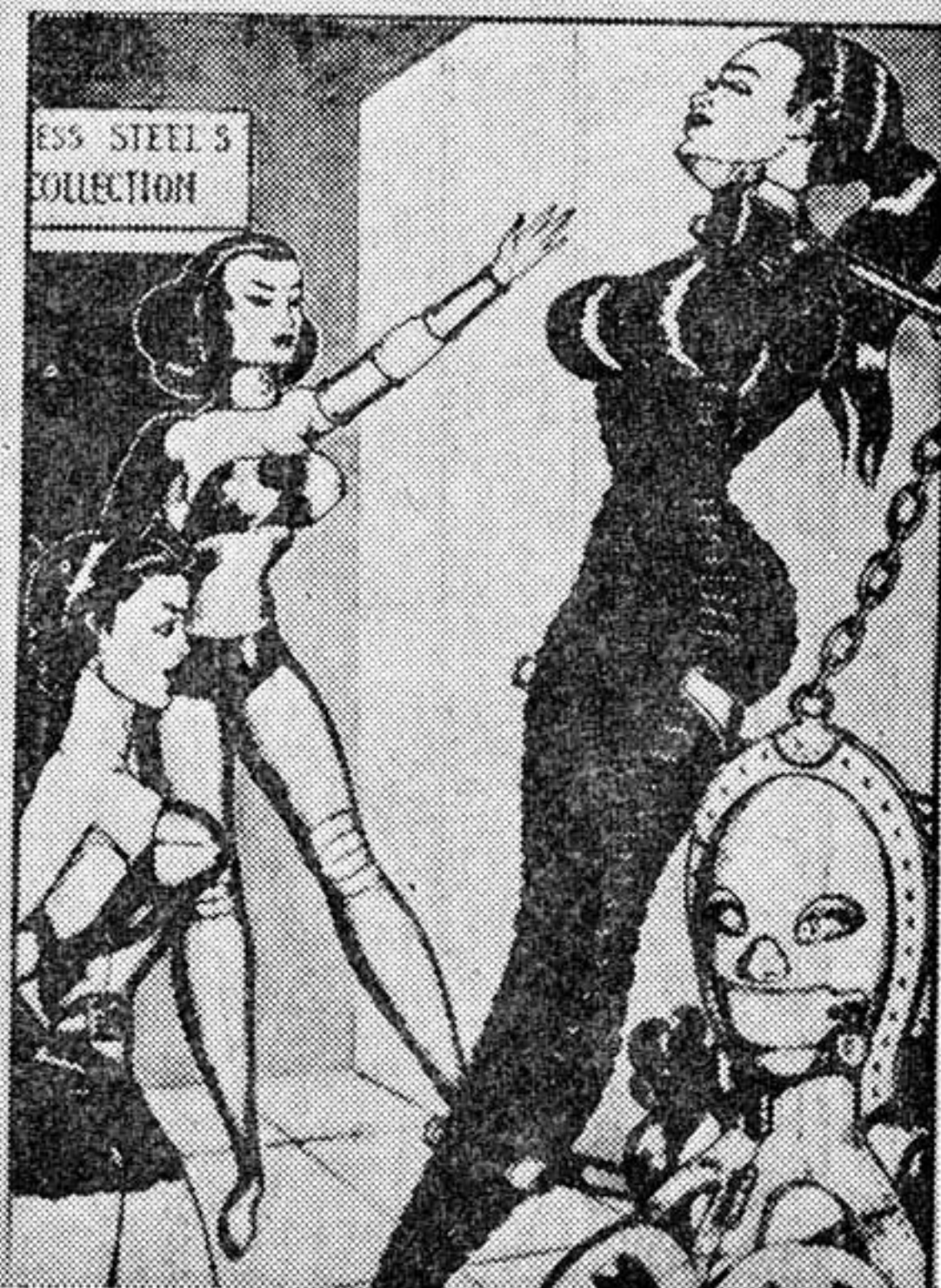
BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

"So you decided to take matters into your own hands and defy my strict orders and wouldn't wear the high heel shoes I selected for you to wear." Well, I'm going to not only make you wear high heels, but I'm going to weld them on to you so that they can't be taken off until I give the word to do so. This will be your punishment for rebelling against my regulations and to make sure that a good fit is made on your new high heels, I'm going to oversee the work myself. I have just the pair of all steel high heeled boots for you that, with a little adjustment, should make you very happy to wear the regular 6-inch high heel shoes in the future.

Putting on a pair of dark glasses to protect her eyes, the Baroness took out a welder's outfit she had on hand and proceeded to weld together a pair of steel boots with extreme seven inch spike heels. First, Baroness Steel welded an iron brassiere to the girl's figure, taking precautions to have the unfortunate girl held securely in position by steel clamps above the elbow joints, as well as putting a wide band around the thighs and legs, thus preventing a sudden lurch to direct the flaming gas welding outfit towards herself.

After gagging the girl to muffle any outcries, Baroness Steel then attached a set of steel links to the lower part of the bra as a leash before going ahead with the iron thigh length high heel boots. However, fitting the boots presented a difficult problem as the legs and thighs had to be kept rigidly straight so that the boots could be symmetrical in shape conforming with the natural contours of the girl's body during the welding process.

43



そのつぎの部屋では「麻ロープ
緊縛機」にかけられたひとりの女
性が、声にならない悲鳴をあげな
がら、回転していました。

その縄は、みただけでおそろし
い感じを抱かせる固さを示してい
ました。

彼女の肉体は、機械のもつ非情
な正確さで、その縄によって、入
念に巻かれていくのでした。

ロープで着飾った人形は、養成
係の前に直立させられました。

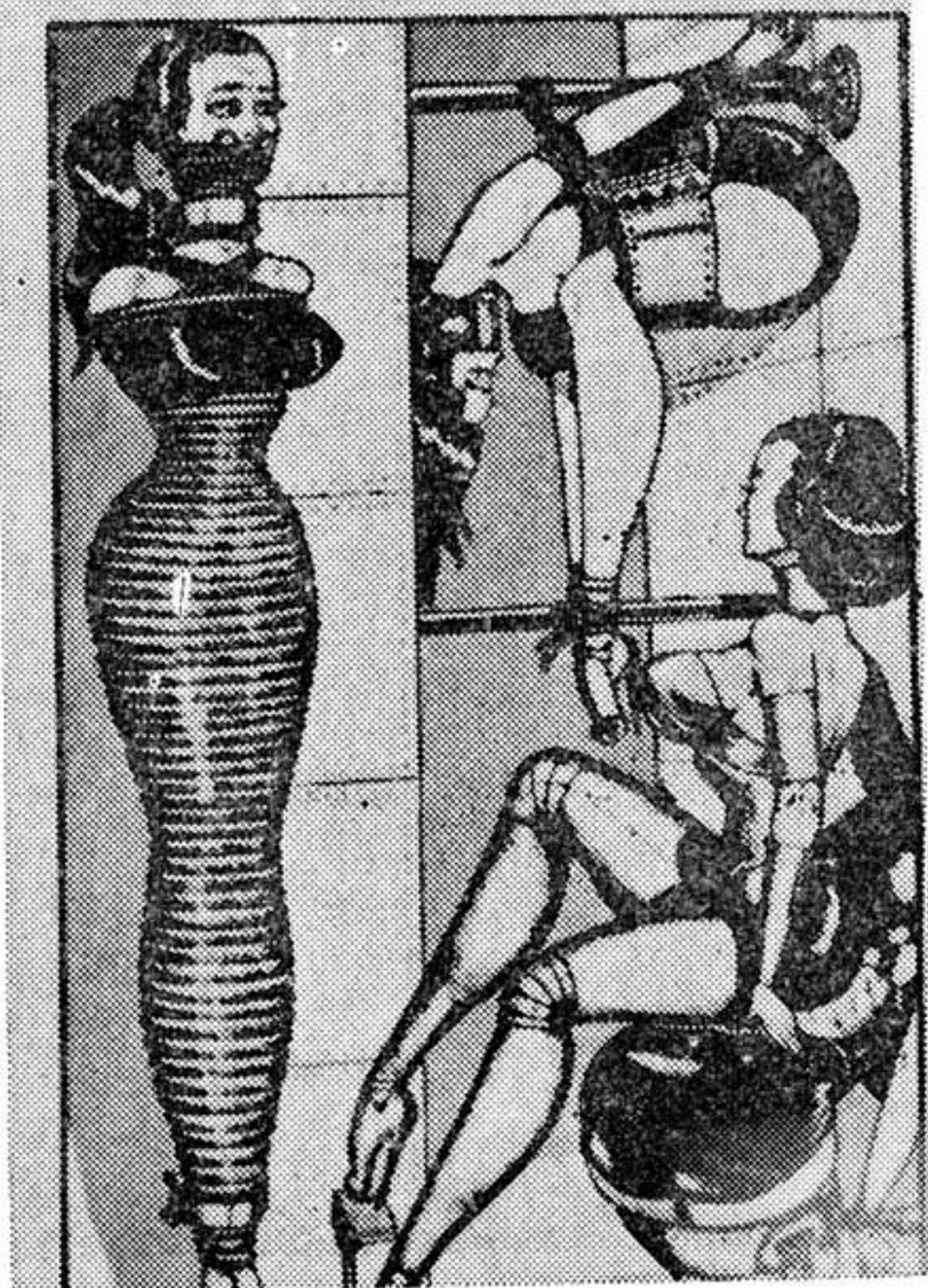
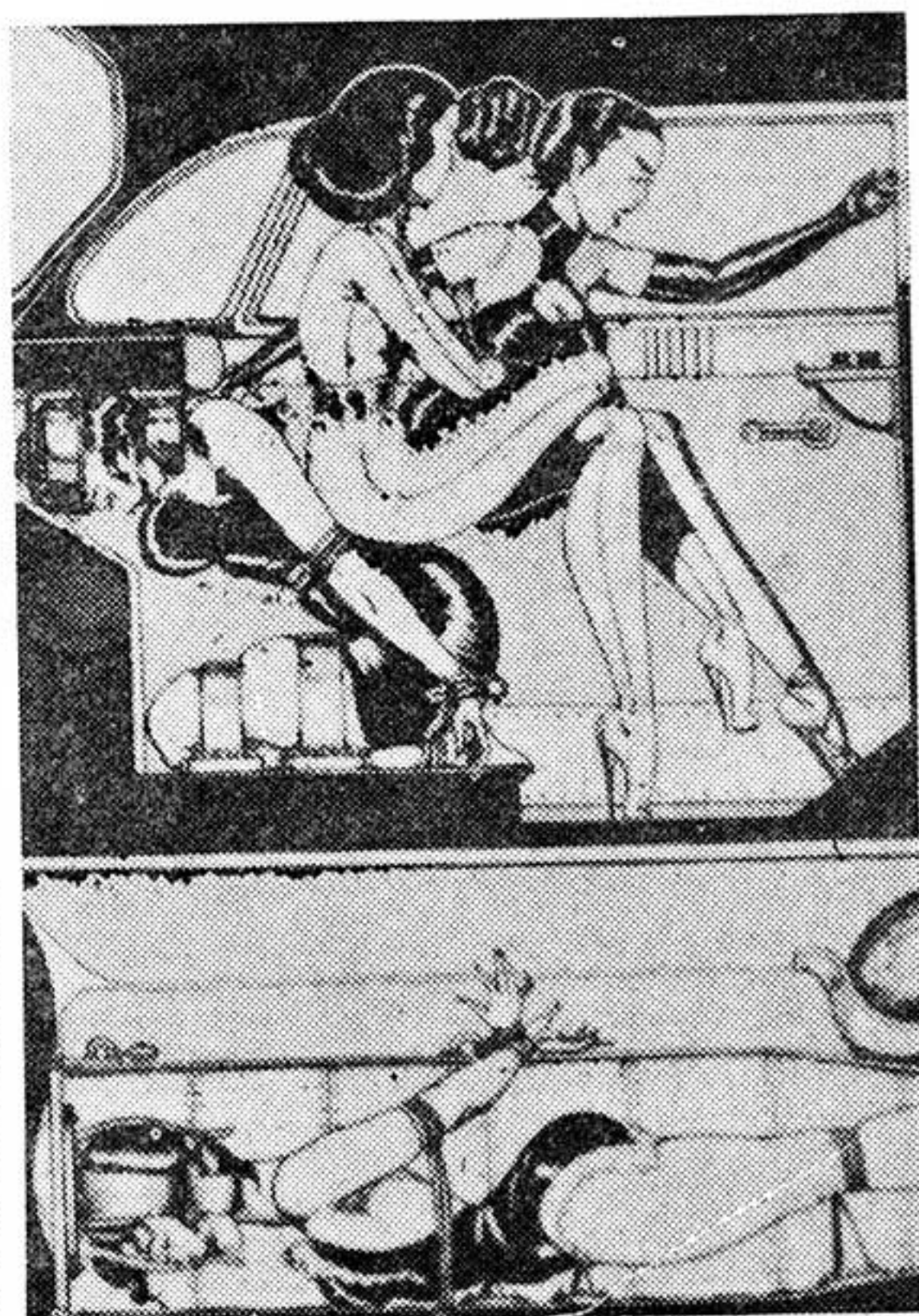
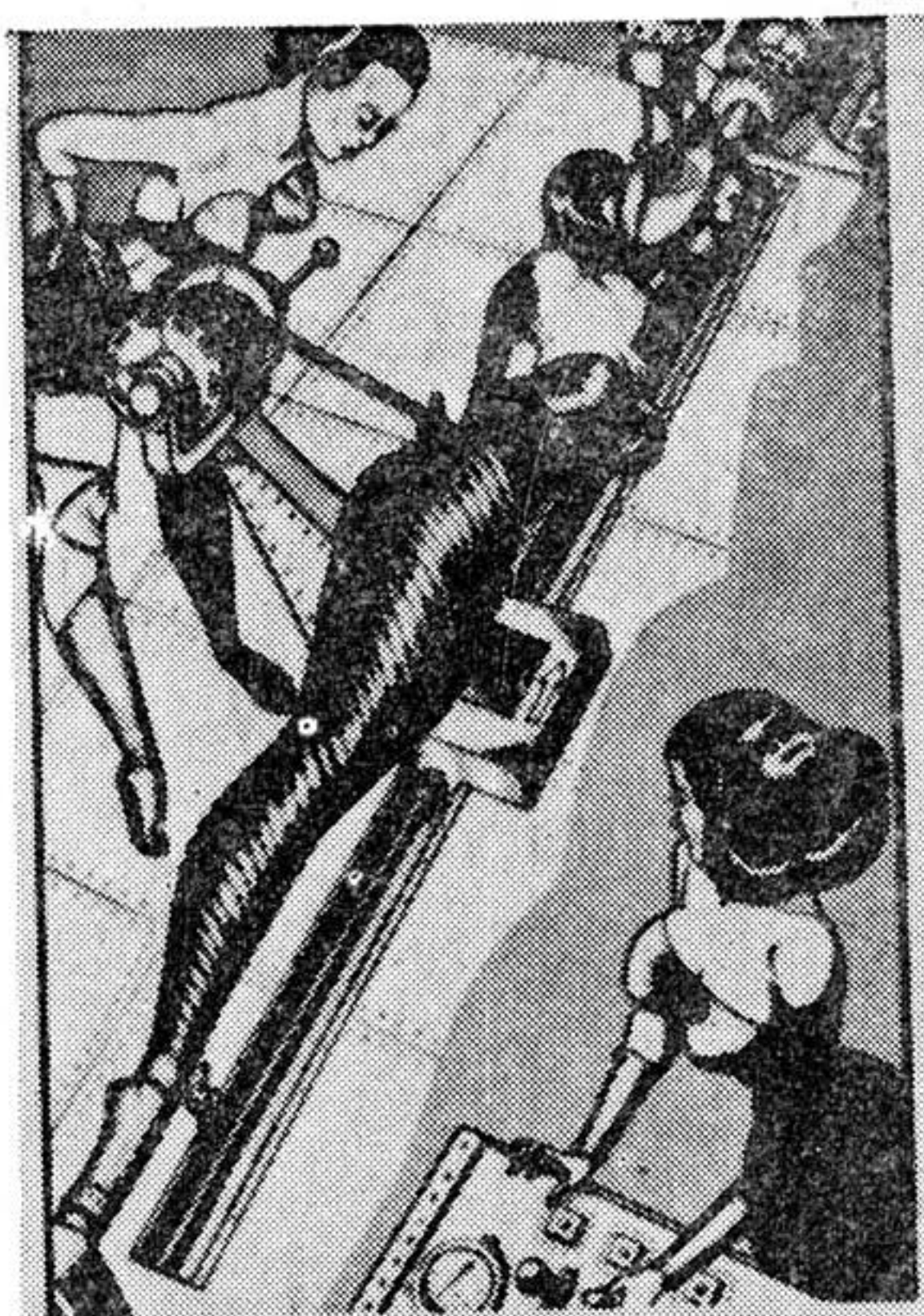
固いロープは、胸から肩へと交
又してのび、彼女のあごから、口
までをぎっしりとふさいでおりま
す。

彼女は、苦痛と恐怖を、目だけ
で表現していました。

「どう、気分は？」

と、養成係がききました。

しかし、それは、返事をきくた
めの質問ではありません。その養
成係のおしりの下にも、肉づきの
よい人間椅子がうめいています。



BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

"I recognized that girl bound to the steel ladder over there, as a particularly stubborn character, with whom I've had a run in with several times before. I want you to go inside and find out from the housekeeper just what she did this time, to merit this punishment. Don't be too long now, for there is so many things I have to do. I cannot allot too much time to any particular servant, unless their madness merit further chastisement."

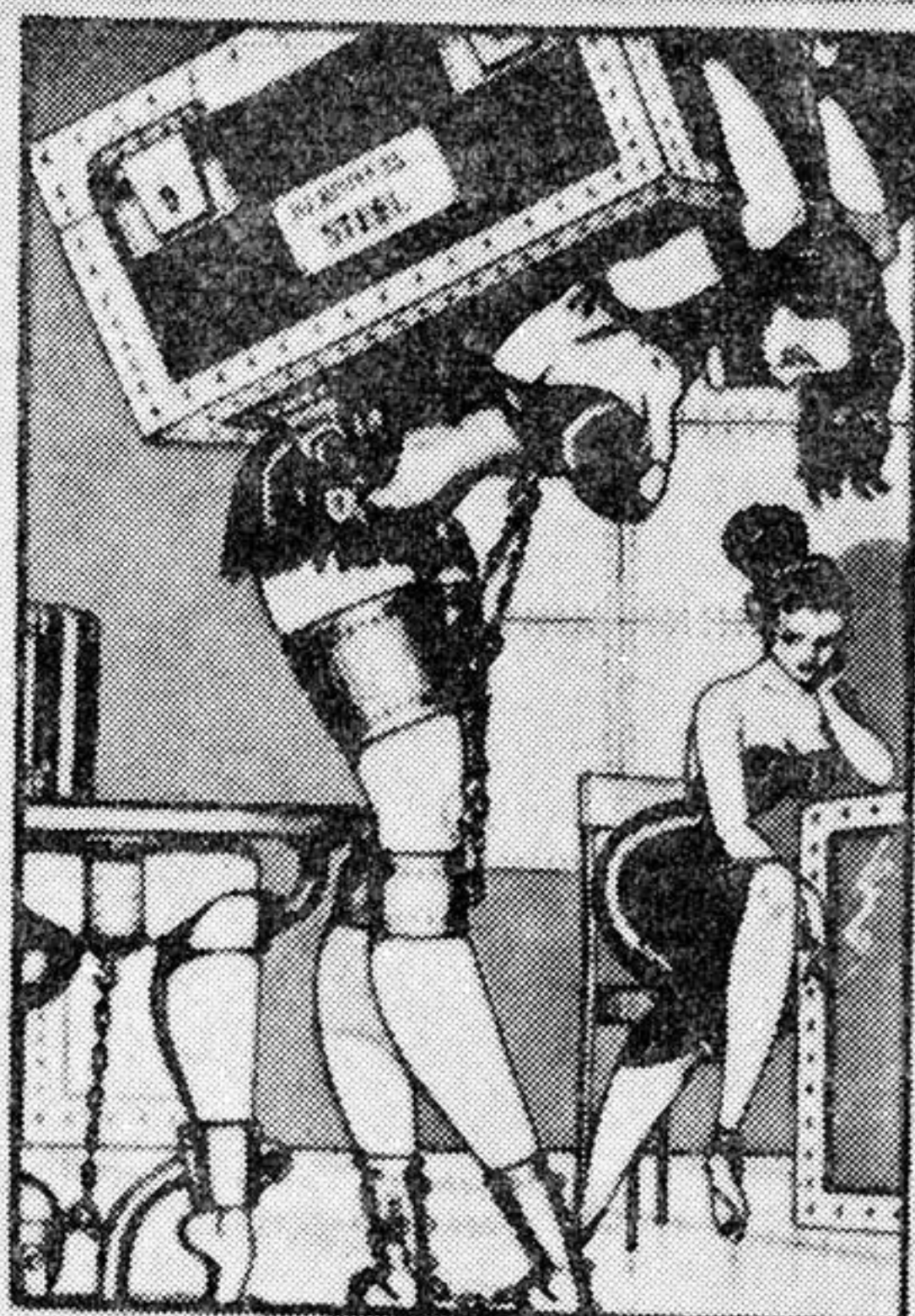
"As soon as I get a full report on their doings, I'll decide further just what is to be done with them. Even though this Villa is in an isolated part of the country, I think we should remove these victims of my housekeeper, inside, where I will go over each case individually and mete out the necessary punishment needed to make them see the error of their ways."

"Take off that servant pinioned there to the wall and have her brought to me," ordered the Baroness. "As soon as I have rested, I'll take care of her case first, as she must have done something drastic. I am quite fatigued at present and want to recuperate some of my energy before I start taking things in hand again."

Bettina quickly ran inside to do the Baroness' bidding, as the sharp tone of her voice bade no good to anyone who went contrary to her wishes, as she was in a very bad mood, partially due to the long journey over rough roads and that things had not run smoothly during her absence.

As Bettina hurried inside, the victim tied on the steps gave her a piteous look of anxiety and Bettina noted a look of relief as well due to the fact she had not been selected as the first servant to get further punishment.

36



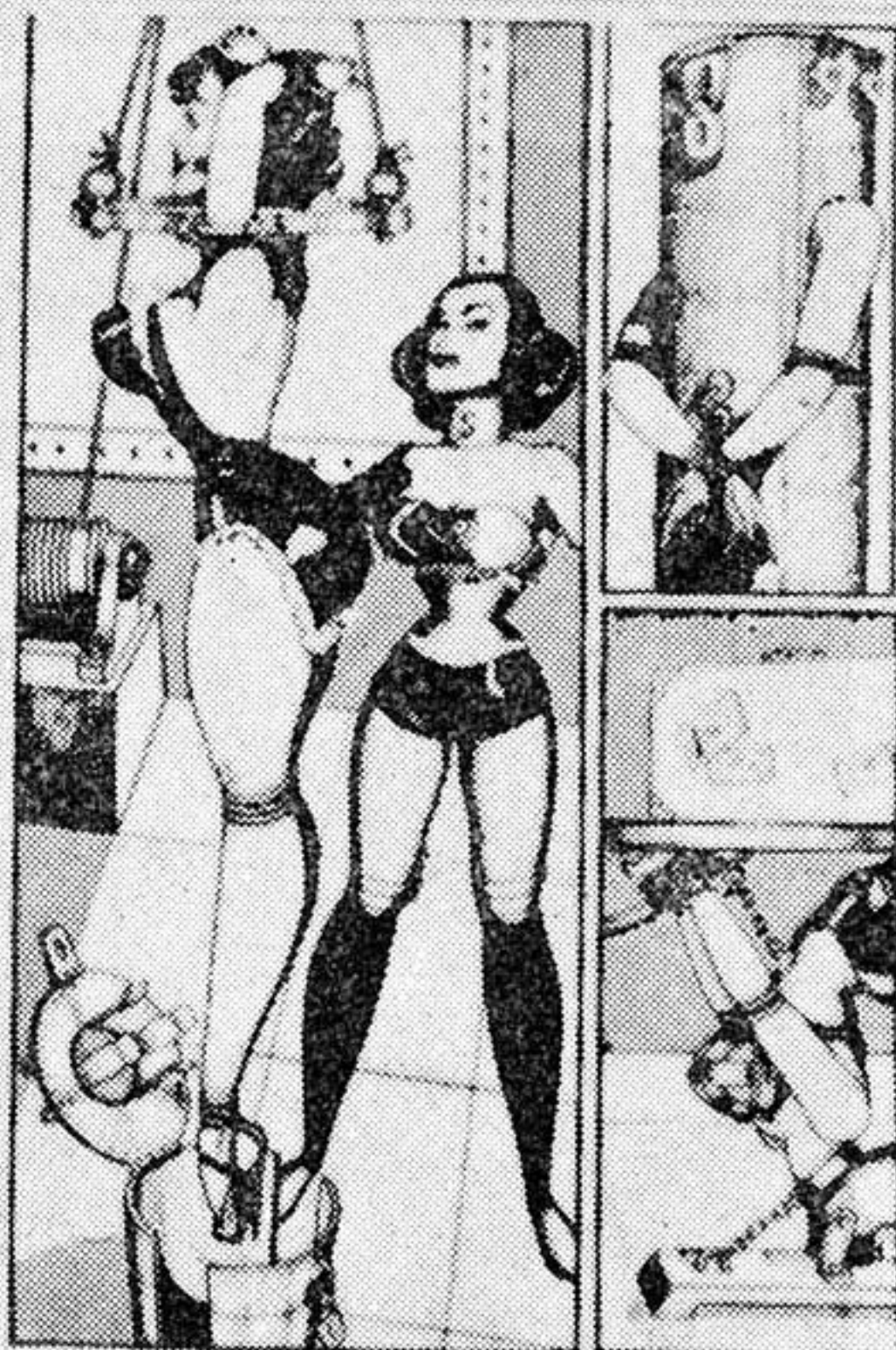
BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

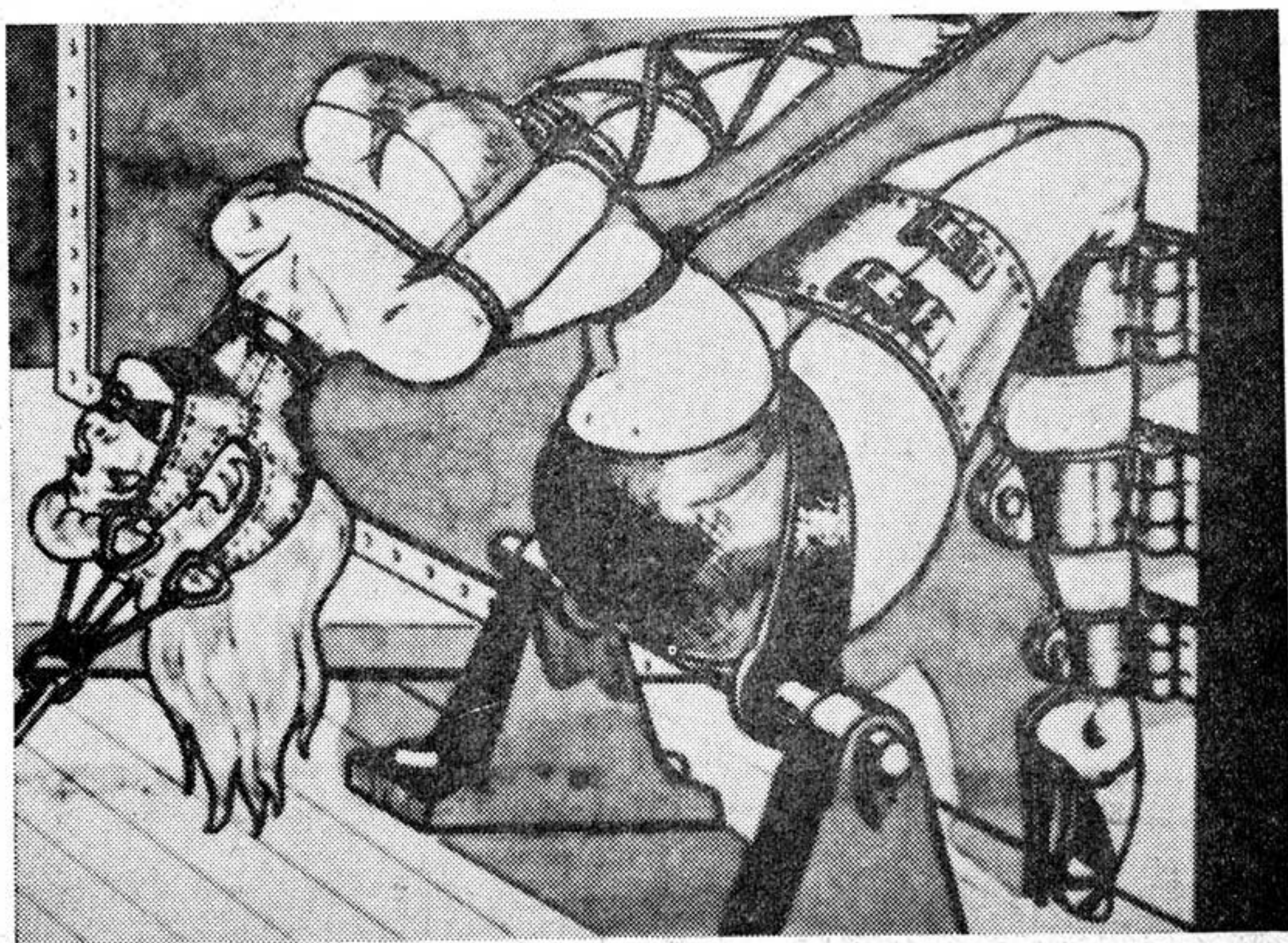
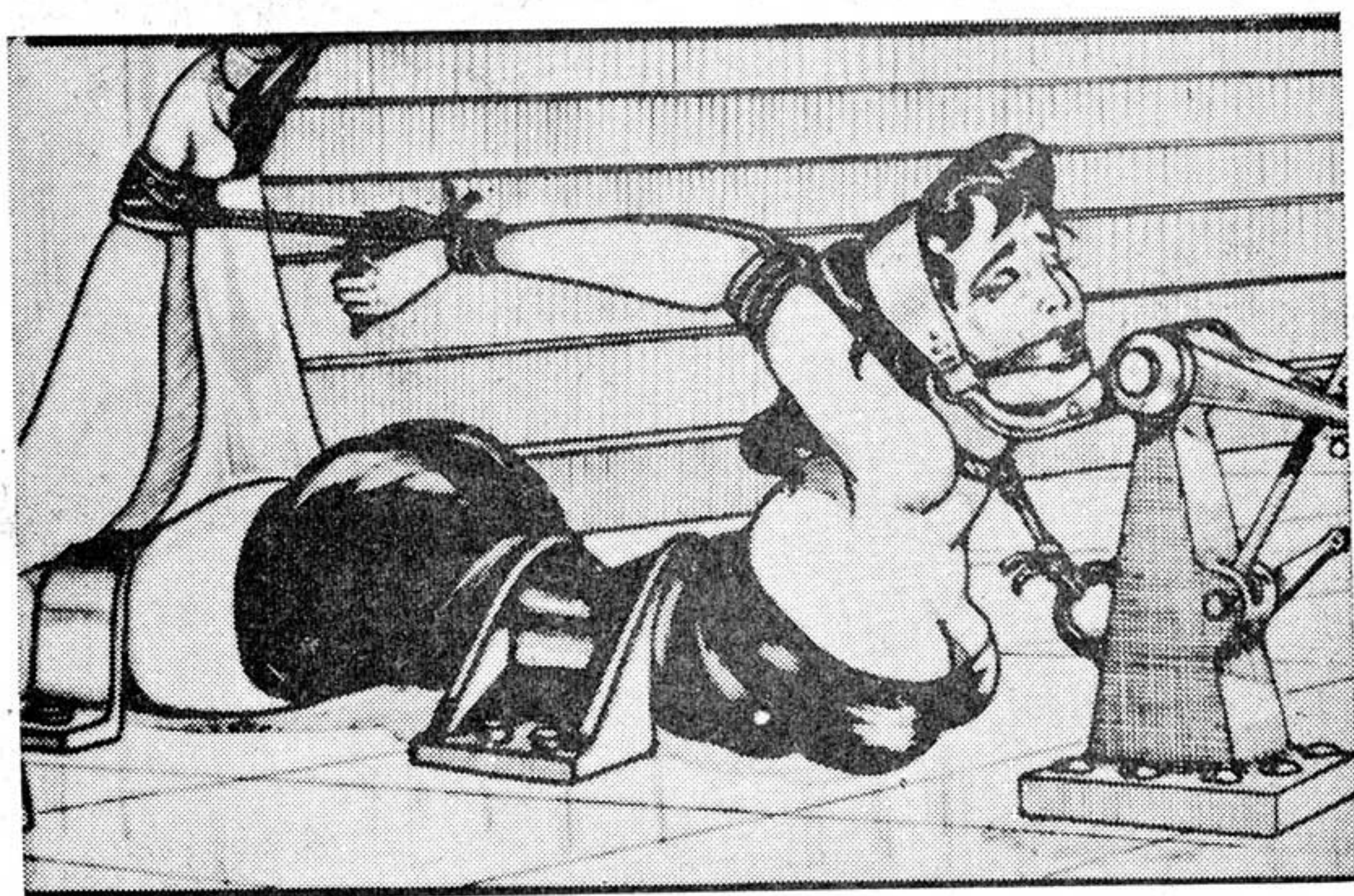
Acting on Baroness Steel's orders, Bettina untied the servant girl from the steps and led her to the room where stern disciplinary action was to be taken against her. As they entered the long hallway to where the punishment was to be administered, the hapless servant with tears of remorse streaming from her eyes, glanced up at another servant who had been chained to the wall. This servant's feet had been inserted into a steel wall bracket and a suit of plate armor fitted to her body with the ever present iron discipline helmet enclosing around the neck and head.

Baroness Steel led the way with Bettina shoving the faltering servant from the rear to keep her from lagging behind. The trio had just reached the disciplinary quarters when they were interrupted by the arrival of one of Baroness Steel's overseers dragging in a chained servant. Upon questioning the overseer, the Baroness learned that this servant had mutinied against wearing the customary 6-inch high heel shoes because they hurt her instep and her arches were weak. This servant had the audacity to ruin an expensive pair of patent leather high heel shoes by first cutting them down in height and also making them open toed by cutting the front so her toes could have more room without first asking permission to do so.

Naturally upon hearing the news that not only were her orders disobeyed and ruining the shoes, as well as setting a bad example for the other servants to follow, the Baroness became extremely angry. Turning the other servant over to Bettina for further punishment, the Baroness gave her personal attention to deciding the fate of the girl who had done this unheard of mutiny in her domicile.

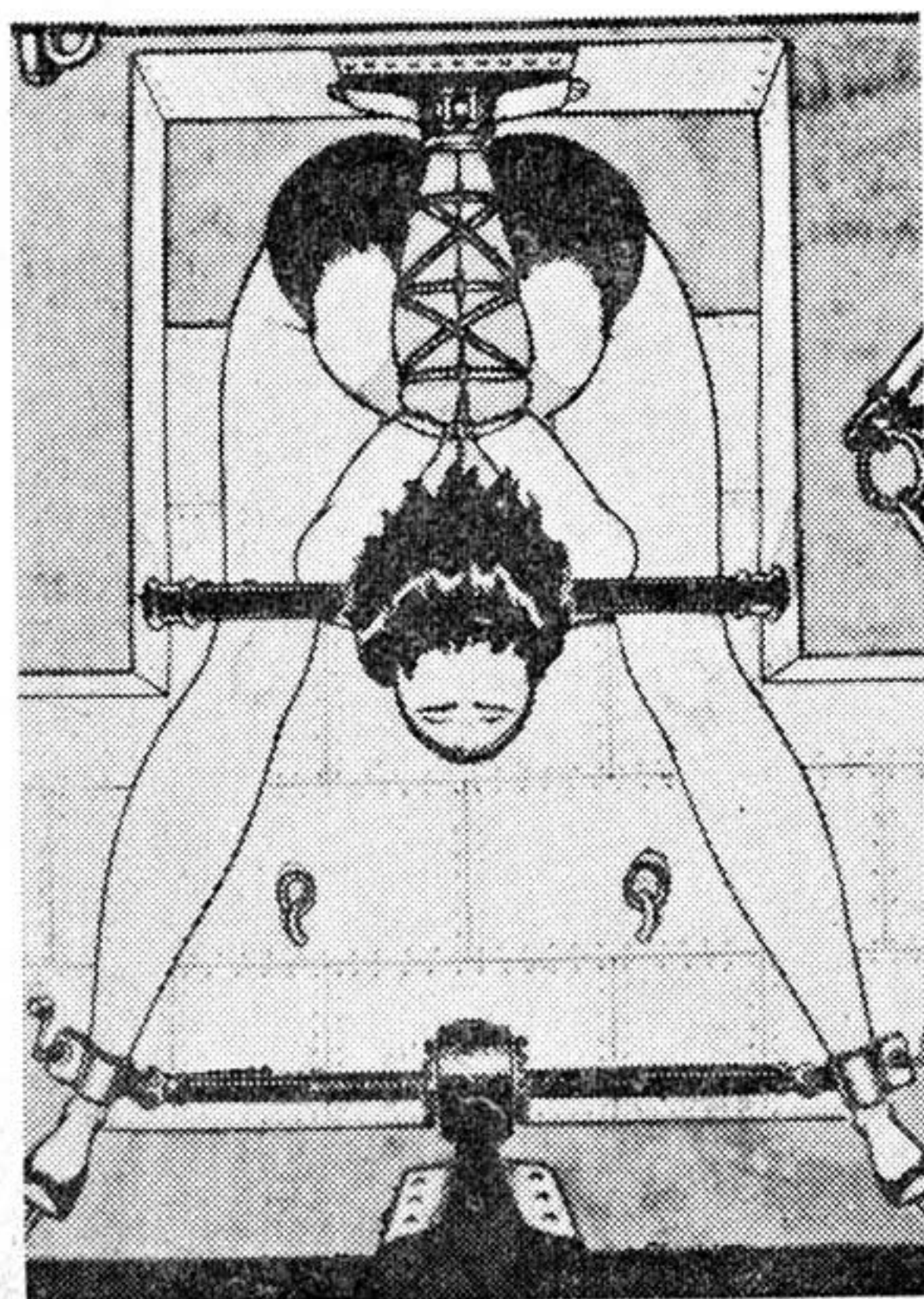
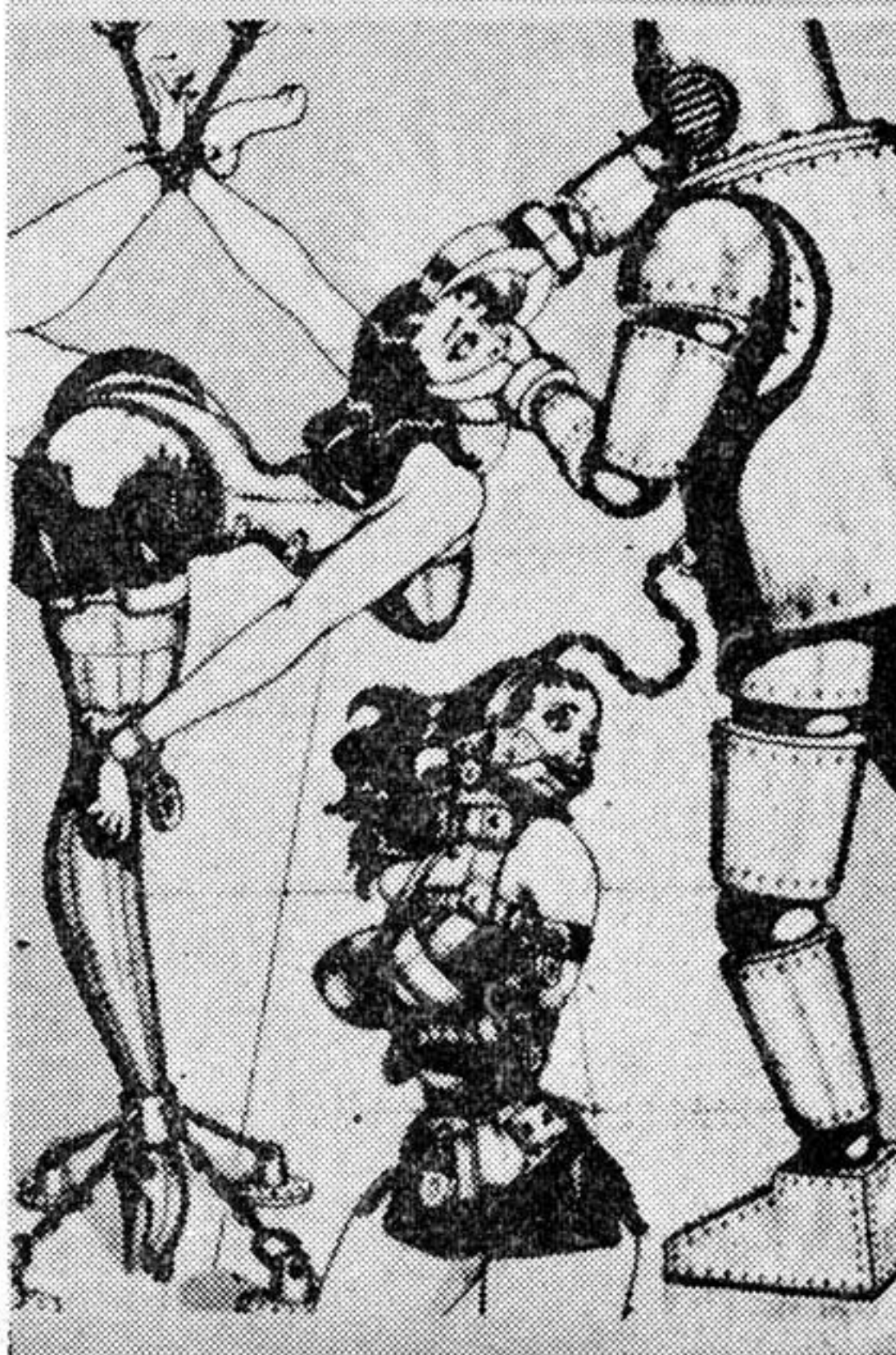
38





電子頭脳ロボットは、人間の頭
 脳よりも正確に、忠実に、男爵夫
 人の命令にしたがいます。
 この愛嬌あるロボットは、リモ
 ート・コントロールであやつられ
 無線によって、操縦されているの
 でした。

男爵夫人がこのロボットを使用
 するのは、博物館のなかにすむ女
 たちの中で、命令にそむいたり、
 ほかの女をそそのかして、夫人の
 意図に反抗させようとする首謀者
 に対してなのです。
 鉄のロボットは、丈夫なくさり
 で、巧妙にその首謀者をしばりあ
 げ、懲戒のための地下室に運んで
 いきました。
 その部屋は、四方の壁も天井も
 鋼鉄の板で張りつめてあり、完ぺ
 きな防音装置がほどこされてあり
 ます。
 反抗者が、どんなに大声で救い
 をよんでも、悲鳴をあげても、絶
 対に、外部へはもれないのです。



忠実なロボットは、首謀者の片足に、鉄の平手打ちを、ぱちんと鳴らし、鉄のゆかに、輪つきボルトで、しっかりとめました。

もがきあばれる首謀者は、片方の手首を、片足の長くつに鉄の輪でしめつけられ、もう一方の手首は、のこった片足にむすびつけられ、からだ全体を、ぎゅうツと張られて、もう身動きがとれなくなっていました。

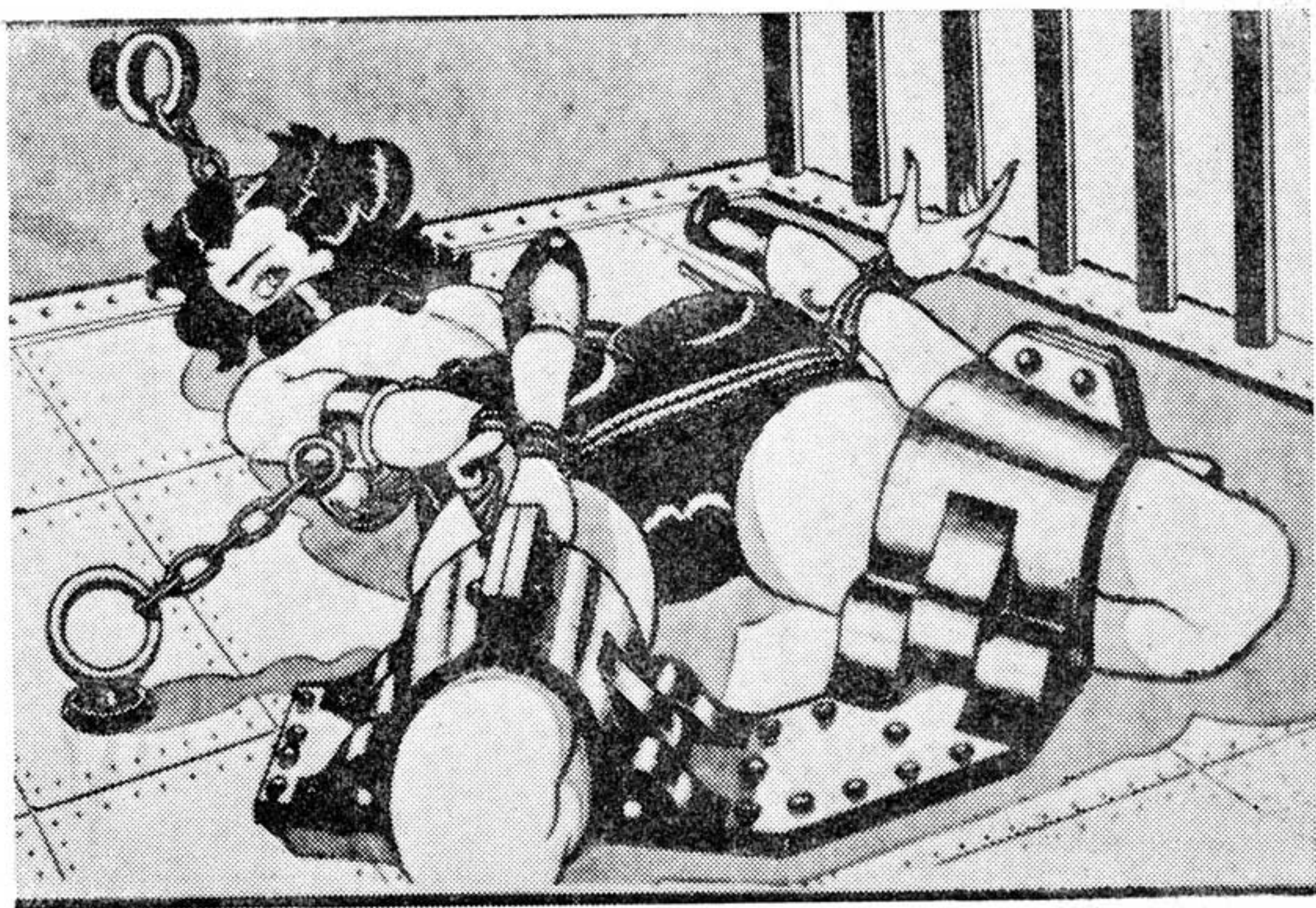
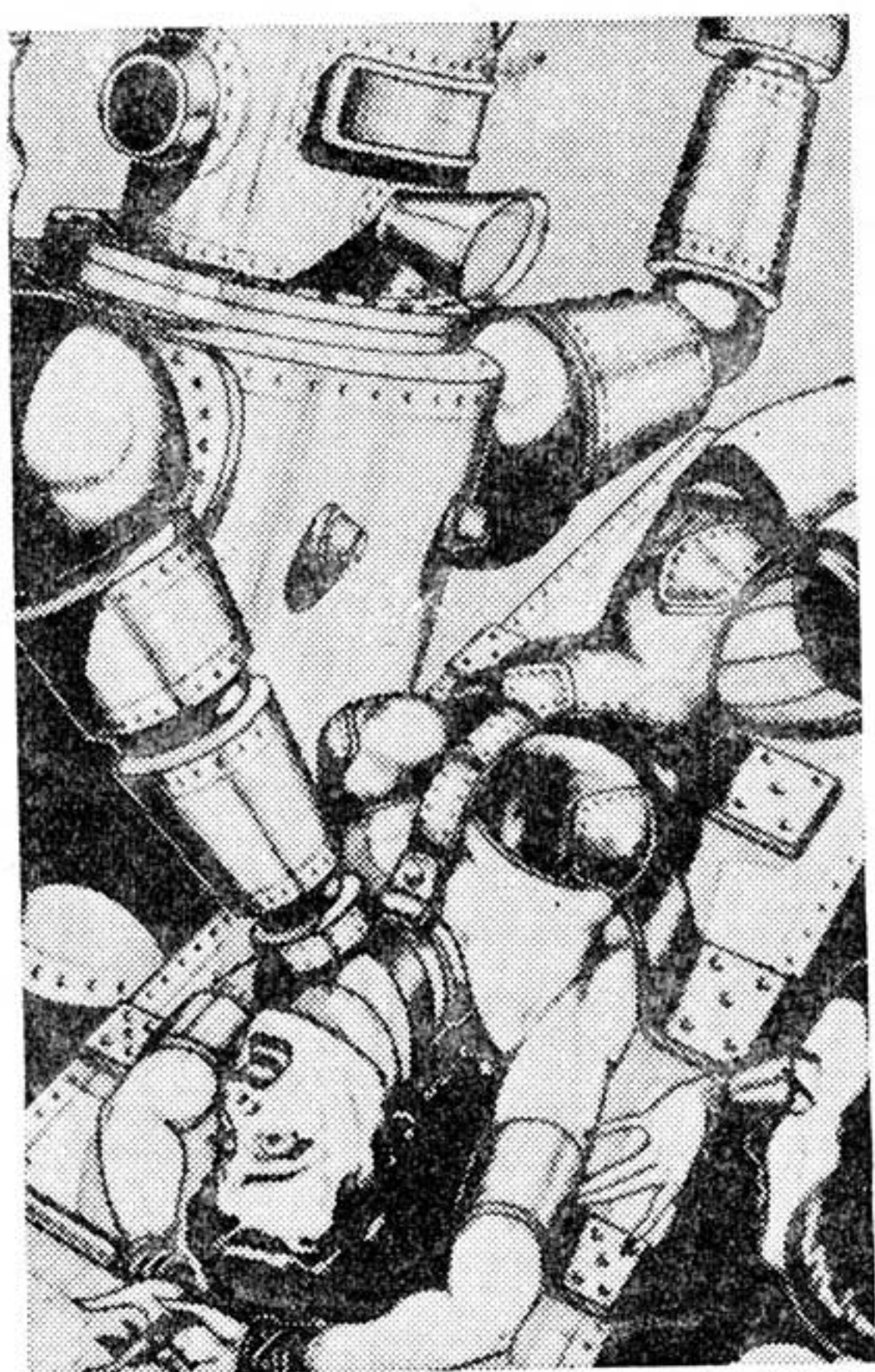
人間が人間をいじめるのならともかく、つめたく固い鋼鉄製の手

に責めつけられ、哀れなきせい者は、発狂にちかい恐怖の表情をうかべております。

「もう、いいです。この博物館に私は勤務できません。おゆるしください。もう帰らせて下さい」

あたらしく採用された彼女は、各室をまわって見学したのち、全身をふるわせて、そう、さけびました。

しかし、男爵夫人は、冷笑をうかべたまま、ゆっくりと首を横にふるのでした。



BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

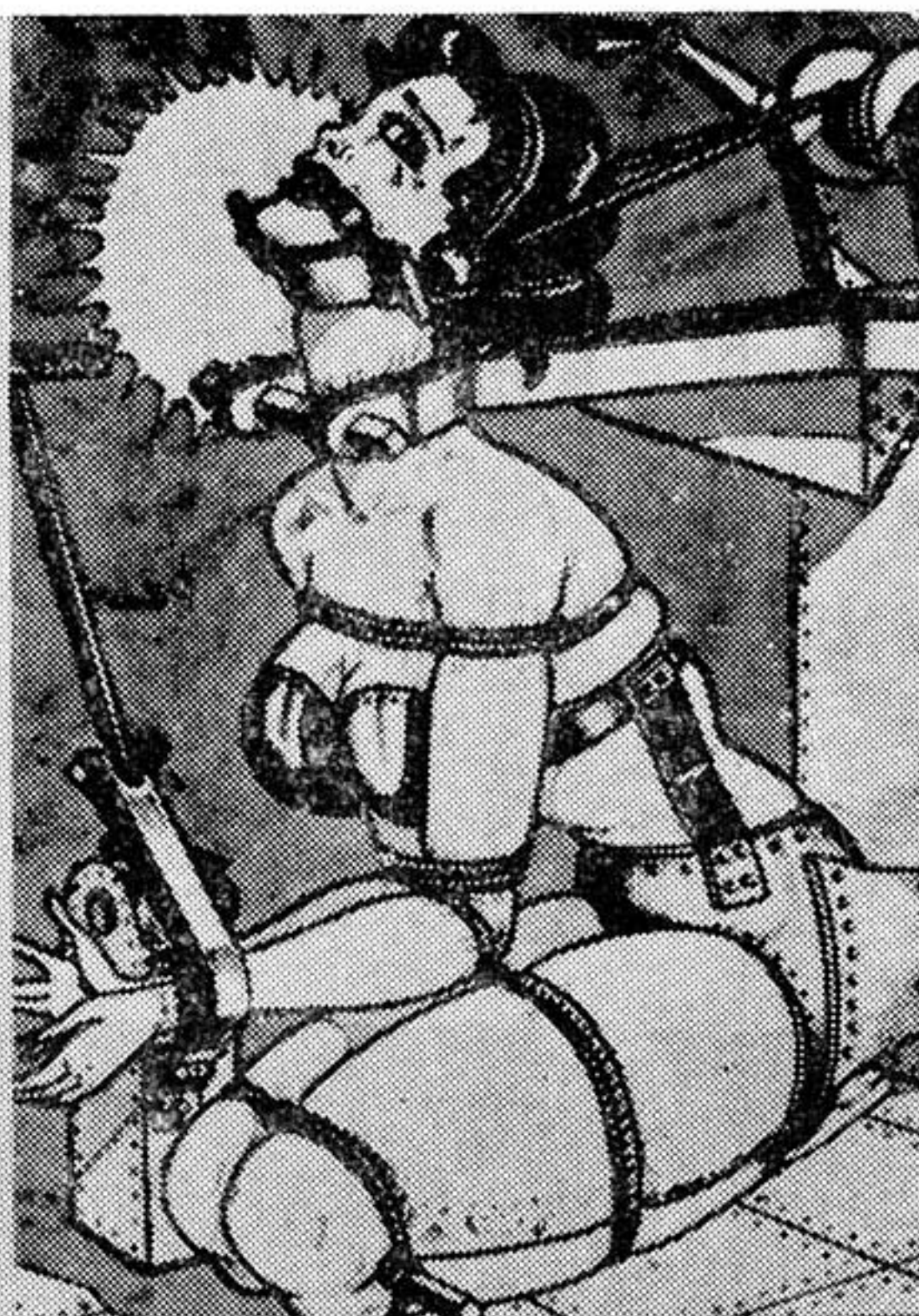
As each servant was released from bondage to go about their duties assigned to them by Elissa, the threat of the robot hung over them constantly and this discouraged any further thoughts of going against their new Mistress' wishes or commands.

Things went well at Baroness Steel's Villa, under the management of Elissa and her gigantic robot for a while, then, mysterious happenings started, which threatened the reign of the oppressor. A sort of underground movement seemed to start out of nowhere, with faithful followers of Baroness Steel being released out of their severe bondage chains and shackles and the chains of steel links cut in half with acid. Also, some of the more trusted assistants and cohorts of Elissa turned up bound to various punishment gadgets in uncomfortable positions.

None of the victims however, could explain the mysterious happenings or how they were put in bondage without their knowing anything about it. All they knew was, they went to sleep at night after making their nightly inspection tours and laid down to sleep. When they awoke the next morning, strange things had happened and they were bound and gagged with no one able to explain how it came about. To make matters worse, a particularly rebellious girl, who had stirred up trouble for the despotic oppressor was missing from where she had been chained up for the night.

Yet, no one had seen or heard a thing and no trace of the missing servant could be found. A guard who had been assigned to watch the dungeon quarters was found bracketed

12



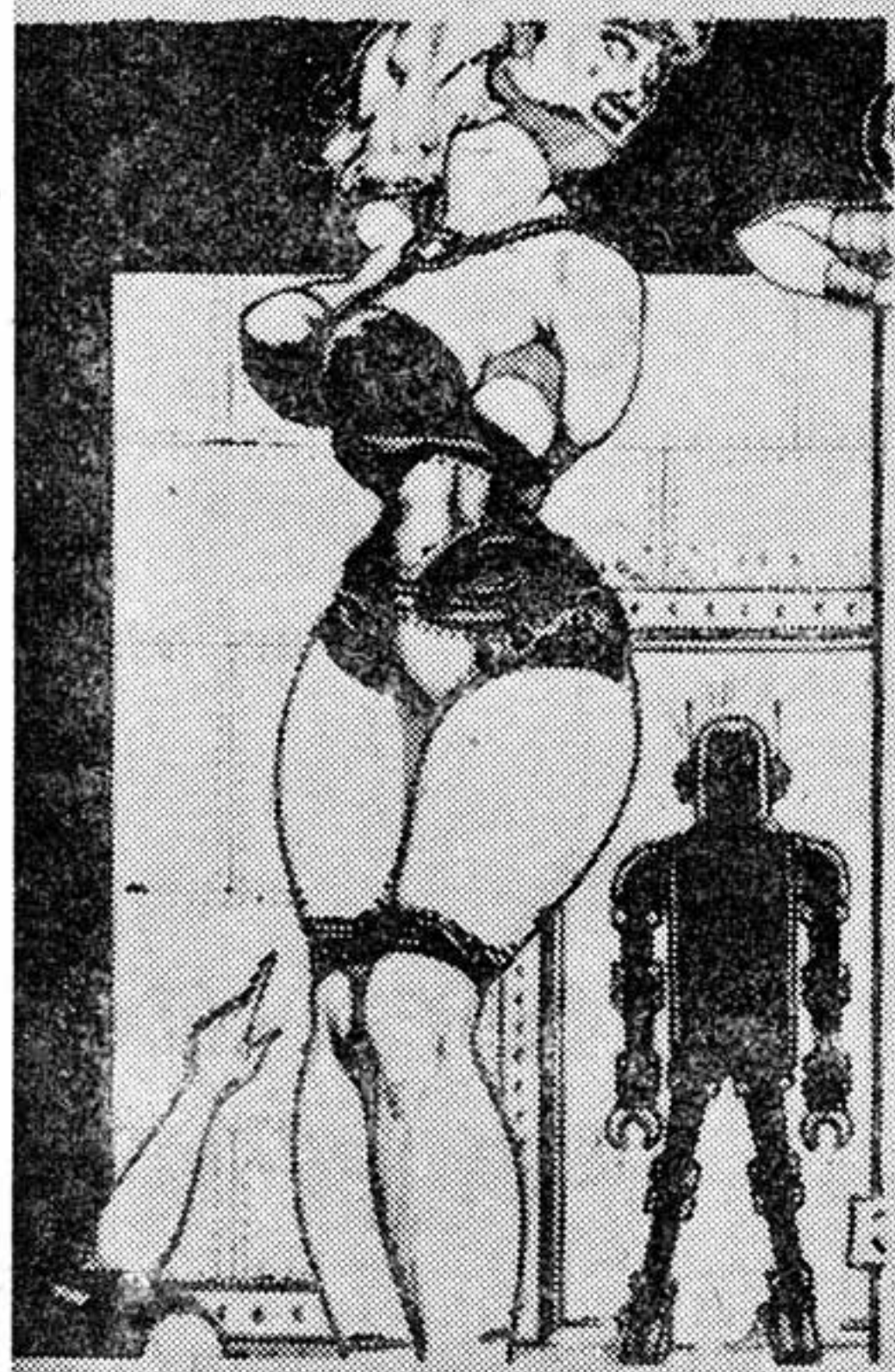
BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

Grasping the subdued opponent, Baroness Steel lashed a rope around her ankles and threading it to a ring-baited turntable, to which she had placed another follower of Elissa, she arranged them so that each had to remain almost stationary. Should either struggle too much or attempt to swing the other girl around, they would automatically pierce their skin on the protruding, thorn-spiked barriers placed alongside.

Giving the servants a final warning to remain perfectly quiet and for them not to struggle too hard or they might accidentally pull the switch which would set in motion the apparatus with the spikes on it. The Baroness knew these girls would not move much for fear of the dire consequences should the spike apparatus close in on them. She wanted to incapacitate as many of Elissa's followers as she could before Elissa got scared and decided to flee from the Villa, taking Baroness Steel's gold hoard with her.

The time was almost ripe now for the Baroness to strike the final blow in her plan of revenge, to get back at Elissa for double-crossing her and attempt on her life. One by one, the Baroness put out of action those servants who, by their acts and deeds were more faithful to Elissa than her. There was less chance of the plan to fail. All those who might oppose her new regime again were skillfully put out of action by her and placed in unbreakable steel bondage, from which there was no chance of escape.

33



お化粧される弓子

北園 透一郎
鬼頭 暁・絵

1
都心からフルスピードで、一時間ほど車を走らせたところにある高級別荘地帯に、いつものまにか、スマートな洋風の建物が新築された。なにも知らない者の目には、せいぜい、三階建ての、しゃれた別荘ぐらいにしかみえない。

しかし、地上に現われている平和な風景とは逆に、地下には、八階という深く巨大な構造が、巧妙な設備をもって完成されていた。この別荘こそ「アラビアの城」と、ひそかに愛称されている、ある人種たちの天国であった。

ある紳士たちにとっては、ハレムであり、天国であったが、ある選ばれた美貌の女性た



ちにとっては、まぎれもない地獄であった。

この「アラビアの城」の主人は、Qとよばれる正体不明の男である。

Qは、全国から多くの若い美女を、むりやりに招待してきては、このハレムのなかに閉じこめ、とくべつな訓練をほどこす術に、天才的な才能をもっていた。

さいきん、Qは上げげんであった。

それは、大木弓子という理想的な娘を、手にいれたからである。

弓子は十九才になり、BGとして勤めはじめたばかりの、明かるく素直な娘であった。

中流の家庭に生まれ、なんの苦労も知らずのびのびと育った幸福な処女の運命は、美しく清純であるがゆえに、かえって悪魔に魅入られてしまったのである。

弓子にとって、この運命の激変は、まだ現実のものとは思えなかった。

夢なら早くさめてちょうだい！

私には、なんのツミもないのに！

おとうさん！

おかあさん！

しかし、この悪夢は、いつまでもいつまでも執拗につづくのだ。

さまざまな羞恥と屈辱が、ぞんぶんに弓子の心へあたえられ、この可憐な娘は、すこしづつ、内部的な変化を示しはじめたようだった。だが、処女の本能は、けなげにも、なおも、Qへの抵抗をつづけるのであった。

Qが満足して部屋を出ていったあと、弓子はベッドの上でぐったりとなっていた。が、やがて自分のあさましい状態に気が付いた彼女は、ワツと泣き出した。

弓子には、ベッドに取り付けられた小さな首輪がはめられているだけであった。

しかし、これだけで弓子は、もうベッドから起き上がることも出来ない。

こうして、Qは弓子のかからだの最終の検査をし、自分のハレムにふさわしい女性であることをたしかめたのであった。

弓子がハレムに入れられることは決定し、この準備室に於ける行事は、すべて終了した。

これからいよいよ弓子には、可愛い愛玩用の赤ン坊として、本格的な訓練が開始され、Qは、その訓練を楽しむのである。

弓子が泣きつかれた頃を見計らって、世話係がやってきた。

「どうだった。おもしろかったでしょう。ホホホ。さあ、もう泣きやみましようね。さ

るぐつわをして上げるわ。だめだめ、おとなしくするのよ。しばらく監禁室で休ませてあげますからね」

世話係は、弓子をあやしなからやわらかい布のさるぐつわをはめ、ベッドから起こして後手錠と足錠をほどこすと、移動椅子に坐らせて監禁室に運んだ。

弓子への課程は終わったわけではないのである。Qは、はじめての夜には、娘が女性としてのよろこびを感じるようになるまで、徹底的に訓練することになっていた。

しかし、Qにとって、自尊心や羞恥心のない女は、なんの魅力もない。

羞恥にもだえさせることによって、彼は征服感を味わい、満足するのだ。

弓子が監禁室での休息で羞恥心と抵抗の気力を取りもどせば、すぐに新たな段階が待っているのである。

Qは、本格的な訓練を行なう新しい部屋を用意しているのである。

準備室を出て、うす暗い廊下をすこし奥へ行き、弓子にとっては絶望的に厳重な分厚い二重ドアを通ると、そこが弓子の監禁室であった。

そこは明かるく豪華な部屋であった。しかし、部屋のあちこちに置かれた、弓子

を拘束し監禁しておくためのさまざまな大きな道具が、どっしりすえられ、つめたく光っていて、監禁室の名にふさわしく、恐ろしい感じである。

その部屋の奥には、べつの広い部屋があり二つの部屋はうすいカーテンで区切られた小さな通路によって連絡していた。

カーテンを透して、奥の部屋にもさまざまな道具が置かれてあるのが見え、ぶきみななにも、不思議ななまめかしさをかもしだしている。

奥の部屋は、弓子に全身美容を強制するための秘室なのである。

Qが弓子に用事のない時は、彼女は監禁室に入れられて、全身美容を受けたり、休息したりしながら、Qのために素肌をさらに美しく保たせられることになっているのである。

そしてQがふたたび弓子を呼び寄せたときに、元気を回復した、傷一つない美しい裸身が提供される仕組みである。

部屋に入ると、弓子は美容師の手に渡された。

監禁室では、主として美容師が弓子の世話をすることになっている。

そのあいだに世話係は、つぎの責めの準備をしたり、休息したりするのである。

「慣れないことばかりで疲れたでしょうね。まあ、まあ、こんなにぐったりしてしまつて。かわいそうにねえ。よっぽど恥ずかしかったのね。でも、弓子ちゃんは、これで正式にこのハレムの女の子になったのよ。よかったわね」

美容師はドアに錠をおろしながら言った。

弓子は、椅子に固定されたままにすべるように美容室へ運ばれ、その一隅の浴室に送りこまれた。

浴場は広く美しかった。

タイル張りの床のまんなかあたりには、種類の異なった湯に入れられるように二つの洋式の浴槽があり、からだや髪を洗うためのベツドや、むし風呂の設備もとのっている。

なんという、ぜいたくな、巧みに計算された浴室であろう。

美容師は、弓子を移動椅子から解き、手錠と足錠を、入浴用のステンレス製のものに換えてから浴槽に入れた。

浴槽の縁に取付けられている首輪がはめられ、弓子は出られないように固定される。

激しい恥ずかしめが終わったと思う安心感から、弓子はぐったりと美容師のなすがままになっていた。

「ああ、いい子になったこと。そうね、おと

なくすると約束するなら、手錠をはずして自分でからだを洗わせてあげてもいいのよ」

美容師は言った。

弓子はすぐにうなずいた。うれしい！

「そう。じゃはずしてあげましょう。だけどさるぐつわや首輪はいじっちゃだめよ。お手手は、からだを洗うだけよ。さるぐつわをはずそうとしたりしたら、すぐにもっときつく縛ってしまいますからね」

弓子が、またうなずくと、美容師はいそいそと後手錠をはずし、タオルを渡した。

弓子は、ひさしぶりに自由になった両手を大きく前に出して、湯をパチャパチャさせながら、無心の目で眺めていた。

両手の自由を奪われている間に、弓子の運命は大きく変えられてしまっていた。

自由であったのは、もう遠いむかしのような感じである。

弓子は、タオルで自分の素肌を洗い始めた。

何度こすっても、Qにみつめられたいやらしい感触は消えそうにもなかったが、湯のあたたかさは、手足のしびれを急速になくさめていった。

しばらく自由に洗わせてから、美容師は、弓子をバスから出し、洗い用のベッドにねか



せて、小間使いにもういちど念入りな力で弓子を洗わせた。

そのあいだに、美容師はさるぐつわを解き汗と涙とよだれで汚れた顔を洗い、汗ににおう髪も洗った。

こうして充分に全身を洗い上げられ、もう一度浴槽にもどして肌を温められると、弓子は大きなバスタオルにくるまれたまま、全身美容室にもどされた。

そこで、弓子は、徹底的な全身マッサージ

を受けた。マッサージの終わるころには、弓子の疲れた肌に、生き生きとした輝きがよみがえり、枷やさるぐつわで痛めつけられた部分も、元のように傷痕ひとつない、みずみずしい艶になっていた。

3

美しい肌にあとを残さないように、スポンジを内側に張った手錠と足錠をはめられると弓子は監禁室の内部にある小さな寝室に連れ

ていかれた。

寝室には、小型だが美しくデザインされたベッドが置かれてある。

その真上には、すっぽりとベッドをおおうくらいの鉄格子で作った檻がぶらさがっていた。

弓子をベッドに寝かせてから、この檻を降ろしてかぶせると、弓子は檻に閉じ込められたと同じ状態になってしまうのである。

「じゃ、しばらくこのベッドでネンネさせてあげるわ。ホラ、こんなにフワフワして、気持ちよいベッドよ。うれしいでしょう。さあお寝巻きを着ましようね、おとなしく着るのよ。縛られたままおネンネするのはいやでしょう？」

美容師は言いながら、ベッドの上に用意されていた寝巻きと称するものを取り上げた。

それは、純白の分厚いタオル地で出来たもので、寝巻きにしてはおかしな形だと弓子は思ったが、じつは拘束衣だったのである。

しかも、普通の拘束衣とは反対に、手がうしろにまわされるものでからだの前面はチャックで締めるようになっていた。

「ホホホホ。これが弓子ちゃんのお寝巻きなのよ。便利なものでしょう。こうしておけば弓子ちゃんのやわらかいお肌でも傷がつかない

いわ。じゃ、チャックが降ろせないように、首輪と錠でとめておくわね」

美容師はすばやい動作で、拘束衣と気付いてもがき始めた弓子に、その寝巻を着せ終えてしまった。

おどろいたことに、胸の部分は、乳房があらわになるように大きな穴が二つあけてあった。

「いや、いや、やめて。苦しいわ。おとなしくしていただきますから、普通のを着せて」

「だめだめ。自由にしてあげるわけにはいかないのよ。弓子ちゃんは、ハレムの赤ちゃんになる教育を受けている最中ですもの。さあさあ、あきらめてちょうだい。オシヤブリを上げますからね」

オシヤブリとは箆口具のことであった。

弓子はスポンジの玉をふくませられて声を奪われた。

スポンジをはき出せないようにする仕掛けも、顔にあとが残らないようになっていた。巧妙な仕掛けの箆口具であった。

「ホホホホ、しずかになったわね。胸のところがあけてあるのは、オッパイの形がくずれちゃ困るからなの。じゃ、ズボンをはかせてあげるわ。お腰がむきだしのままじゃ、いやでしょう」

美容師は、足錠をはずすと、同じように真っ白いタオル地で作ったズボンをはかせた。

ズボンは一本の筒のようになっていて、弓子の足の自由をうばうようになっており、腰のところで締めて錠をかけると、脱げなくなってしまう。

その上、このズボンには、オシメとオシメカバーが内側に取り付けられていた。

「さあ、これで仕度は出来たわ。オネンネしてちょうだい。起きられないように、首輪と

足枷を鎖でベッドに止めておくわね。ホラ、もうベッドから逃げだせないのよ。オシッコがしたくなったら、いつでもオシメを使って

いいわ。オネションレーターというものを取り付けておいてあげますからね。オシメがぬれたら、ベルが鳴る仕掛けになっているのよ。すぐに取り換えてあげられるようにね」
そんなことを言いながら、弓子のオシメの中に小さな装置を押し込み、それにつらな電線を、ベッドの足もとにある機械に連結



した。オシメがぬれるとスイッチが入って、美容師たちのいる部屋のベルが鳴る仕掛けなのである。

「アッ、アッ」

弓子はうめいてもがいた。

「おとなしくネンネしていただくやだめよ。そうね、恥ずかしいのね。いいわ。ブラジャーをしてあげましょう」

美容師は、むき出しにされてかすかにふるえる弓子の可愛い肩すじに、ねっとりしたクリームをたっぷりぬり込んでから、白い毛皮で作った、ゆったりしてブラジャーを着せた。

やわらかな長い毛の毛皮を二枚張り合わせて作ったこのブラジャーは、たっぷり着せられているため、弓子が身動きすると、自然に胸がくすぐられる効果がある。

「どう。これはくすぐりブラジャーというもののなの。それに、いまぬってあげたクリームは、胸の感覚をとっても敏感にするものなのよ。もうすぐ効き目が出てきて、とってもいい気分になるわ。ホホホホ」

美容師は笑いながら、天井に吊ってあった檻を降ろしてベッドにかぶせ、弓子を閉じ込めると、この寝室を出ていった。

あたりはまったく静寂になった。

ただ、弓子の簞口具の奥から、非常にゆっくりにテンポのうめき声が聞こえるだけである。

ブラジャーはくすぐったかった。

息をするのさえ、気を付けないと、たちまちやわらかな毛が敏感な乳首をくすぐるのである。

ベッドへの拘束はゆるやかなものであったけれど、弓子には、身動きすることなど思ってもよらない。

この静かな、しかし巧妙な装置は、純真で初心な弓子をいじめるのに、最適のものであった。

幾重もの拘禁のなかで、弓子は、息ひとつするにも注意せねばならぬほど神妙にベッドに寝ながら、ふたたび男の手もとに連れて行かれるときのくるのを待っていた。

くすぐられるたびに、ウツとうめきながらも、なぜか不思議な感覚が身内を走りぬけるのをおぼえて、彼女はひそかに身をくねらせた。

美容師が寝室から去ってもう何時間もたったように弓子には感じられた。

実際には一時間くらいだったのであるが、たえず緊張していなければならぬ弓子にとっては、苦しく長い時間であった。

やっと美容師が小間使いを連れて、弓子のねかされている寝室に入ってきた。

「さあ、もうすぐ旦那さまのご休憩も終わるころよ。その前にお仕度をしなくてはいいけませんから、そろそろ起きましょうね」

美容師は言いながら、ベッドにかぶせてあった檻を上げ、弓子を起こした。

「じゃ、くすぐりブラジャーも取ってあげましょうね。ホホホホ。くすぐったかった？でも、おもしろくなくて、とてもいい子だったわね。オモラシもなかったのね。旦那さまにだっこしていただかないといやなの？ホホホホ」

美容師は、笑いながら弓子の拘束衣を脱がせて、ふたたび全身美容室に連れていった。

美容室のマッサージベッドに横たえられた弓子は、もういちど香油を全身にぬりこまれて、淡いピンク色に輝く美しい肌になった。

やがて、ゆっくりとした化粧着にくるまれた弓子は、部屋のすみにある大きな三面鏡の前の化粧椅子に坐らされて、全身にやわらかな化粧をほどこされていた。

「ウツ、ムツ」

と低いうめき声をもらしながら、弓子は自分の肉体が、玩具用に美しく化粧されていくのを、悲しそうに眺めていた。



ほっそりしたからだには、ごつい拘束具がはめられていて抵抗はできないのだ。

素肌の化粧が終わると、美容師は、弓子を化粧椅子からはずして、カガミの前に立たせた。

「アラアラ、しゃがんじゃだめ。恥ずかしいの？ でも、すなおにタッタしているのよ。すぐにお洋服を着せてあげますからね。仕様のない子ね。じゃタッタできるように、この首輪で吊らしてもらわね。ホホホホ。これから、旦那さまとお夕食をいただくのよ。だから盛装させてあげるわ。とってもきれいなイブニングができているのよ。じゃ、まずパンティをはきましようね。前のはオシッコで

汚れてしまったためだから、いいのを作らせておいたわ。ホラ、可愛いパンティでしょう」

美容師は、弓子をあやしながら、パンティをはかせ始めた。

純白の地に、小さな花をいっぱい刺繍した可愛いパンティであった。

可愛いブラジャーも着せられ、その上にごくうすい、白の絹のスリッパが着せられる。

すべすべした絹の感触に、弓子は思わず肩をふるわせた。

「弓子ちゃんはスタイルがいいから、コルセットや、ほかのファンデーションはいらない

わ。それに、このほうが旦那さまにとっても魅力的ですものね」

美容師は言った。

「それじゃイブニングよ。とってもきれいだわ」

美容師は続けて弓子のからだへ、大きな赤い花が、一つ、胸から裾の広がったスカートのかけて刺繍してあるだけの、純白のイブニングドレスを着せた。

それはまったく素晴らしいドレスだった。

弓子でさえ、いままでさわったこともないほどの高級なものである。

しかし、そのドレスは特殊な仕立てになっていて、うしろ手に縛られ、椅子に固定され

ていても、自由に着たりぬいだりできるように、あちこちにボタンやチャックが隠されている。

ドレスは、弓子のからだに、きちんと合った。これは身体検査の成果の一つである。

白いイブニングドレスをきっちり着せられた弓子は、まぶしいほどの清楚な美しさであった。美容師でさえ、しばらく見とれたほどである。

着付けの終わった弓子は、小さな足錠と後手錠をはめられて、また、元の化粧椅子に坐らされ、顔の化粧をしてもらった。

簾口具をはずされ、むしタオルでふいてもらった可愛らしい顔は、淡彩の化粧でますます可憐になる。

黒い髪は、ていねいにブラッシングされた。イブニングに合うように結い上げられ、みことなヘア・スタイルである。

「さあ、これでいいわ」

美容師は、弓子の仕上がり満足したらしく、そうつぶやくと、小さな悲鳴を上げる口に、白の分厚い布で出来たさるぐつわをはめた。

もちろんボタンをはめると、弓子にぴったり合う、専用のさるぐつわである。

これで、弓子がQの前に出る準備はすべて

すんだわけである。

やがて世話係の女が呼ばれてくると、できあがった弓子を美容師から受け取って、移動椅子に坐らせ、隣りの監禁室のカガミの前へ連れていった。

「きれいになったわね。まるで別人のようよ。うれしいでしょう」

世話係は、屈辱にまみれて歯をくいしばり、じいっとうつむいている弓子の顔をのぞきこんだ。

「む、む」

弓子は、涙のたまった眼を世話係に向けて哀願した。

美しくなるのはむろんうれしいことではある。

しかし、それが自分の意志で行なわれたのではなく、まるで品物のように扱われながらほどこされたのは、弓子にとって激しい屈辱にちがいない。

しかも、その美しさは、もう弓子自身のものではないのである。一個の人形にすぎないのだ。

世話係は、弓子の美しさに満足のため息をもらしながら、縛めを点検していたが、弓子がまたシクシク泣き始めたことに気付いた。

「だめだめ、泣いたりしちゃ。せっかくのお

化粧がだいなしじゃないの。仕様のない子ね。それでは、目隠しして上げるわ」

世話係は、あついガーゼで弓子に目隠しをほどこした。

「これから行くお部屋は、育児室と呼んでいる所よ。これからの旦那さまとお遊戯は、だいたい育児室ですることになるわ。弓子ちゃん、旦那さまの赤ちゃんですものね。ホホホ。そこは、とってもきれいで大きなお部屋よ。弓子ちゃんを恥ずかしがらせるいろんなお道具もたいてい育児室にそろえてあって、いちばんお遊びに便利にできているわ。たのしみにしていらっしやいね。もうすぐ旦那さまから、お呼び出しがあるはずですからね」

世話係は、弓子に言い聞かせた。

弓子は、新たな恥ずかしめが加えられるのを知って、「むっむっ」とうめきながら、椅子の上で、はかなくもがいていた。

4

育児室！

育児室とは、いったい、なんだろう？

弓子は、目をとじた。その目のなかのなみだは、もう乾いていた。

ひくいブザーの音が、ぶきみにひびいた。

インターホンは、Qの声を伝える。

「弓子を育児室の方へ連れて来てくれ」

「かしこまりました」

世話係は、インターホンにそう答えると、弓子が坐らせられている移動椅子を背後から押し始めた。

「むっ、むっ」

弓子をのせた椅子は、そのままハレムの廊下をへて、育児室に運ばれていった。

そこではQが待っていて、弓子の哀れにも美しい姿を見ると、ほほうといったようなため息をつき、やがてにんまり笑いながら彼女に近付いて、ガーゼの目隠しを解いた。

その部屋は、前の準備室よりさらにひとまわり大きく、明かるく照明されていた。

正面の壁に大きなカガミが一面にはめこまれている点は準備室と変わりはないが、絨毯や壁は赤系統の色に統一され、家具なども、豪華な飾りのついたものがどっしりとすえられていて、全体になまめかしい雰囲気を作っている。

他の三方の壁には、いくつかのべつの小部屋に通ずる入口が作られていて、ドアやカーテンでさえぎられていた。

小部屋には、巧妙な道具がひとつずつ入っていて、その方法に応じた趣向が凝らされて

いるのである。

「フフフフ。しずかにしていたそうだね。よしよし、いい子だ。じゃ、また、いっしょに遊んであげようね。こちらに入ってもらおうか」

言いながら、弓子を、カーテンで区切られた、すみの小部屋に運んだ。

そこは、例の便利な仕掛け椅子のある部屋であった。

三方の壁にはめこまれた大きなカガミの真ん中に、二個の椅子が巧みに組み合された道具が、どっしりとすえられている。

全体の雰囲気は、さっきの広い部屋と同様に、豪華でなまめかしく、甘いムードミュージックが静かに流れていた。

この小部屋の目的が、さきほどの準備室のものとは異なるのもちろんである。ここは、弓子を赤ン坊として教育する部屋なのである。

弓子の正面にあるカガミは、スイッチひとつでスクリーンに変わり、教育用のスライドや映画を写すことも出来るようになっていく。

椅子のほうも準備室のものとは、だいぶちがっている。

弓子の坐らせられる寝椅子には、全体にや

わらかな毛皮が張られていたが、毛皮のすぐ下は鉄板になっていて、硬く、しばらく坐らされてみると肌がひんやりしてくる、仕組みになっている。

そして、この鉄板には弓子のからだの曲線に合わせた複雑な凸凹がつけられており、リングやベルトできっちり固定されると、弓子はギブスベッドに入れられたように、全身がまったく動かなくなってしまうのである。

この椅子は、言わば弓子の「ゆりかご」であった。

弓子は、このゆりかごに入れられているうちに、次第に理想通りの赤ン坊に教育されていくのである。

Qは、安楽椅子にゆったり腰をおろすと、ふくみ笑いをもらしながら、もがいていやがる弓子を移動椅子から解いた。

「フフフフ。じっとしておいで、すぐに動けないようにしてから、いろいろおもしろい遊びをしてあげるからね」

Qは、あやしながら、世話係たちに手伝わせて、弓子をゆっくり固定し始めた。

せつなくもだえる弓子のほっそりした腰に巾の広い鉄の枷ががっちりはめられ、弓子は椅子から逃がれることが出来なくなった。つぎに、水平に、いやおうなしに伸ばされたす



んなりした脚の先へ、枷がびっちりひとつづつはめられ、可愛い膝小僧には、皮のベルトが締められて、弓子の足の自由はまったく奪われた。

「まあ、アンヨのほうはこれくらいにしてあげよう。じゃ、つぎはお手手のほうをちゃんとしようね。悪戯ができないようにね、ウフフ」

弓子の後手錠はいったんはずされたが、すぐにQはその細い腕をねじり上げると、椅子

の背の後へまわし、そこに取り付けてあったリングと皮ベルトを手首と上腕にはめた。

つまり、弓子は自分の手で椅子の背を後に抱きかかえた形にされたのである。

「さあ、こうしておけば、からだにベルトをかけなくてもいいだろう。フフフ。じっとしておいで。あばれるとお手手が痛いだろう。弓子の寸法に合わせて椅子を作っているのだから。フフフ。じゃ、首枷をはめて、おしまいにしようね。ホラホラ、もっと、あ

ごを上げてごらん」

Qは、弓子の反応を楽しみながら、ごつい首枷をほどこして固定し終えると、フフフと満足そうな笑いをもらしながら、葉巻きに火をつけ弓子の美しいイブニング姿を鑑賞しはじめた。

白い清楚な、しかし豪華なイブニングドレスを着たまま、枷をはめられ、うしろ手に椅子に固定された弓子には、美しさと哀れさにあふれ、十分に満足させるものがあった。

Qは、葉巻と弓子を楽しみながら、口では弓子をからかったり、あやしたりしている。

弓子は恐怖と恥辱に、

「むうん、むうん」

とうめきながら、涙のたまった美しい瞳を向けて哀願していた。

「よしよし、お坐りしているだけではいやなのだね。じゃ、めずらしいものを見せてあげよう」

Qは言うど、世話係を呼び、

「弓子の戸棚を見せてやってくれ」と命じた。

すぐに、小間使いが大きなガラス戸棚を押して来て、その扉を開いて見せた。

それは、弓子のからだのサイズに合わせて作らせた、弓子専用の拘束具を入れた戸棚で

あった。

扉のガラスには、「弓子」と金文字が入れてあり、車が付いていて、どこへでも運べるようになっていた。

戸棚は、NO・1からNO・3までの三種があった。

Qは、その中身を説明し始めた。

一番目の戸棚は、顔にはめる道具の入ったものであった。

一番上の棚には、専用二重さるぐつわのなかの、上にはめられるほうのさるぐつわが、ずらりと並べて吊ってあった。

主として皮製のものが多く、考え得るほとんどの型のものが用意されており、いくつか

のものは錠をかけることもできる。

皮のほかには、生ゴムのものや、ビニールのものもあったが、Qの好みは皮のさるぐつわであるらしい。

もちろん弓子の顔に合わせて仕立てられており、はめるときに調節する必要はないのである。

二番目の棚には、色とりどりの布製さるぐつわが吊ってあった。

これは、二重さるぐつわとしても用いられるが、主として普通のさるぐつわのように使うもので、頬のあたりでボタンをいくつか止める仕掛けになっている。

布のさるぐつわは、普通、監禁室に入れら

れている間に用いられることになっていた。

いじめられているあいだ中、二重さるぐつわで嚴重に口の自由を奪われるのである。

三番目の棚には、この二重さるぐつわのため、ファンデーション用のさるぐつわが、いくつも積み重ねられていた。

絹やナイロンのものから、厚いたオル地に至るまでのさまざまなファンデーションさるぐつわは、言わば、さるぐつわの下着なのである。

これと、この上にはめるさるぐつわの種類を組み合わせて、さるぐつわの強度は、何通りにも変えられるのである。

ファンデーションさるぐつわの棚の下は、



そのさるぐつわをはめるときに用いる詰め物用の品の棚であった。

普通に用いる詰め物は、以前にも述べたように、ナイロンガーゼである。

ガーゼは、弓子の口の大きさに合わせて切った上に、きちんと巻いて用意されていた。

このほかに、わざと汚したり、匂いをつけたりしたガーゼや脱脂綿が、ビニール袋に入れて用意されていたし、皮の玉、スポンジ、ゴムボールなど、あらゆる器具がそろえられているのである。

つぎの棚は、箆口具の棚であった。

皮のもの、プラスチックのもの、鉄のものなど、ごつい恐ろしい箆口具が、犠牲者の顔にはめられるときを待っていた。

むろん舌ばさみ器もあったし、口のなかにすっぽり納ってしまうような、特殊な防声具もあった。

これらの箆口具のなかで、弓子を一番ふるえあがらせにものは、お面のような鉄の防声具であった。

小さなねじをまわすことによって、弓子の口に、防音装置の仕掛けられた大きな鉄の玉が押し込まれ、鼻孔がふさがれ、目の穴にもシャッターが降りる装置である。

これをはめてしまえば、もはや、うめき声

すら、外にはもれなくなってしまうのだ。

この下の、一番最後の棚には、ビニール袋に入った、色とりどりのチャドルと、目隠し用の布が積み重ねられていた。

恐怖にふるえる弓子に、これらの道具をひとつひとつ手に取って見せ、使用法を教えたQは、全部見せ終わると、ファンデーションと皮の二重さるぐつわを棚から取り出して、弓子のさるぐつわを取り換え、さらにチャドルで弓子の顔をつつんでしまった。

純白の柔らかなチャドルで顔を隠した弓子は、ますます可憐になった。

Qはニヤリと笑って、小間使いに合図を送った。

NO・2のガラス戸棚が運ばれてきた。それは、四肢の自由を拘束する道具の入った戸棚であった。

一番上の棚には首輪、その下に手錠、三番目には足錠がずらりとそろえられている。

黒光りするごついものから、銀色に光る小さなものまで、さまざまのものが用意されているのである。

むろんその中には皮のものもいくつか混っている。

足錠の下の大きな棚の中は、首枷、手枷、足枷、腰枷をそれぞれ巧妙に組み合わせた、

コンビネーションの拘束具がいくつか置かれていた。

その下の棚は、弓子を縛り上げるための皮紐や、ロープの棚であった。

かんたんには、しかも厳重に縛り上げることができるよう、あらかじめ弓子のからだに合わせて結び目が作っており、二、三カ所を縛れば、完全な縛めが可能である。

むろん、高手小手型や、海老縛り型などさまざまな型のものが用意されているのである。

一番下の棚は、拘束衣の棚になっていた。皮の搾衣のようなものから、ガウンに似たゆったりしたものまでの、これまた、各種の型のものがそろえられている。

しかも、この拘束衣を着せた弓子を自由に観賞できるよう、一部のものを除いたほかはすべて胸と腰の部分に窓があけてあった。

これらの拘束具は、言わば弓子の装身具である。

したがって、常にすくなくとも一種類以上の拘束具が、弓子のからだにどこかに付けなければならぬことになっているのである。

拘束具の戸棚を全部見せ終わると、Qはつぎの戸棚を持ってこさせた。

NO・3の戸棚は、大変はなやかでなまめかしかった。それは、弓子に着せる下着類のつまった戸棚であった。

一番上の棚は、ふだん着と称する薄物の丈の短いスリッパと、ネグリジェが何枚も入っていた。

ネグリジェは、一部かんたんな拘束衣を兼ねるものも用意されていたが、大部分は、弓子に似合うようなうすい、可愛らしい型のものであった。

二段目と三段目の棚には、ブラジャーとパンティを一对づつまとめて吊られていた。

弓子に着せられるものであるから、見るだけで顔を赤らめるような型のものが多い。これらは、下着というよりむしろ、弓子からのだの美しさを強調する意味のほうが強いかからである。

四段目の棚は、オシメカバーの棚になっており、その下の棚には、オシメ用の布が何枚も積み重ねてあった。

オシメの布の横には、後仕末のためのタオルも用意されている。

消毒したタオルでいいねいにふき清めた後クリームを全身にぬりこんでおくのが習慣なのだ、Qは説明した。



小間使いたちは、いつのまにか、この部屋から去っていた。

Qは、ゆっくりと葉巻きをとりだし、火をつけた。

平和な紫煙が、この部屋の天井に、わだかまりはじめた。

弓子は歯をくいしばり、とくに念入りに自分のからだに合わせた、ぶきみな拘束具や、恥ずかしい下着などを見せられ、恐怖と恥辱にふるえていた。

Qは、そんな弓子を、美しいイブニンブドレスの上から観賞しながらあやしていたが、やがてベルを押して世話係を呼んだ。

「食事にしてもらおうか」

食事は、別室で用意されていたらしく、すぐに車付きのテーブルにのせられて運ばれて来た。

すでに夕食をすませてしまったQのためには、ウィスキーと、ちょっとしたオードブルが用意されていた。

しかし、弓子のための夕食は、すこし変わっていた。それは、完全な育児食の献立であった。

大きな皿に入ったオートミールやわらかな

ビスケット、一杯のジュース、それに保温器に入った、何本かの哺乳ビン入りミルクである。世話係たちは、テーブルを椅子のそばに止めると、一礼して部屋を出ていった。

「じゃあ、ちよっとおそくなつたが、夕食にしようね。さるぐつわをはずしてあげるけれど、おとなしくしていなけりやだめだよ。弓子は知らないだろうが、滋養腕腸という方法もあるのだからね。さるぐつわをはめたままうしろから食事をさせるお仕置きなのだよ。フフフ」

言い聞かせると、弓子のさるぐつわを解いた。

頬には、さるぐつわのあとが、赤くくつきりついていて痛々しい。しかし、これがQにとっては、魅力のひとつなのだ。

弓子は言われた通り、おどろきと恐怖の表情を浮かべながらも、沈黙していた。

お仕置きが恐ろしかったからである。

「よしよし、いい子だ。じゃあ、おべべが汚れないように、ヨダレカケをしてあげよう。フフフ、よく似合うよ。ホラ、カガミを見てごらん。可愛い赤ちゃんが見えるだろう。フフフ。それではまずうがいをしようね」

可愛い飾りのついた、小さなヨダレカケを弓子の首にまきつけると、うがい水の入っ

たコップを取り上げた。

「ああ、お願いです。手を解いて。自分で食べます。あばれたりしませんから」

弓子は、小さな声を出して哀願を始めた。

「フフフ。赤ちゃんが自分で食べるなんておかしいよ。おとなしく言うことをお聞き、ちゃんと食べさせてあげるからね、いい子だからね。それに、あんまりやかましく言うとお口をくくって、さっき言ったみたいにするよ。そのほうがいいのかね」

と、Qは笑いながら弓子の髪の毛をなでた。

「ゆるしてッ」

弓子は、ふるえあがってたちまち静かになった。

何度かうがいをさせてから、Qは、オートミールの皿を取り上げた。

「さあ、これから食べようね。そら、お口をアーンしてごらん。とってもおいしいのだから」

Qは、スプーンを弓子の口に運び始めた。

弓子は、このハレムに招待されてきた最初に世話係から、「あなたは、旦那さまの大きな赤ちゃんになるのよ」といわれていたことを思いだした。

しかし、食事まで幼児用のものがあたえられるのは、すでに成熟した乙女にとって、耐えがたい屈辱であった。

しかも、口まで運んでもらって、食べさせられるのである。

弓子は、ただお仕置きが恐ろしいばかりに、仕方なく口を開いた。

「よしよし、いい子だ」

Qは、シクシク泣き始めた弓子にゆっくり食べさせながら、自分自身は、チビチビとウイスキーを飲んでいた。

が、やがて弓子は、

「もう、イヤ。いりません」

と、口を開こうとしなくなった。

なにもたべずに責められ続けていたのだから、さすがに空腹ではあった。

しかし、哀れな格好で、屈辱的な食事を食べさせられるのに、もはや耐えられなくなったのだ。

「だめだめ。弓子の食事は、栄養やカロリーを計算して作ってあるのだから、ここにそろえてあるものは、全部食べないといけないんだよ。いい子だから、いうことをきくね。じやミルクでも飲もうかね」

Qは、保温器の中から、哺乳ビンを取り出して、ゴムの乳首を口に取り付けた。

二合以上も入るかと思われるような、大きなビンであった。

「ホラ、この先端を吸ってごらん」

しかし、弓子にとっては、この哺乳ビンが一番の屈辱だったのである。

「イヤ、イヤ」

弓子は泣きながら、かわいい首を横に振りつけている。

「フム、言うことを聞かないんだね。じゃ、ちよっとお仕置きをして上げようかね。すぐにミルクが飲みたくなるからね」

Qは、やさしい猫なで声になった。

その声のぶきみに、弓子は戦慄した。

ベルにに応じて現われた小間使いに、Qは、

「くすぐりセットを持っておいで」

と、命じた。

むろん、泣き続けている弓子には、その意味はわからない。

小間使いは一礼して姿を消したが、すぐに美しい小箱を持って来て、テーブルの上に置いた。

「フフフフ」

「何をするの、かんにんして」

「フフフフ、ミルクを飲むのをいやだというから、ちよっと足のうらを可愛がってあげようと思ってね。ホラ、これをごらん」

Qは弓子に小箱の中身を見せた。

箱のなかには、くすぐり用のこまごました道具が、きちんと整理されてつまっていた。

やわらかな羽根と筆が数本ずつ。

水鳥の胸毛を集めて作った刷毛。

毛皮で作ったブラジャーとパンティ。

それに、弓子には何のために使うのかわからなかったが、電気バイブレーターや、ゴムの人形など。

「フフフフ」

恐怖に声も出なくなった弓子を見て楽しそうに笑うと、箱の中から黒い絹の手袋を取り出した。

手袋の掌の部分には、一面にやわらかな羽毛が植えてあるのだ。

「よしよし。じっとしているのだよ。そのきれいな足のうらをいい子、いい子してあげるからね」

言いながら、手袋をはめた手を、弓子の足のかかとに軽く置いた。

「アッ、アーッいや、いや、ゆるして」

弓子は、たちまち悲鳴をあげ、身をよじって羽毛から逃がれようとした。

しかし、がっちり固定されている弓子には逃がれる手段はない。

可愛らしく、すべすべとまるい、白い、足のかかとが、なにかの人形のようにふるえ、Qをいよいよよるこぼせるだけであった。

「フフフフ。そら、どんな気分だね？　じっ

としておいで」

Qは手をゆっくり動かしした。真ッ白な足のかかとに黒い手袋が、奇妙な美しさである。

「ゆるして。アーッ、かんにんして、もうやめて。飲みますから。アーッ。ゆるして」

弓子は、たちまち降参してしまった。

Qは、そんな、哀れな弓子をなおもしばらく觀賞してから、手袋を取った。

「フフフフ、もうおとなしく飲むね」

「ハ、ハイ」

弓子は激しくあえぎながら答えた。

「よしよし、じゃ、これを吸ってごらん」

Qは哺乳ビンを取り上げて、ゴム乳首を彼女の口にふくませた。

弓子は、大きな瞳になみだをいっぱいためながら、哀れな格好でミルクを吸い始めた。

Qは満足そうにため息をつく、また、ウイスキーをなめ始めた。

やっと一本吸い終わって、ほっと一息つくと同時に、弓子は自分の上半身が汗びっしょりであるのに気付いて真ッ赤になった。

「お洋服を着せて」

弓子は、小さな声を出して頼んでみた。

「だめだめ。弓子はこうしているほうが可愛いよ。ホラ、カガミを見てごらん」

「いや、寒い。着せて」

「フフフフ。寒いはずはないよ。どんなポーズでも大丈夫なようにエアコンディスプレイがしてあるのだから」

Qは言ったが、ふと新しいスポーツを思いついたらしい。

「寒いのなら、すこし運動させてあげようかね」

言いながら、サイドテーブルから、さるぐつわを取り上げた。

「あつ、何をするの。いや。かんにんして」

「フフフフ。さっきはちよつとだけだったから、今度は本式にくすぐって上げよう。すぐに、あつくなるよ」

「いや、いや、ゆるして。本当は寒くなんかないの」

「さあ、おとなしくするのだよ。お口をくくって上げるからね」

「かんにんして。あッ、あーッ」

悲鳴を上げる口に、Qはれいの苦しい二重のさるぐつわをほどこし、つぎに、弓子の声を楽しみながら、肌を敏感にする特殊なクリームを、足のうらにたっぷりすりこんだ。

「むっ、むうん、むうん」

弓子は、眼を見開いて哀願する。

クリームの効果が現われるまで、ニヤニヤ笑いながら弓子の顔を眺めていたがやがてく

すぐりセットの中から羽根と筆を取り出す。

「フフフフ。そら、そら」

「むっ、むっ」

「オヤ、可愛い指と指のあいだにゴミがついているようだね。はらってあげよう」

弓子のせつないもだえとふさがれた声を楽しみながら、左右の白い愛らしい足のうらをくすぐった。

やがて、弓子はQの動かす美しい羽毛に、まったく反応しなくなった。

全身は汗でびっしょり濡れ、可愛い胸は大きくあえいでいる。

「そら、言った通り、暑くなったろう。フフフ。じゃ、全部とろうね」

ゆっくりとその作業にかかった。

イブニングドレスには、巧みにボタンやスナップが隠されていて、椅子に固定されている弓子から脱がせるのはかんたんだった。

Qが手をはなすと、弓子は、なさけない格好にされていた。

「よしよし、いい子だった。じゃ、残りの食事をしてしまおうね」

Qは、弓子のさるぐつわを解いて、また、食べさせ始めた。

ぐったりとなった弓子は、もう、観念して食べさせてもらうより仕方がなかった。

ゴルドンの記憶 ⑥

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵



異端者

新聞では相馬博士の失踪事件はさほど大きな取扱いを受けなかった。博士自身、ジャーナリスチックな意味からいって、それほど著名な学者でもなかったし、また失踪自体、何か些末な個人的理由によるたわいのない事件としか考えられなかったからだ。家人も認め

るとおり、博士はもともと奇行の多い人で、理由なく家をあけることはしばしばで、今回それが多少普段より長くなったとはいえ、そこに犯罪の介在する余地はないと判断されたからだ。たとえば誘かいされるとか、殺されるとか、そういうぶっそうな犯罪のにおいはどこにもなかった。

だから世間の関心もほとんどなかった。新

聞の社会面にその記事が報道されても、見落とすか読みとばすかであった。

わずかに物知りの連中が、「相馬博士って言えば、あの古代人文学者の——」と口をすぼめて、今でもまだ生きていたのか、といった顔をする位であった。

学界で博士は異端視されていた。主流から遠く置き去りにされた形で忘れられた、相馬

篤太郎の着想と実証は常に常識つばずれた反時代的なところがあった。歴史的事実として既に認証されているものに疑義をさしはさみ、だれもが信じもしない、まるで架空の物語のような歴史上の事件を、突如として証明しようところみたりするのであった。

堅実にしてかつ常識に富んだ主流派の学者たちは、この奇矯な相馬博士の言動を、ひどくのがにがしげに思った。というより、さげすみ無視した。戦争中彼は、不敬罪の名のもとにながらく獄中にあった。天孫族の日本渡来に関する彼の解釈が、不敬罪の因となった。本来なら、とくに銃殺刑にも処さるべきところを、その一般への影響力がほとんどないという客観的な理由から、死一等を減じられていたのであった。それほど彼は、学界

はおろか、広く一般からも門戸を閉ざされた孤児同様の境遇にあった。

戦後事情は一変し、昨日までの神話派の歴史学者が今日は実証派の学者に変貌した。相馬博士の時代がここに到来したはずであった。ところがいつまでも、どんなに事情が一変しても、彼は一向にうだつがあらなかつた。戦時中の主流派の学者たちが、いつのまに戦後の主流派に、同じようなメンバーで返り咲いていたのかかわらず。

いつの世にも、なぜ相馬篤太郎は、疎外者として学界に、またジャーナリズムに受け入れられなかつたのか、それは彼が三流の私立大学の出身で学閥の背景がない、という以上に、その風采もひどく見栄えがせず、そのくも生意気にも、だれもが考えもつかぬきらめたのだ。

前号まで

美しい、ふしぎな予言者サレアをめぐる上島氏の言動には、ある好奇心な秘密がこめられているようであった。それは、ゴルドンの伝説につながる、ゴルドンの記憶につながる秘密であった。上島氏は若妻美美子を残して横浜港を出発する。大阪商船一等航海士としての任務につい

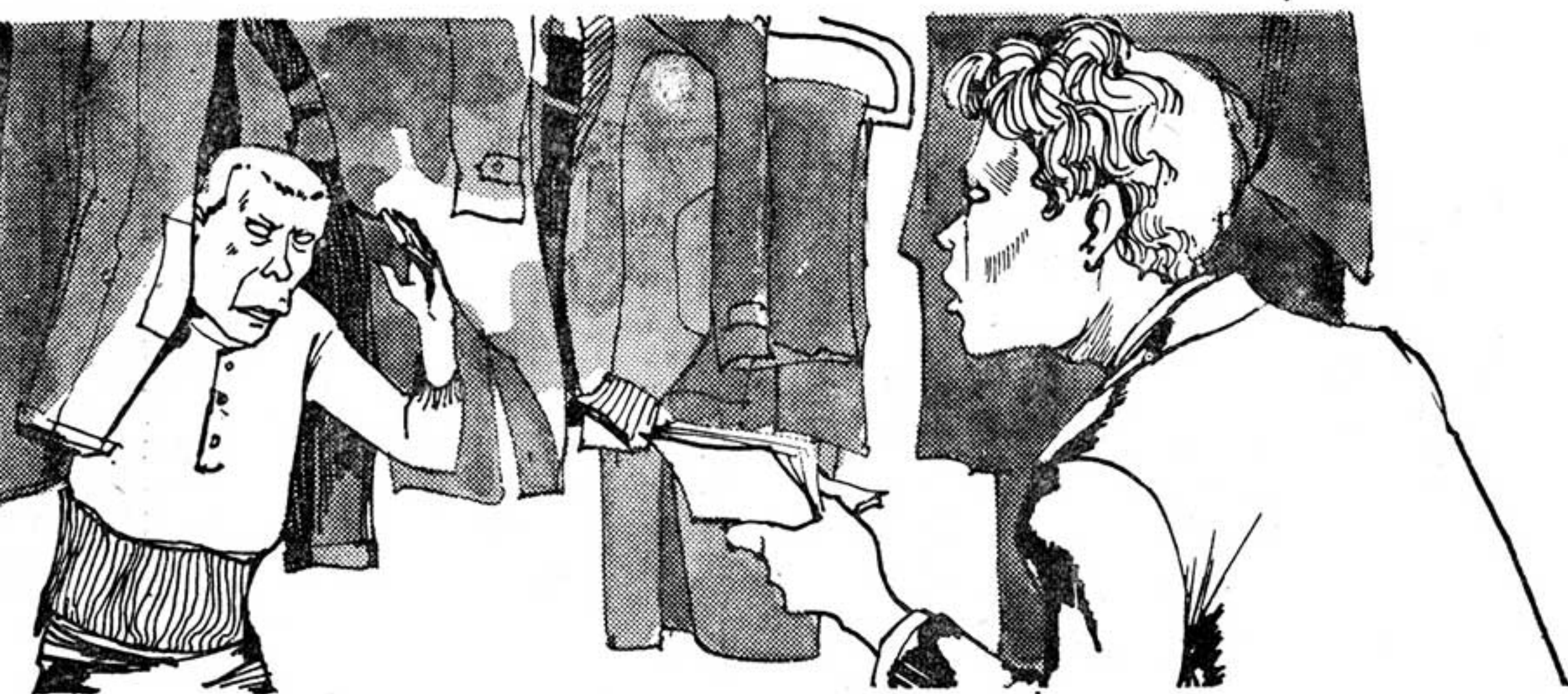
くような卓見を、時折チラチラとひらめかすことが理由としてあげることができた。

二つの予感

一流の大新聞は動かなかったが、三流の週刊誌の二、三社が、相馬篤太郎失踪事件を、興味本位に割に派手な扱い方をした。どこも記事ダネに困っていたからである。『天に駆けたか地にひそんだか、ヨウとしてつかめぬナゾの失踪』といったセンセーショナルなタイトルが多かった。東亜日報が日刊新聞のかたわら発行している『週刊東日』にも、博士失踪事件の特集記事があった。内容はいいかげんなものであったが、これはほとんど小林春吾の創作だった。記事によると、博士は或る隠し女の家隠れていることになっていた。博士は年に似ずその面での大変な達人になっていた。

たわいもない記事である。小林の奴が、と苦笑しながら、わたしは記事を斜め読みにして、その週刊誌をそのまま机の上にほっぽり投げようとして、ハッとしたようにその手を止めた。そしてもう一度、その部分の文字に目をすえた。

『——学者として木石ではない。やはり人の子である。相馬博士は本業のほうはともかく



として、女を泣かせるコツを知る面では超一流という定評がある。人の子どころか、最後のところへ来ると、どうして学者のほうももっと露骨でアサましいくらいだ。

——彼を知る元遊廓の親爺、山花為三郎氏（現在古着屋を経営）は、今度の失踪事件について——

ほかの文字は目にはいらなかった。ただカッコ内の古着屋を経営という文句だけが、非常なすばやさでわたしの連想意識を働かせた博士の外出時の洋服をもって留守宅に現われたという古着屋である。この古着屋に、詳しい事情を直接聞いてみることだ。ほかの者が聞きのがした何か聞いてはしないか。大事な博士からの預かり物を亡くしてしまったという、責任上の立場を離れて、わたしはせがひでも博士を捜し出そうと思った、単なる失踪事件ではなく、思いもつかぬ背景がそこには隠されているような、予感に捕えられていたのである。

予感といえば、夫の出航に当たって、ひどく芙美子は何かにおびえているようであった。それは彼女の中で予感がささやきかけたからだ。

「——何かのために」といって上島氏はわたしに重要書類をあずけて発った。何かのため

に、とは、氏の中の予感がそう思わしたのだ。この二つの予感が重なって、ひとりであのサレアの不吉な予言めいたセリフの中に吸いこまれてゆきそうな、そういう予感の中に相馬博士の影も漂うのである。

ネツ造記事

東亜日報社の近くの喫茶店まで呼び出しをかけると、小林春吾はすぐ出てきた。

「どうしたい、景気は？」

野放図な声である。そしてどしんとわたしの前の椅子にコシを落とした。

「週刊誌の記事は君だな」

のっけからわたしは言った。あまりゆっくりもしていられないのだ。心がせいた。

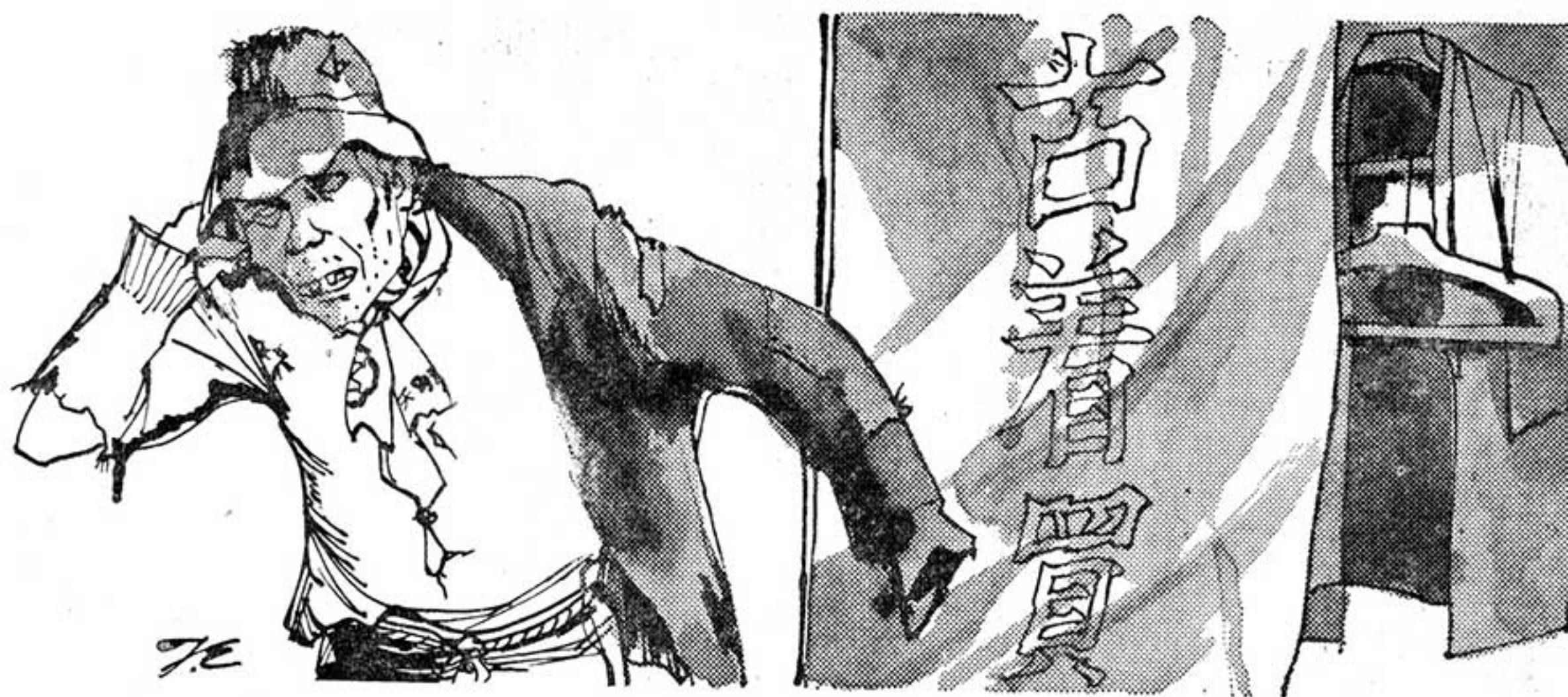
「ああ、あれか、相馬博士のね」

ちよっとテれたような薄ら笑いで、

「なーに、せっかく人が張り切って手がけようとしていた、女族残酷物語をさ、出バナをくじかれた腹イセもあってネ」

と言いつつ、さういふことを言った。

小林春吾にすれば、博士の失踪はありふれたごくつまらない市井の一小事件に過ぎなかった。そんなことより、せっかく人がキオいこんで訪問したのに行方不明で用が足せないとは、と、そのことが頭にきた。物事はすべ



てきっかけが大事である。そのきっかけにケチがついたようで、何となくその後の動きに熱が入らないのである。

「何も博士に会えなかったからって、君の企画にはそう大して影響はないじゃないか。なければ作ればいい。ゴルドンの伝説を作りあげるんだって、この前言ってたじゃないか」卓上のグラスに、コーラのピンを傾けながらわたしは言った。

「そりゃそうだ」

小林はすなおにうなずいて笑った。いずれにしても、あんな妙なネツ造記事をデッチ上げた手前、テレかくしに博士への弁解のためにも、こうして力んでみせたというところが実意のあるところのようであった。

「でもまるっきりのウソじゃないぞ。多少は裏付けがあって書いたんだ」

「ところで博士は、あの古着屋でこじきに変装したんだってね」

だが小林の関心は全く別のところにあつた。記事によると、その親爺が、元の経歴からいって、今もチマタの女につながりがあり、いろんな女をそれからそれへと博士に取りもつたらしく、それにおわせながら書かれているが、その部分は彼の創作によるとして、その創作の部分に彼はひとりがつてな熱を

あげている趣があつた。古着屋の場所を聞くと高田馬場付近の都電通りだという。聞くことはそのことだけだった。

古着屋

都電通りを早稲田のほうへ、ものの五分も歩かないうちに目ざす古着屋はあつた。ツユの合間、一時晴間を見せた日の夕刻であつた。

「へーっ、何ぞご用でしようかいな」

労務者目当てのらしい、思いきってクタブれた、古ジャンパー類がせまい店内の天井から鈴なりにぶら下がっていた。その間をかき分けて山花為三郎は出てきた。ザンギリ頭がゴマ塩のように、白い粒々の白髪を中にまぶしこんでいた。

「相馬篤太郎先生のことで——」

わたしは店先の丸椅子に腰をおろした。

「週刊誌の記事で取材にきた、ホレ、小林という男に聞いてきたんですよ——なんですってね、相馬博士はあの日、こじきの扮装のまま帰らないのですってね」

すると山花の四角ばった顔が急にけわしくなり、わたしの質問に答えるより先に、「あんた、小林っていうあの記者さんとは知り合いかなんかで——ふーん、だったら文句

が言いたいな、あの記事は何ですかいな。あんなでたらめがありますかい。元遊郭の親爺で女のとりもちをやってるなんてとんでもない——」

初めはそれでもことば静かに、それが次第にシリ上がりに語調に力が入って、まるでかみつくような高調子になった。

結局収獲としては、ほとんど予期していたものが得られないまま、わたしはその古着屋を出た。

美しき訪問者

「阿麻さん、お客さんがさつきからお待ちかねよ」

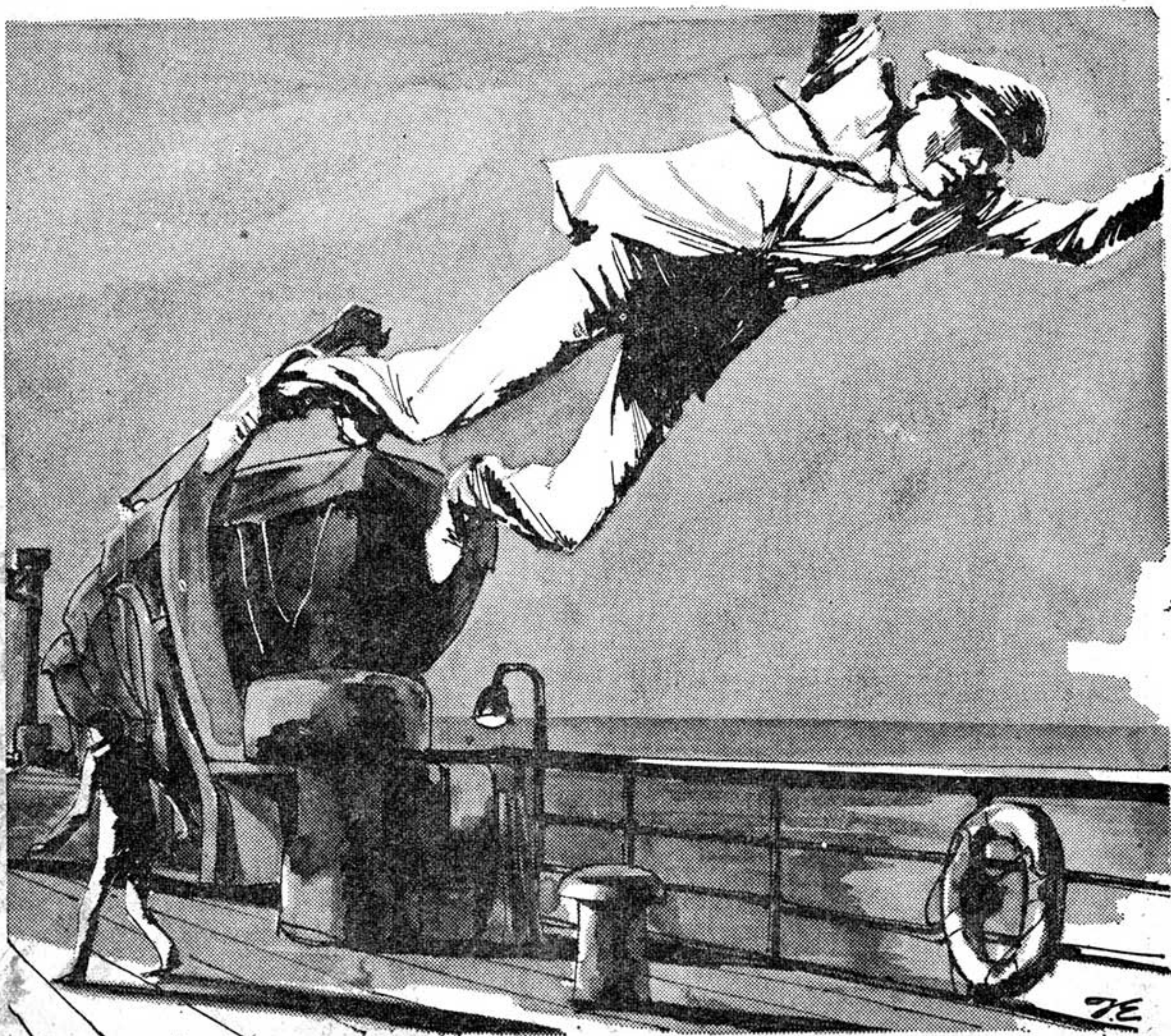
下宿の玄関で、おばさんがさっそくに声をかけてきた。おばさんの目に笑いがあった。ヤユするようなくすぐったい笑いだった。

「きれいな人よ」

つけ加えてそう言った。わたしははじかれたようにクツを脱ぎ、そそくさと上に上がった。何か心にときめくものを感じたからである。玄関に脱がれたヒールに見おほえがあった。

「いらっしやい」

部屋のフスマをあけるなりそう声をかけると、あわてたように居ずまいを直した芙美子



は、長目のマツ毛を伏せて一礼した。張り詰めた空気がそこに流れた。

「上島が行方知れずになったらいいんです」

一瞬、ギクリとわたしの筋肉の動きが静止した。脱ぎかけた服をそのまま、わたしは芙美子の前に思わず腰を落とした。

「何ですって！ 上島さんがどうかなさったんですって」

「突然行方不明になったんですって、——会社から知らせがあつて、今行ってきたところなんです」

複雑な意識が瞬間流れた。予期していたものが予期通りに訪れたという言いようのない期待で胸がふくらんだ。いや、それは深い大きな驚がくであつた。これは本当に、全くだことではないのである。

「お茶でもどうぞ」

ほとんど使うことのない、対の湯呑みに茶をついで、芙美子に奨めた。

「詳しく話してくれませんか」

わたしはヒザをにじり出していた。芙美子の髪のかおりがほのかに漂って、わたしの内部に或る広がりをごだまのように伝えた。

「会社から電話があつたんです。それでわたしは出かけました。そしたら——」

声をのんだ。目にかえって強い意力をみな

ぎらして、芙美子はわたしの顔を見た。驚きも悲しみも何にもない、恐しく無気味な沈黙があつた。

「何かのために——」と上島氏は、わたしに相馬博士の書類をあずけて日本をたつた。それは予感であつた。いや、記憶であるのかも知れない、そうなるという未来の記憶、未来も過去もいっしょだつた。その秘密は何だ、これこそゴルドンの記憶であらねばならぬい。

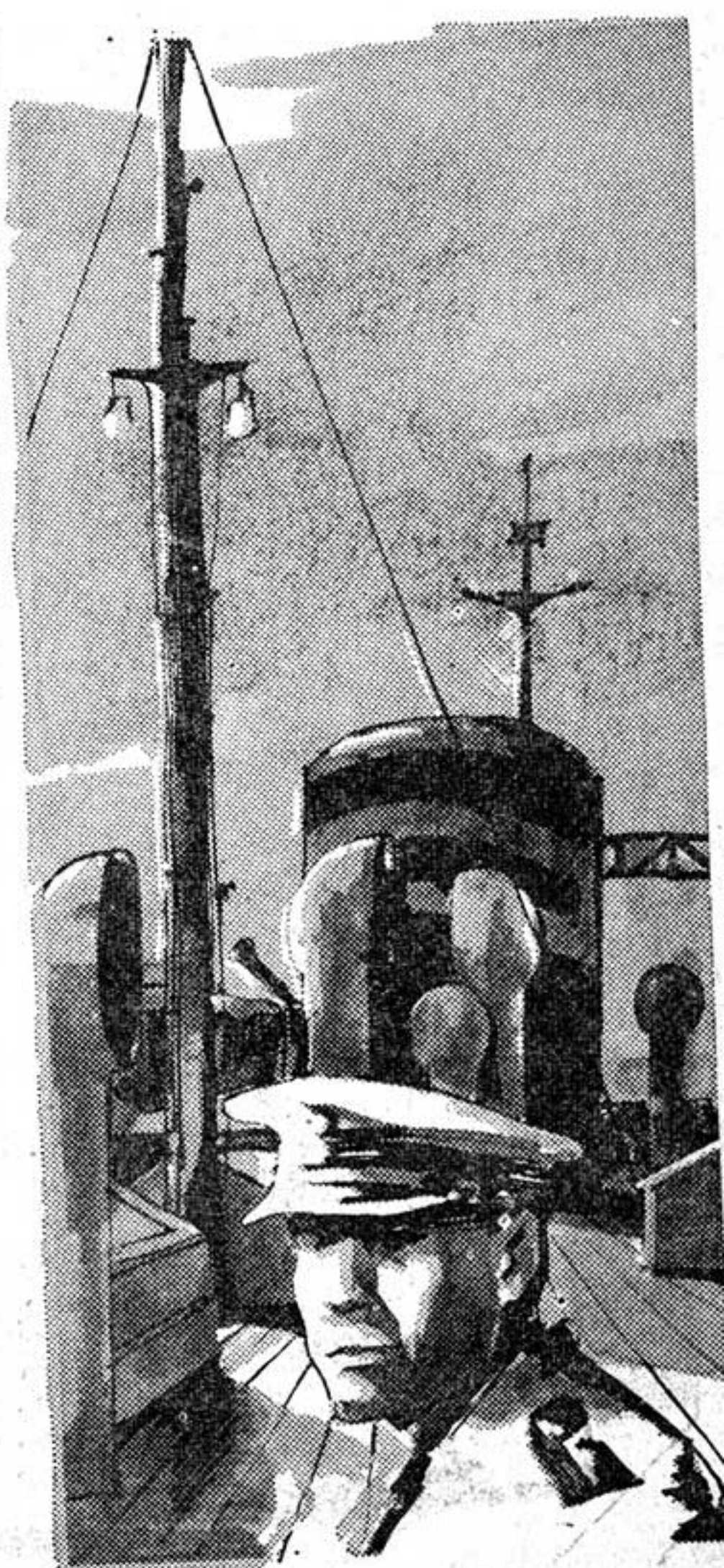
「船が遭難したとかいうのなら話はわかります。ただ、急に、かき消すように居なくなつたというんですから、わたしには何のことかさっぱりわからないんです」

あなたならこのことに何かを、何らかの答えを与えて下さるに違いない、芙美子の表情がそう訴えていた。

上島氏消失

大阪商船の海務部で、わたしは上島氏の失踪事件について聞くことができた。若い、薄茶の背広を着た如才のない男だつた。大きな壁の世界地図を前にして、彼は指先を当てたその海の一点の右横隣りには、今たびたび国際的紛争の問題となつてクローズアップされるキューバ島が、冬眠にはいったトカゲのよう、頭と背を丸めていた。

「ちようどこの地点で、ちよつとした風が吹き荒れた後、思いもかけず雲が切れ、月が明るくさしてきたんだそうです。そこで上島さんは森本運転士というのと、上甲板で月見がてらに涼をとっていた、と。ところが信じられんことですがね。森本運転士がちよつと目をそらして振り向いたら、今、目の前に居た



上島さんが居ないってんですからね。彼、よっぽどびっくりしたと見え、しばらくポカンとして何が何だかわからない状態でいるところへ、後からボンとカタをたたかれた。振り向くと船長が立っていた。そこでやっと気がついて、今起こったふしぎな事情を話し、皆で手分けしてくまなく船内を捜し回ったが見つかからない。さー、大騒ぎになって、万が一にもと船をとめ、今度は付近の海を二日二晩捜し求めたがむだだった。もっともしあやまってデッキから海へでも落ちていれば、これは捜してもほとんどわかりっこないでしょうが、でもふしぎな話です。たった今日の前に居た男が消えたんですから——少なくとも海に落ちる間もなかったはずだし、落ちるにしても手すりがあるんですからね。森本運転士は言ってるんですよ」

「その森本さんとやらは——」

「十一月までは帰ってきません」

「でもおかしい話ですね」

「といっても、森本さんが海に突き落としたとはまさかね。船が帰ってくればもっとはっきりした事情がわかるでしょうが——それにしても奥さんには大変お気の毒なこと——」
ふしぎな話だ。わたしは考えた。サレアの予言とキツとした芙美子のあの時の表情と、

そうしてそうだ、これは相馬博士の失踪と必ず何かのつながりがある、そのつながりを果たすカギは、それこそゴルドンの記憶であった。

エテルナ

バー・エテルナでは客がこんでいた。ムシムシとする、いやに暑苦しい夜であった。せめてものさわやかに、映画「南太平洋のテーマミュージックが、店内のムードを漂わせ、はすかいに開けられた窓のサンから外に流れ出るのがめつけものであったが、それにしても暑かった。といっても、まだルームクーラーの季節には少し早すぎた。

「だってふしぎなお話ですわね」

マダムと今、上島氏失踪事件のことで話合っているところであった。といっても、せまい店内に客が大勢だったので、落ちついて話をする間がなかった。ルミもキクもナオミもてんてこまいで、あっちの相手をしたり、こっちへ移ったり、ご愛きよう笑いの配給に忙しかった。

ドアがあき、新しい客が顔を出すたび、わたしは錯覚に襲われた。老人のこじきを予想したのである。小林が、思わず振り返って、相馬博士に似ている、と、嘆息をついたほど

であったが、今それを思い出していた。あの時は何気なく聞きすごしやりすごした。それより、投げられた残飯をむさぼり食べるようにしていたあのこじきのあさましさと、客に對してた時とは打って変わったようなマダムの、高圧的なこじきに対する仕打ちが、わたしには興味があつた。

ところが、今にしてようやく思い当たるのである。あのこじきこそ、相馬博士その人ではなかったのか。そう判断する手がかりは、それは——わたしは店内をおもむろに見回しサラミをかじり、ビールを飲んだ。

でっぷり太った眼鏡の男に、ビールのサービスをしているマダムの美しい陰のある横顔をながめながら、わたしは何気なく思い出していた。小林とこの店で飲んだ時、マダムはふたりの話に加わってきた。

「ゴルドンの伝説？ ひどくおもしろそうな話ですね。それで、それがどうして女性の残酷さと関係があるんですの」

あの時のマダムの興味の示し方は、確かに普通ではなかった。殺気じみたものさえ感じられた。

古着屋のおやじの話だけで、確証はなかったが、とにかくあのこじきは相馬博士だ、まずそのことはまちがいない。だがなぜその時



声があった。

「旦那、一曲いかがです」

流しの男が、いつの間にか横に立っていた。青白い顔をしていた。今まで彼の来るのを待っていたのだ。わたしはわざとらしくだみ声をあげて曲を頼み、そのチップにつけて彼に用意していた紙きれを渡した。これは彼

と待ち合わせするための呼び出し状だった。

疑惑の糸

エテルナに近い「スワン」という喫茶店だった。しばらく待つと例の流しの男が、ひとりやってきた。入口でキョトキョト店内を見回している。ギターは持っていない。仲間

にあずけてきたのであろう。わたしは奥のボックスから立ち上がり、手をあげた。

「呼び出してすまん」

男はぶあいそうに返事をしない。ただチップの手前、お義理で顔出したのだといわぬばかりの態度であった。ウエイトレスがコーヒーを運んできたとき、わたしはさらに三千

円を出した。男はシロツとそれに視線を投げ黙って受け取ったが、だいぶ顔色にやわらぎが出た。

「早速だが聞きたいんだ。——このあたりにおじいさんのこじきが居たね」

わたしはこじきの模様を詳しく話した。エテルナでの印象強い出来事については黙っていた。

「ああ、あのこじきか、見なれない奴でね、でもちよつと変わってたな、それがどうかしたんか」

語尾にいくらか関西なまりがあつた。

「いや、ちよつと事情があつて行方を捜しているんだが——」

流しの男はモゾモゾとポケットをまさぐり今渡した三千円と最初のチップの分千円とを合わせた四千円を、わたしのほうに突き出して言った。

「そのことならおれは知らん。金は返すよ」

あつさりした言い方だった。案外直情径行型のいい奴だなと、わたしは笑顔になってそれを押し返した。

「君、そんなにせっかちになるなよ。いや、知らなければ知らないんでいいんだ。だったら——」

ひととき間をおいて、

「エテルナの店のことを知ってるか。マダムや女の子たちのことさ。どんなことでもいい。どんなちっぽけなことでもいいんだ。君の知ってること、みんな話してくれないか」

「エテルナね、そういえば、あのこじきはほとんどエテルナ専属みたいで、あの店の前ばかりうろうろしていたね」

わたしはそれを聞くとほくそえんだ。やっぱりそうか、と、スルスルと糸がつながっていく興奮みたいなのを感じた。だがまだ、ほとんどわかつてはいなかった。実に漠然模糊とした手探りにすぎなかった。

残酷、残酷、残酷

何のために相馬博士はこじきになったか、それも一度や三度ではない。五、六度もそうやって変装しているのだ。博士は奇人だという。こじきになることを好む奇人は、ということ、いちおうわたしは、博士がマゾヒストではないのか、ということ疑ってみた。

「裏窓」という雑誌に、人体当たりマゾヒズム論Vというマゾヒストの手記が載っているが、それを読むとこじきに変装する部分がある。こじきになって、女から軽べつされ犬のように扱われる、そういうことに倒錯の情熱を燃やす話である。

だが博士がこじきになったのは、マゾヒズムのためなのであろうか。そんな簡単なことなのであろうか。そうとは思えないのだ。

わたしは何とはなしに、エテルナに焦点を当てて考えていた。エテルナは上島氏が行きつけのバーである。それをわたしがおなじみとして引き継いだのだ。今でもあの店には、上島氏のおいがこもっていた。彼とあそこで、マダムや女の子をまじえて、サレアの話をした。女の残酷さについて話もした。

残酷さといえば小林春吾が得意満面に、女族残酷物語の企画について、それからゴールドンの伝説や相馬博士のことをしゃべったのはエテルナにおいてであった。そうして、そこにこじきが、つまり博士自身が現われて、マダムや女の子に犬なみの悔べつ的な扱いを受けた。あの手のひらを返すような冷然としたマダムの表情——いや、これは何もマゾヒズムのためではないのだ。博士はエテルナばかりを目当てにやってきた、それは流しの男が言うとおりの。上島氏、サレア、女の残酷、ゴールドンの伝説、博士の失踪、それから上島氏の遠い異郷の海での奇怪な消失事件、そう考えると、ふとまたあの正体不明の女、留守中に「ゴールドンの古記録」を持ち去った女のことか思い返される。そうだ、単に失踪なん

かではなく、博士はだれかに誘かいされたのだ。

つまりこじきになってエテルナに来ていたからだ。エテルナの何かを探ろうとしたからだ。最近南方から、新しい新事実と、ゴールドンの伝説に関する記録や、新研究を得てきたからだ。

得てきたからこそこじきになって——それからそれへと、長い間わたしは、自分かつてな空想にふけていた。

暗合、暗示

「エテルナのマダムについて、詳しく知ってるのはだれも居ねえんじゃないかな。ルミにキクにナオミか、女の子三人ともそういうやだれも知らねえな。三年ばかり前、あの店が開店したときマダムがどこからか連れてきたんだ。それがよ、白状するけどよ、おれ、キクって子と一度寝たことあんのよ。のこのこ温泉マークまでついてきやがるんで、こいつあ気があるなって喜んでたらよー、パンティ一つのはだかにしたはよいが、おっぱいんとこだいてみたら、まるで氷みたいに冷たいんだ。何だかゾツとしたね。あの感じどう説明したらいいかな、ちょっと死人だいたみたい。な気しよかったな、するとキクの野郎ケラ

ケラッて笑いやがんだ——」

流しの男のことばには、何か笑えぬものの中に含まれていた。

「逃げようたって逃がさないぞ」

半分ふざけ半分ではあったが、わざと男のようにすごんでみせたあのキクの、クリクリした目を思い出していた。

わたしは下宿のおばさんが届けておいてくれた夕刊を広げて目を通した。それにはアフリカに出かける京大調査隊の記事がのっていた。

『人類の起源と進化の過程をつきとめるためアフリカ大陸の野生チンパンジーと原始部族の生態調査に取組んでいる京都大学は、六月の乾期に、第二次アフリカ類人猿学術調査隊（隊長京大人文科学研究所教授西司郎）を朝日新聞後援で現地に送ることになった』

その記事の下隅に、海外トピックスとしてサレアの記事が小さくのっていた。発信地はキューバのハバナからであった。

彼女はいつから、ハバナに居るのであろうか。

ふとキューバ付近の洋上で蒸発するように消えた上島氏のこと、奇しくも思い返されるのであった。

（未完）

■見たもの聞いたもの

東映映画「十七人の忍者」のなかに、女忍者へのかなり強烈な責めが登場する。

大友柳太郎ふんする公儀隠密の妹、梢（三島ゆり子・新人）が、敵方の駿府城下から脱出しようとして、城方の侍に捕えられる。

細引でうしろ手に縛られ、縄じりをひかれて、兄の捕われる牢の前へひきだされる。

近衛十四郎ふんする城方の忍者に「仲間の隠れ場所をいえ」と責められ、ついに城中の拷問部屋につながれる。

ふとい柱に、両腕を前抱きにされて縛られ、背中をムチ打たれる梢。ついには、素肌をむかれて打たれ、なまなましいムチあとが披露される。とくに、悲鳴が迫真的であった。



読

者

コ

ー

ナ

ー



★七月号拝見しました。過去私はたくさんマンネリ化した作品、というよりSMを描かんとめ無理に設定した背景の下で、人間性が、あるいは切実な人生のある断面が、描かれた作品というものを見出すことができず失望し、また幾度も「裏窓」をほうりだそうとしたものでしたが、その時でも一、二編の傑作が最後の私の救いでした。最近の貴誌は、装幀もなかなか斬新で、ひと目で惹きつけられますが、何よりもうれしいことは、平均点以上の作品が増えたことでしょう。それは、編集の方法によるものか、作家連の奮起かと、とにかくそのよい傾向をよろこんでおります。たとえ凡作

が連なっても、長年愛読している者にとっては、長い目で見るという、いわゆる慢性化した視点があり、きびしい要求はしないものですが、それでもちゃんと「裏窓」の作品に伴なう歴史を眺め、明日のよりよき充実を望んでいるものです。これは、私の偏見とは思いますが、海外版のSM写真はともかく、絵には興味がありません。よりすぐれた作品を、日本の先生方は描かれます。その作品のために、広いスペースは使われるべきではないでしょうか。それから最後に一言、この欄でおなじみの郷保夫氏の「ばいざいッお転婆学園」と続篇を読み、氏の並々ならぬ筆力に、私は感心しまし

★他にも多くのご投稿がありましたが、スペースの都合で掲載できなかったことをおわびします。このらの投稿はハガキでも結構ですからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌次号をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

た。ユーモアあふれるタッチはいつもすごんだ作品群の中にあつて、軽い笑いをもたらしもので、真夏の清涼剤のごとき、新しいタイプの作品である、うれしく思いました。

（東京・K）

★裏窓八月号拝見いたしました。が、まったくすばらしい内容に息もつかせず読ませていただきました。その内容について、感想を書いてみます。正直にいつて、表紙はどうもおとなしすぎます。しかし、書店にならべるたてまえから、表紙もあまり強烈なもののはせられない事情もあると思います。しかし、何といっても表紙うんぬんではなく、私たちが望むのは内容の

充実です。その点、内容はさすがに良いものが多いので安心です。巻頭、巻末の絵物語は、山田画伯の力作にくわえて、オフセット印刷の美しさは、充分私はたんのういたしました。春日章先生（堂昌一先生の絵に似ています。ペンネームででしょうか？）の絵も私の好きな画風です。今後も春日先生の絵をお願いします。ともかく私は絵が好きで貴誌に載っている絵に、たいへん興味があります。絵を描くことの好きな私にとって、貴誌に載っているたくさんさんの絵は、この上ない絶好の教材ともなっているのです。ところで話は変わりますが、エダ・キリコさんの撮影行という記事、たいへん興味のある文でした。小生は、いつもグラビアにのっているモデル嬢の心の中は、どんな気持ちをしているのだろうと思っていました。そうだった点で興味深く読ませていただきました。今後もうこうした記事（撮影アラカルト、苦心談等）を掲載して下さい。なお、「砂の上の船」のグラビアですが、モデルにタイツをはかせていますが、この方が全裸そのものより、エロチックな楽しさがあります。



読者コーナー



(和歌山 Y・M生)

★貴誌のご発展を心からよろこび、同時に楽しませていただいております。貴誌も本号(七月号)より二割五分の値上げとなり、なんの予告もありませんでしたので、私のような、毎月百円玉二個を握って、本屋を往復していた者は、余分に歩かされました。諸物価の値上りにともない、いたしかたないですが、ここに、強くお願いいたしたいのは、「本代上って内容下る」にならないように、一段の努力をほつする次第です。最近号を読みまして感じることは、どうも物語に似たような作品が多い気がしてなりません。今月号「泣きじゃくる弓子」も、五月号で「アラビアの城」が掲載されていますので、再度読ませる必要もなかったのではないかと思います。また、この作品に似たのは、十二月号「赤い城」「可愛い調教師」が掲載されています。本誌らしく、バラエティに富んだ作品を掲載して下さることを、切望いたす次第です。以前は、なかなか読む者に教える作品が掲載されていました。たとえば「日本刑罰史」など。本誌の絵は実に良いと、毎度思っ

ています。また、表紙もその美しさに毎号おどろかされますがむしろ表紙などは黒一色にし、そこへ題字を反対色で浮かせるようにしたほうが、経費の点から、見た目も良いのではないかと、思う次第です。現在のよう美しい表紙は、額に入れておきたい代物です。また、編集後記でもったいつけることなく読者のための本に、せひしていただきたく願う次第です。良いグラフィアを、良い作品を、より楽しめる絵を、掲載願って止みません。それでこそ、読者の求める「裏窓」であると、確信いたす次第です。(東京・S)

★斯界の王者、わが「裏窓」において、その敬愛する編集部を左右するであろう大事なグラフィアに、精魂こめて撮影したたくさんの縛り写真の中から、読者にいちばんよろこばれなさそうな写真をえらび、それを載せなければならぬというご時勢に、先日封切られた「女女物語語」の縛り場面は、久しぶりの興奮を私に与えてくれた。以下ざっとその感想をのべよう。

場面変って、いきなり長襦袢一枚の女が、座敷の中央につき

倒される……。のはよい。そして左すみの方に一束の縄を持った男が現われる……。のはちょっとまずい。というのは、この男が女をこれから縛るといふ暗示を与えるため大きく縄を画面にみせるが、どうやら右手に持っている。しかし、縄をしいて縛るには、縄束は左手に持たなければ具合が悪いと思う。すると、この男は左ききなのか。左ききの方が器用だというから上手に縛れてそれでよいのかも知れないが、やはり縄束は右手で持たないとまづいと思う。さて、女の両腕をぐいとねじあげて縛りだす。ねじあげて縄をかけてませはじめあたりはよい。迫真力充分、思わずドキッとする場面である。普通の映画ではあのようにして両腕を縛りはじめめるものなど決してない。しかし、縛り役の男が少しアガったのか、それからがちょっとまたつき気味であった。そのため、すぐそこはカット、次にうつしだされたものはもうすっかり縛られた女の背面。これじゃあ、なあんたという感じがする。縛られた女はなかなか感じさせる味をただよわせていたが、惜しむらくは、そこまでにいたる過

程をうつし出してくれなかったことだ。「いや、チャンとそういうところも見せてやったはずだ」あるいは武智先生はそう言われるかもしれない。それは、黒いシュミーズの女の場面であろう。画面いっぱいうつしだされた黒シュミーズの肉つき豊かな女体。縄が、ヒシヒシと女の体をしめつけていく。縄をしめるたびに、豊かな乳房のあたりの官能的な黒色のシュミーズや、肩からずり落ちたつり紐なとがブルンブルンとゆれ動く。実にすばらしい場面だった。私の血をわきたたせるに、充分魅力的な写真だった。しかし、もうその時は、女の両腕は後に組まれ、縛られていたのである。なぜ、この女を捕え、腕を後にまわし、手首を縛り、そしてあのすばらしい場面まで持たせていくれなかったのか。この黒シュミーズの女は長襦袢の女ではなく、したがって長襦袢娘でもない。だから、両腕をぐいの場面と、ヒシ・ブルンの場面とは、一見つぎたせば女を縛る過程がわかると考えられやすいが、実はカッキリと断層があるのである。雰囲気がちがってくるので



ある。ゆえに、せっかくもありあがった興もそがれる。それに、黒シユミーズの場合、女の顔がうつっていかなかった。縛られる時の、刻々変る女の表情は実に大切なものである。これをうつさなかったとは！

とか何とか、いろいろ文句を並べたが、本当はかなり興奮して見ていたのである。はじめに言ったとおりの、今のご時勢を考えれば、涙が出る程うれしかった。と、そこへひょっこり変な男がとびだして、カメラを構えるところが画面一ぱいにうつった。なぜ、こんなぶざまな構成をしたのだろう。私はここで、この一連の縛り写真が、一面ある意味で迫真性を持ちながらも、ぬるま湯につかったような感じがする理由がわかった。演出者にサディズムをあつかう資格がないのである。極言すれば女を描き出す力が不足なのである。そもそも縛られた女たちを、縛りのモデルとして描いたことに間違いがあった。これでは金のため貞操を売る職業的な女性と同様になってしまう。なぜ女のマゾヒズムに焦点を合わせなかったのだろうか。少くとも女を描くことを目的とした映画

なのであるから、この隠された女の美しさ、魅力をぐっとひき出してみせるべきであった。この演出者の焦点ちがいがさらに画龍点睛を欠く失敗をやった。それは、一人として猿轡をされた女がでてこないことである。何人かの女が縛られていたのであるから一人くらい、と思ったが、猿轡という最高のアクセサリは誰もつけていなかった。なにか、通り一ぺんの演出という感じがする。

しかし、と私は秘かに思う。あの偉大な武智氏のことであるから、私がくどくど言ったことなど、実は先刻ご承知なのであるまいか。なにぶん今のご時勢だから、わざとマゾ女を表面にたてずに縛り写真のモデルとすりかえたのではなからうか。目指すところは、女のマゾヒズムだったのでなからうか。とすると、描き足りない不満は私より武智氏自身で、すでにいろいろお感じになっているにちがいない。縛りあげる過程も、猿轡も——。ここに思い至り、私は武智氏の労を多とし、自らの不明と失礼を心から、そして、よろこんでお詫びする。

(東京 Y・G)

●編集後記●



を、編集長みずから、その女性に会うため、大阪へ飛んだことです。

▼「私はすこしばかりのM傾向を有する一女性です。貴誌を拝見しておりますが、どうもグラビアは兎戯に類するものばかりでものたりません。一度だけなら、私がモデルになってもよろしいと思います

▼とりわけ美人というほどではなくとも、まず愛らしい顔立ち。二十一歳という年令もウソではなさそうな肢態。ギランティも折り合いが付きいよいよ撮影開始。

が……(以下略)」というお手紙が、大阪在住の一女性から、編集部にとどきました。

▼ところがおどろきました。縄のかけかた(つまり縛りかたですな)を、ものすごく注文する。

▼「それじゃ急所がしまつてない」「もつときつく」などという要求を大阪弁でやられこっちはもう、汗みどろ。

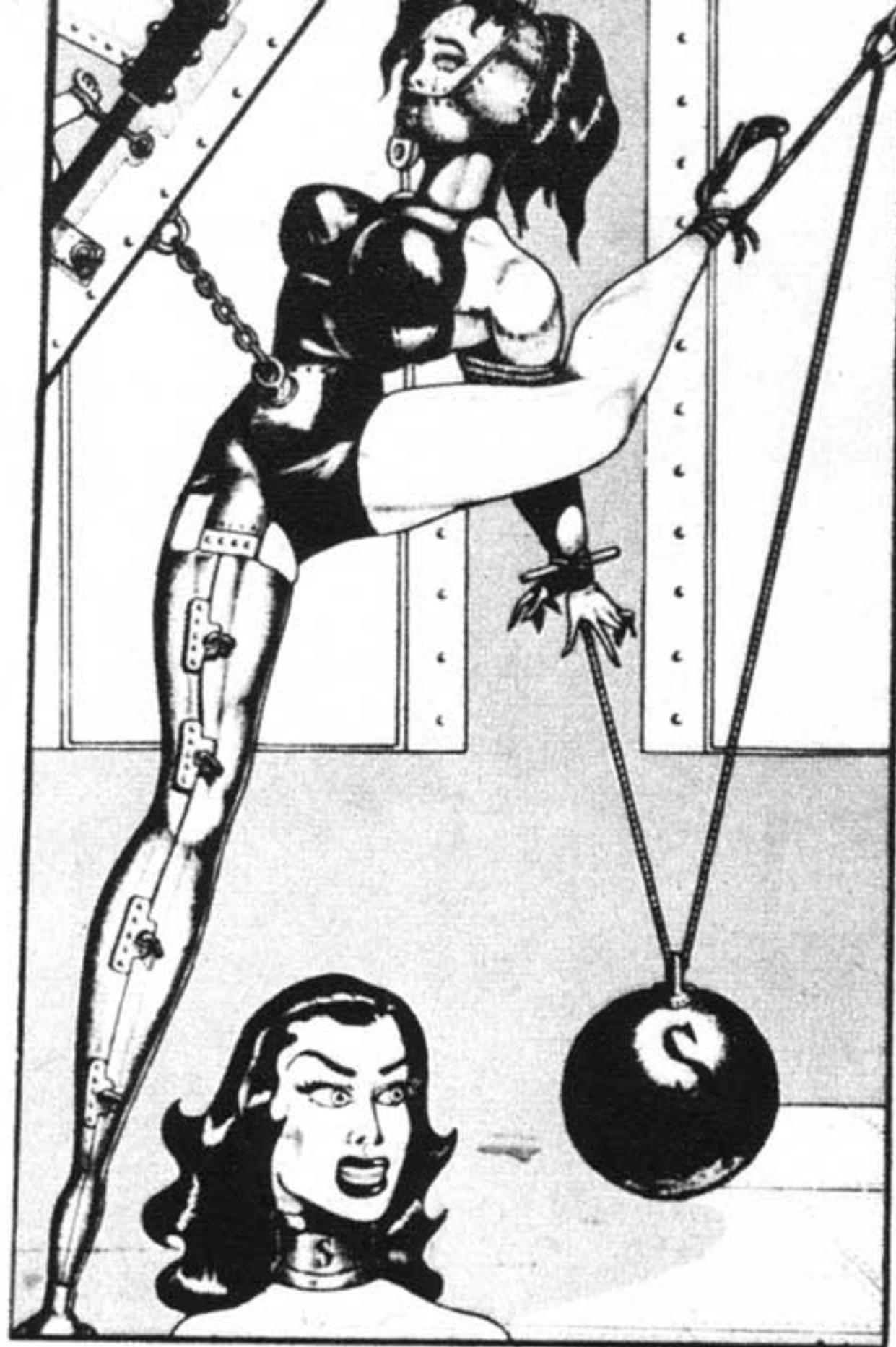
▼「くそッ」とばかりに、全力をふりしほってやったことはやったのですが、写真の出来のほうは、あまり強烈すぎて、みな、ボンッ。

▼この暑いなか、忙しいなかムキにさせました。

▼モデルは、あまりMすぎてダメというお話。(飯田)

海外の 公刊誌より

アメリカ
SM絵物語
ご紹介



カルフォルニア
フェニクス商会・特約

BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

Elissa, soon found out that "Uneasy, Lies The Head That Wears A Crown," for the rumbling of discontentment over her arbitrary and capricious methods of dealing with the help, soon reached her ears, of a plot to assassinate her and overthrow her regime. By coercion and threats of severe punishment, she found out the names of the ringleaders.

Fearful for her life, the arrogant and haughty ruler of the Baroness Steel's household now felt for the first time the chill of impending tragedy and doom, for she knew it was only a matter of time when one of the unruly servants would forsake her vows of obedience and kill while she slept. Yet, she had gone so far now and the taste of power and leadership had gone to her head like a strong wine and she did not want to give up her throne and dominating influence over the huge estate of the Baroness Steel.

When the ringleaders of the insurrection were brought before her and refused to give her the pledge of allegiance she requested, the newly acclaimed ruler then threatened to loose the mighty electronic, steel robot man against them as a last resort. With that, Elissa pressed a button which summoned "Steelama" the electronic robot, which had been kept in readiness in case an emergency arose.

Now that the emergency had arisen, Elissa, trusting no one, turned up the dials and buttons which controlled the robot. The robot responded to the slightest command of Elissa and when she pushed various buttons which worked the gears in the steel claws of "Steelama's" hands, the robot did as instructed, having been so constructed that the short wave

4



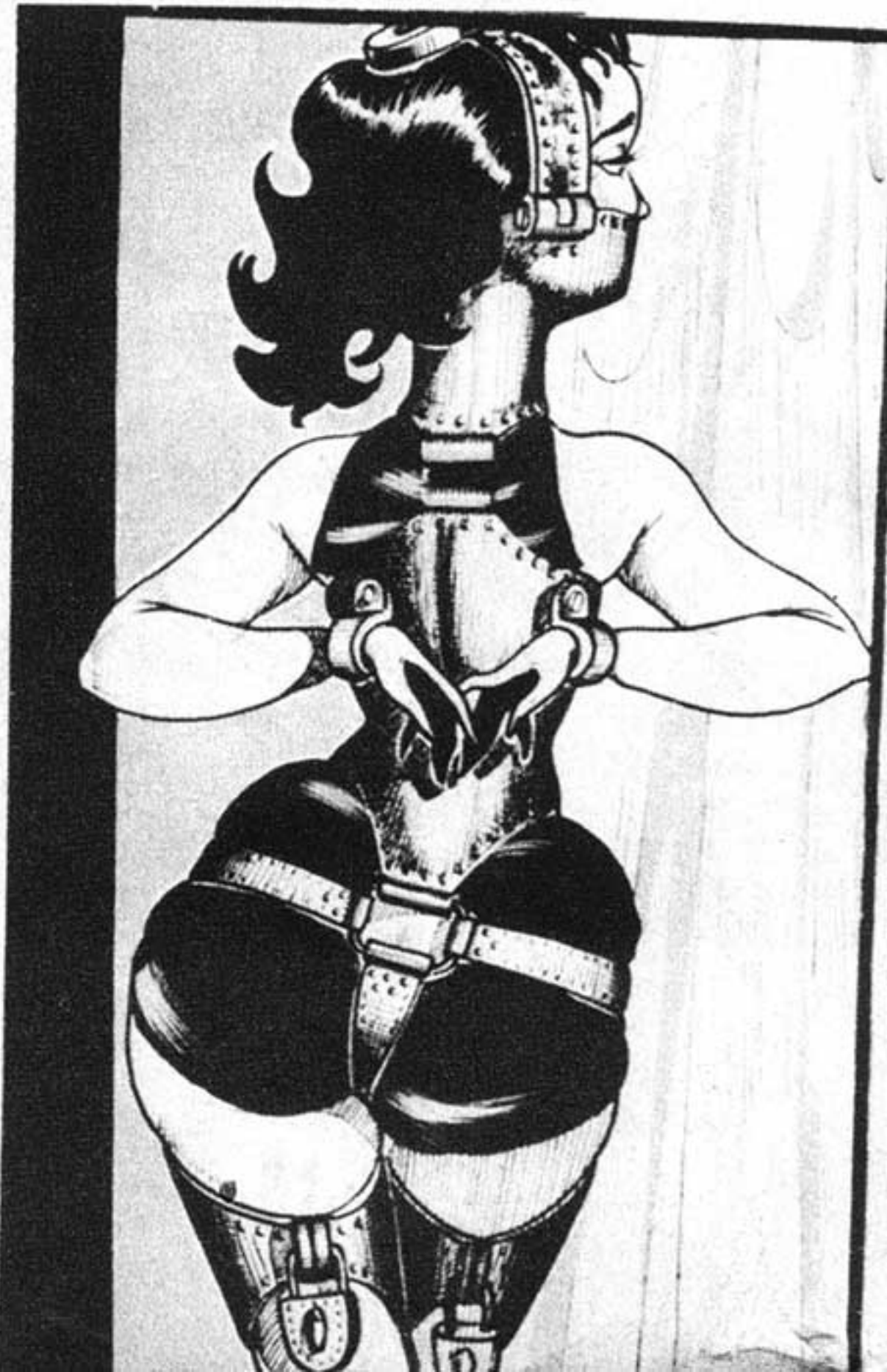
41



21



JIM



BARONESS STEEL'S MUSEUM OF TORTURE

Going down to the lower regions where unruly servants were being kept to serve out their punishment periods meted out to them for various infractions of her rules, Baroness Steel was amazed and startled to discover that virtually all her trusted and valued assistants were being held in various stages of bondage. Turning to her head housekeeper, who had accompanied her on the sudden inspection tour, the Baroness exclaimed, "Elissa, just what is the meaning of this outrage, why are my valued helpers bound in such a helpless manner? There's something wrong here and I demand to know, at once, what they might have done to warrant such strict bondage." "Release these girls at once as I intend to get to the bottom of what has happened here since my absence."

Elissa, the head of the household, knowing the jig was up and that her plan to take over the entire household and the ruling power of the Baroness Steel would be revealed if she released the unwilling captive friends of the Baroness, suddenly turned on the unsuspecting Baroness; lashing out with a sledge-hammer blow which landed on the Baroness' chin, stunning her for the moment and knocking her down to the floor.

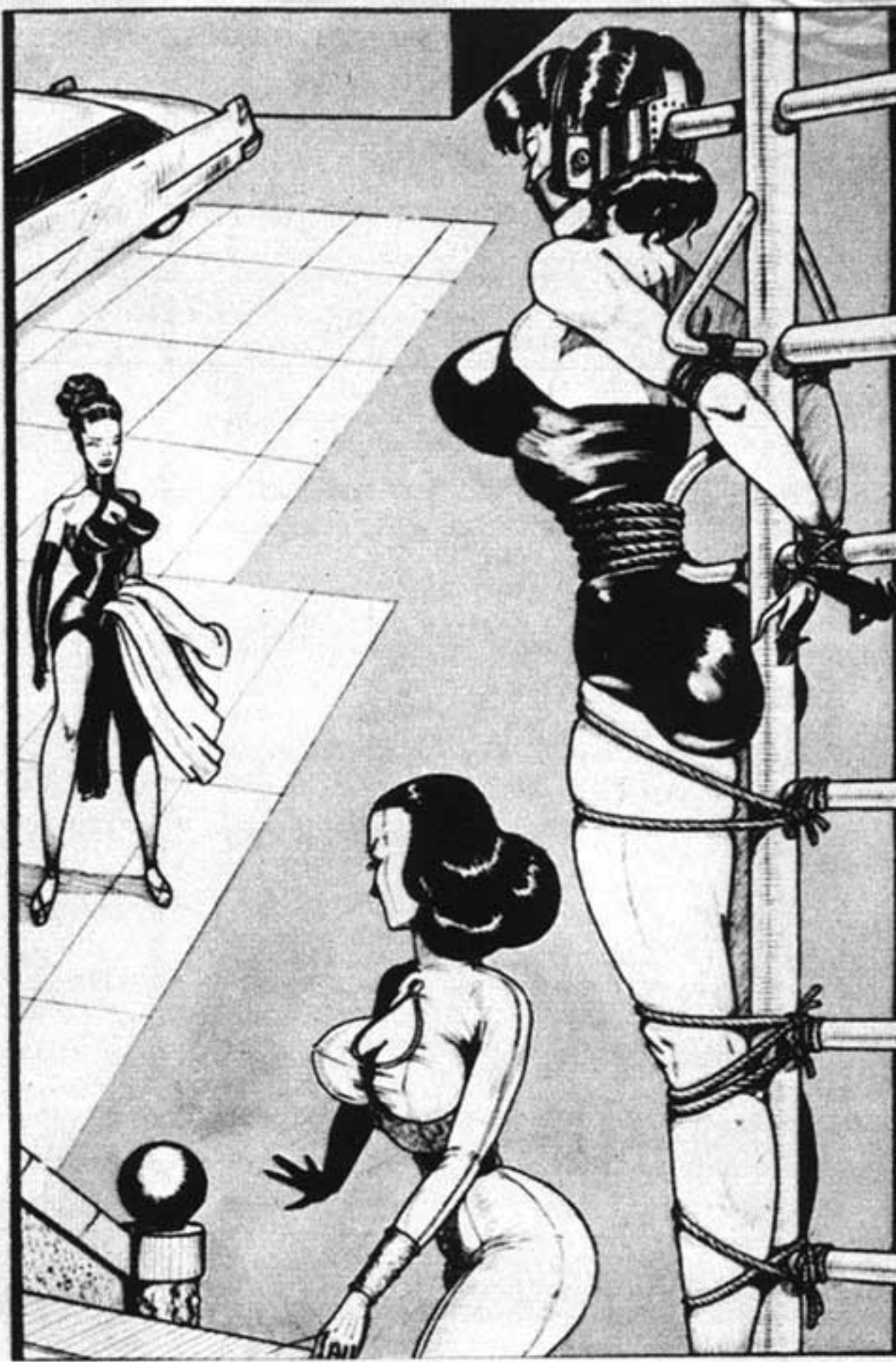
Turning the half-conscious Baroness around, the housekeeper placed her wrists behind her back, binding them securely. In the ensuing struggle that followed the fragile dress of the Baroness was torn and tattered to pieces. Before the stunned Baroness could recover from the hard blow she had received, Elissa slapped a handy steel-pronged gag in her mouth, thus shutting off any attempts at an outcry the Baroness might make.

58





50

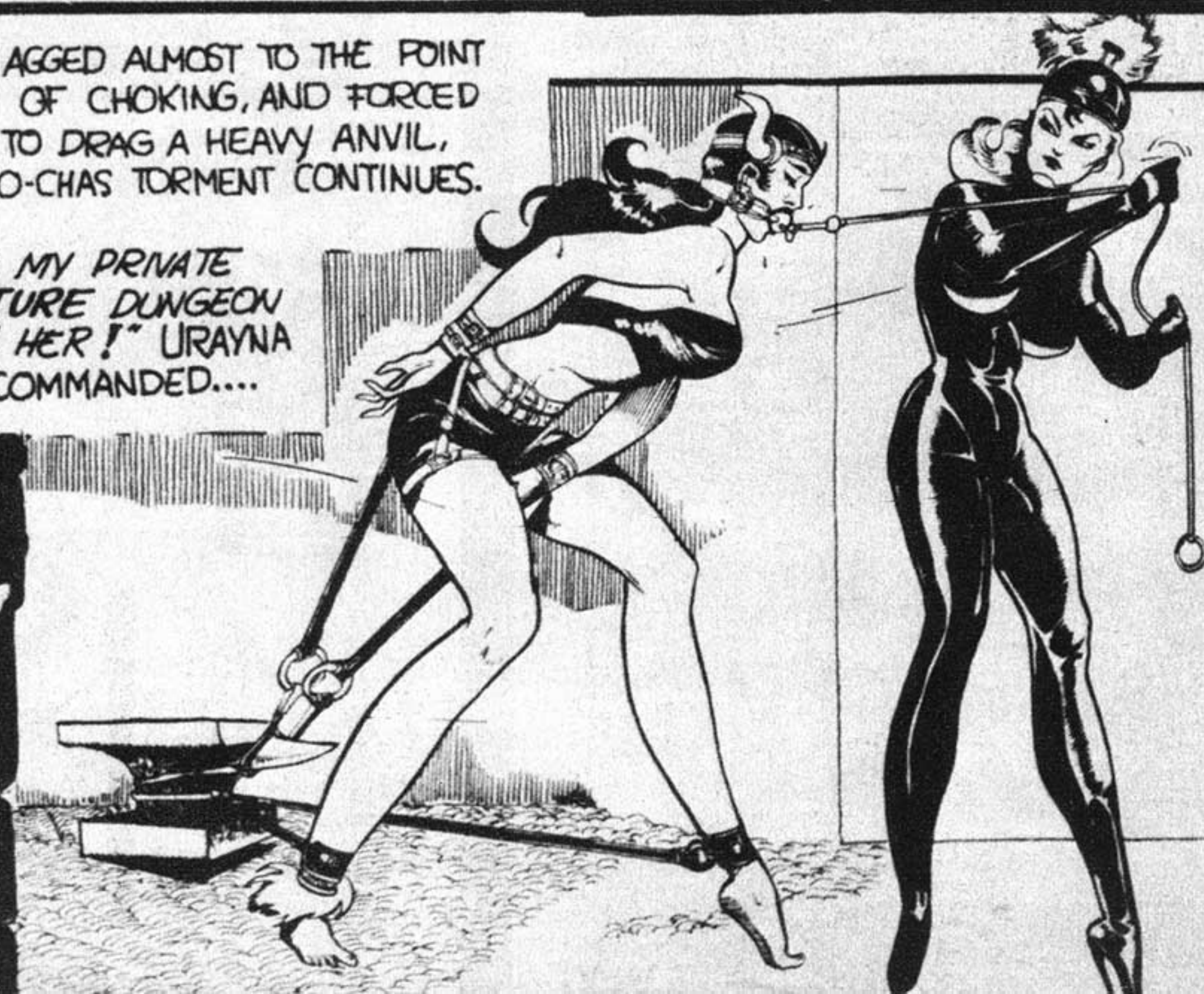


HOURS LATER, THE TREACHEROUS TRIBES-GIRL REACHED THE STRONGHOLD OF URAYNA THE MOST FEARED AND HATED WOMAN ON THE ISLAND---THE GUARDS QUICKLY ALERT THEMSELVES AT THE APPROACH OF CHO-CHA, BEING THAT O'CHEELA'S SAVAGE GIRLS AND URAYNA'S ARMY WOMEN ARE CONSTANTLY AT WAR--"IT IS I, CHO-CHA" CALLED OUT THE JUNGLE GIRL--"I BRING NEWS FOR URAYNA!"---"ENTER, DOG OF AN INFORMER!" SPAT OUT THE GUARDS, FOR ANY ONE DETESTED A BETRAYER !!.....



GAGGED ALMOST TO THE POINT OF CHOKING, AND FORCED TO DRAG A HEAVY ANVIL, CHO-CHAS TORMENT CONTINUES.

'TO MY PRIVATE CAPTURE DUNGEON WITH HER!' URAYNA COMMANDED....



X WITH RAWHIDE THONGS BINDING THE LEATHER ABOUT THEIR ANGEL-SOFT ARMS AND LEGS, JAN AND ELEXUS ARE STARTED ON THEIR WAY TO THE WRECKED PLANE TO PROVE THEY ARE NOT ENEMY SPIES, AND TO SAVE THEMSELVES FROM DEATH. "YOU'LL NOT COVER MY EYES WITH 'DEVIL-CRAFT!'" SPAT CHO-CHA.



23

C HO-CHA, THE INFORMER IS ABOUT TO BE PUNISHED FURTHER AT THE HANDS OF "RHEBA", A URAYNIAN MAJORETTE WHEN URAYNA ORDERS THE FRIGHTENED WITCH-DOCTRESS TO BE BROUGHT TO HER CHAMBER....

"YOU'RE LUCKY!" SNAPPED MAJOR RHEBA---"IF IT WERE LEFT TO ME, I'D RIP YOUR YELLOW SPINE OUT---- ZOLTA WAS MY SISTER!!"





15



AUNT ROPES THAT FURROWED DEEP INTO THEIR SOFT SKINS HELD THE CAPTIVES IN RIGID POSITIONS AS O'CHEELA, TRIBAL LEADER CONFRONTS THE THREE. "YOU WITCHES OF EVIL DEEDS WHO COME FROM THE LAIR OF MY ENEMY RAYNA IN DISGUISE, AND 'CAPTAIN ZOLTA' OF 'URAYMAS' ARMY OF HELL, WHO SEEK TO CONQUOR AND ENSLAVE MY PEOPLE SHALL BE SACRIFICED TO OUR GOD 'KA-HAI A' COME THE RISE OF THE SUN-I O'CHEELA COMMAND SO!"



BENEATH THE MERCILESS RAYS OF THE TORRID TROPICAL SUN, ELEXUS, CHO-CHA AND JARI, THEIR BODIES ENCIRCLED WITH STRINGENTLY BUCKLED BANDS OF LEATHER, FORCED TO BREATHE THRU PARCHED LIPS, FIGHT THEIR WAY ACROSS THE SCORCHING DESERT, PULLING THE PLANE AGAINST THE SAND FILLED WINDS OF AN ONCOMING STORM!!!

裏窓叢書 名場面集

この縄をひけば、どういう光景が展開するのか。

残忍な所業である。

いま、うしろ手に縛られ、足をちぢめて床にうつ伏しているお絹を、天井から逆さ吊りにしようというのだ。

しかも、右足首だけに縄を巻き

つけたということは、お絹の全身を片足だけに重みをかけて吊りさげようという準備である。

「早く縄を引け。塔十郎——」

わざと緩慢な塔十郎の動作に、渋川伴内、またじれた。

「ふふふ。おぬし、どうも気が短かい。じわじわやれといったのは、

おぬしではないか」

塔十郎、妙に赤い舌をだして、ベロリと両てのひらをなめた。縄を引くために、湿らせたのである。

そして、天井から垂れ下った縄を、むぞうさにつかんだ。

「この縄をひくと、お絹の片足があがる。片足だけがな。ふふふ」

ぐい、とひく。

必死の思いでちぢめているお絹の足が、縄にひかれてジリジリのびた。ハツとして抵抗するが、縄の力は強い。

お絹の右足首が、ぐいぐいと上にひきあげられていくのだ——。



裏窓叢書第一集 肌獄地異狂

飯田豊吉著 中島喜美絵

裏窓叢書第二集

縛呪姫黒

黒木 忍 著 山田 彬弘 絵



何気なく、女は細竹の先を畳の合せ目につきいれた。恰度、四方から畳の隅が集まっているところである。

細竹が、ずぶりとさし込まれる。女は、そうしたまま細竹をしならせる。手に力を入れて指が畳にすりつくまで押してみる。

「折れないもんだねえ」

女は、ふと感じたように、ひとりごとをしゃべる。

その目が、しのぶの顔へゆく。

ふと、意地の悪い笑いが女の唇のはしにうかんだ。

「ね、ちよっと目をあけて見てごらん」

しのぶは、恐る恐る目をあけた。

「折れないんだよ。折れそうで、だけどころかこうやって先を畳につけるのには力がある」

しのぶは、なんで女がそんなことを見せたがるのか、わからなかった。

女は、畳の隙間に立てた細竹を

しならしたまま微笑する。

「お前さん、後手にしばってあるけど立てるだろうね」

「は、はい」

「こっちへ歩いてくるんだ。そしてこのしなわした細竹の上にきちんとすわってごらん」

きいて、しのぶはあっと思う。



朱実は両腕で乳房を抱き、また逃げはじめ。登美子が縛りつけられている椅子の周囲を、犬のようにはいつて逃げまわるのだ。

必死だった。乳房がゆれ、胸がくねった。だが、せまい部屋だ。そして、敵ばかりなのだ。逃げる裸身の首が驚づかみにされ、手にはたちまち縄をかけられた。

「ひいいッ！」

咽喉にも縄が巻かれた。もう動けない。もがけば首がしまる。朱実はいしる手に縛りあげられる。素肌に荒い縄が喰いこみ、ゆたかにまるい乳房の形が、縄目にぷつぷつと割れた。

「あの鉤から吊るしてやれよ。そのほうが手っ取り早いだろう」次郎が、天井に視線をむけていた。

この部屋は、もと倉庫だった。コンクリートの天井に、ふとい鉤型の鋼鉄が、数本打ちこんである。朱実にとっては、それは悪魔の爪だった。

「へい」

返事して、アキラは朱実を縛った縄尻を、その天井の悪魔の爪にひっかけた。

アキラは手に唾をした。これから、この縄を引いて、朱実のからだを宙吊りにしようというのだ。

裏窓叢書第三集

地底の牢獄

藤見 郁著 秋吉 巒絵



裏窓叢書第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

裏窓叢書第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

掌中にめざす獲物を捉えたむささび小僧は、ほくそ笑んで魔手のばそうとしている。じつくり時間をかけて、雪絵の口を割る自信もある。女の急所を心得たむささび小僧なのであった。

「やめて、やめて下さい」

恐怖とおぞましさに、喘ぎなが

ら、泣き声を振り絞る雪絵。

「こいつは地獄縄といってな。若い娘にはこたえられねえものさ」

ふところから、新らたに一束の縄を掴みだしたむささび小僧である。

忍びこんだ屋敷で、女を弄ぶための縄だ。むささび小僧の手に握

られている縄は、女の凝脂と呻吟を吸い取って、ぬらぬらと輝いているようであった。この縄に裸身を縛りあげられて、何人の女が屈辱の涙を流したであろうか。

「あれッ、かんにん——」

耐えられずに、裸身をのたうたせる雪絵であった。

ふくよかな腹部に、深くくびれを刻んで、縄はふた巻される。余った縄尻を掴んだまま、むささび小僧がにたりと妖しく嗤った。

女の最大の弱点である羞恥を縛りあげる期待に、むささび小僧の胸がふくらんだ。

（「責め肌忍法」より）

裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302振替東京10756久保書店宛

38年(八月号) 二五〇円

◎絵物語 東京—神戸十六時間

文・祖父江 新
絵・山田 彬弘
文・矢桐 重八
絵・春日 章

◎絵物語 めめ肌女郎……
文・矢桐 重八
絵・春日 章

◎絵物語 密林の美女……
文・黒部 恭治
絵・中川 彩子
文・祖父江 新
絵・落合 竜二

◎西部 紅のライフル……
文・祖父江 新
絵・落合 竜二

★グラフィア・砂の上の船
漁師宿にて……吉田 久

★グラフィア・海外サド写真特選集
残念なり狼飛佐助(小日向一夢・絵) 井村 錠
妖異水底に沈む(秋吉樹・絵) 信夫 澄夫
お仕置きにぬれる弓子(鬼頭暁・絵)

北園透一郎
お転婆学園秘密作戦(江洲晃夫・絵) 郷 保夫
女の争い(都築峰子・絵) 五所 章
フィギュア・トレーニング……春川 光彦

切支丹散華(東桂史・絵) 北村 仙也
現代マゾヒズム文化時評(17) 森下 高茂
体当たりマゾヒズム論(13) 水尾 究

ゴルドンの記憶⑤(江洲晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(七月号) 二五〇円

◎絵物語 無明怨念記……
文・矢桐 重八
絵・春日 章

鞭のニコラス……
文・春日 章
絵・中川 彩子

続・アラビアの城
泣きじゃくる弓子……文・北園透一郎
絵・鬼頭 暁

グラフィア・静かな山林の午後
闇に光る……吉田 久

◎絵画集・サディスチンの微笑……江洲 晃夫
喜多 玲子

切支丹女牢……喜多 玲子
南北戦争以前……鬼頭 暁
海外SM絵物語……フェニクス商会

切腹殉教記(小日向一夢・絵) 黒部 恭治
しのび逢い刺青情話(都築峰子・絵)

北野 竜一
くたばれッ淑女学院……郷 保夫

西鶴におけるマゾヒズム……安東 泉
血染め白百合(古正英生・絵) 佐藤達四郎
体当たりマゾヒズム論(12) 水尾 究

墓場からの命令(山田彬弘・絵) 祖父江 新
わが愛の渴望(落合竜二・絵) 白木ゆりこ
虐げられた女たち(東桂史・絵) 野方 伸

ゴルドンの記憶④(江洲晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(六月号) 二〇〇円

◎鬼頭暁時代妖美画集……鬼頭 暁

◎中島喜美時代妖美画集……中島 喜美

グラフィア・幽囚の部屋……吉田 久

◎絵画集 続・美しき海賊船 フェニクス商会

七つの大罪(中川彩子・絵) 落合 竜二

続・異端の終末……芦田 奈貴

おどろ記珍化論……左 次郎

「ロリーター」における
ニンフェッティズム……安東 泉

「夜と霧」……黒田 史朗

放浪と自己恋着の画家……かびや・かずひこ

月光の道で……河村 童八

鬼婦長……丸亀 恵子

夜の妖蝶……立原 道夫

ボスには乳房がある……五所 章

体当たりマゾヒズム論(11) 水尾 究

さんざね不動(小日向一夢・絵) 庄内 裕治

復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵) 黒部 恭治

忍法「乳影」(鬼頭暁・絵) 島本 春雄

妄執侍(古正英生・絵) 潮 一樹

霧姫変化(鬼頭暁・絵) 佐藤達四郎

ゴルドンの記憶③(江洲晃夫・絵) 阿麻 哲郎

38年(五月号) 二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆……文・島本 春雄

流刑星の美女たち……文・東 桂史

江洲晃夫耽美画集……文・豊田 一狼

グラフィア・夢幻のへや……絵・山田 彬弘

美しき海賊船……藤沢 修

くさりと美少女……フェニクス 商会・提供

海外SM画傑作選……井村 錠

茅女物語……潮 一樹

会津の女兵……飯田 豊吉

その夜……阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶(2)……村山 省

椎名夫人の足……かびや・かずひこ

ほも紳士録……森下 高茂

現代マゾヒズム文化時評(14) 水尾 究

体当たりM論(10) 北野 竜一

私の愛した女優……北園透一郎

アラビアの城……祖父江 新

孤島の復讐鬼……祖田 奈貴

異端の終末……夢中 夢夫

背後の脅迫者……郷 保夫

ばんざいッお転婆学園……郷 保夫

38年(四月号) 二〇〇円

38年(三月号) 二〇〇円

38年(二月号) 二〇〇円

38年(一月号) 二〇〇円

37年(十二月号) 二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……

・マドリヌと黄金の靴……

・白狐のお新いろうさんげ……

小日向一夢妖美画個展……

・黒いタイツ……

・鏡と女……

海外SM画傑作選……

・パウリーネ夫人のピクニック……

・ゴルドンの記録①……

処刑の囚……

無分別な夜……

大阪非情地帯……

内外ミュージックホール・スナップ集 藤沢修

「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話 北野竜一

文芸評論「醜いコメディ」について 安東 泉

文・島本春雄
絵・秋吉 樹

文・松平莊司
絵・中川彩子

絵・東 桂史

小日向一夢

毛 卓三

猪島 昌也

藤沢 修

フェニックス商会・提供

阿麻 哲郎

三鬼 俊

海老沢七郎

豊中 夢夫

藤沢修

北野竜一

安東 泉

絵物語・スリーベツト号……

・銭姫党伝奇……

・白峰の女忍者……

グラビア・けんらんたる商品……

・黒猫を捕えた①②……

海外SMフォト・画傑作選……

醜いコメディ……

大利根無頼……

和装恋慕……

はも紳士録(3)……

体当たりマゾヒズム論(8)……

猫……

犬とギブスと搾衣……

不死身の女……

「蠍たち」にみる

文・豊田一狼
絵・鬼頭 暁

文・島本春雄
絵・古正英生

文・矢桐重八

絵・小日向一夢

藤沢 修

泰西出版資料

淡路周五

祖父江新

宮古志満夫

かびや・かずひと

水尾 究

村山 省

春川 光彦

海老沢七郎

安東 泉

絵物語・姫法師呪文……

・変化黒髪小僧……

秋吉樹妖美画個展……

グラビア・黒い皮のスタジオ……

・美の凝結……

・美の模像……

海外SM画傑作展……

島原の子守唄……

金色の胸毛……

郡氏の応接室……

代用品じゃつまらない……

フォルリ城の花嫁……

おれの名はクニエル……

愛の戦慄と充実……

体当たりマゾヒズム論(7)……

文・島本春雄
絵・小日向一夢

文・京 剣児

絵・古正英生

秋吉 樹

泰西出版

金井 行雄

金井 行雄

泰西出版

春川 光彦

立原 道夫

豊中 夢夫

九十九郎

三鬼 俊

祖父江新

白木ゆりこ

絵物語・ハレウィンの歌う首……

・赤鯨奇伝……

・隠密麝香猫……

山田彬弘妖美画個展……

グラビア・美の回帰……

・美の彷徨……

・美の孤立……

クリスマススイヴに悪魔がくる……

赤い血のうずまき……

仮面のたわむれ……

黒い幻想……

小さな赤い腰巻の記憶……

体当たりマゾヒズム論(6)……

夜の感觸……

忍者遁走記……

文・松平莊司
絵・中川彩子

絵・小日向一夢

文・島本春雄

中島 喜美

山田 彬弘

毛 卓三

北 好夫

金井 行雄

九十九郎

関町 妙男

溝口 雄太

白木ゆりこ

外村 良

水尾 究

万里小路崑

絵物語・洞穴の姫と……

・耳の戦慄……

・妖説黒繩盜賊……

グラビア・犬と女……

・美の発端……

・美の展開……

・美の落差……

かわいい調教師……

殉国……

投げ節お駒……

締めつける愛情……

東京午前零時……

日本刑罰史(終回)……

はも・とその周辺(終回)……

体当たりマゾヒズム論(5)……

文・松平莊司
絵・中川彩子

絵・曾我部 泰

毛 卓三

北 好夫

毛 卓三

金井 行雄

北園透一郎

中康 弘通

花巻京太郎

春川 光彦

豊中 夢夫

名和 弓雄

かびや・かずひと

水尾 究

安東 泉

文・松平莊司
絵・中川彩子

絵・曾我部 泰

毛 卓三

北 好夫

毛 卓三

金井 行雄

北園透一郎

中康 弘通

花巻京太郎

春川 光彦

豊中 夢夫

名和 弓雄

かびや・かずひと

水尾 究

安東 泉

37年(十一月号) 二〇〇円

絵物語・かわいいアンヌの	文・松平 荘司
はうけん	絵・中川 彩子
異聞・牛裂きの刑	絵・東 桂史
宝石の血	絵・秋吉 樹
グラビア・美の鋭角	毛 卓三
・美の冗舌	金井 行雄
・美の傾斜	金井 行雄
・美の断面・ほか	金井 行雄
海外SMフォト特選集	泰西出版資料
あわれ雪路	丸亀 恵史
おかつばとおさげの間	間野 嶺
霧笛の町	五所 章
妖美画傑作選	沖沙二 都築峰子
火刑幻想	多賀 満
夜の画帳	鳴滝 三郎
足	村山 省
体当たりマゾヒズム論	(4) 水尾 究
さまたみろ	春川 光彦
ある恋の物語	山木 節夫
不安と絶望から幸福への道へ	桜井 和子
畜獣デリムソン(終回)	阿麻 哲郎
ほも とその周辺	(9) かびや・かずひこ
風雲地獄街道	(6) 鈴宮 英樹

37年(十月号) 二〇〇円

絵物語・ひざまずいて	絵・秋吉 樹
柔肌切支丹	絵・曾我部 泰
江潮晃夫妖美画個展	江潮 晃夫
グラビア・舞台名場面集	金井 行雄
・たわむれのふたり	藤沢 修
・美と醜のあいだ	金井 行雄
ある青年の休暇	ゴードン社・提供
紅の私刑	五所 章
女奴隷の浴室	東島かおる
妖しい休臭の夜	市川 菊夫
畜獣デリムソン	(11) 阿麻 哲郎
鬼洞又四郎の煩惱	小田桐 爽
ギラルド王の金色奴隷	松平 荘司
現代女牢記	多賀 満
江戸の怪談	河西 恒一
ほも・とその周辺	(8) かびや・かずひこ
海外SM映画ご紹介	美濃村 晃
体当たりM論	(3) 水尾 究
盗む	村山 省
おろかな馬のものがたり	馬場 弘二
風雲地獄街道	(5) 鈴宮 英樹

37年(九月号) 二〇〇円

絵物語・凄絶めくら忍法	絵・東 桂史
・密林の女王ムムムタル	絵・中川 彩子
蛇と鞭	絵・山田 彬弘
北原環妖美画個展	北原 環
グラビア・SM式美容鍛練法	毛 卓三
・屈曲	毛 卓三
・悪夢	毛 卓三
・女ひとりのへや	猪島 昌也
・かわいいくちびる	毛 卓三
お涙の受難	花巻京太郎
山小屋の暴風雨	駒井たまき
戦慄の女体爆弾	綾川 妖司
鈴の泣き声	浦戸 宏
白痴美の女	青柳貫次郎
日本型罰史	(3) 名和 弓雄
ほも・とその周辺	(7) かびや・かずひこ
「瘋癲老人日記」を解剖する	安東 泉
タロの恋	八巻 令
体当たりM論	(2) 水尾 究
女賊と姫君	霧山 志郎
畜獣デリムソン	(10) 阿麻 哲郎
鬼婆のすむ家	三枝喜久治
風雲地獄街道	(2) 鈴宮 英樹

37年8月号ぜんぶ

売り切れました

37年(七月号) 二〇〇円

絵物語・最初の火星人	絵・山田 彬弘
〃 鞭に生きる女	(5) ウェアン・ロッド
〃 海外SMフォト特選集	
〃 中川彩子妖美画個展	中川 彩子
★グラビア・時代劇のムード	猪島 昌也
〃 石伐り場の女	毛 卓三
〃 沼のほとり	毛 卓三
フォト時代劇・島抜け伝八	海老沢七郎
旗本被虐年譜	島本 春雄
鼻には鼻を	九十九十郎
脱走兵とその妻	竹谷 十三
姫に捧げられた人獣の話	白畑 高之
ほも・とその周辺	(5) かびや・かずひこ
地獄で泣け	万里小路崑
武后秘話	綾川 妖司
奇縁縁切り榎	小田桐 爽
絵本かぞえうた	喜多 玲子
畜獣デリムソン	(8) 阿麻 哲郎
忘念油屋火事	竜崎 聖吾
現代マゾヒズム文化時評	森下 高茂
萩塚温泉のおもいで	影 なぎさ
裏窓タウン	編集部・編
風雲地獄街道	(2) 鈴宮 英樹

37年(六月号) 二〇〇円

絵物語無残女忍者記……………文・矢桐 重八

〃 時間旅行機第一号……………文・豊田 一狼

〃 鞭に生きる女④ 文・画・ウアン・ロッド

〃 フン族の暴雄アッチラ画・中川 彩子

碧眼蜜女伝……………小田桐 爽

肉の濁流……………城堂 純

畜獣デリムソンⅦ……………阿麻 哲郎

グラビア追いつめられていく演技・毛 卓三

〃 和室のひとり……………猪島 昌也

〃 女体倉庫……………毛 卓三

〃 ふとんの上で……………猪島 昌也

色戯鬼島田……………竜崎 聖吾

桜とサムワイとサティズム……………浜野 真砂

哀艶十六夜街道……………文・円城寺 達

A心酔のタイプ……………かびや・かずひこ

日本刑罰史(1)……………名和 弓雄

稲妻さんげ……………万里小路 崑

現代マゾヒズム文化時評……………森下 高茂

黒髪幻想曲……………章 文彦

地獄船青竜号……………永井卓二郎

縄を待つ女……………堀越 早苗

37年 5月号 ぜんぶ 売り切れました

37年(四月号) 二〇〇円

〇グラビア・はんにやのめん……………吉田 久

〃 ゆがむ豊胸……………藤沢 修

〃 いすと女……………吉田 久

〃 片隅にうごめく……………猪島 昌也

〇絵物語・地獄への招待状……………文・小川左門

〇ある夜の強盗……………画・喜多玲子

〇砂漠の恐怖王……………文・藤見 郁

〇砂漠の恐怖王……………画・山田彬弘

リボンに巻かれる娘……………文・松平莊司

姫肌受難船……………画・中川彩子

奇妙なあしながおじさん……………綾川 妖司

畜獣デリムソン(5)……………黒部 恭治

私本・礼津女切腹……………黒田 史郎

なめたい……………阿麻 哲郎

日本拷問史(3)……………団 克衛

フォト・ストーリー……………田沼 醜男

〃妖蘭亭の愛欲……………名和 弓雄

捕われた姫君……………ウアン・ロッド作・画

残部 僅少

37年(三月号) 一五〇円

〇グラビア・沈黙のポーズ……………吉田 久

〇ソファベッドのあるへや……………藤沢 修

〇もだえ三熊はか……………編集部・編

〇絵物語・青い野獣のブルース……………烏丸 克彦

〃女忍伝奇館……………文・黒部 恭治

不貞現場の女……………絵・古正 英生

畜獣デリムソンⅣ……………春川 光彦

マゾヒズム文化時評……………阿麻 哲郎

由美子よ逃げ……………森下 高茂

鞭と縄と美貌の迫害者……………竹谷 十三

〇絵物語・吸血鬼号の女囚……………院南 五郎

日本拷問史②……………文・島本 春雄

美妃責め行者譚……………絵・中川 彩子

フォト・ストーリー……………名和 弓雄

〇絵物語・煩惱地獄医者……………来島 撰次

極楽バンテイ往生……………ウアン・ロッド作・画

マンクロープの葉かけ……………絵・中島 喜美

海老沼武七の執念……………章 文彦

37年 2月号 ぜんぶ 売り切れました